

---

# 魔法少女リリカルなのはAnother

外神 恭介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはAnother

### 【Nコード】

N9505M

### 【作者名】

外神 恭介

### 【あらすじ】

少年は殺意と憎悪を胸に、復讐を誓った。少女はただ、母の望みを叶えたかった。そして少女は、二人と友達になりたいと思った。

これは、海鳴市を舞台に繰り広げられる、もしかしたらあったかもしれないもう一つの物語。魔法の力は想いの力。何を想い、何を願うのか。星の光は、金の閃光は、名も無き少年は、どんな想いを貫くのか。少年と少女達が出会う時、世界はまた、廻り始める。魔法少女リリカルなのはAnother、始まります。うん、あらすじの時点でわかると思うけど中二全開な上にヘタです。それでも

よければなのは、フェイトの、少年の紡ぎ出す物語を見守ってや  
ってください。それだけが前原…、げふん。それだけが作者の望み  
です。

## プロローグ（前書き）

どうも初めまして。 外神恭介です。

はてさて、この度私何をとち狂ったのか投稿し、この作品（笑）を世に広めることとなりましたw

よければ彼らの物語にしばしお付き合いください。

## プロローグ

木々がうるさい程にざわめいている。

風が体に容赦なく打ち付け、感覚を狂わせる。

心音がやけに大きく聞こえる。まるで全身が感覚器官になったかのように、僕の体は周囲に対して過敏なまでの警戒態勢を維持していた。

「…っ、はあっ…」

左手から流れ出る血が体温を奪い、意識をぼやけさせる。時間と共に僕の体は、消耗という名の不利を抱え込んで行く。

「早く…、決めないと…、っ!？」

感覚網に引っ掛かる、一つの気配。反射的に僕は気配の方向にソレを向ける。

ペンダントのような赤い宝石が光を放ち、幾何学模様の魔法陣を形成する。目の前で展開されたそれは、八芒星を孕んだ円形の封印術式!!!

同時、生い茂った草葉の陰から現れたソレが、こちら目掛けて突進して来た!!!

「妙なる響き、光となれ!!! 赦されざる者を、封印の輪に!!! ジュエルシード、封印!!!」

詠唱と同時、宝石から閃光が放たれる!!! この術式は、範囲内で術者が指定したモノを封印する、今の僕に扱える最高の魔法。この状況を打破するには、それしかない!!!

「グルオアアアア！」

雄叫びが聞こえると同時、

僕の体は吹き飛ばされていた。

「ぐっ、ああああああっ！！」

術式が発動するよりも僅かに早く、ソレが突っ込んで来たのだと理解すると同時、僕は地面に投げ出された。

「グルウウウ…」

ソレは僕を一瞥した後、背を向けて駆け出した。今逃げられたら、回復の時間を与えてしまう！！

「ま、待てっ！！…ぐっ」

起き上がろうとするも、その試みは失敗に終わった。蓄積したダメージと先程の衝撃で完全にやられたようだ。

「このままじゃ…」

誰か。誰か。誰でもいい。僕の声聞いて。僕に、力を、貸して…。ブラックアウトする意識を必死に抑えながら、僕は最後までそう信じ続けた…。

「…！！」

急に立ち上がったせいで、ガタン、と椅子が音を立てる。家族が皆揃って呆然とするなか、私は外へ飛び出した。

「ちょ、ちよつと！！なのは！？」

美由希お姉ちゃんの言葉を振り切り、靴を履き、玄関から出て、辺りを見回す。

右を見る。何も無い。

左を見る。何も無い。

「……………気のせい、なのかな？」

腕を組んで、頭を捻る。

だけど、確かに…、

「おいなのは、どうしたんだいきなり」

「お兄ちゃん…」

恭也お兄ちゃんの声で、夕飯の途中で飛び出して来たことを思い出す。

「急に飛び出してごめんなさい、だけど…」

「だけど？」

「…声が、聞こえたの」

「声？」

「うん。力を貸して、って、とても苦しそうな声で」

普通に考えればありえない出来事だが、実際に聞こえたのだから仕方ない。これは怒られるかな…。

「…そうか」

でもお兄ちゃんは頭にポン、と手を置いただけで、何も言わなかった。

「…お兄ちゃん？」

「なのははその声を聞いて、助けたい、って思ったんだろ？それはなのはの優しさだ。だから俺は何も言わないよ」

わしゃわしゃ、と頭を撫でて、お兄ちゃんは家の中へ戻って行った。

「……………」

最後に私はもう一回辺りを見回す。さっきと同じで、人っ子一人居なかった。

「…気のせいかな」

溜め息をつき、私は家の中へ引き返した。早くご飯食べちゃおうと。

庭の茂みに転がっている、赤い宝石に私が気付くのは、もう少し後のことになる。



「フエイト、本当に大丈夫なのかい？」

そう言っただけで彼女は、私の瞳を見据えた。彼女の透き通るような瞳に、私の姿が映る。ツインテールにした金髪と、黒いリボンを着けた私の顔は、少しやつれてるように見えた。私でさえそう思うのだから、心配性の彼女がそういう理由には十分過ぎたみたい。

「大丈夫だよ、アルフ。私は元気だから」

「そんな顔で言われても説得力ないよ！！ただでさえこんな辺境の世界に来たばかりなんだ、少し休んだ方が…」

確かに、私の体はまだ、異なる世界の空気に馴染んではない。だけど、私の目的を遂げる為には、一分一秒足りともムダにする訳には行かない。…でも、

「わかったよ、アルフ。でも、10分だけだからね？」

苦笑しながらそう答える。少しくらい譲歩しないと、アルフは納得しないだろう。ホント、頑固なんだから…。

「…わかったよ」

アルフもそこはわかっているのか、素直に折れてくれた。ありがとう、と心の中で礼を述べておく。

「フエイト…」

ベットに寝そべった私にアルフが近付いて来て、唐突に抱きしめられる。

「ア、アルフ？」

いきなりだったので驚いてしまうが、

「本当に…、気をつけておくれよ…」

その言葉に口を閉ざしてしまう。

アルフに心配を掛けていることは、痛いくらいにわかってる。でも、それでも、私は…、

「大丈夫だよ、アルフ」

震える彼女の体をそっと抱きしめる。

「もう私は、決めたから」

そう言っただけで私は、静かに微笑んだ。

誰かは言った。人と人は繋がっていけると。

誰かは言った。世界は愛と平和に満ちていると。

でもそれは、ただの幻想に過ぎない。

世界には悪意がある。

罪なき者を巻き込んでしまう事故・事件は、世界と言わず、探せばどこにだって転がっている。

世界を構成するのは、平等に訪れる不平等と、理不尽な悲しみの二

つしかない。

「……………戯言か」

呟いた声は宙へと溶ける。ビルの屋上に立つその影は、漆黒の髪と同色のロングコートを風に靡かせ、鋭い視線で眼下の街を見下ろす。海鳴市。海辺に隣接した活気のある街で、山や丘もあり、温泉街やスーパー銭湯まで備えた、正に至れり尽くせりの場所だろう。

普通の人間が住むならば。

「…微かにだが、匂うな…」

コートを纏ったその少年や、彼の同族だけが感じ取れる気配。街の至る所を感じられる、力の波動。

「20…、いや、21個か」

おおよその数を突き止める。これだけの数が散らばっているとすると、一人で動くのは面倒だ。だが、

「…やらない訳には、行かないよな」

《Of Course（当然）》

胸元に飾られたアクセサリー、十字架を模したシルバーネックレスから無機質な声が響く。まあ、あくまで独り言みたいなモノで、同意を求めた訳ではないんだが。

「行こうか、相棒。災厄の芽を刈り取りに」

《Yes Sir（了解）》

タン、と軽い音を立てて彼が屋上を蹴る。慣性と重力に引きずられ、彼の姿は昏い夜の闇の中へと消えて行った。

この広い空の下には、幾千幾万の人達が居て、色んな人が願いや想いを抱いて暮らしている。

その想いは、時に触れ合って、ぶつかり合って、すれ違うこともある。

だけど、その中のいくつかは、きっと繋がっていきける。伝え合っていける。

これから始まるのは、そんな出会いと触れ合いのお話、そのもう一つの結末。

本当の魔法を胸に、彼の思いと彼女達の想いが、新たな世界を紡ぎ出す。

魔法少女リリカルなのはAnother、始まります。

## ブローグ（後書き）

やwらwかwしwたw

こんなんでもよければ続きはできてるんで、読みたいたった方は  
一声くださると嬉しいです><

## 第一話「出会い」（前書き）

さて、いよいよ一話ですよ奥さん（えw

とりあえず読もう。話はそれからd（ディバインバスター

あ、それとアリサには進行上ミハーになっていただきました（えw

## 第一話「出会い」

「ここは…」

目覚めると、周りは真っ暗で、私は何もない空間に居た。上下左右の感覚もなく、意識だけがあるような空間だった。

『力を…貸して…』

「!?!」

あの声…、昨日の夜と同じ声だ!!

「君は誰!?!どこにいるの!?!私はここにいるよ!?!」

『お願いだ…、アレを見つけて…、僕の、所に…』

…声が遠ざかって掠れて行ってる!?!ここで見失ったら…!!

「待って!!!!君は誰なの!?!私は、高町なのはは、どうすればいいの!?!」

『なのは…、お願いだ…、ジュエルシードを…、封印して…』

「待って!!!!ねえ、待ってよ!!!!」

声を上げて、彼の声は遠ざかるばかりで。そしていつの間にか、周りが白くなっていることに気付いた。

『忘れて。そして、日常に戻って』

そんなもう一人の声に背中を押され、私の意識は上へと昇って行った。

瞳の〜奥の〜秘密〜吸い込まれそうな〜笑顔の〜裏の真実に〜柔らかな愛〜僕が届けに行くよ〜

「ん…」

アラームにセットされた歌が流れ出す。どうやら起きる時間のような。手探りで携帯電話を探すが見つからない。アレ？どこに置いたんだっけ…。

触れたら〜壊れそうな温もり〜が今過去を離れ溢れ〜出〜す〜ずっと側にいる〜か〜ら〜悲しい影に〜惑わないで〜

ピ。

ああ、見つけるまでにサビが終わっちゃった、とそんなことを考えながらむくりと起き上がる。

「……………?」

何か夢を見た気がするが、内容が思い出せない。普段なら気にも留めないことだが、何故か引っ掛かる。

「んー」



腕を組んで頭を捻る。どこかで聞いた声だったような…、

「なのはー、起きてるのー？」

と、階下から響いたお母さんの声に思考を中断され、手繰り寄せていた記憶は泡のように弾けて消えてしまった。

「はーい、起きてまーす」

考えることを止め、私は階下へと降りて行つた。

「行つて来まーす」

「……行つてらっしゃーい」「」「」

皆の声に送られて家を出る。一見よくある幸せな家庭の風景。だけど、悪いけど私、高町なのはにはそう思えない。

お父さんとお母さんは20年近く一緒に居るのに新婚さんさながらの仲の良さで、お兄ちゃんもお姉ちゃんへの剣術の指導に熱心だし、歳が離れていることもあつて、私は高町家の中でも少々浮いた存在となつている感が否めない。

「……つとと、いけないいけない」

考えちゃダメだ。確かに家は昔色々あつたけど、昔は昔、今は今だ。今は皆、本当に良くてくれているんだから、そんな失礼なこと考えちゃダメだ。どうも昨日の声を聞いてからメンタル的に不安定な

気がする。こういう時は…、

「なのはちゃん」

「なのはー」

「すずかちゃん、アリサちゃん、おはよー」

やっぱり、仲の良いお友達とのお話だね。

バス停で合流した二人の女の子。金髪を二カ所で短く括ったのがアリサ・バニングスちゃん、紫色の髪を長く伸ばした子が月村すずかちゃん。私と同じ私立聖祥大附属小学校の三年生。二人共私の親友で一年生の時から同じクラスだ。今年からは同じ塾に通っている。

「…？どうしたのなのは、顔色悪いわよ？」

「…え？」

「うん、なんか具合悪そうだよ？学校着いたら保健室行く？」

付き合いが長いだけあって、すぐに気付かれてしまいました。ホント、私には勿体ないくらいよく出来た友達です。

「ううん、大丈夫。それより、お話しよ？」

やって来たバスに乗り込みながら微笑む。今私に必要なのは、保健室のベットじゃない。楽しくお話出来る友達だ。

「いいけど…、無理はしちゃダメだよ？」

「あんたは無茶なことやるくせに抱え込むタイプだからねー、油断出来ないわホント」

すずかちゃんは心配そうに、アリサちゃんは溜め息をつきながらそう答える。なんだかんだ言っても付き合いの長い二人だ。無意識に私の言いたいことを悟ってくれたのでしよう。

「そういえばなのは知ってる？明日ウチに転校生が来るらしいわよ？」

空いていた一番奥の席に並んで座りながら、唐突にアリサちゃんと言った。

「へ？転校生？」

「なんでも帰国子女で、ものすごくカッコイイ男子なんだって」

まくし立てるようにアリサちゃんが熱弁する。結構ミ－ハーな所あるからなあ…。

「でもこんな時期に転校生？」

すずかちゃんが口を挟む。今は4月の半ば。この時期なら学期の始まりに編入して来るのが普通のハズ。なのになんでこんな中途半端な時期に…？

「なんでも親の都合らしくてね、外国だから新学期に間に合わなかったみたい」

「ふーん…」

他の二人はともかく、私はあんまり興味がありません。二人だけじゃなく他の女の子にしても、誰がカッコイイとか誰が好きとか、そんなことばかり話しています。私には好きとか恋とか、そういうことはわかりません。家族が皆仲が良いからなのか、私にはそういった感情、男女感の恋愛という感情が人一倍欠落している、らしいです。

「あーあ、明日が待ち遠しいなあー」

「賑やかになるのは、悪いことじゃないもんね」

転校生の話題で盛り上がる二人を尻目に、私はぼんやりと思考に耽る。

(…あの声、どこかで…)

結局、学校に着くまで私はずっとそんな感じでした。

「すっかり遅くなっちゃった…」

声のことをずっと考えていたせいか、塾でもぼんやりしてしまいました。

心配した先生に呼び出されてお話していたら、もう外は真っ暗。早く帰らないと…、

『…助けて』

「!？」

ショートカットするべく公園の林を突っ切っていた私は、聞き覚えのある声に急ブレーキ。この声、昨日と夕べの夢同じ声だ!! その感覚に繋がったかのように、夕べの夢がフラッシュバックする。そうだ、この場所、夢の中に出て来た場所にそっくりだ!!

「どこ!??どこにいるの!？」

辺りを見回すが、夜の帳に覆われた林の中では、見つけることは難しい。せめてもう一度、声が聞こえれば…、

『…助けて!!!』

「!?!」

再び頭の中に響く声を聞いた瞬間、私は直感に従って走り出す。暗くて足元が危なっかしいけど、多分こっちに…、

「…!?!」

木々が途切れ、月明かりが差し込む一角に、その子は居た。綺麗な白い毛並みを持つ、30cmくらいの、

フェレット。

「…え？」

あの声って、この子が？

『…来て、くれた…』

「!?! やつぱり、君が…」

『…後は、アレさえ…、見つければ…』

その声を最後に、フェレットさんがうずくまる。

「あ、ちよ、ちよっと!!」

慌てて抱き抱えてはみたものの、放っておく訳にはいかないし、こんな時間じゃ獣医さんもやってない。アリサちゃんやすすかちゃんの家は犬や猫がいるから頼めないし、………そうだ!!

「フェレットさん、静かにしててね」

家の前に立った私は、背中のフェレットさんに呼び掛ける。少し窮屈だけど、背負ったかばんの中に入れることにしたのだ。ちよっただけ我慢しててね。

「すうーっ、はあーっ」

我が家を見据え、深呼吸。いざ、

「行か…ん？」

ふと視界の端に、何かが光った。家の庭の茂みに輝いている、赤い光。

「これは…」

拾ってみると、それは赤い宝玉だった。小さくて、今にも壊れてしまいそうな儚さなのに、とても温かい。

「…後でお父さんに聞いてみようつと」

それをポケットに押し込み、今度こそ私は家の扉を開けた。

「ただいまー」

「はあ…」

部屋に戻って来た私はぼふっ、とベットに倒れ込む。今日は色々あって疲れた。

結局、フェレットさんのことはバレてしまった。お兄ちゃん曰く、「めちやくちや拳動不審だったぞ」とのこと。おかしいな、ダンボールを被れば完璧のハズなのに…。

ともあれ、ちゃんと事情を説明したら、家で飼っても良いって言って貰えた。よかったね、フェレットさん。

「とりあえず明日、獣医さんに診てもらおうね」

フェレットさんの頭を撫でると、私の手にほお擦りして来た。可愛いなあ。

「それにしても…」

机の上に置いた、あの赤い宝石を見る。お父さんやお母さんに聞いてみたが、よくわからなかった。大したことじゃないハズなのに、タベの夢と同じで、どこか引つ掛かる。

「むー、…ん？」

ふと、気が付いた。先程まで階下から聞こえていたお母さんとお姉ちゃんの声が聞こえない。

「……………っ!？」

不安に思っ下へ降りた私が見たのは、誰も居ない、リビングだった。

「な、んで…」

「こっちへ」

呆然とする私に掛けられた、四度目の声。振り向くと、あの赤い宝石を抱えたフレットさんが、玄関を指差していた。

「…え？」

「人払いの結界を張ったけど、物的損害は避けられないから」

「え?え?」

戸惑いながらも、とりあえず指示に従い外に出る。空を見上げると、家を中心にドーム型のような何かが張り巡らされていた。



「……………っ！？くっ…」

同時に頭の中に響く耳鳴り。タベの夢でも聞いた、脳を直接揺らすかのような不快な音。

「とりあえず、広い場所に…、あの公園に行きましょう」

フェレットさんが肩に飛び乗って言う。一体何が…、

「グルウウウ…」

「っ！？」

その唸り声を聞いた瞬間、私は弾かれたように駆け出した。理性ではなく本能が、ここから逃げろと言っていた。その直感に従い、ただひたすらに前へ、前へ、前へと走り続けた。

「君には資質がある」

公園のベンチに倒れ込むように座り込んだ私に、フェレットさんは言った。

「…し、資質？」

荒れた息を整えながら聞き返すと、フェレットさんは説明を始めた。

「僕はある探し物の為に、ここではない違う世界から来ました」

「へ、ええっ!？」

いきなりのトンでも発言に大声を上げてしまふ。そんな、違ふ世界だなんて…、

「でも、僕一人の力ではどうにもできない。だから、資質を持った君に…、なのはさんに協力して貰いたいんです」

「っ!!！」

名前を呼ばれ気付いた。夕べの夢で私に語りかけて来たのも、このフェレットさんだったんだ!!

「迷惑だとはわかっています。でも、力を貸して欲しいんです!! 奇跡の力を…、魔法の力を!!」

「魔法…?」

魔法って、あの魔法? カボチャの馬車やドレスを作り出す、あの魔法?

「グルオアアアアア!!」

戸惑い混乱する私に追い打ちをかけるように響き渡る、あの雄叫び。

「くっ、もう追い付かれて…」

膝から飛び降りたフェレットさんから緑色の光が放たれる。その光は正方形を二つ組み合わせた八芒星を描き、それを中心に円が広がる。その魔法陣が輝くと同時に、何かがそれにぶつかって来た。

「グルオアアアアア！」

歪な黒い獣、それが率直なイメージだった。足はなく体は球体で、地を這うようにして突っ込んで来ている。

「お礼は必ずしますから、お願いします!!」

「お礼とか、そんな場合じゃないでしょ!？」

魔法陣の内側で言い合っていると、右手に持ったままだった宝石眩いが光を放ち始めた。

「これって…」

「それを持って目を閉じて、心を澄ませてください。そして、呪文を唱えろんだ!!」

「じ、呪文なんてわからないよ!？」

「大丈夫!!心に浮かんだ言葉を、そのまま言えればいい!!」

「う、うん!!」

とは言ったものの、呪文なんてわからない。とりあえず目を閉じ、心を澄ませ、ひたすらに高町<sup>自分</sup>なのはの中に埋没していく。

「我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て」

どくん。

自分の中で何かが目覚めたような、そんな感覚。体に溢れてくる、力の奔流、その波動。

「風は空に、星は天に、そして、不屈の心はこの胸に!!」

一度捕まえたその感覚を頼りに、ひたすらに言葉を紡ぎ続ける!!

「この手に魔法を!! レイジングハート、セット・アップ!!」

《Stand by Ready Set up》

瞬間、桜色の光が弾けた。

天を貫く一条の光。その桜色の光の中心に私は居た。

「な…、なにこれ…?」

余りに眩し過ぎる為か、あの獣でさえ動きを止めている。

「落ち着いて、そのままイメージするんだ。君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を!! そして、君の身を守る、強い衣服の姿を!!」

「そ、そんな…、急に言われても…」

慌てて目を閉じ、思い描く。先端に宝石を付けたバトンのような杖と、聖祥の制服と天使の翼をイメージしたような衣服を。

「と、とりあえず、これで!!」

《All Right（了解しました）》

キン！

その声と同時に、宝石が一際強い光を放ち、私の体を包み込む。私の服が光に溶けるようにして消えて行き、私が思い描いた通りの衣服に包まれる。そして、手の中の赤い宝石が宙に浮かび、これまた私がイメージした通りの形の杖が生まれ、その先端に合体した。

「グルウアアア！！」

光が弾けるようにして消え、その余波で獣が吹き飛ばされる。周りには、桜色に輝く光の羽が舞っていた。

「…よかった、上手く行ったみたいだ」

どこか夢見心地だった私は、フェレットさんの声で急に現実へと引き戻される。

「えっ！？ええっ！？嘘っ！？」

思わず辺りをキョロキョロと見回してしまつ。どこから「ドツキリ大成功」の看板を持った誰かが出て来ることを期待したが、幸か不幸か、この光景は現実だった。

「な、なんなの？これ？」

だが、現実是非常だった。

「グルウウウ…」

静かに起き上がった獣が、ぎらついた瞳でこちらを見据えている。  
さっき吹き飛ばされたから怒っているのだろうか。

(ええーっ!!???)

どどどどど、どうしよう!?

「ようやく見つけたと思ったら…」

彼は上空からその光景を見下ろす。夕べ以降微弱だった反応の一つ  
が急に増大したから急いで来てみたら…、

「まさかこんな辺境の世界に、魔法使いが居るとはな…」

溜め息と共に再び視線を落とす。

《How do you do, Master? (どうする? 主人)》

胸元に飾られた、十字架を模したシルバーネックレスから響く声。

「そうだな…」

そう言っただけで彼はその少女に視線を送る。まだ幼い、彼とそう変わらない年頃の少女。突然の変化に戸惑っているのか、オロオロと辺りを見回している。

「とりあえずは様子見て、いざとなったら介入する。アクセル、準備しとけ」

《Yes / Sir（了解）》

相棒に声を掛け、待機状態にさせる。口数こそ少ないが、彼との意思疎通には十分事足りる。

「見せて貰おうか…、この世界の魔法使い、その実力を…」

黒衣を風にたなびかせ、その少年はこれから始まるであろう戦闘、その舞台を見据えた。

## 第一話「出会い」（後書き）

しかしアレですね

一期見返してたらロリなのは株めちゃくちや上がってキャラソート2位になっちゃったよw

感想を頂けると作者は昇天するほどテンションが上がります（えw



## 第二話「封印」（前書き）

二話です。以上。

別名主人公無双回。

読者の諸君はブラウザの戻るボタンにカーソルを合わせておくんだ  
（デイベインバスター）

## 第二話「封印」

「グルオアアアアア!!」

「ひうつ!!」

雄叫びに思わず後退り、木に背中をぶつけてしまう。改めて見てみると、その獣は大きかった。周囲に生えている木々を越える程の大きさを誇り、こちらに鋭い視線を投げ掛けてくる。

「どどどどど、どうすればっ!!?」

思わずテンパってしまい、誰にともなく尋ねてしまう。が、そんなこちらに構うことなく、獣が静かに身をたわめた。

「来ます!!」

「っ!!?」

ダンッ!!と地面が刻れる程の勢いで跳躍し、全体重を掛けてこちらに飛び掛かって来た!!

「ひゃあっ!!」

思わず杖を掲げて、目を閉じてしまう。このままじゃ押し潰され

《Protection》

杖の先端についた宝石から女性の声が響くと同時、私の体を中心にドーム状のバリアが張られた。

バチッ！！

「くっ…、うつ…」

強烈な衝撃と音に目をぎゅっと閉じ、ただひたすらに耐え続ける。永遠にも思える一瞬の後、  
バン！！という凄まじい破裂音と共に、獣の体が碎けた。その破片は石の槍と化し、地面や木々に突き刺さる。

「え…、ふええっ！？」

思わず一瞬で更地へと変貌を遂げた林を見回してしまう。そんな風にオロオロとしていた私は、

後ろから倒れてくる大木に気付かなかった。

「なのは！！後ろ！！」

「…え？」

振り返った私の目には、もう避けられない程至近距離に迫った大木が視界一杯に広がっていて…、

「ひうつ！！」

## 《Gravity Fall》

ブーン！！

「……………」

来るであろう衝撃に身を固くしていた私は、恐る恐る目を開ける。

「嘘…」

が、視界一杯に広がっていたハズの大木は、影も形もなかった。  
チラリと赤い宝石に目をやるが、

《…Axel? (…アクセル?)》

彼女? は一言呟いたつきり黙して答えない。…それに一瞬だけ、男  
の子の声が聞こえたような…、

ジュルジュルジュル…。

「!?!」

が、そんな私の思考は、何かが這いずるような不気味な音に遮られ  
た。

「とりあえず、あっちへ!?!」

再び肩に飛び乗ったフェレットさんが叫ぶ。何が何だかわかんない  
けど、

「う、うん!?!」

とりあえずは、状況を整理しないと。

《∴Master(∴主人)》

右手に握った刀から咎めるような声が響いた。

「早過ぎる、ってか？」

《∴∴∴∴∴》

無言で肯定の意を返す相棒に、俺は言い返す。

「あのまま放置したらアイツは良くて重傷、最悪死亡だ。生まれたての魔法使いにそこまで求めるのは酷だろ」

《Just birth?(生まれたて?)》

「どう見てもそうだろ。それならこんな世界に魔法使いがいることにも合点が行く」

大方、アレを目覚めさせてしまったヤツが自責の念にでも捕われて追って来たはいいが力及ばず、協力者を捜し出した、といったところだろう。

「ま、本格的な介入はもう少し後だ。アイツの技量を見極めた上で決めるよ」

《∴Yes,Sir(∴了解)》

その声を最後に刀は沈黙した。俺も宙を歩きながら、彼女が見える位置へと移動する。

「出来れば一人で片付けたかったんだけどな…」

その眩きは風に流され、誰の耳にも届くことはなかった。

「僕らの魔法は発動体、杖等の媒体に組み込んだ、プログラムという方式が基になっています」

背後を気にしながら走る私を尻目に、フェレットさんは説明し始めた。

「そして、その方式を発動させるのに必要なのは、術者の精神エネルギーです」

ゲームというMPみたいなものかな、と考える。向こうにまだ動きはないようだ、油断は全くできない。

「そして、忌まわしい力の下に生み出されてしまった思念体…、アレを停止させるには、その杖で封印して、元の姿に戻さないといけないんです」

とりあえずそれなりの距離は取れた。息を整えながら、地面に降りたフェレットさんに向き直る。

「良くわかんないけど…、どうすれば？」

「さっきみたいに、攻撃や防御の基本魔法は、心に願うだけで起動しますが、より大きな力を必要とする魔法には、呪文が必要なんです」

「呪文…？」

それってさっきみたいなの…？

「さっきみたいに心を澄ませれば、自然と心に浮かぶハズです」

私の疑問に答えるように、フェレットさんが言った。

「えっと…」

さっきみたいに目を閉じ、再び心を澄ませる。無限に広がる高町<sup>自</sup>なのはの中から、一つの言葉を探し出す。

（もう少し…、もう少しで…）

「グルウアアアアアア！！」

「「！！！？？」」

だが、掴みかけた感覚は、再度の咆哮によって霧散してしまう。猛スピードで迫る獣を目にして、私の体は完全に硬直してしまった。

「なのは、防御を！！」

フェレットさんの声に我に返るが、体は未だ固まったまま。このままじゃ間に合わない…、

## 《Round Shield》

バディッ！！

そのまま私に激突すると思われた獣の体は、銀色の魔法陣によって弾かれた。

「…え？」

フェレットさんと一緒に間抜けな声を上げる。私（杖）がさっき張ったバリアは桜色だし、フェレットさんは緑色。どちらも銀色の魔法なんて使ってない。

「悪いなアクセル。でももう限界だ」

と、後ろからそんな声が聞こえた。コツコツと音を立てて、一人の男の子が私の前に出る。

漆黒のロングコートを身に纏い、両手に白銀の刀を携えた、黒い髪の少年だった。顔は影になって見えないが、私より頭半分高いくらいの身長だ。

「来いよ、災厄の種。一般人に手を出すっていうんなら…」

彼が右手に握った刀を獣に突き付けながら語り掛ける。静かな、しかし強い意志を秘めた声。そんなイメージを抱いた。

「俺が相手してやるよ」



(…デカいな)

その獣を前にして抱いた、俺の第一印象はそれだった。車と同じくらしいの巨体で這いずるように動き回った結果、地面は荒れ、木々は倒れ、公園はその原型を留めていなかった。

「…もっと早く出た方が良かったかもな」

《It is an afterthought (ただの結果論だ)》

「ま、それもそうか」

眩きと共に雑念を切り捨て、それを見据えた。先程のラウンドシールドで警戒を強めたのか、こちらの様子を窺っている。…ちょうどいい。

「おいアンタ」

背を向けたまま、呆然としたままの少女に声を掛ける。

「え？わ、私？」

「他に誰がいるんだよ…」

こんな状況下だというのに、思わず苦笑してしまう。やはり、生まれたての平凡な魔法少女で間違いなさそうだ。

「そこのフェレット連れて早く逃げな。例え素質があるとしても、

生まれたての魔法使いじゃコイツを相手にするには荷が重い」

言葉を投げ掛けながらも警戒は解かない。向こうもそれがわかって  
いるのか、前傾姿勢のまま微動だにしない。

「ふえ？ だけど…」

「事情もよくわからないまま変身したんだろ？ これ以上関わろうと  
すれば、危険を伴うし、最悪死ぬかもしれない。それだけの覚悟が  
あるのか？」

脅しとも取れる言葉だが、この際構わない。これ以上コイツ絡みで、  
犠牲を増やしたくはない。もう、あんな…、

「確かに事情もわからないし、傷付くことは怖いよ」

と、俺のネガティブな思考を断ち切るように、少女の声が聞こえた。

「だけど、それでも私は…」

チラリ、と視線を投げ掛けると、その少女は真っ直ぐにこちらを見  
据え、

「私は、この子を助きたい」

そうはつきりと答えた。

「…良い目だな」

一瞬、アイツとダブって見える程、純粹で真っ直ぐな瞳だった。

「俺が足を止めてやる。アンタは封印に専念しろ」

「えっ！？でも私…」

が、そう言った途端にオロオロし始める少女。強いんだか弱いんだか…。

「出来るよ、君なら」

口調を和らげ、そう断言する。アイツと同じ目を出来るんだ。出来ない方がおかしい。

「しっかりやれよ、魔法少女」

それだけ言い残し、俺は獣目掛けて駆け出した。

「しっかりやれよ、魔法少女」

その一言と同時に、彼の姿が視界から消えた。

「え？」

慌てて周囲を見回すと、彼の姿は容易に見付けることが出来た。

10m以上離れた、獣の真後ろに。

「速っ…」

《Gravity Saber》

無機質な声と共に、刃が黒い光を帯びる。

「厘気一閃!!」

掛け声と共に彼が二刀を構え踏み込む。獣が振り返ると同時、その体は真つ二つに切り裂かれていた。

「グロオオオオ!!」

苦しみの声を上げながらも、再生を始める獣。さっきよりも再生が早い…!!

「再生速度が上がった…。こりゃ本格的に面倒だな」

「グルウアアアアア!!」

咆哮と共に獣の体から、幾多の触手が伸び、一斉に襲い掛かって来た。

私に向かって。

「…はあ」

対し彼は嘆息一つ。

《Linear Accel》

「目の前に敵が居るつてのに…」

無機質な声と彼の声がシンクロした瞬間、彼が再び姿を消し、

「なに無視してる訳？」

私の目の前に現れた。こともなげに二刀を振るい、全ての触手を切り裂いていく。

「コイツに手は出させない」

再び地を蹴り、獣の真正面に現れる少年。

「せやあつ！！」

腰溜めに構えた刀を抜刀、獣を縦に両断する！！

「グルウアアアアア！！」

が、先程と同じように瞬時に再生され、傷一つない獣が現れる。

「ホント、キリのない作業って拷問だよなあ」

対し彼は愚痴を零すように一言。彼の言葉に刀が呼応し、その刃の輝きが増し始めた。

「サクサクサクサクつと」

彼の冷めた掛け声と共に刃が四回振るわれる。

瞬間、獣は綺麗に八等分されていた。

「……！！」

「ほら、ボサツとすんな。コイツらいくら斬っても死なないから、封印しないと永遠に終わらないぞ」

再生し続ける獣を相手に、ひたすらザクザクと斬り続けながらこちらに声を掛けてくる少年。私は受け止めるだけで精一杯だったのに、一体なんなのこの人！？

「なのは、今はとりあえず封印が最優先だ！！彼が止めている内に、早くー！！」

「あ、うん！！」

とにかく獣は彼に任せて、こっちはこっちの仕事をしないと！！再度目を閉じ、精神世界に潜り込む。さっき僅かに掴んだ感覚を頼りに、心の中に浮かんだ呪文を引っ張り出す。

(……………見付けた！！)

「リリカル、マジカル！！」

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！！」

唱え始めた私をフォローすべく、フェレットさんも獣の居る場所に緑色の魔法陣を展開する。

「ジュエルシード、封印！！」

《Sealing Mode Set up》

私の声に呼応して、杖が変形を始める。宝石の付け根周辺の柄が伸び、桜色に輝く翼が展開され、辺りに実体のない羽が舞う。

「グルオオオオオ!!」

宝石から放たれた桜色のリボンに縛られ、獣が苦悶の声を上げる。  
が、

「くっ…、強っ…」

獣がのたうちまわり、リボンが少しずつ裂け始めた。マズい…、このままじゃ…、抑え切れ、

「見苦しいんだよ」

《Gravity Fall》

ズンッ!!

彼の声と同時に、重さが増したかのように獣が倒れ込み、地面にめり込んだ。抵抗が弱まった!! 今なら…!!

《Stand by Ready》

「リリカル、マジカル、ジュエルシード、シリアルXXI!!」

無我夢中に呪文を唱え、獣の額に現れたシリアルナンバーを読み上げる。

「封印!!」

《Sealing》

私と宝石の音がシンクロした瞬間、桜色の閃光が獣を貫く！！

「グルオ、オ、オオオ…」

柔らかな光に包まれて、その獣は宙に溶けるように消滅した。

「成功か…」

封印をサポートしてくれた少年がそう呟き、スタスタと公園の外へ向けて歩き始める。

「え！？ちょ、ちょっと!？」

思わず声を掛けるが、

「あとはデバイス、…その杖で触れれば封印は完了だ。出来れば、出会うのはこれっきりにしたいけど、な」

それだけ言い残し、彼は再び地を蹴った。一瞬で見えなくなった彼を追うのは不可能だろう。

「よい、しょ、…つと」

更地の中心に輝くジュエルシード。とりあえず、言われた通りに手に持った杖、レイジングハートで触れてみる。



キーン!!

《R e c e i p t   N o . X X I》

綺麗な音と共に、レイジングハートが封印完了を伝えて来た。同時に、体を桜色の光が包み、私の服がいつもの服に戻った。握られた手の中には、赤い宝石、レイジングハートがある。

「…終わっ、たの?」

「はい、あなたのおかげで」

「……………はあ」

安堵感に身を委ね、ペタンとその場に座り込む。

「本当に、ありがとう…」

パタリ。

「へ?」

音がした方を見ると、フェレットさんが倒れていた。

「ち、ちよつと!?!大丈夫!?!ねえ!?!」

慌てて抱き上げるが、気を失っているだけのようだったので安心する。が、

「あ…」

辺りを見回すと、荒れ地と言っても過言じゃないくらいめっちゃめっちゃになった公園が目に入り、冷や汗がダラダラと流れ始める。

「も、もしかしたら私、ここに居ると、大変アレなのでは…」

腕の中のフェレットさんは気を失ったままだし…、

「と、とりあえず」

私はフェレットさんを抱き直し、

「う、ごめんなさい」

その場から逃げることにした。

《…Master（…主人）》

「何故俺が封印しなかったか、ってか？」

タン、と軽く地面を蹴り、数十メートルの高さを誇るビルの屋上に降り立つ。

「知ってるだろ？今のアレは欲望を無差別に叶える危険なモノだ。なら俺が持っていれば、暴走しないとも限らない」

そう、俺の心に渦巻くこの想い、どす黒い欲望は、叶える訳にはい

かない。少なくとも、今はまだ。

「それに、あの子が持つてるなら心配ないだろ」

無言で咎めるような思念を送ってくる相棒に言い返す。

『私は、この子を助きたい』

あの少女の言葉が脳裏を過ぎる。問い掛けたこちらが動揺する程、恐ろしく純粹で、真っ直ぐな瞳だった。

「あの様子じゃ、やめろつつつても関わってくるだろうな…」

嘆息と共に屋上の扉を開く。この廃ビルが現在のねぐらになっているのだ。

「今日は終わりだ。もう出ないだろうし、明日から面倒になるからな」

《…Yes, Sir (…了解)》

答えと同時に、二本の刀が光り輝き、十字架をあしらったネックレスへと変わる。

「アイツが家に戻るまで、結界維持頼むぞ、アクセル」

《Yes, Sir (了解)》

さて、明日は早いし、さっさと寝とくか。

「はあーっ」

公園から離れ、どうにか自宅のベッドまで戻り一息つく。いつの間にか緑色から銀色に変わっていたドームも、私が家にたどり着くと同時に消えた。お母さんやお姉ちゃんにそれとなく聞いてみたけど、ドームを張られていた間のことは覚えていない、というより知らないらしい。家にたどり着いて10分以上経ってからようやくサイレンが鳴り始めたことを考えても、あのドームが張られている間は時間が進まないみたい。

「すみません…、巻き込んでしまつて…」

枕元に座ったフェレットさんが頭を下げる。

「ううん、大丈夫」

と、私は明るく笑って見せるが、

「でも実際、危ない所でした。彼が居なかったら、怪我どころじゃ済まなかったでしょう」

確かに、あのよくわからない少年が防御してくれなければ、私は今ここに居なかったかもしれない。だけど、

「それでも私は、あなたを助けたい。力になりたいの」

フェレットさんの目を見据えて、はっきりと答える。これは私が決めたこと。誰がなんと言おうとも、これだけは譲らない。

「君は…」

「自己紹介がまだだったね。私は高町なのは。小学三年生。気軽になのはって呼んでね」

何かを言おうとしたフェレットさんに被せるようにして言う。こうでもないはずと自分を責め続けそうだし。

「…僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

「ユーノ君、か。良い名前だね」

フェレットさん、ユーノ君を抱き上げた私はニッコリと微笑む、つもりだったが、大欠伸をしてしまった。

「ふあ…、色々あつて今日は疲れたな…。ユーノ君、詳しいお話は明日にしよう?」

「うん、わかった」

上着を脱ぎ、ベットにころんと寝転がる。

「それじゃユーノ君、おやすみー」

「おやすみ、なのは」

ちよっぴり変なことになっちゃったけど、考えるのは明日にしよう…。

（そういえば…）

まどろみの中で、今日出会った少年の姿を思い出す。最後にチラリと見えた彼の顔は、

（なんだか…、辛そうだったな…）

そんなことを思いながら、私は睡魔に身を委ねた。

## 第二話「封印」（後書き）

デバイスの発言を全部英語にしたのは死亡フラグにしか思えません  
が、関係ないよ、？<sup>バカ</sup>だものw  
ところでフェイトマダー？（スターライトプレイヤー）

### 第三話「接触」(前書き)

はい、三話です。

前回のような主人公無双はありませんが、ちょっと殺伐としています。反抗期ですかね？(えw  
それではどーぞー



### 第三話「接触」

「なのは、夕べの話聞いた？」

教室に入ると同時、アリサちゃんが駆け寄って来た。

「え？夕べって？」

「なんでも昨日通った公園で何か事故があったみたいで、しばらく封鎖されるんだって」

これから塾に行く時通れないのは辛いよね、と後から近付いて来たすずかちゃんの言葉に、背中に嫌な汗が伝う。心なしかかばんの中のユーノ君も、ごそごそと身を丸めたような気がする。それってもしかして…、

「あんた昨日帰り遅かったでしょ？巻き込まれたりしなかった？」

「え！？あー、うん、まあ…、大丈夫大丈夫」

が、私の言葉とは裏腹に、二人は訝しげな視線を送ってくる。

「なのは、あんたどうしたの？」

「ふえ！？ど、どうしたって、な、何が？」

唐突なアリサちゃんの言葉に、私は慌てて聞き返す。

「なんだか昨日辺りから、様子がおかしいよ？」

「ええ！？そそそ、そんなことないよ！！」

続けて言うすずかちゃんも納得させようと、私は必死に訴えかけると、タイミングが良いのか悪いのか、授業の開始を告げるチャイムが聖祥附属の校舎に鳴り響いた。

「…まあ、そこまで言うなら何も言わないけど、無理はするんじゃないわよ？」

アリサちゃんが呆れたように額に手を当て、溜め息をつく。

「具合が悪かったらすぐ言ってね？」

すずかちゃんも心配そうにしながら、自分の席に戻っていく。先生が教室に入ってきた為、アリサちゃんもこちらを気に掛けながら席に戻る。

「…大丈夫？」

「うん。いきなりあのことで話し掛けられてビックリしただけだから」

頭の中に直接響いてきたユーノ君の声に、口に出さずそう答える。あんまり自覚はないけれどももう私も魔法使いの一員で、念話くらいは変身しなくても出来るらしい。

『それじゃ、話してあげるよ。僕のことや魔法のこと、ジュエルシードのことを』

教科書を開く先生をぼんやりと眺めながら、私はユーノ君の声に耳を傾けた。

「…オイ」

むくり、と起き上がり、俺の放った第一声はそれだった。

《How did you do? Master (どうかしたか? 主人)》

しれっと聞き返してくる相棒、  
いや、今この瞬間は敵か。敵に聞き返す。

「…俺、夕べ「明日5時に起こせ」って言ったよな？」

《Yes<sup>ああ</sup>》

春とはいえ、朝5時と言えばまだ暗い時間だ。なのに今屋上から見上げた空はどこまでも明るく青い。

「…今何時だ」

《It is ten o'clock (10時だな)》

「…オイ」

再び同じセリフを吐いてしまう。今日が初日だったのに…、初っ端から遅刻かよ。最悪だ。

《I was given up because it had occurred though it called (声を掛けても起きないから諦めた)》

「そいつ時こそ根性見せろよ!」

後でコイツ絶対バラす。

《Might you run if it is said that it was 8 PM? (夜8時だと思った、と言えば通じるだろ)》

「な訳あるか!」

胸元のネックレス目掛けて怒鳴り、ダブルアクセルを起動させながら隣のビルへ跳ぶ。そのまま壁を蹴って地に降り、目的の場所目掛けて駆け出した。

「ホントに通じたよ」

《Because it was a returnee, the jet lag might have been judged to be reluctant even if it caused it (帰国子女だから時差ボケ起こしても仕方ないと判断されただろう)》

かばんとコンビニ袋をぶら下げ、生徒で賑わう昼休みの廊下を歩く。

場所がわからず遠かったこともあり、結局学校、聖祥附属にたどり着いたのは昼休みになってからだった。

「…平和だなあ」

思わず昔を思い出す。昔と言っても僅か数日前の話だ。なのに、とても遠い昔の話に思えるのは、それだけこの数日が濃かったということなのだろう。…いや、戯言か。

「確か四年は一個上の階だったか…」

くだらない思考を切り捨て教室に向かおうと階段に足を向けたと同じ時、向こうから歩いて来る三人組に気が付いた。

「なのは、あんた本当に大丈夫？」

「授業中もずっと上の空だったよ？」

「あ、うん、大丈夫大丈夫…」

金髪を括った長い髪の少女と、紫色の髪を伸ばしたカチューシャの少女。

そして、オレンジの髪を二カ所で結んだ、あの少女。

「……………っ!？」

向こうもこちらに気付き、身を固くする。その反応で、確実に昨日の少女だと確信した。

『やれるか?』

『N a t u r a l l y (当然)』

胸元の相棒に念話を飛ばす。我が頼れるパートナーは涼しげに答えた。なら、やれる。

(グラビティ…)

「あー!!」

「「「!?!?!」」」

唐突な金髪の少女の声に、俺だけでなく二人の少女も動きを止める。

「もしかして、今日編入して来た帰国子女の!?!」

目をキラキラと輝かせながら尋ねてくる。

「え? あー、まあ、一応」

どうにか答えながら頭を掻く。なんでそんなこと知ってるんだコイツは…。

「これからお昼ですよ? よければ一緒にしません?」

と、気を取り直したカチューシャの少女が提案してくる。

『…どう思う?』

『It is judged that it is a good』

chance (いい機会だと判断する)』

『…だな』

チラリ、と奥の少女に視線をやると、戸惑ってオロオロしていた。ホント、偶然というか、神様も趣味が悪いというか。

(…戯言だな)

神などいない。いる訳がない。くだらない思考をしている暇はない。

「よかった。僕も来たばかりでまだ色々わからないから、よければ案内してくれる？」

にこやかに話し掛けながら、念話で相棒に指示を送る。

『アレの準備をしとけ』

『Yes Sir (了解)』

「はい、喜んで」

カチューシャの少女が微笑み、金髪の少女があの子を引っ張る。

「ほらなのは、気分転換にちょうどいいし、一緒に行こ？」

「あ…、う、うん」

なのはと呼ばれたその少女は、チラチラとこちらを見ながら階段を上り始める。さて、

(どう転ぶか、だな…)

「…すごいなあ」

屋上に出て、街を一望した彼の漏らした感想がそれだった。

「ここは海が近いから、風も気持ちいいんです」

すずかちゃんが備え付けのベンチに座り込み、弁当を開ける。

「ま、おかげで屋上は大繁盛で、場所取りが大変だけどね」

アリサちゃんもドサツ、と座り、弁当箱を引っ張り出した。私もおずおずと座り、お弁当を開ける。

「そっといえば、名前なんていうの？」

コンビニ袋をごそごそやってる男の子に、卵焼きをぱくつきながらアリサちゃんが尋ねた。

「ああ、そっといえば名乗ってなかったね」

彼はおにぎりを引っ張り出し、微笑みながら自己紹介する。

「僕は。 。 四年生。よろしく」

「…え？」



私は思わず呟く。…今、なんて？

「ええ！？年上だったんですか！？」

アリサちゃんが驚いたように言うが、私が聞きたいのはそこじゃない。

「まあそっただけど、堅くならなくていいよ。普通に接してくれると嬉しい」

恐縮して小さくなったアリサちゃんに苦笑し、彼は手を振った。

「私は月村すずか。すずかつて呼んでね。よろしく、君」

まただ。私にはその言葉がわからない。聞き取れて、言おうと思えば言えるハズなのに、脳がその単語を理解出来ない。

「うん、よろしくすずかちゃん」

「よろしく。あたしはアリサ・バニングス。アリサでいいわ」

「うん、アリサちゃんもよろしく」

戸惑う私をよそに、二人は自己紹介を終え、フレンドリーな空気を醸し出している。

「で、こっちが…」

「た、高町なのはです…。よろしく…」

アリサちゃんに促され、おずおずと自己紹介する。

「うん。よろしく、なのはちゃん」

彼はニツコリと微笑み、指をパチン、と鳴らす。

瞬間、世界が静止した。

「っ!？」

校舎は銀色のドームで覆われ、先程まで隣に居たすずかちゃんとアリサちゃんも消えた。広い屋上に残っているのは、私と彼の二人だけ。

「余興は終わりだ。出て来いよフェレット。居るんだろ?」

先程とは打って変わった言葉使いと表情で、屋上の扉を見遣る。

「…微かに魔力が漏れ始めていたからね。僕を呼んでいたんだろう?」

と、扉の陰からユーノ君が現れる。それを見た彼は頷き、視線を戻す。

「安心しろ。少なくともこちらは敵対するつもりはない。だが…」

そのまま彼は、何もない空間に座り込む。椅子も何もないのに、彼の体は宙に完全に固定されていた。

「ジユエル<sup>アレ</sup>シードに関わる以上、俺としてはあんたらと話をしてお

かなきゃならない」

介入者たる俺が気になってたんだろ？と彼は続ける。

「教えてやるよ。俺の素性と目的を」

「まず、ジュエルシードというモノについての説明だ」

フィルムを剥がしたおにぎりを一口かじり、彼が説明を始める。ユーノ君自身や魔法については授業中に聞いたけど、ジュエルシードについてはまだ何も知らないので、真剣に耳を傾ける。

「その前に前提として、俺やそいつはこの世界じゃない、別の世界から来たってことはいいな？」

ユーノ君を指差し、確認を取ってきた彼に私は頷いた。OK、と彼が説明を再開する。

「ジュエルシードは俺達の居た世界における古代遺産、ロストロギアと呼ばれるモノで、本来は手にした者の願いを叶え、力を与える魔法の石なんだ」

再びごそごそと袋を漁り、牛乳パックにストローを刺しながら彼が続けた。アレ？でも…、

「そんなモノが…、なんであんな姿に？」

「そう。問題はそこなんだ」

願いを叶える魔法の石が、何故あんな獣の姿になって襲い掛かって来たのか。そんな疑問を挟んだ私に、彼はよく気付いたと言わんばかりに続ける。

「本来、ジュエルシードは21個全てを集めることでその力を発揮するんだが、その性質上恐ろしく不安定で、力の発現条件が一切不明なんだ。タベのように単体で暴走して、使用者を求めて周囲に危害を加えたり」

ふと脳裏に、タベの獣の姿が過ぎる。あんなモノが街を荒らしたりしたら、大変なことになる。

「偶然見付けた人や動物が間違って使用してしまつて、それを取り込んで暴走する可能性もある」

その言葉に私は青ざめる。単体でもあれだけ危ないのに、人や動物を取り込んだじゃうの…！？

「そんな危ないモノが…、なんで家のご近所に…？」

「…僕のせいなんだ」

「「！？」」

震えながら尋ねた私と、牛乳を啜っていた彼が、同時にユーノ君へ振り向く。

「僕は故郷で、遺跡発掘を仕事にしているんだ。ある日、古い遺跡の中でアレを発見して、調査団に依頼して保管して貰ったんだけど、

輸送していた時空間船が事故か、何らかの人為的災害に合ってしまった……」

「この世界に散らばった、って訳か」

彼が嘆息しながらおにぎりを頬張る。それを見たユーノ君は縮こまりながら続けた。

「今まで見付けられたのは二つだけだから……、残りは19個。まだまだ先は長い……」

「でも、ちよつと待つて」

唐突に割り込んだ私に、二人の視線が集中する。

「話を聞く限りでは、ジュエルシードが散らばっちゃったのって、全然ユーノ君のせいじゃないんじゃない……」

「だけど……、アレを見付けてしまったのは僕だから……。全部探し出して、ちゃんと封印しないと……」

なんとなく……、なんとなくだけど、ユーノ君の気持ちはわかる。もし私が同じ立場だったら、きっと私も同じことをしただろうから。

「少しの間だけ休ませて貰って、魔力が戻ったら、また一人でジュエルシードを探しに……」

「ダメだよ」

ユーノ君が言い切る前に、私はきっぱりとそう言った。だって……、

「友達が困ってるんだから、ほっとけないよ」

「だけど、昨日みたいな危ない目に合うかもしれない。昨日は彼が助けてくれたけど、今度は本当に死ぬかもしれないんだよ？」

「言ったでしょ？私はユーノ君を助けたいの。だから、協力させて」  
一人ぼつちは寂しいから。ユーノ君はずっと一人で頑張ってきたから。私も、一人の寂しさを知っているから。放っておくことなんて、出来るハズない。

「なのは…」

「ユーノ、だったか？心配すんな」

と、一個目のおにぎりを完食した彼がユーノ君に向き直る。

「なんかあったら俺も協力するし、なのはには怪我一つ負わせない。だから安心して、俺達に任せとけ」

夕べと同じ静かな、だけど、強い意志を秘めた声。あれ？そういえば…、

「ジュエルシードのことは聞けたけど…、あなたは一体…」

思わず疑問が口をつく。彼についての話題には一切触れていない為、彼のことはわからないままだ。

「俺はジュエルシードを封印する為別の世界から来た、ただの魔法

使いだよ」

彼が二個目のおにぎりを開封しながらなんでもないことのように答える。つて、ええ!?

「じゃあ、帰国子女って話は…」

「当然囃。この中途半端な時期に編入するならそのくらいの理由がないといけないし、そもそも日本じゃない所から来たんだからあながち間違ってもいないけど」

別世界から来てても帰国子女って言うのかなあ…、つて、そうじゃなくて!!

「でも、ジュエルシードを集める以上、学校に行ったら時間がなくなるんじゃない…」

「俺がなんと言おうと、周りから見れば10歳児が昼間に歩いているようにしか見えないだろ」

だったら面倒でも学校に行つて、目立たない方を選ぶ、と答えながら牛乳を啜る。まあ確かに、間違つてはいないんだけど…。

「あなたは何故、ジュエルシードを集めているんですか？」

不意にユーノ君が放った問い掛けに、二個目のおにぎりを完食した彼の動きが止まる。

「…困っているヤツが居て、助けてやれる力がある。なら、答えは一つだけだろ」

一瞬の間を経て、彼が牛乳を啜りながら答える。だが、

「だとしても、こんな辺境の世界まで来る理由にはなり得ない。もしジュエルシードを悪用するつもりなら…」

「…悪用、だと？」

ユーノ君が言った瞬間、彼の纏う空気が変わる。体が硬直してしまいう程凄まじいそれは、怒りの感情だった。

「誰が使うかあんなもの…、アレがロストロギアじゃなけりや、俺が真っ先にブツ壊してる…!!」

空の牛乳パックを握り潰し、怒りに震えながら彼が毒づく。一体、なんなの…!?

「…悪い、取り乱した。でも最初に言っただろ、敵対するつもりはないって」

牛乳パックをコンビニ袋に押し込み、彼が立ち上がる。

「今はまだ詳しいことは言えないが、俺はただ単にアレを封印したいただけ」

そう言い残し、彼は屋上から出る扉を開ける。

「ま、待って!!あなたの、あなたの名前は!？」

すっかり忘れていた疑問を思い出し、遠ざかる彼の背中に問い掛け



る。

「名前…？ああ…、魔法使い以外は違和感を抱かないようリフレクションを掛けといたんだっけ…」

私の言葉に、彼が思い出したように呟く。

「俺はナナシ。名前がないからナナシだ。わかりやすいだろ？」

彼は俯きながら自嘲するように答えた。

「名前が…、ない…？」

それって、一体…。

「かつてはあったよ、名前。ちゃんとした名前がな。だけど…」

彼は空を仰ぎ、自らを嘲笑いながら続けた。

「今の俺には、それを名乗る資格なんてないよ」

そう言った彼の姿は弱々しく、今にも泣き出しそうに見えた。

「…俺の連絡先だ。なんかあったら使ってくれ」

と、呆然とする私目掛けて、ナナシ君が一枚の紙屑を放り投げる。キャッチして開いてみると、携帯の電話番号とアドレスが書いてあった。

「まあ、何はともあれ目的は同じだ。これからよろしくな、なのは」

「うん、よろしく、ナナシ君」

その言葉を最後に、ナナシ君は屋上を後にした。それと同時に、校舎を覆っていた銀色のドームが消える。居なかった人達が戻り、止まっていた時が刻まれ始める。

「しかし残念ね、急に家族に呼び出されるなんて」

「仕方ないよ、また今度誘おう？」

アリサちゃんとすずかちゃんも、何事もなかったかのように昼食を再開する。

「…これもナナシ君の魔法かな？」

「おそらくは。アフターケアまでしていくとなると、本当に敵対するつもりはなさそうだ」

弁当箱を入れる巾着袋の中に隠れたユーノ君と言葉を交わす。まあとりあえず、

（…放課後にでも連絡してみようかな）

お弁当を食べながら、そう思った。

「…こんなもんか」

『Well-done（上出来だ）』

無事教室にたどり着き、色めくクラスメートをあしらいながら、相棒と言葉を交わす。

『高町なのは、か…』

高町なのは。自ら望んで魔法に関わることを選んだ、あいつと同じ目をした少女。

『そんなやつが使ってくれるんなら…、あいつも本望だろうな…』

『Because that girl seems to be trusted（あの少女を信頼しているようだしな）』

相棒も満足そうに頷く。やっぱ、気にはなっていたんだな。

『ちゃんと釘は刺しといたか？』

『It was said that that and the present master were freeshi in old times very（昔はどうあれ、今の主人はただの「ナナシ」だ、と言っておいた）』

『…サンキ』

と、授業開始を告げる鐘がなり、生徒が席に戻り始める。

『さて、頑張るか』

『Make an effort as far as possible  
ible（精々気張れよ）』

相棒との会話を打ち切り、俺は笑顔を作りながら教壇目掛けて歩き出した。

### 第三話「接触」(後書き)

しかし(21)個って…

都築さんは(21)〃ロリの時代が来ることを見越していたのだろ  
うか(マテ

そんなこんなでようやく主人公の名前が出たと思ったら「ナナシ」  
ってなんやねん俺。

そしてさりげなく伏線フラグを立てていたり。

はい、続きますw

#### 第四話「共闘」(前書き)

はい、四話です。

別名ggdggd回です。

嘘みたいだろ…？まだアニメ二話なんだぜ？これ…？  
ま、ともあれどうぞー

#### 第四話「共闘」

「ふう……」

授業の終わりを告げる鐘が鳴り、私は一息つく。

「なのはー、今日はどうする？」

立ち上がって伸びをしていると、アリサちゃんが尋ねて来た。私達三人組は普段、放課後になると翠屋に集まることが多い。翠屋というのは私の両親が経営している喫茶店で、洋菓子等の販売も行っている。

「んー、悪いけど今日はなしで。やりたいことがあるから」

悪いと思いつながらもアリサちゃんに謝り、かばんを背負う。

「何かご用事？」

すずかちゃんが首を傾げながら尋ねる。まあ用事っていえば用事だけど……、

『今の俺には、それを名乗る資格なんてないよ』

自らをナナシと名乗ったあの少年。その時の泣きそうな顔が、何故か目に焼き付いて離れない。理由はわからないけど、何故かほつけないのだ。

「まあ似たようなものかな。じゃ、二人共また明日ねー」

「うん、じゃあねーなのはー」

「なのはちゃん、また明日ねー」

二人と別れ、ポケットから携帯電話を引っ張り出した私は、メモに書かれた11桁の番号を入力した。

「…で、どうかしたのか？」

電話を掛けてから3分。彼はあっさりとやって来ました。あまりにも呆気なさ過ぎて、肩透かしを喰らったような気分です。

「え、あ、いや、まあ、どうかしたって程でもないんだけど…」

しどろもどろになりながら言葉を紡ごうとする私を見て、彼は溜め息一つ。

「とりあえず立ちっぱもなんだし、どっか行くか？」

「あ、うん」

冷たく振る舞っているけれど、アリサちゃんやすずかちゃんに対する記憶の修正や、言葉に詰まる私への気遣いは本物だ。そこについてはユーノ君とも意見が一致している。

『俺はナナシ。名前がないからナナシだ』



だからこそ、彼がわからない。心の奥に温かいモノを持っているのに、何故あんな風に振る舞うのか。

（お話…、聞けたらいいな…）

彼の背中を追いながら、ふとそんなことを思った。

「さて、ジュースとお茶とソーダ、どれがいい？」

とりあえず、近くの公園のベンチに腰掛け、自販機から戻って来たナナシ君が質問する。

「あ、じゃあジュースで」

「オッケー。ユーノはお茶とソーダどっち？」

私にオレンジの缶ジュースを渡しながら、今度はユーノ君に尋ねる。

「えー？えーと、それじゃあお茶を…」

「あいよ。ちょっと待ってな」

自分の分まで買って来てくれるとは思っていなかったのか、戸惑いながら答えるユーノ君にそう言うと、ナナシ君はお茶の入った缶を開け辺りを見回した。

「…よし、誰も居ないな。アクセル」

《Gravity Fall》

ナナシ君が胸元のネックレスに呼び掛けると同時、無機質な声が答えた。

瞬間、缶の口から渦を巻くようにしてお茶が宙に舞い始めた。

「…え？」

しかし彼は気にすることなく、空になった缶を地面に置く。

「よつ、と」

軽い掛け声と同時に、缶が押し潰されるようにして変形を始め、ペット用品の水差しに似た形になる。そのままお茶を流し込めば、ユーノ君用のお茶飲み場が完成だ。

「…すごい」

思わず感嘆の声が漏れる。目の前に水差しを置かれたユーノ君も、あまりの出来事にポカンとしたままだ。

「すごいすごい！！一体どうやったの！？」

「そんな大したことでもないよ」

興奮する私をよそに缶を開封し、ソーダを啜りながらナナシ君が言う。

「ユーノから聞いてない？魔力変換資質の話」

「魔力変換資質？」

頭にクエスチョンマークが浮かぶ。なんだろそれ。

「ああ、なのはにはないのか、魔力変換資質。ユーノ、説明頼む」

が、ナナシ君は納得したように頷き、ユーノ君に後を任せてソーダを啜り始めた。

「魔力変換資質っていうのは、魔法によるプロセスを踏まず、魔力を別のエネルギーに変換する事が出来る能力のことだよ。本来、魔力によるエネルギーの発生には魔法による組み替えが必要なんだけど、この資質を持つ者は魔法を介さずにエネルギーを発生させることが出来るんだ。簡単に言うと、魔法なしで炎や電気を操れる能力、みたいなモノだよ」

ユーノ君がぴちゃぴちゃとお茶を舐めながら解説してくれる。

「その能力を、ナナシ君が持ってるの？」

「まあね。俺みたいに二つ持ってるヤツは珍しいみたいだけど」

そう言いながらナナシ君は再び手を振るう。すると、地面に転がっていた石が急に浮き始めた。

「一つ目がコレ、重力。と言っても、重力ってのは上から掛かる力の名前だから、任意の方向に発動出来る時点で重力じゃないけどね」

さっきのお茶もコレだよ、と苦笑しながら石を落とす。

「んで、もう一つがコレ」

そう言うとナナシ君は立ち上がり、いつの間にか空になっていた缶を思いっ切り放り投げる、…って、ええ！？

「ほいっと」

が、次の瞬間、バチン！！と凄まじい音を立てて、ナナシ君が何かを握る。

「…ええー！？」

良く見るとそれは、さっき彼が放り投げた空き缶だった。一体どうして…。

「…磁力、かい？」

と、その光景を眺めていたユーノ君が答えを口にした。

「大正解。ま、磁力の応用で電気も操れるけど、それは変換資質ではないかな」

手の中のそれ、金属製の空き缶を手で遊びながら答えるナナシ君。

「ま、そんな程度しかない魔法使いだけどね」

そして彼は、またその表情を見せた。今にも泣きそうで、フラフラとさ迷い続けている子供のような、あの表情。

「ナナシ君…」

そのことについて聞こうとした瞬間、

「!？」

急にナナシ君が立ち上がる。何かあったのかな…？

「……………!？」

遅れてユーノ君と私も気付く。夕べと同じこの感覚は…!!

「おちおちお茶も出来ねえな…、ったく」

と、ナナシ君がユーノ君を肩に乗せ、私をお姫様だっこして、…つて!？

「ナナナナナ、ナナシ君!？」

「こつちのが速いからな。ちょっと我慢しててくれ」

真っ赤になって口ごもる私とは対照的に、ナナシ君は涼しい顔で目を閉じる。

《Linear Accel》

十字架を模したネックレスから声がすると同時に、私達は宙に居た。

「…綺麗」

思わず私は今の状況を忘れ、眼下に広がる海鳴市の景色に魅入られ

ていた。

「…飛ばすぞ。しっかり掴まっとけ」

だからこそ、この街を守りたい。そんな私の思いに呼応するかのように、ナナシ君は呟く。

《Gravity Acceler》

再び声が響くと同時、私達は加速した。ジュエルシードの気配がする地点、神社目掛けて。海鳴市を、守る為に。

巨大な狼の姿をしたジュエルシードがその女性に覆い被さっているのを見た瞬間、ナナシ君の瞳から光が消えた。

「…アクセルツ!!」

《Gravity Saber!!》

私を背中に背負い直しながら右手に刀を握り、すれ違いざまに狼を切り裂いた!!

「グルアアアア!!」

「なのは!! ユーノ!! その人を頼む!!」

いつの間に拾ったのかその女性を私に預け、苦悶の声を上げる狼との間に立ち塞がる。

「てめえ……!!」

こんなに怒っているナナシ君を見るのは二度目だ。一度目はもちろん今日の昼。ユーノ君がジュエルシードを悪用云々言っていた時だ。

「落ち着いてナナシ!!この人は怪我してない!!気を失っているだけだ!!」

ユーノ君の声に、ナナシ君が纏っていた負のオーラが霧散する。よかった、いつものナナシ君に戻った…。

「グルオオオオオオ!!」

が、それを察したのか、狼がこちら目掛けて飛び掛かって来る!!

「…………チッ」

対しナナシ君は舌打ち一つ。右手の刀を縦に構え、狼の牙を受け止める。

「…邪魔だよ」

《Gravity Acceler》

そのままタン、と軽く跳び、刀を軸に右足を高速で振り抜いた!!

「グルアアアア!!」

狼は苦悶の声を上げながら吹き飛ばされた。あまりにも一方的で、

ちよつと可哀相にも思える。

「…ユーノ、まさかコイツ…」

「うん。現住生物を取り込んで…」

「え？どういうこと？」

顔を歪めたナナシ君と、深刻な表情のユーノ君を交互に見遣る。

「なのは、あいつの首元見てみる」

ナナシ君の言った通り、起き上がった狼の首元に視線を送る。そこにあるのは…、

「…首輪？」

よくよく見てみると、そんな風にも見える。首輪…、狼…、まさか！？

「おそらくその人の飼い犬辺りが、ジュエルシードに触つちまったんだろ。つたく、運の悪い…」

はあ、と盛大な溜め息と共に、どこからともなく二本目の刀を取り出す。

瞬間、彼の着ている聖祥附属の制服が光に包まれ、黒いシャツとズボン、漆黒のロングコートに覆われる。手にも黒い指無しグローブを装着し、準備は万全、と言った感じだ。

「現住生物を取り込んで実体を得た分、昨日のより手強いよ。なの



は、君も変身を――！」

ユーノ君の声でハッと我に返り、胸元からレイジングハートを引き張り出す。が、

「アレ？起動つてどうやるんだっけ？」

私の放った問いにユーノ君がずっこけ、ガクツとナナシ君の肩が下がる。

それを狙ったかのように、狼がこちら目掛けて突進して来る――！！

「チイツ――！」

刀を構え直し、狼の牙を受け止めるナナシ君をよそに、私とユーノ君は話し続ける。

「『我、使命を』から始まる起動パスワードだよ――！」

「ええっ！？あの時必死だったし、あんな長い覚えてないよぉ――！」

「くっそ……重――！」

ギリギリと音を立て、必死に時間を稼ぐナナシ君。急がないと――！！

「え、えと、我、使命を受けし者なり……！」

必死に昨日の記憶を辿り、起動パスワードを唱え始める。

「グルオオオオオオオ――！」

「んなつ!?!」

が、獣が刀をくわえ込んだまま、ナナシ君を投げ飛ばした!!

「がつ!?!」

鳥居に背中を打ち付け、ナナシ君の動きが一瞬止まる。その隙を見逃さず、狼はこちらに飛び掛かって来た!!

「っ!?!なのは!?!」

「くそっ、間に合わ!?!」

完全にフリーズしてしまった私の耳に、二人の声が聞こえる。もう…、ダメ…、

キン!?!

《Stand by Ready Set up》

バディツ!?!

私が目を閉じようとした瞬間、レイジングハートの声と衝撃音が聞こえた。恐る恐る前を見ると、桜色のバリアが狼を食い止めている。

「ふえ!?!?」

ふと手の中に違和感を抱き、右手を見下ろす。いつの間にか杖へと姿を変えたレイジングハートが、私の手に握られていた。

「パスワードなしで、レイジングハートを起動させた…!？」

「おらあっ!!」

驚く私とユーノ君をよそに、ナナシ君が狼を蹴り飛ばす。凄い速さで飛ばされた狼は、地面に体を打ち付け苦悶の声を上げる。

「なのは、怪我ないか!？」

「あ、うん。レイジングハートが守ってくれたし」

かなり動揺しているナナシ君に、私は余裕の表情で答える。

「ありがとう、レイジングハート」

《It is natural(当然のことです)》

私のお礼にレイジングハートが当然だ、とばかりに答える。

「なのは、防護服!!」

「え?ああ、忘れてた。レイジングハート、お願い」

まだ聖祥附属の制服のままだったことに気づき、レイジングハートにお願いする。

《All Right,Barrier Jacket》

レイジングハートの声と共に桜色の光に包まれ、私の纏う衣服は昨

日イメージしたモノ、バリアジャケットへと姿を変える。

「さて、準備は整った訳だが…」

ホツと一息ついたナナシ君が奥を見遣る。立ち上がった狼の目はきらついていて、戦意は全く衰えていなかった。

「サクツと片すか。行くぞ、なのは」

「うん!」

素直に頼ってくれることが嬉しくて、俄然やる気もアップする。

「片手じゃキツイな…。アクセル、一本で」

《Yes, Sir. Device Form》

無機質な声と同時に刀が一本になり、ナナシ君が感触を確かめるように握り直す。

「んじゃ、行きますか」

軽い声と同時に、昨日と同じように彼は駆け出した。

さっきヤツの攻撃を受けきれなかった理由は至って単純。二刀流という構造上、片手でしか握れない為、握力を完全に活かしきれないのだ。

片手に一本ずつではなく両手で一本握ることによって、手数を減らし質を上げる。周りは知ったこっちゃないが、少なくともこの理論は俺自身には当て嵌まる。

「グルオオオオオオ!!」

再び牙を剥き襲い掛かってくる狼。だが、

「さっきみたいには…、いかねえ、よっ!!」

アクセルでしっかりと受け止め、カウンターの回し蹴りを叩き込む。  
勿論グラビティアクセルで加速させた足を、だ。

「グルアアアア!!」

「まだだ!! アクセル!!」

苦悶の声を上げるが容赦はしない。続けざまに愛刀デバイスに指示を出すと  
同時、アクセルが鞘に収まる。

《Linear Zamber》

アクセルの声と同時に、神速の居合斬りを放つ!!

「グルアアアア!!」

リニアザンバー。刀身と鞘を同極にし、相手と刀身を異極にすること  
で高速抜刀、相手を一刀両断する魔法だ。その性質上範囲は狭い  
が、その分威力は折り紙付き!!

「グルオオオオオオ!!」

だが、真つ二つに切り裂かれたヤツの体は、瞬く間に再生してしま

う。

「核を避けたとはいえ…、アッサリ再生されると自信なくすな…」

《It is not even in the mind either (心にもないことを)》

「うつせ」

アクセルに言い返し、刀を鞘に収める。

「リニア…、ザンバー…！」

再び抜刀し、狼の体を切り裂く。だが、今回はそれで終わらない。

「アクセル、ツインフォーム」

《Twin Form Set up》

左手に二本目の刀を握り、大上段から斬りかかる…！

「グルアアアア…！」

「グラビティセイバー」

だが、まだまだ終わらない。刀身を重力でコーティングし、狼を鋭く見据える。

「千切り賽の目切りみじん切り。どれが好みだ？」

脅し文句とも取れる言葉を呟き、俺は狼を切り刻み始めた。

「うわー…」

昨日と同じ凄まじい光景に、ユーノ君も思わず頬が引き攣っている。いくら核、  
犬が居る場所を避けて斬っているとはいえ、あまりにも圧倒的。あまりにもひどい。それはもはや戦いではなく、ナ  
ナシ君の独壇場、ワンサイドゲーム一方的な虐殺だった。

「…つとと、そんな場合じゃないや。レイジングハート、お願いね」

《All Right・Sealing Mode・Set up》

私の声に応え、レイジングハートが変形を始める。やや伸びた柄から光の翼が展開された、封印の為のシーリングモード。

「ナナシ君！！下がって！！」

ナナシ君が狼から離れると同時に、レイジングハートから放たれた光がリボンへと変わり、狼を縛り上げる！！

「グルアアアアア！！」

苦悶の声を上げる狼の額に、XVIIの数字が浮かび上がる。

《Stand by Ready》

「リリカル、マジカル、ジュエルシード、シリアルXVII！！」

ナナシ君とユーノ君のサポートを受けつつ、私はレイジングハートを狼に向け、最後の一言を唱えた。

「封印!!」

《Sealing》

私とレイジングハートの声がシンクロし、桜色の閃光が狼を貫く!!

「グルア、ア、アアア…」

桜色の光に浄化され、狼の体は崩れ去った。後に残ったのは、宙に浮くジュエルシードと、小型のコーギー犬が一匹。

「ほら、またわんこが触らない内に封印しちゃって」

犬がジュエルシードに気を向けないう、犬の相手をしながらナナシ君が促す。

「うん。レイジングハート」

《All Right (了解しました)》

レイジングハートに一声掛け、宝石部分でジュエルシードに触れる。

《Receipt No. XVI》

綺麗な音と共に、ジュエルシードが吸収されるのを確認して、ようやく一息つく。



「…ふう。これで、いいのかな？」

「うん。これ以上ないくらいに」

「パーフェクト。百点満点だな」

呟いた私に二人から声が掛けられる。すごく疲れたけど、二人の笑顔を見ているとじわじわと達成感が沸いて来て、

「…えへっ」

つい、顔が綻んでしまうのでした。

「ん…、んん…、アレ…？ 転んで、頭でも打ったかな…？」

日も沈み掛けた夕暮れ時、その女性は目を覚ました。キョロキョロと辺りを見回し、愛犬の姿を探している。くうん…。

と、彼女の足元に、飼い犬であるコーギー犬が近寄って来る。頭を捻りながらも彼女は犬を抱いて、神社の石段を降りて行った。

「お疲れ様、かな？」

「うん、そうだね」

鳥居の上に腰掛けた私とユーノ君は、端っこに立ったままのナナシ君に声を掛ける。

「ま、念には念を、ってね。ヘタに全部忘れさせて騒がれるよりは、嘘っぱいホントのことだけ覚えさせといて、夢だと思わせとくくらいが丁度いいんだよ」

ナナシ君は額に手を当て、海鳴市全体を見渡している。磁力、引いては電気を操れる彼が、彼女の記憶を操作してくれたのだ。

「こんなにも良い街なんだ…。あんまり、騒がしくしたくないしね」

ナナシ君が苦笑しながら、こちらに歩み寄って来る。

私、高町なのはが魔法使いになってからの、長い一日がやっと終わっていきます。新しく出来た友達、ユーノ君のこと。魔法のこと。不安なことや、よくわからないこと。そして、本当は心には温かいモノを持つてる、ナナシ君のこと。とにかく、たくさんあるんですが…、

「それにしても、お腹減ったねー」

私の唐突な言葉に、ユーノ君が微笑み、ナナシ君が苦笑する。

「んじゃ、今日はお開きかな。なのは、ユーノ、また明日な」

私の手を取って、石畳の上に降ろしてくれたナナシ君が手を上げる。

「うん、それじゃあまた」

「ナナシ君、また明日ねー」

ナナシ君は微笑を残し、夕暮れの空へ駆け上がって行った。また今

度、お話したいな…。

「さて、帰ろっか」

「うん」

肩に掴まったユーノ君と言葉を交わし、石段を駆け降りる。  
とりあえず、色々頑張っで行かなきゃ、と思います

#### 第四話「共闘」(後書き)

はい、やらかしました。

変換資質二つです。

しかも重力と磁力って聞いたことねーぞw  
どんだけレアなんだよw

しかも共闘(笑)w

主人公が斬ってなのはがぶっぱしただけやんw

とりあえず、次回からは更に文章が長くなるのでご注意ください  
えw

## 第五話「変化」(前書き)

はい、五話です。

色々詰め込んだ結果ポリウムがえらいことにW  
アニメ三話+説明ブチ込んだ結果がコレだよ！W  
それではどーぞー

## 第五話「変化」

こんばんは、高町なのはです。

私は今、真夜中の学校に居ます。一人ではなく、ユーノ君とナナシ君も一緒です。

「行ったぞなのは！！準備出来てるな！？」

「うん！！大丈夫！！」

「最大限のフォローはするから、任せといて！！」

いつもは平凡な小学校三年生なのですが、最近是这样、色々ありまして…、

《Stand by Ready》

「リリカル、マジカル、ジュエルシード、シリアルXX、封印！！」

《Sealing》

桜色の閃光が弾けると同時、元の姿に戻ったジュエルシードが、ゆらゆらと降りて来る。

「はあっ、はあっ、はあっ」

「なのは、お疲れ様」

「大分息荒いぞ？大丈夫か？」

えーと、魔法少女とか、やってるんですが…

「大丈夫、なんだけど…、ちょっと疲れた…」

そう言い終えるや否や、脱力した私は地面に倒れ込む。

「つとー!!」

地面に激突する寸前に、ナナシ君が抱き止め、支えてくれた。地面に刺さったままのアクセルがなんだか哀愁を誘う…。

「…まあ、しょうがないよね…。夜中の2時だし…」

ユーノ君がレイジングハートを支えながら呟く。腕と足がプルプルしててなんか可愛い。

「とりあえず、封印出来たし帰ろうか」

溜め息と共にアクセルをネックレスに戻したナナシ君。そのまま私を背負い、レイジングハートとユーノ君を拾って歩き出す。

「寝てっついていいよ、俺がしっかり運んどくから」

「ん…、ゴメン、お休み…」

ナナシ君の温もりに包まれて、私は心地よい睡魔に身を委ねる。

「…お疲れ様」

ナナシ君は微かに微笑み、歩き始めた。  
私達の家、高町家に向かつて。

「なのは、起きて、朝だよー」

「んにゃ…、今日は日曜だから…、もうちょっとお寝坊させて…」

次に気が付くと私はベットの上で、ユーノ君に揺すられていました。  
でもタベ頑張ったから眠くて…、ふぁ…、

「なのはー、起きてるかー」

「ひゃいっ！？おおおお起きてまふっ！！」

廊下から掛けられたナナシ君の声には私は飛び上がり、あたふたとしながら答える。

「うんまあ、休日だし寝ててもいいけど…、約束には遅刻しないようにな」

「う、うん！！今出る〜」

わたわたと着替え慌てて廊下に出ると、ナナシ君はポカンとした後、  
口元に笑みを作る。

「ったく、抜けてるんだか真面目なんだか…」

そのまま階段を降りはじめたナナシ君に続き、私も下に降りた。



布団に埋もれ、窒息寸前だったユーノ君に私が気付くのは、  
もう少し後になる。

「お父さん、お母さん、おはよー」

「士郎さん、桃子さん、おはようございます」

二人揃って挨拶を済ませる。

「ああ、なのは、ナナシ君、おはよう」

「おはよう、二人共」

なのはの両親、高町士郎さんと高町桃子さんが笑顔で返してくれた。  
さて、順を追って思い返してみよう。何故俺がここ、高町家にナチ  
ユラルに溶け込んでいるのかというと。

「ええっ！？ナナシ君お家がないの！？」

そもそも事の発端は四個目のジュエルシードを封印した四日前。「  
そっいえばナナシ君の家ってどこにあるの？」と聞いて来たなのは  
に、正直に「廃ビルに勝手に住んでる」と答えたことだ。

「じゃあ家においでよ！！お父さんもお母さんもお兄ちゃんもお姉  
ちゃんも良い人だよ！？」

「お前んとこそんな大家族だったのな…、って、待て」

危うく流される所だった。危ない危ない。

「迷惑は掛けられないし、第一俺は別の世界の人間だぞ？ジュエルシードの封印が終わったらいなくなるし…」

「ええっ!？」

それを聞いた瞬間、なのはがダッシュで詰め寄ってくる。って速えな!？

「嘘っ!？ナナシ君、いなくなっちゃうの!？」

「落ち着け、騒ぐな、とりあえず苦しい」

必死な表情で襟元を掴まれたまま、物凄い勢いで揺らされる。…うわ、軽く酔った。

「でも実際その為に來てるんだから、終わったら…、終わっ…、たら…」

ジュエルシードを全て封印して。それからどうする？この胸に秘めた黒い欲望に従い、ヤツを追えと？そして…、

「ナナシ君、大丈夫？顔真っ青だよ？」

なのはが俯いた俺の顔を覗き込む。こんな優しい少女を、俺の業に巻き込めと？

「…一人は、寂しいから」

「…え？」

ぼつり、と。なのはが唐突に呟いた。

「お父さんはもともとボディーガードの仕事をしてただけで…、事故に巻き込まれて大怪我したことがあるんだ」

翠屋の店主である、高町士郎さんの顔を思い出す。なのはの友人の付き合いで何度か会ったことがあるが、優しくそうな人だった。…同時にただならぬ気配も感じていたが、そういうことだったのか…。

「お父さんの看病やお店の切り盛りで家は大変で、私は一人でちっちゃい頃を過ごしたの…。わかってはいたけど、寂しかった」

静かに語り続けるなのはを見て不意に、薄暗い部屋の中、隅で膝を抱える彼女の姿が脳裏を過ぎる。とても悲しそうな瞳は、あいつによく似ていて…、

「…ナナシ君？」

心の命ずるままに、思わずなのはの頭を撫でていた。

「あ…、悪い」

つい手を引つ込め視線を反らす。何をやっているんだ俺は…。

「一人で悩んでも答えは出ないから…、だからお家で過ごして、ゆっくり答えを探して行けばいいんじゃないかな」

その言葉には、抗えない何かがあつて。俺は無意識に頷いていた。

それからあれよあれよという間に話が進み、俺は高町家に居候することになった。土郎さんは「何やら事情があるみたいだし、何もない所だがゆつくりしていつてくれ」と笑み、桃子さんは「次男も欲しかったのよねー」と満面の笑顔、恭也さんは「まあこんな家だから」と苦笑、美由希さんは「あらカッコイイ、なのはの好きな子？」と目を輝かせ、皆（？）温かく迎えてくれた。何このお人よし一家。絶滅危惧種並の善意の塊じゃん。

ちなみにこれ以上頭痛の種を増やしたくないので、最後の一人についてはスルーした。：そっぴや美由希さんが言つた時、なのはの顔からぼふっ！とすごい音が聞こえた気がしたがなんなんだか。

「ナナシくん、お皿運んで」

「はいはい、つと」

桃子さんに渡された朝食、スクランブルエッグをお盆に乗せテーブルに運ぶ。ホント、大分馴染んだよなあ、俺。

「それじゃ、いただきます」

「……………いただきます……………」

土郎さんの音頭に、全員の声がシンクロする。  
温かな家庭。温かな団欒。俺にはもう手に入らないと思っていた、ささやかな願い。

「ん？ナナシ君、どうかしたの？」

隣に座ったなのはが無邪気に尋ねてくる。頬についたケチャップが、なんだか微笑ましかった。

「なのは、頬にケチャップついてるぞ」

「ふえっ！？どこどこ！？」

案外大事なモノというのは、すぐ傍にあるものなのかもしれない。オロオロするなのはの頬をナプキンで拭ってやりながら、俺はそんな風に思った。

「しかしユーノ、いいのか？ジュエルシード探し」

「ん？」

河原の土手に座り込み、眼下で繰り広げられるサッカーの試合をなんとはなしに見ながら、頭上に乗せたユーノに質問を投げ掛ける。今日は土郎さんがコーチ兼オーナーを務めるサッカーチーム、翠屋JFCの試合の日なのだ。朝言っていた「約束」もそのことで、なのはの友達二人、アリサとすずかと一緒に応援しようと話し合っていたらしい。なので、今日の街中パトロール兼ジュエルシード探しはなしになったのだ。

「一週間で五個も集まってるんだ。少しくらい休んだって罰は当たらないし、それ以前に体が持たないよ」

「俺としてはサッサと終わらせたいんだけどな…」

脱力してもたれ掛かるユーノの喉元をくすぐりながら、ベンチに座るなのはを下ろす。

高町なのは。不思議な少女。俺なんかに進んで関わろうとする、自称平凡な小学三年生兼魔法少女。

「…家族の所に、帰りたい？」

ふと、膝の上に降り立ったユーノが真剣な顔で尋ねてくる。

「家族、ね…」

対し俺は視線を逸らし、頭上を流れる雲を眺めた。

「いないよ、家族は。両親は四年前に事故で亡くなった」

「……………ゴメン」

なんでもないことのように告げた俺に対し、ユーノは頭を垂れる。  
「…」

「なんでお前が謝る？両親が死んだのはお前のせいじゃないだろ」

苦笑しながらユーノを抱え上げる。

「確かに俺はこの世界で無駄な関わりを増やさないようにしてきた。ジュエルシードを封印した後どうするのであれ、別れは辛いからな」

女三人の中に一人だけ男、というのが気まずいのもあるが、今日の約束を辞退した理由はそちらの方が大きい。

だけど、あの少女と出会って、俺の心にも若干の変化が現れた気がする。

「一人で過ごす方が気楽なのは事実だけど…、こうして誰かと触れ合う、温かい家庭も、…嫌いじゃないかな」

その変化が良いことが悪いことかはわからないけれど、

「…そうだね」

ユーノが微笑み、頭上に乗る。俺も立ち上がりながら、こいつも同じなんだな、と思う。俺と同じで、あの少女とその家族が生み出す不思議な空間に、安らぎを覚えているのだと。

「明日から頑張るか…、お互い様に、な」

「そうだね。なのはに負担は掛けられないし」

二人が拳（？）をぶつけ合い、男の約束をすると同時に、試合終了を告げる笛が鳴り響いた。

「…人多っ」

日曜日の海鳴市は、人出がかなり多かった。

試合終了後、サッカーチームのメンバー+なのは達は、翠屋でパーティーをするとのことで、俺は街中を歩いていた。温かい家庭は嫌

いじゃないが、騒がしいのはさすがにご遠慮願いたい。なのには  
ユーノを預けた際に言っておいたので、終了のお知らせが来るまで  
適当に過ごすことにしたのだ。神社で共闘した日に互いの精神をリ  
ンクさせておいたので、電話やメールがなくとも念話で一発、とい  
う訳だ。

「…ホント、良い街だな」

活気があり、人々の顔は希望に満ちている。魔法なんてなくとも、  
人間は幸せになれる、ということの何よりの証左だ。

「とりあえず本屋にでも…、…っ!？」

瞬間、俺の感覚器官はそれを捕らえた。あまりにも微弱な反応だが、  
間違えるはずがない…!!

「ちっ…!!アクセル!!」

路地裏に飛び込み、相棒に声を掛ける。大分遠くまで来てしまった  
為、間に合わせるならこれしかない。

《Double Acceler》

ダブルアクセル。磁力の反発による加速、リニアアクセルと、重力  
操作による反作用の減衰と加速、グラビティアクセル。その二つを  
重ね掛けするのがこれ、ダブルアクセルだ。

「間に合ってくれよ…!!」

ダンッ!!と地を蹴り、俺は反応した地点目掛けて跳躍した。



俺がなのはのいるビルの屋上、　　おそらく彼女も気付いたのだろっ、そこに辿り着いた時、広がっているのは絶望だった。

「あ…、ああっ…!!」

なのははうちひしがれたように座り込み、眼前に広がる光景から目を逸らせずにいる。

今回のジュエルシードは、巨大な大樹だった。街の中心部に生えたその根は、海鳴市の三分の一近くを覆っている。

「ちっ…!!どこの世界樹だよ…!!」

ユグドラシル、というワードが脳裏を過ぎり、俺は奥歯を噛み締める。

途中から反応が増大した時点で予想はしていたが、やはり暴走してしまっただよう。これだけの力となると、おそらく人間が発動させてしまったのだろっ。普通の人間にとって、ジュエルシードは綺麗な石程度にしか見えないから、誰かが拾うということも十分有り得る。

（これだけの中から核を探すととなると厄介だな…。くそっ、どうする…!?!）

「なのは!!なのは!!」

焦る心を押さえ込み、被害を最小限にかつ迅速にジュエルシードを封印する算段を立てていた俺は、なのはの様子がおかしいことによ

うやく気付いた。

「あ…、あ…、ああ…」

自らの肩を抱き抱え、ガタガタと震える彼女は、どう見てもマトモな精神状態ではない。ユーノの必死の呼び掛けにも答えず、目には涙さえ浮かべている。

「私の…、せいだ…」

なのはと目を合わせようと屈んだ俺は、その呟きを聞き取った。

「気付いてた…、ハズなのに…。あの子が持ってたことに…、気付いてたハズなのに…」

どうやら、なのはは原因に心当たりがあるようだ。連日頑張って疲れていたし、警戒し過ぎだと思ってしまっても無理はない。

「こんなことになる前に…、止められたかもしれないのに…。私のせいで…、私のせいでっ…!!」

パンツ!!

だが、その言葉を聞いた瞬間。俺はなのはの頬を張っていた。

「私のせい…? こうなる前に止められた…? ふざけんな…。ふざけんな!!」

呆然とするなのはの両肩を押さえ込み、僅か数cmの距離で睨みを効かせる。

「思い上がるなよなのは。俺達は神じゃない、人間だ。当然ミスもするし、「こんなはずじゃなかった」未来をいくつも作り出す。けどな……」

あの日のことを思い返す。全てが変わった、全てを失ったあの日。失意と絶望のどん底に叩き落とされた俺は、それでも刃を取ることを選んだ。例え全身を返り血で染めることになるうとも、それでも前へと進むことを選んだ。

「それでも俺達は、「今」と戦わないといけないんだよ」

「……」

「確かにミスは取り戻せない。時間を巻き戻すことなんて誰にも出来ないんだから。それでも俺達は頑張つて、未来を変えることが出来るだろう？」

もし俺が刃を手に取らなければ、なのはは獣に押し潰されていたかもしれない。

もし俺がこの世界に来なければ、あの女性は狼に食われていたかもしれない。

もしなのはが助けたいと思わなければ、ユーノは野垂れ死んでいたかもしれない。

「いくつもの過去と選択があつて、「今」があるんだ。なら未来を変える為に、今俺達がすべきことはなんだ？」

失意に打ちのめされ膝をつくこと？違う。  
手を拱いて何もせず見過ごすこと？違う。

「お前に覚悟があるのなら、その手に掴め、魔法の力を」

伝えるべきことは伝えた。後は全てなのは次第。なのはから離れ、屋上の淵に立つ。

「アクセル、セットアップ」

《Stand by Ready Set up》

相棒の声を聞きながら、俺はビルの上から飛び降りた。

「お前に覚悟があるのなら、その手に掴め、魔法の力を」

ナナシ君がそう言い残し、屋上から飛び降りる。落下しながら漆黒のロングコートに身を包み、大樹の中心部目掛けて跳んで行った。

「それでも俺達は、「今」と戦わないといけないんだよ」

私の脳裏に、ナナシ君の言葉がリピートされる。

「確かにミスは取り戻せない。時間を巻き戻すことなんて誰にも出来ないんだから。それでも俺達は頑張つて、未来を変えることが出来るだろ？」

そう、彼は諦めていない。街は甚大な被害を被り、怪我人も出ているのに、それでも彼は諦めていない。

それなのに、私はここで諦めるの？

嫌だ。嫌だ。そんなのは絶対に嫌だ！！

「…レイジングハート」

《Stand by Ready Set up》

私の声に答え、胸元の宝石が起動する。桜色の光に包まれて、私の衣服はバリアジャケットへと姿を変え、手には愛杖レイジングハートが握られる。

『いくつもの過去と選択があつて、「今」があるんだ。なら未来を変える為に、今俺達がすべきことはなんだ？』

そんなこと、決まつてる。答えはたった一つだけ。

《Area Search》

「ありがとう、ナナシ君…。お陰で、目が覚めたよ…」

足元に桜色の魔法陣を描き、涙を拭いながら前を見据える。覚悟は決まった。ならば後は、進むだけ。

「もう私は、迷わない」

大量の桜色の閃光が、海鳴市全土を駆け抜けた。

「！？これは…！？」

核の位置に大雑把な当たりを付け、移動中だった俺を桜色の閃光が追い抜く。周囲から使用者の指定したモノを探し出す魔法、エリアサーチだった。

「…ホント、凄いヤツだよ、お前は」

立ち直るように仕掛けた発破だったのに、ここまでの効果を生むとは思っていなかった。

「さすがはあいつと同じ目を持つ者、…なんてな」

アクセルを両手に構え、銀色の魔法陣を描く。

《Gravity Fall》

アクセルの声と同時に、てんでんばらばらに動いていた桜色の閃光が、規則正しく効率的に動き始めた。

グラビティフォール。重力を操る全ての魔法使いにとっての最終目標たるこの魔法は、任意の方向に重力を発生させるというものだ。重力とは空間に働く力。重力を完全に制御するということは、空間を意のままに操るということに他ならない。

「ぶつつけだから仕方ないとはいえ、無駄が多いからなあ…」

周囲の空間を制御し、エリアサーチの動きを適宜調整しながら呟く。

「そのうちちゃんと教えてやらないとな」

《At all（全くだな）》

二人は苦笑しながら、作業のスピードを速めていった。

「…見付けた!!」

開始から僅か一分。私は核の位置を特定した。始めは端から端まで片っ端から調査する方式だったのだが、30秒付近からサーチの仕方が変化、効率的に調べることが出来た。きっと、ナナシ君が手伝ってくれたんだ!!

「え!?!もう!?!どこ!?!」

「あそこ!!」

さすがの速さに驚いたのだろう。尋ねてくるユーノ君にレイジングハートで指し示す。

核があるのは大木の中核部。その中にキーパーの人とマネージャーの人が、抱き合うようにして眠っている。

「待ってて、すぐ封印するから…!!」

「ここからじゃ無理だよ!!もつと近付かないと…」

確かにここから距離が空いているし、例え放ったとしても、核に至る前に生い茂った枝に阻まれてしまうだろう。…でも!!

「出来るよ!!大丈夫!!そうだね、レイジングハート!?!」

《Shooting Mode, Set up》

私の想いに答え、レイジングハートが変形を始める。後部の柄が伸び、前方に魔力を集中させる為、先端の宝石を囲う金色のパーツを分解。音叉状に再構成、合体させ、光の翼を展開する。

「出来るよ…、二人でなら…」

静かに呟きながら、構えたレイジングハートの先端に魔法陣を展開する。

「私と、ナナシ君ならっ!!」

周囲に吹き荒れる魔力をかき集めながら、私はただ、前を見据えた。

その魔力を感知した瞬間、俺は既に動き始めていた。

「ったく、アドリブに合わせるこっちの身にもなれっての!!」

《Gravity Saber!!》

アクセルが指示に従い、グラビティセイバーを展開する。ホント、優秀で助かるよお前は…!!

「やるぞアクセル!!」

《Yes Sir!! (了解!!)》

ダンッ!!と地を蹴り、俺は核のある中心部目掛け加速する。



「蜃気一閃！！」

ありったけの魔力をかき集め、重力を纏ったアクセルを振るう。打ち出された魔力は飛ぶ斬撃と化し、黒い三日月状の衝撃波となって大樹を刳る！！

「見えた……！！」

核となる金色の繭、その中に眠る少年と少女。

「決めろ……なのは……！！」

ナナシ君の、声が聞こえた。遠くて届くハズもないのに、その声は、確かに私へと届いた。

「行くよ……！ レイジングハート……！！」

《All Right（了解しました）》

ひたすらにかき集めた魔力の塊。その楔を今、解き放つ……！！

「ディバイン……、バスター……！！」

レイジングハートから放たれた桜色の閃光が、海鳴市上空を矢の如く駆け抜け、大樹の繭に命中。少年の握るジュエルシードに照準を定めた。道は繋がった。後は、封印するだけ……！！

《Stand by Ready》

「リリカル、マジカル、ジュエルシード、シリアルX！！封印！！」

レイジングハートに任せ、封印の為の呪文を唱える！！

《Sealing》

レイジングハートとジュエルシードを結ぶ桜色の糸に沿って、封印の閃光を再び放つ！！

《Receipt No.X》

封印完了を告げる声と同時に、桜色の光が街を包んだ。

夕暮れの川沿いの道で、ナナシ君と再会した。

「あ…」

「お疲れ様」

邪魔な瓦礫を壊してきたらしいナナシ君は、全身が汚れていた。彼曰く「これだけ広範囲で長い時間発現してしまったとなると、全員の記憶操作に何日掛かるかわからないから…、下手に動くより瓦礫斬った方がマシだ」らしい。

「…『めんなさい』」

「なんで謝る？悪いのは気配に気付いておきながら結界も張れなかった俺だ」

いたたまれなくなって謝った私に、ナナシ君は苦笑混じりに言い返す。

「でも、ナナシ君は戻ってくるのに一生懸命だったし…、やっぱり私が…」

「ていつ」

「あうつ」

謝り続ける私に対し、ナナシ君の返した答えはデコピンだった。うつ…、痛い…。

「お前がやらなきゃ、街はあのまま大混乱だった。お前がやらなきゃ、あの二人は死んでたかもしれない」

額を押さえた私の頭を撫でながら、ナナシ君が優しく続ける。夕陽に照らされた彼の顔はとても穏やかで、

「お前が守ったんだ。それだけは誇つていい」

思わず、見とれてしまいました。

「だから、まあ、なんだその…、元気出せ」

「ごによごによと続けながら、そっぽを向くナナシ君。」

「…えへへ」

そんなナナシ君の気遣いがなんだか嬉しくなり、私は彼の腕に抱き着く。

「ちよつ、なのは!？」

あ、ナナシ君顔が赤くなってる。いつもは無表情だけど、こんな顔も出来るんだ。

「…ありがと、元気出た」

「…そうか」

私の小さな呟きを拾ったナナシ君は、頭をわしゃわしゃと撫で、

「…帰ろうか」

それだけを言った。

「うん」

私はナナシ君と手を繋いで歩き出す。今度はナナシ君も抵抗しなかった。

私達の間には距離がある。過去のことや、本当の名前のこと。まだナナシ君についてわからないことはたくさんある。

だけど今日、その距離が少しだけ、ほんの少しだけ縮まったような。そんな気がしました。

## 第五話「変化」(後書き)

おかしいな、なんだこの最終回みたいなノリはw

ノリ始めると止まらないのは悪い癖ですねw

そして調子に乗ってなのはにフラグ立てましたサーセンw

次回はいよいよあの子が登場！

主人公の謎が明かされなかったり明かされなかったり！

ナナシ「明かされないのかよ」

## 第六話「三人目」(前書き)

はい、六話です。

ポリウムは加速するッ！(えw

再び説明ブチ込んでるので長いですw  
それではどーぞー

## 第六話「三人目」

夜の帳が降りた海鳴市。満月の光に照らされて、その少女は眼下を見下ろした。

「ロストログアは…、この付近にあるんだね…」

少女の脇に控える橙色の毛並みをした狼に、独り言のように語りかける。

「形態は青い宝石…、一般呼称はジュエルシード…」

漆黒のマントに身を包み、右手に斧のような武器を携えた少女は、金色の髪を風に揺らす。

「そうだね…。すぐに手に入れるよ…」

彼女の意志に答えるかのように、狼が海鳴市全土に響き渡るような長い遠吠えを上げた。

「よし、こんなもんかな」

朝6時。ナナシ君と私は海鳴市内の丘、桜台で向かい合っていた。

「とりあえず基本的な魔法はマスター出来てきたし、今日はここままで。最後にいつものアレやって終わろう」

荒い息のこちらに対し、ナナシ君は涼しい顔だ。私の三倍近いメニユーをこなしているのに、この差はなんなんだろう。

「う、うん!!」

呼吸を整え、私は目を閉じる。足元に魔法陣を展開し、魔力で精製した弾丸を生み出す。その数、計五つ。

「五つ、ね…。お前、絶対本気だろ…」

「今日こそ当てるよつ!!」

呆れたように溜め息をつくナナシ君に、私は指を差して宣言する。もう三日連続で三回も負け越しているんだから、負ける訳にはいかないの!!

「頼むから軽傷で済む程度にしてくれよ…」

ナナシ君が念の為バリアジャケットを纏い、ベンチに座っているユイノ君に合図を送る。

「用意…、スタート!!」

ユイノ君の声と同時に、レイジングハートをナナシ君に向ける。私の指示に従い、桜色の弾丸がナナシ君を狙って宙を駆ける!!

「動きが直線的過ぎるぞ？」

対しナナシ君は余裕の表情で呟き、弾丸の隙間を縫ってこちら目掛けて駆け出した!!



「くっ…!!」

慌てて急転換、弾丸をナナシ君の背後から加速させ、待機状態だった二発の弾丸を飛ばす。

「よっ、と」

軽い掛け声と同時に、ナナシ君が斜めに大きく一步を踏み込む。それによって四発の弾丸はかわされるが、

「まだだよ!!」

待機状態の最後の弾丸を発射し、残りをターンさせた。前、後ろ、右、左、上からの五点同時攻撃を仕掛ける!!

「へえ…」

なのにナナシ君は涼しい表情を崩さないまま、地面にしゃがみ込む。

「!?!」

逃げ場のないこの状況で、一体何を…!!?

「グラビティアクセル」

彼の声がすると同時、彼の周囲が桜色の爆発に包まれる!!

「やった!?!」

「残念」

「!？」

背後からの声に振り返ると、私の額にデコピンが放たれるのは同時だった。

「あたっ」

思わずレイジングハートを手放し、両手で額を押さえながら座り込む。ナナシ君はレイジングハートをキャッチし、ユーノ君に向き直った。

「ユーノ、タイムは？」

「…一分半。昨日より30秒伸びたね」

「んー、やっぱり起動力ある相手に弱いみたいだなー」

私にレイジングハートを返し、頭をぼふぼふと叩きながらナナシ君

「また負けちゃった…」

「まだ魔法使いになって半月も経ってないんだから仕方ないだろ。これでもなのは才能ある方だぞ？」

落ち込む私にナナシ君が労いの言葉を掛ける。でも、

「…ナナシ君に言われても説得力ないよ」

私と一つしか変わらないのに、私以上のメニューを涼しい顔でこなし、本気の私をグラビティアクセルだけであしらえる魔法使い。段々自信なくなってきました…。

「ほら、くよくよすんな。迷ってたら勝てるもんも勝てなくなるぞ？」

バリアジャケットを解除し、黒いシャツにズボン、白いパーカーといういつもの姿に戻ったナナシ君が、私の手を引っ張り立ち上げさせる。

「今日は約束もあるんだし、魔法について考えるのはここまで。士郎さんや桃子さんに気付かれない内に、サッサと帰ろう」

「う、うん」

私もバリアジャケットを解除し、黄色のシャツにオレンジのミニスカート姿に戻る。宝石に戻ったレイジングハートを首から提げ、ユイノ君を肩に乗せる。

「んじゃ、ひとつ走り帰りますか」

「待って、私運動苦手なの」

そんな会話をしながら、私達は賑やかに帰宅した。

そもそも事の発端はあの日、ジュエルシールドが大樹の姿となり、海鳴市を混乱に陥れた日の夜のこと。

「ナナシ君、ちょっといい？」

「ああ、どうぞ」

風呂上がりに自室で本を読んでいた俺は、唐突になのはの訪問を受けた。彼女も風呂上がりなのか、袖の長いピンクのパジャマを着込み、髪を下ろしたなのはの姿は、結構新鮮だった。

「どうかしたのか？こんな時間に」

ページに栞を挟み、ベットに座るよう促しながら尋ねる。

「うん、えと…」

なのははつつんと指先を突き合わせながら、まごまごしている。そんな様子を見守ること一分、なのははようやく口を開いた。

「わ、私に魔法を教えて下さいっ！！」

言うや否や頭を下げるなのは。対し俺はボカンとしていた。

「なんで唐突にそんな？」

とりあえず心を落ち着かせ、なのはに尋ねる。

「その…、今日のことなんだけど…」

その言葉を聞き、俺はなんとなく理由を察した。が、助け舟は出さず聞きに徹する。

「色んな人に迷惑掛けて…、私は何にも出来なかったから…、せめて、今度同じことがあった時、何か出来るようにしたいの」

時々つかえながらも、なのはは真っ直ぐに俺を見据え、言葉を紡ぎ続ける。

「今までは単にユーノ君のお手伝いでジュエルシードを集めてたけど、もうこんなことは起こしたくないから…、私は、自分の意志でジュエルシードを集めたいの」

そこまで聞いた俺は、ぼふっ、となのはの頭に手を乗せた。

「…合格」

「…ナナシ君？」

キョトンとするのはに、俺は微笑みながら答えを返す。

「お前が自分の意志で決めたなら、俺は何も言わない。どうせ言っても聞かないしな」

ちようどいい機会だし、と苦笑すると、じわじわと俺の言葉が浸透してきたのか、満面の笑顔を見せるなのは。

「じ、じゃあ!!」

「俺なんかで良ければ、教えてやるよ、魔法の使い方」

そう告げると同時、なのはが俺の胸に飛び込んで来た。…って!?

「ありがとうナナシ君！！私、頑張るから！！」

「わかった！！頑張るのはわかったからとりあえず落ち着け！！」

顔を擦り寄せてくるなのはを引きはがそうと奮闘するが、どこに隠していたのかと思う程の馬鹿力でしがみついている。と、

「なのはー、ナナシくん、恭ちゃんが今度のお休みのことで話がある…、って…」

頭痛の種、もとい高町美由希さんが入って来た。

「………」

瞬間、三人の動きが一齐にフリーズする。なんだここは。氷河期の南極か。

「お邪魔しました」

「ちよっ！！待て！！美由希さん！！弁解の機会を！！」

「……っ！！」

美由希さんは笑顔で引っ込むし、なのはは今更気付いたのか真っ赤になって固まってるし、あーもう、今日は厄日だ…。

『鬱だ…』

『Don't mind(…頑張れ)』

結局、その後30分掛けてどうにか誤解は解くことが出来た。美由希さんがつまらなそうな顔をしていたのは気のせいだと思いたい。主に俺の精神衛生上の為に。

「ナナシ君、着いたよ」

「え？あ、ああ」

なのはに声を掛けられ、回想から現世へ帰還し、バスを降りる。あれから毎朝毎晩、俺はなのはに魔法の、主に実技の指導をしている。彼女はアドリブでエリアサーチを操る程先天的なセンスを持っているので、座学よりこちらの方がいいと判断した。習うより慣れろ、とは上手く言ったものだ。

訓練メニューは主に射撃系魔法の制御と咄嗟の防御結界の構成、「ハンデありの俺に一発当てるか3分耐えたら勝ち」という簡易模擬戦を行っている。実際なのはは驚異的なスピードで成長しているのだが、あまり実感はないらしく、いつも自信なさ気にしている。…ハンデ増やそうかな？

そんな思考をしている内に、先に降りた高町恭也さんがインターホンを鳴らしていた。程なくしてメイド服を着込んだ紫色の髪的女性が現れる。

「恭也様、なのはお嬢様、お坊ちやま、いらっしやいませ」

「お坊ちやまはやめて下さい…」

それとその名前で呼ばないで欲しい。思い出したくもないことを思

い出してしまっから。編入の際に偽名を名乗らなかったことを今更ながらに悔やむ。

「くすくす、それでは 様で」

溜め息混じりの俺に対し上品に笑うこの女性はノエルさん。若くしてメイド長を務める女性だ。

「お招きにあずかったよ」

「お邪魔しまゝす」

で、どこでメイド長を務めているかって言うと、

「なのはちゃん、いらっしやい」

ノエルさんの陰からすずかが顔を出す。相変わらずおしとやかというか、深窓のお嬢様というか。

「うん、こんにちは」

ここは、すずかの家。広大な敷地を誇る、月村家のお屋敷なのだ。

「それにしても、ホント大きなお屋敷だね…」

奥に通され、椅子に腰掛けた俺は呟く。アリサやすずかの前なので、言葉遣いもよそ行きモードに変えてある。



「まあ、大きくても困るだけだけどね」

「あはははは…」

金持ち仲間であるアリサが愚痴り、すずかは苦笑している。なのははと言つと、ユーノ共々俺の猫かぶりっぷりに苦笑いしていた。

今日は休日の為、すずかの家でお茶会の計画を立てていたらしく、俺も引きずられて来たという訳だ。恭也さんというと、すずかの姉にして恋人である忍さんと二人つきりでいちゃらぶしているのだろう。正直興味はない。

すずかの専属メイドにしてノエルの妹であるファリンさんの入れた紅茶を飲みながら、そんなことを考えつつふと足元に視線をやると面白い光景が広がっていた。

「……………」

すずかの飼い猫の一匹に睨まれたユーノが、蛇に睨まれた蛙よろしく固まっている。猫は好奇心が強いと言つし、体格差的にも考えてかなりアレな状況だろう。

『ナナシ！！助けて！！目が！！目が怖い！！』

…念話飛ばす程嫌か、ユーノよ。

「ゴメン、すずかちゃん、ちょっとトイレ借りるね」

「うん、場所わかる？」

この女子だらけの空間から抜け出す口実も出来たことだし、と俺は行動を開始する。すずかは疑いもせず俺を心配してくれた。いい子

「だなあ…、真っ直ぐ育てよ…」

「ま、最悪誰かに聞くから大丈夫。ついでに外の空気吸ってくるから遅くなるかも」

「うん、行つてらっしゃい」

『ユーノ、悪い』

『へ？ごふっ』

立ち上がる瞬間ユーノを爪先で蹴り上げキャッチ、電光石火でポケットに押し込む。不快感を抱かせない最善の方法を、これしか思い付かなかった俺でスマン。

軽く気を失ったユーノを気に掛けながら、俺はそそくさと部屋を後にした。

「今日は…、元気そうね」

「へ？」

アリサちゃんの唐突な言葉に、私は首を傾げる。私はいつも元気だよ？

「なのはちゃん最近、少し元気なかったから」

「あ…」

多分、この間の事件があった頃だろう。ただでさえ最近、ジュエルシードやナナシ君絡みで色々考えてたし。

「もし何か心配事があるなら、話してくれないかな、って二人で話してたんだけど」

すずかちゃんが心配そうに、アリサちゃんもチラリとこちらに視線を送る。二人の気遣いに、思わず涙腺が緩んだ。

「すずかちゃん…、アリサちゃん…、うん、私は大丈夫だよ」

最近あんまりお話出来てなかったし、今日だけは魔法のことなんて忘れて、ゆっくりしようっと。

「なんなんだこの猫屋敷は…」

肩でぐったりとしているユーノに、思わず哀れみの視線を送る。なのはをして「猫天国」とまで言わしめる月村邸は、どこに行っても猫、猫、猫。猫から逃れる為に裏手の森まで来てしまった。

「猫なんて嫌いだ…」

始めは地面を歩いていたユーノだが、結局ギブアップし肩に乗ることを選んだ。…念話を忘れる程疲れたか、ユーノよ。

「…ご愁傷様」

まあ、俺もお陰であの気まずい空間から逃げられたので、劳いの言葉を掛けながら再び周囲の気配を探る。

「…さつきから何度も探索魔法を使っているけど、どうかしたの？」

「いや…、なんか妙に引つ掛かってな…」

答えになっていないような答えを返ししながら、俺は神経を研ぎ澄ませる。このモヤモヤした感じ…、まさか…。

「ユーノ、なのはの所に戻っててくれ。俺はもう少し調べてみるから」

「…わかった」

俺の声に真剣な響きを感じ取ったのか、案外あっさりと承諾するユーノ。

…健闘を祈る。猫的な意味で。

「気のせいであつてくれよ…」

ここ最近なのははロクに休めていない。せつかくの休日を潰す訳にはいかないのだ。

「最悪俺達だけで片付けるぞ」

《Yes, Sir (了解)》

相棒に警戒を促しながら、俺は奥へと進み始めた。

「あれ？ユーノ君？」

場所を変え、外でお茶会をしていた私達のところにユーノ君が戻ってくる。さっきから姿が見えないから、ナナシ君と一緒にだと思ったんだけど…

「……………っ！？」

二人同時に、それを感じ取った。すぐ近くに、ジュエルシードの反応！！

『もうナナシは動き始めてるけど…、どうする？』

『えつと…』

猫と戯れる二人の姿を見ながら考える。放っておけないけど…、一体どうすれば…。

『……………！！そうか、ナナシ、そういうことか！！』

不意に呟いたユーノ君は、すずかちゃんとアリサちゃんの前を横切り、森の方へと走り出す。

「ゆ、ユーノ君！？」

思わず声を上げると同時、ユーノ君の狙いに気付いた。そういうことか……………！！

「ユーノ君、何か見付けたみたい。ちょっと行ってくるね」

立ち上がりながら二人に言う。嘘をつくのは心苦しいけど、これしか方法はない。

「大丈夫？一緒に行こうか？」

「ううん、平気。すぐ戻ってくるから」

すずかちゃんの質問に答え、私も走り出す。

「気を付けなさいよー」

アリスちゃんの声に手を振って答え、私は走るスピードを上げた。

「…そういえばノエルがいないわね」

「アレ？どこ行っただろ？」

「…ええー」

「…うわー」

「…マジで？」

ユーノ君の展開した結界の中で合流した私達が見たのは、良くも悪くも想像の斜め上に行くモノだった。

「ニヤア？」

すずかちゃんのお屋敷と同じくらいの大きさになった、一匹の、猫。ナナシ君は脱力のあまり言葉をなくし、ユーノ君に至ってはガタガタと震えている。よく見たらこの子、ユーノ君をずっと見てた猫さんだ。

「ニャア」

猫さんは我関せず、と言った感じで、私達三人等気にも留めず歩き始めた。

「あ、あ、あ…、あれって…？」

「た、多分…、あの猫の「大きくなりたい」って思いが…、正しく叶えられたんじゃないかな、と…」

「…なんつか、ジュエルシードって、思ったよりアホな気がしてきた…」

三人揃って頭を抱え込む。気にするなのは、気にしたら負けなんだ…。

「でもこのままじゃ危険だから、元に戻さない」と

「うん…、まあ…、そうなんだけど…」

元に戻すということは、ダメージを与えないといけない訳で…。

「…さすがアレを斬るのは気が引けるんだけど。絵面的に」

獣や狼をズバズバ斬ってたナナシ君も、さすがに猫相手じゃ躊躇うらしい。どうしようか…。

「…なるべくダメージを与えないように頑張るか」

「…それしかないかな」

とりあえず、変身を…。

ズドンッ！！

どこからともなく飛んできた閃光が、猫さんに突き刺さる。

「ニヤアアアア！！」

「なっ！？」

「まさか、また別の魔法使い！？」

振り返った私達の目に映ったのは、

死神のような、一人の少女。

長い金髪をツインテールに括り、黒を基調としたバリアジャケットを纏った少女。漆黒のマントが風にたなびき、手に持った斧のような武器が威圧感を助長する。

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃」

《Photon Lancer FullAuto Fire》

少女の声に応え、バルディッシュと呼ばれた斧が魔法陣を展開。雷



の槍が猫さんに襲い掛かる!!

「なのは!!」

ユ一ノ君の声に我に返り、私はナナシ君の方を向く。これまでみたいに的確な指示をくれることを期待した私が見たのは、

「ユ…、ユキ…?」

呆然と膝をつき、その少女を眺めている彼の姿だった。体はガタガタと震え、大量の冷や汗をかくその姿は今までに私が見たことのないもので…、

「ナナシ君っ!!」

「っ!?!」

彼が遠くにいつてしまう気がして、私は思わず叫んでいた。

「ナナシ君、止めないと!!」

「あ、ああ…。そうだな…」

だがそう言いながらもナナシ君の体は満足に動かず、アクセルを握る手も震えている。

「レイジングハート!!」

《Stand by Ready Set up》

よくわからないけど、これ以上ナナシ君にあの子を見せちゃいけない。そんな強迫観念に捕われ、私はレイジングハートを起動した。

《Flier Fin》

バリアジャケットに覆われるや否や魔法を発動、ブーツから展開された光の翼で空を駆け、猫さんの上に降り立つ。

《Wide Area Protection》

再度放たれた攻撃に対し、咄嗟に防御魔法を発動。雷の槍を辛うじて全弾防ぐ。

「魔導師…？」

突然現れた私に疑問の表情を浮かべながらも、少女は無情に攻撃を放つ。

「ニヤアアアアア！！」

足を撃たれた猫さんはバランスを崩しながら倒れ込み、上に居た私も地面に落ち、

《Gravity Accel》

ることはなかった。重力制御により加速したナナシ君が私を抱き留め、地面に舞い降りる。

「ナナシ君！！大丈夫！？」

助けて貰えたことは嬉しかったが、顔面蒼白なままのナナシ君を見て思わず聞いてしまう。

「絶好調ではないが…、動けない訳じゃない」

聞き終える前に腕の中から降り、ナナシ君を庇うように前に出てレイジングハートを構える。

「同系の魔導師…、ロストログアの探索者…？」

身近な木の枝に降り立った少女が、無感情に尋ねてくる。そんな少女に気圧された私の前に、アクセルを構えたナナシ君が出る。

「お前もジュエルシードを探して、別の世界から来たのか？」

少女はナナシ君の放った問いには答えず、レイジングハートとアクセルに視線をやる。

「バルディッシュと同系の、インテリジェントデバイス…」

「バル…、ディッシュ…」

私が呟いた声には答えず、冷たい視線で私達を見下ろす少女。

「ロストログア…、ジュエルシード…」

《Scythe Form Setup》

バルディッシュの声と同時に、斧の刃の部分が展開。金色の刃を形作ったそれは、死神の鎌となる。

「申し訳ないけど…、頂いていきます…」

その声を聞いた瞬間、ナナシ君が刀を構えた。一瞬で目の前に現れた少女が振りかぶった金の刃と、それを防ぐべく構えた黒い刃が交錯し、激しい火花を散らす。

「なのは！！急いでジュエルシードを！！」

「う、うん！！」

《Flier Fin》

ナナシ君の声に我に返り、翼を広げ空へ羽ばたく。

「……………」

それを見た少女は鎧迫り合いをやめ、距離を取り鎌を構えた。

《Arc Saber》

少女が鎌を振りかぶると同時、その三日月状の刃がこちら目掛けて襲い掛かってきた！！

《Protection》

プロテクションで辛うじて防ぎ、上空へ飛び上がった私が見たのは、  
眼前に迫る、黄金の刃。

「させるかっ…！！」

が、間一髪割り込んだナナシ君が受け止め、三人の視線が至近距離で交錯する。

「いきなり攻撃なんて……！！理由くらい言ってくれても……！！」

必死に訴えかけるが、

「言っても……、多分……、意味がない……」

その言葉はバツサリと切り捨てられる。

「ちいっ……！！」

ギーン！！と鎌を弾き、私を抱えたままナナシ君が後退する。

《Divine Form》

バルディッシュの声と共に鎌が斧に戻り、

《Shooting Mode》

レイジングハートの声と共に、杖が砲撃モードに変形する。

《Divine Buster Stand by》

《Photon Lancer Get Set》

互いにデバイスを構えて対峙する。きつと私と同一年くらい。綺麗な髪と綺麗な瞳。だけど……、この子は……、綺麗な

「ニャア…」

「「!?!」」

先程まで倒れていた猫さんが起き上がっていた。

「…ごめんね」

《Fire》

一瞬気を取られた私達に、その攻撃を防ぐ術はなく。

「なのはー!! ナナシー!!」

雷に吹き飛ばされた私は、気を失った。

魔導師の少年と少女を片付けた私は、その巨大な猫の前に降り立つ。

「ニャア…?」

これから何が起きるかわからないのであろう、その猫に私は少しだけ哀れみの感情を抱いた。

《Sealing Form Setup》

バルディッシュの声と共にデバイスが変形を始める。柄の先端部が伸び、刃の部分を反転。金色の光の翼を広げた、槍のような姿へと

なる。

「…捕獲」

先端へ魔力を集束させ、膨大な雷を纏ったバルディッシュを、地面目掛けて振り下ろす。

「ニャアアアア!!」

地を這う雷が猫に直撃し、中からあるものが浮かび上がってくる。青い宝石、…ジュエルシード。

《Order（命令を）》

私の意志に答え、バルディッシュが準備完了の意を告げる。

「ロストロギア…、ジュエルシード…、シリアルXIV…、封印」

《Yes Sir（了解）》

振りかぶったバルディッシュから天へと雷が放たれ、黒雲を作り出す。その闇の中から降り注ぐのは、大量の雷の槍。

猫に掠めるようにして地面に突き刺さった金色の閃光は、地に魔法陣を形成し、呼応するように天の魔法陣が一際強い閃光を放つ。天と地で結ばれた光は魔法陣の中を覆い、ジュエルシードの暴走した魔力を完全に消し去った。

土煙が晴れた先にあったのは、倒れ込んだ子猫と、宙に浮くジュエルシード。

《Captured（確保完了）》

バルディツシュで無事に回収し、一息つこうとした瞬間、

「っ！？」

殺気を感じバルディツシュを構えると同時、白銀の刃がバルディツシュに直撃した。

「……………っ！？」

デバイスであろう二刀を構えた少年の姿を見て、私は絶句する。左手には雷による火傷を負い、バリアジャケットもズタズタで所々帯電している。だが、私が驚いたのはそこじゃない。

彼の瞳に宿る、正体のよくわからない執念が、私を一時的に硬直させる程のオーラを放っている。一体、この少年は何者なのか。

「……………」

チラリと奥に視線をやると、少女は地面に寝かされていた。少年が身を呈して守ったのか傷はなく、気を失っているだけのようだ。近くに待機したフェレットが警戒した視線を送ってくるが、そんなことは問題ではない。

「答えて貰うぞ…、お前の素性と目的を…！！」

この不利な状況下でも彼は諦めていない。その意志の強さに感嘆と、少しだけ憧れを抱く。

「…答える義務はありません」



だが、この場において私達は敵同士。私には、譲れないモノがある。

「バルディツシュ…」

《Photon Lancer》

私は鏑迫り合いを維持したまま、バルディツシュからフォトンランサーを放つ。

「くっ…!!」

さすがにマズいと判断したのか、バルディツシュを弾き後退する。それを見届けた私は宙へ舞い、逃走を謀った。さすがにあの状態で追い付けないのか、追ってくることはなかった。

私が目を覚ましたのは、空が茜色に染まる頃でした。気絶した私をナナシ君が運んでくれて、そのナナシ君はフラツといなくなっていました。記憶を修正してくれたのか、私はユーノ君を追っている内に転んで気絶してしまい、たまたま散歩中だったお兄ちゃんと忍さんに拾われたことになっていました。

皆に凄く心配を掛けてしまったことは心苦しかったけど、私の頭の中はナナシ君のことだけでいっぱいでした。あの子のことをユキと呼び、異常なまでに震えていたナナシ君。きっと、彼が完全に心を開いてくれない鍵は、そこにある気がする。

(…それに)

今日出会った、あの少女のことを思い返す。多分、ユーノ君やナナ

シ君と同じ世界から来た、寂しげな目をした、あの少女。

（また…、ぶつかっちゃうのかな…？）

窓の外に広がる夕暮れを眺めながら、私はそんなことを思いました。

「フェイト、お疲れ様」

仮の家、街に聳えるビルの一つに帰宅した私を、アルフが出迎える。

「邪魔が入ったけど…、大丈夫だったよ…」

ジュエルシード、シリアルXIV。無事に封印出来て、少しホッとする。

「いくつかは…、あの子達が持つてるのかな…？」

ソファに座りながら、今日出会った二人のことを思い返し、独り言のように呟く。

「大丈夫だよ…、迷わないから…」

アルフの心配げな視線に微笑み、言葉を返す。そして、吹き抜けの天井越しに上のフロアを見上げ、そこに飾られた写真立てを見遣る。

「待ってて…、母さん…。すぐに…、帰ります…」

## 第六話「三人目」（後書き）

はい、遂にメインヒロイン登場です。

ナナシの意味深発言は、後に大きな意味を持ってきます。

…多分。

…きつと。

…おそろく。

しかしこの二人、ボツコボコであるw  
次回はかなり波乱の展開です。

## 第七話「すれ違い」(前書き)

はい、七話です。

今回やや鬱っぽい展開になっているのでご注意ください。  
ではござ

## 第七話「すれ違い」

『ねーお兄ちゃん、お腹空いたー』

『飯食ったばっかだろ？もーちよい待て』

少年は隣で駄々をこねる少女に対し、嘆息しながら言い返した。

『そうか貴様はそんなに私が嫌いか』

『待てコラ。飯作って貰えないからってデバイス構えるアホがいるか』

どこからともなく取り出した杖を突き付けた少女に対し、少年は再び溜め息。

『アホではない、あたいは神だ』

『はいはいわかったからデバイス仕舞え』

『…最近兄者が冷たい』

『It is あしらわれていますね treated』

少女が泣き真似をしながら杖に話し掛け、杖がフォローになってないフォローをする。

『…ったく、ほらよ』

『あ…、プリン…』

少年が少女の前に置いたのは、一つの洋菓子。少年が丹精込めて作った、少女の大好物。

『熱取りに冷ましてたからな。言っただろ？少し待てって』

『……………!!』

『ま、俺がお前に出来ることなんてこんなもんしか…』

『お兄ちゃああああああん!!』

が、少年が言い終える前に少女が飛び付いて来た。

『ちよっ!!オイ!!飛行魔法使ってまで抱き着くな!!』

『やーだよー すりすりー』

『…勝手にしてくれ』

『Do not dominate（尻に敷かれてるな）』

『うつせ』

諦めたように受け入れる少年に対し、壁に立て掛けられた刀がからかいの声をあげる。

『ね、お兄ちゃん』

『なんだよ?』

振り向いた少年に対し、少女は満面の笑顔で、

『いつもありがと!』

そう、告げたのだった。

「っ!はあっ…、はあっ…」

また、あの夢だ。あの少女に出会ってから、ここ一週間毎日見続けている、昔の夢。

(…考えるな)

記憶を脳の奥深くに押し込み、荒い息を整えながら俺は周囲を見回す。閑散とした廊下に人の気配はなく、居るのはマッサージチェアに座った俺と、

《…More over, is it that dream?》  
また、あの夢か?》

胸元の相棒<sup>アクセル</sup>だけだ。

「…まあな」

溜め息と同時に、起動したままだったマッサージチェアを停止させ立ち上がる。とにかく今は気を紛らわせたい。

《Will here not sleep well recently? The body doesn't keep it if doesn't take a rest (ここ最近口々に寝ていないだろう? 休まないと体が保たんぞ)》

「…わあつてるよ」

気遣ってくれるのはありがたいが、今は何も考えたくない。どうせ寝た所で、またあの夢を見るだけだ。

そう思い軽く伸びをした俺は、当てもなくフラフラと歩き出した。

ゴールデンウィーク。この国における、五月の連休を示す言葉。良い機会だということで、高町家+月村姉妹&+メイド姉妹、アリサと俺を加えた12人(11人+一匹とも言つ)で、海鳴温泉へ二泊三日の小旅行と洒落込んだ訳だ。初めは辞退しようとしたのだが、9VS1という戦力差で抗えるハズもなく。恭也さんとユーノの苦笑を背に車へ連行され、俺は諦めるということを実感した。高町家はこの旅館に度々来ているらしく、あの少女のことで悩んでいたのはをリラックスさせる為にもちょうどいいだろうと踏んで、あまりなのはに会わないように過ごしていたのだが…。

(ユーノとレイジングハートがいる以上忘れられないだろ…)

今更気付いた俺は、相当疲れているのだろう。ユーノはともかくレイジングハートが主人であるのはから離れる訳がない。完全にムダだったということだ。



「ああ、くそ…」

あの日以降ジュエルシードも全く見付からず、俺の焦りと苛立ちはかなり高まっている。このままじゃなのは達は何を言うかわかったもんじゃない。せつかくの温泉なのだし、一人でゆっくり休むしよう…。

「あ…」

と思った矢先にこれか。温泉に入りに来たのであろうなのは達とバツタリ出くわす。なのはも俺の不穏な空気を察しているのか、最近あまり話していない気がする。

…いや、違うか。

「これからお風呂入るんだけど、一緒にどう?。」

「いや、お前女で俺男だろ」

どういう思考回路だ。物心つく以前ならともかく小学生にもなって混浴?アホか。

「で、でも、ここの露天混浴だし…、少しお話しよう?。」

それでもなのはが手を差し延べようと必死に呼び掛けるが、

「…アクセル」

《…Yes, Sir (…了解)》

俺はそれを振り払った。重力を制御して俺の周囲の空間位相をずら

し、認識不能な状態にした上で他の人間の記憶を一瞬で修正する。

「あ…」

なのはもそれを理解してしまったのか、差し延ばした左手が行き場をなくし、俯いたままとぼとぼと歩き始めた。

「…ゴメン」

そのまま顔を背け、一言だけ呟き、その場を後にした。

なのははこれっぽっちも悪くない。悪いのは、なのはを避けているのは、俺なのだから。

「…むー」

屋内温泉に浸かり、ぶくぶくと空気を吐きながら考える。どうも最近、正確には一週間前から、ナナシ君の様子がおかしい。

『ちよっ…、なのは…、溺れる…』

手元でユーノ君をじやらしながら、私はあの日のことを思い返す。

『ユ…、ユキ…？』

あの子のことをそう呼んだナナシ君。その瞳に宿っていたのは、後悔と哀しみの色。でもあの子はユキと呼ばれても反応しなかった。つまりナナシ君の勘違いの可能性が高い。

なのに、何故今に至るまで不安定なままなのか。もちろん聞いてみ

たけれど、「答えたくない」の一点張りで、何も教えてはくれなかった。

(…なんとか、したいな…)

今のナナシ君は、心を閉ざして距離を取っている。初めて会った時よりも頑なで、常に哀しそうな目をしていて。

その瞳が、あの少女と被る。

寂しげな目をした、綺麗な髪の女の子。ごめんねと謝りながら、ジエルシードを持ち去っていったあの少女。

生まれも性格も何もかも違うけど、私達三人はどこか似ている気がする。一人幼少期を過ごした私、寂しげな瞳の女の子、そして、何かを抱え込んでいるナナシ君。

(なんとかして…、聞き出さないと…)

「ちよっ!!なのは!!ユーノが!!」

「ふえ?...ああっ!!」

アリスちゃんの声に我に振り返り手元を見下ろすと、お湯を飲み目を回したユーノ君がいた。

「きゅ」

「お、お姉ちゃん!!」

ノエルさんのおかげで、ユーノ君はとりあえず事なきを得ました。

『なんで僕も...、連れて行ってくれなかったんだ...』

ユーノ君の眩きが聞こえた気がしたけど、うん、多分気のせいです。

「さて、どうしよっかな…」

とりあえずお風呂から出た私は、ユーノ君を頭に乗せ廊下を歩く。  
アリサちゃんやすすかちゃんはもう少しお風呂に入っているらしく、  
一旦分かれた。

「温泉だし、卓球にでも誘おうかな…、それか、一緒に旅館の探検  
とか…、わぶっ」

唸りながら歩いていた私は、向こうから歩いてくる人に気付かず、  
正面からぶつかってしまった。

「あ、す、すみません…」

慌てて謝る私だが、

「んー？ふむふむ…」

その女性は私を見て、何やら頷き始める。

「君かね…、家の子をアレしてくれちゃってるのは…」

赤みを帯びた橙色の髪を背中まで伸ばし、翡翠色の瞳をした、お姉  
ちゃんと同じ年くらいの人の言葉に、心当たりのない私は何も言う  
ことができない。

「え…、え…?」

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンチョに見えるんだけどな」

ジロジロと私を観察し、何やら失礼なことを言う彼女。だけでもしこの人の知り合いに知らず知らずの内に迷惑を掛けたんだとしたら…。

「なのは、知り合いか?」

「ナ、ナナシ君!？」

と、場の空気を切り裂くようにして、ナナシ君が現れた。

「見るからにこいつの知り合いじゃなさそうだが…、何か用でしうか」

そのまま私の手を引き、女性との間に割り込むナナシ君。

「ふうん…」

同時、女性の視線が鋭くなる。唐突に現れたナナシ君を警戒するように眺め、そのまま一分程が経過する。

「ふ…、あつはっはっはっは!!」

と、突然女性が笑い出した。私は呆然と、ナナシ君は目を細めながらそれを見守る。

「いやー、悪い悪い、人違いだったかなー？知ってる子によく似てたからさ」

笑いが収まると同時、頭を掻きながら謝罪する女性に、私は呆気に取られる。

「あ…、なんだ…、そうだったんですか」

どうにかそれだけを搾り出し、笑顔を浮かべる。

「あはは、可愛い可愛い」

そう言いながら女性は、ユーノ君越しに私を撫でる。よかった、悪い人じゃなさそう…、

「っ!!」

が、不意にナナシ君が放った蹴りに驚き、女性がバックステップで距離を取る。

「ナ、ナナシ君!？」

「今ほんの僅かにだが、お前から魔力が漏れていた。なのはに何を  
するつもりだった？」

私の咎める声を遮り、ナナシ君が怒気を孕んだ声を女性にぶつける。  
…確かに冷静に考えれば、あのナナシ君が不意を突いて放った攻撃  
を、普通の人間が避けられるハズがない…!!

「おお、恐い恐い。安心しなよ、今の所は挨拶だけさ」

対し女性はなんでもないように、裾を払いながら腰に手を当て仁王立ちする。

「忠告しとくよ。子供はいい子にして、お家で遊んでな。オイタが過ぎるとガブツと行くわよ？」

瞳をぎらつかせながら、そう宣言する女性。まるで獣のような敵意に、私は思わずナナシ君の手を握りしめる。

「ならこちらが言うべきことは三つだけだ。一つ、世間一般から見ればてめえも十分子供だ。二つ、お前がなんであろうと、俺達はこれからも動き続ける。三つ」

私の手を優しく握りしめ、鋭い視線を投げ掛けながらナナシ君は最後の一言を告げる。

「…油断してると、足元掬われるぜ？」

ニヤリ、と笑ったナナシ君の顔は、あの女性と同じくらいの迫力があって、さしもの彼女も目付きを変えた。

「…言うじゃないか。でも、勝つのはあたし達だよ」

「言ってる。俺達は勝手にやらせて貰うし、てめえらと勝負するつもりもない。…なのは、行くぞ」

言うべきことは全て伝えたのか、ナナシ君が私の手を引いて歩き始める。ちらりと女性の方を見てみたが、追ってくる様子はなかった。

『あー、もしもしフェイト、こちらアルフ』

『ん…』

温泉旅行を囲む山の木々。その内の一本の枝に寄り掛かるように座っていた私は、アルフの声を受けて目を開く。

『ちよつと見てきたよ。例の白黒の子達』

『そう…。どうだった…？』

この付近にジュエルシードの気配を感じ、調査中だった私はあの二人の気配を察知。アルフに旅館に潜入しての調査を依頼したのだ。

『白い子の方はビビってたからどうってことないだろうけど、もう一人の黒い子、あっちは注意した方が良くもね』

『黒い子…？』

黒い子、と言われてあの男の子の姿が脳裏を過ぎる。ジュエルシードに異常なまでの執念を見せた、得体の知れないあの少年。

『あたしが白い子の方に接触しようとした時、僅かに漏れた魔力を察知して攻撃して来たくらいだからね』

『…！！そんなに…？』



アルフも私程ではないが、魔法の心得はある。普段から魔力を完璧に隠しているのに、接触の際の僅かなそれを感知した…？確かに、警戒し過ぎて損をすることはないだろう。

『こっちはまだ進展なし。次のジュエルシードの位置は中々特定出来ないみたい。今夜、ちょっと探し回ってみるつもり』

『ん、りょーかい。それじゃまた夜にね』

『うん…』

その声を最後に念話が途切れ、静かな空間が戻ってくる。

「…急がないと」

僅かな接触でどこまで看破されたかわからないが、少なくともいずれ気付かれるだろう。私達も急がなければ。

「…行こう、バルディッシュ」

《Yes , Sir (了解)》

デバイスフォームのバルディッシュを携え、私は山の奥深くへと進んで行った。

「…ここまで来れば平気か」

あの廊下から離れ、売店付近までやって来た俺は手を離す。

「ナ、ナナシ君…」

「俺は念の為旅館周辺を探ってくるから、なんかあったら連絡してくれ」

それだけを言い残し、その場から立ち去ろうとする。

「ま、待って!!」

が、がしつと俺の手を握ったなのはに引き留められた。

「あいつがどう動くはわからないが、警戒しておくに越したことはない」

「な、なら私も…」

「ダメだ」

なのはの申し出を却下し、手を振り払う。

「ただでさえここ最近ロクに休めてないんだ。あんなイレギュラーは俺に任せて、お前は体を休めろ」

「で、でもほつとけないよ!! ナナシ君だって疲れてるし、最近様子おかしいもん!!」

だがなのはは諦めず、必死に俺を説得しようとしてくる。が、

「あ、なのはー、おーい」

「なのはちゃん」

売店から出て来たアリサとすずかに声を掛けられ、なのはが動揺する。今二人は俺を呼ばなかった。それが意味することを、理解してしまったのだろう。

「…遅くても夜には戻る」

空間を操作し、なのはにも認識出来ない深度へ潜りながら歩き出す。あの二人ならなのはをリラックスさせてやれるだろうし、あの女が来たとしても、気の強いアリサが前に出てくれるだろう。

「……………」

ジュエルシードを封印する為にこの世界に来て。なのはやユーノと知り合って。なのに今の俺は、まるでなのはを守る為に動いているかのようだ。

「…俺も甘いな」

俺の呟きに、デバイス<sup>アクセル</sup>が答えることはなかった。

「くっ…」

あれから日没まで山中を探し回ったが、ジュエルシードは見付からない。発動さえしなければ、爪と同程度の大きさなのだ。この広大

な山の中から探し出すのは難しい。

（探索魔法にも引つ掛からない…、どうすれば…）

「まさか、当たりより先に大当りと出会つとはな」

「!？」

背後からの声に振り向くと、あの黒い少年が居た。黒いシャツにズボン、白いパーカーを纏っていて、目付きが鋭いことを除けば普通の少年に見えた。

「来る前からジュエルシードの微弱な反応と、お前の気配は掴んだ。念の為妨害の結界を張ってみたら、やたらめつたら探索魔法。戦闘に傾注し過ぎた典型的な魔法使いだな」

スラスラと台本を読むように述べながら、少年がこちらへ向けて歩いてくる。

「あなた…、何者…？」

アルフの正体を一瞬で看破したり、私に気付かれずこれだけの範囲に妨害を仕掛けるなんて、ただの魔法使いでは有り得ない。

「俺はナナシ。過去を捨てジュエルシードを追い求める、名前の無いただの魔法使いさ」

彼は肩を竦めながら返答する。明らかな偽名にふざけた態度が、私の心に波紋を呼び起こす。

「ふざけないで。それだけの力を持っていて名前がない？冗談なら余所で…」

「…それだけの力、だと？」

瞬間、彼の纏う空気が変わる。それはとてもどす黒い、怒りと憎しみの感情。

「ああ、これだけの力があれば大抵のヤツはなんだって出来るだろうよ。でも俺には出来なかった。だから捨てた。何もかも。…それだけだ」

吐き捨てるように言いながら、彼が胸元から銀十字のネックレスを引っ張り出す。

「もう一度聞こうか。お前の名と目的を」

ネックレスが一本の刀に変化し、私に向けて突き付けられる。

「…フェイト・テストロッサ。目的はジュエルシードを回収すること」

バルディッシュを構え、私も答える。彼が名乗った以上、名乗り返すことが礼儀のように思えたからだ。

「何故集める？封じる為か？使う為か？」

「……………」

再度の問いには無言を返した。ジュエルシードを欲しているのは、

私ではなく母さんだから。

「…なら仕方ない。事情によっては協力出来たかもしれないのにな」

《Barrier Jacket》

デバイスの声と同時に、彼の纏う衣服が漆黒のロングコート、バリアジャケットへと姿を変えた。

「バルディツシュ」

《Barrier Jacket》

私の声と同時に、バルディツシュが応える。漆黒のドレスのようなワンピースが光に包まれ、黒を基調としたバリアジャケットに包まれる。

「……………」

互いに武器を構えながら、隙を窺う。刀を構えた彼の纏うプレッシャーは凄まじく、危うく気圧されそうになる。

（…でも、負けられない…）

母さんの願いを叶える為にも、ここで負ける訳にはいかない。

「……………っ！」「」

月明かりを遮る雲が晴れた瞬間、私と彼は同時に地を蹴る。刀と斧がぶつかり合い、激しい火花を散らす。衝突した互いの魔力

は、波紋のように山全体へと広がっていった。

「……………っ!!」

布団の中で寝ていた私とユーノ君は、ほぼ同時に目を覚ます。

「なのは!!」

「うん!!この魔力…」

ナナシ君とあの子のものだ!!

「ユーノ君、場所わかる!？」

「戦ってるみたいだから多分大丈夫…、捕まえた!!」

特定が完了したらしく、ユーノ君が肩に飛び乗る。

「行こう、なのは!!」

「うん!!」

何だか嫌な予感がする…。

（お願い…!!間に合って…!!）

「アクセル!!」

《Twin Form》

「バルディッシュ!!」

《Scythe Form》

二刀を振りかぶり、鎌と化したバルディッシュの斬撃を受け止める。  
…やっぱりこいつ、強い!!

《Arc Saber》

《Gravity Saber》

刀身をコーティングし、金色の刃を弾き距離を取る。

「塵気…、一閃!!」

そのままアクセルを腰溜めに構え、クロス型の斬撃を飛ばす!!

「つ!!」

が、背後からの殺気を感じると同時、しゃがみながら鎌をかわし、  
左手のアクセルを投擲した!!

「っ!?!」

思いがけない攻撃方法に驚くが、間一髪の間でかわす彼女。



「戻れ!!」

が、俺もそこまでバカじゃない。アクセルの向きを変え、磁力を操り引き寄せる!!

「っ!!」

死角からの奇襲に驚きながらも、少女は再びアクセルをかわし、距離を取った。

「ちっ…」

アクセルをキャッチし、思わず毒づく。怪我を負わせないように戦ってはいるが、そんな余裕は正直ない。全力で戦ってもギリギリで勝てるかどうか、というレベルだ。

「グラビティ…」

次の一手を放とうとした瞬間、背後の川面から青い光が立ち上った。

「「!?!」」

この反応、間違いなくジュエルシールドだ。まさか二つの厄介事を同時に抱え込むことになるとは…。

「ウオオオオオ…」

ジュエルシールドを核とした水は人型を形成し、水の巨人へと姿を変えた。アレだけの水をぶち抜いて封印するのはかなり骨だ。となれば…。

「フエイト、手伝え」

「っ!？」

唐突な俺の言葉に、彼女が驚愕の眼差しを向けてくる。

「俺は周囲に被害を出したくない。お前はジュエルシードを手に入りたい。利害は一致していると思うが？」

「……………」

少女はしばし思案の後、こくりと頷く。契約完了。

「俺がヤツをぶった切る。その後お前が封印しろ」

「!？」

再度驚愕の眼差し。獲物を譲ると言われたのだから、当然といえば当然か。

「あいにく封印用の砲撃魔法なんてないんでね。適材適所だ」

「…わかった。バルディッシュ」

《Sealing Form Setup》

納得はしたのか、彼女はバルディッシュを変形させる。さて、色々面倒なことになったが…。

「周囲に被害が出る前に一瞬で決めるぞ!!」

《Yes, Sir!! (了解!!)》

一本に戻ったアクセルを構え、俺は地を蹴った。

「厩磁…、一閃!!」

水の巨人の前に飛び上がった彼は、鞘に収めた刀を高速で抜刀した。黒いエネルギーを纏った刃はたやすく水を切り裂き、巨人の胴体を袈裟掛けに切り落とした。それに伴い、核の部分が露出する。

《Order (命令を)》

「ジュエルシード、シリアルXVII、封印」

《Yes, Sir (了解)》

バルディッシュが私に応え、先端に雷を集束、解き放つ。宙を駆けた雷光は巨人の核を撃ち抜き、ジュエルシードの魔力を霧散させた。

(…凄い)

肩をぐるぐると回す少年を見ながら、素直な感想を抱く。的確な指示にキレのある技。いくら邪魔が入らず彼の協力があつたとはいえ、前回より段違いに速い。

「…?」

こちらの視線に気付いた彼が、首を傾げながら肩を竦めた。  
もしかしたら彼になら…、私達の事情もわかって貰えるかもしれない。もし協力して貰えたら、どれ程心強いことか。

「……………」

ジュエルシードが舞い降りる中、再び二人対峙する。ジュエルシードは片付いた。ならば後は、私達の問題に決着を付けるだけ。

「…あの」

「はああああっ!!」

が、私の声は、闖入者の雄叫びによって遮られた。

「っ!?!」

彼は慌てて刀を構え、アルフの拳を防御する。間一髪間に合ったとはいえ、もし間に合わなかったら…!!

「アルフ、待って!!」

「ジュエルシードは確保したんだ!! さっさとずらかるよ!!」

続けざまに拳を打ち込みながら、私を促すアルフ。どちらにせよこの状況では、それ以外に方法はない。

「だめーっ!!」

「「「っ！？」」」

が、私達の間の緊張感は、もう一人の闖入者の悲痛な声と、撃ち込まれた桜色の弾丸により霧散した。

「なのは！？何故来た！？」

「これ以上戦っちゃダメだよ！！二人共話を聞いて！！」

動揺する少年と悲しげに叫ぶ少女をよそに、私の思考はフリーズしていた。二人は気付いていないが、少女のすぐ傍に、

ジュエルシードが浮いている。

少しでも動けば触れられる位置だ。アレを取られたら、また振り出しに戻ってしまう。そうしたら、母さんが……！！

考える前に私は動いた。少女の後ろに回り込み、バルディッシュを振りかぶる！！

「！？なのは！！」

「え……？」

振り向いた少女の瞳に映るのは、驚愕と、恐怖と、

刃を展開した、サイズフォームのバルディッシュ。

「っ！？」

慌てて止めようとするが、既に腕は振り下ろされてしまい、止める術はない。この距離ではプロテクションも間に合わないし、サイズフォームならバリアジャケットも貫いてしまうだろう。

（そんな…）

半ば諦観し、流れに身を任せた私の感覚が、三つの情報を捉えた。赤と、黒と、鉄の匂い。

「え…」

「嘘…」

正面を見据えた私と少女が見たのは、

少女を庇い、胸に金色の刃を半分以上埋めた、黒い少年だった。

「あ…、あ…、ああ…」

「う、嘘…、嘘だね？」

私は震えながら、少女は泣き笑いのような表情をしながら、目の前の光景を否定する。だが、現実是非情だった。

「か、はっ…」

水音と共に大地が赤く染まった瞬間、静止した時間が、動き始めた。

「いやああああ！ナナシ君っ！！ナナシ君っ！！」

「落ち着いてなのは！！むやみに揺すっちゃダメだ！！」

倒れ込んだ少年を抱き寄せながら、少女が絶叫する。治癒魔法を展開するフェレットの声にも耳を貸さず、ただひたすらに泣き喚く。

放り捨てられた杖が硬質な音を立て、六つのジュエルシードを撒き散らした。

「バ、カ…!!」

彼は口の端から血を流しながら、そんな少女を叱咤する。

「あ…、あ…」

私はそんな光景に目もくれず、血に濡れたバルディツシュを構えたまま、地面に座り込む。まだ私の手には、人を刺した感触がありありと残っていて…、

『事情によつては協力出来たかもしれないのにな』

「あ…!! ああ…!!」

「フエイト!! フエイト!!」

駆け寄つて来たアルフが叫ぶが、耳に入らない。私の中では黒に吸い込まれた金と、そこから漏れる赤い液体がひたすらにリフレインされる。

「くっ!! 撤退するよ!!」

アルフが私を抱き抱え、宙に浮いたままのジュエルシードをキャッチ、更に地面に撒き散らされた、六つのジュエルシードに手を伸ばす。

「ア、クセル…!!」

《Gravity Fall!!》

主の命に応え、デバイスが空間を捩曲げる。大半のジュエルシードはその渦に飲み込まれたが、

アルフが一つだけ、掠め取っていた。

「く、そ…!!」

彼が毒づきながらも遠ざかる私達を鋭く見据えているが、直に脱力し、瞳を閉じた。

「フェイト!! しっかりするんだ!! フェイト!!」

アルフの声を聞きながら、私は意識を失った。

「っ!!」

ガバツと跳ね起きた俺は、まず辺りを見回した。見覚えのあるこの和室は…、旅館の中か？

「目が覚めた？」

脇を見下ろすと、ユーノがちょこんと正座していた。俯いた表情は、こちらから窺うことは出来ない。

「…あれから、どうなった？」



逸る心を抑えつつ、俺はユーノに尋ねる。なのはを鎌の一撃から庇った後のことは、記憶に霧が掛かって思い出せない。

「ナナシがなのはを庇った後、投げ出されたレイジングハートからジュエルシードが散らばって、その内一個を奪われた」

「な!？」

まさか、あの少女がそんなことを!？

「鎌を持った方の子は呆然としてて、使い魔がジュエルシードを奪っていったんだ」

「あいつか…!!」

昼間に絡んで来た女を思い出す。まさかとは思ったが、あの子の使い魔だったのか…!!

「…そして、その後は?」

「なんとか治癒魔法で傷は塞いで、なのはが泣きじゃくりながら飛行魔法で連れて帰って来たんだ。ナナシが記憶を修正してたから、そっちの問題はないよ」

「そうか…。…なのはは?」

尋ねた俺に対し、ユーノは顎をしゃくる。なんだか重みがあるなと思ったら、なのはが俺に寄り掛かったまま熟睡していた。

「ただでさえ疲れてたし、あんな光景見せられて大泣きしちゃった

からね…。仕方ないよ」

「……………」

俺は無言で、なのはを今まで居た布団の中に寝かせた。俺の手を固く握りしめたなのはの手を優しく引きはがし、頭を撫でてやる。今日良いことは二つあった。一つ目はアレだけ大泣きした以上、なのははぐっすり眠れるであろうこと。そして二つ目は、覚悟を決められたこと。

「ナナシ…」

「お前も考えてたんだろ？俺と同じことを」

なのはの頭に乘せた右手が、銀色の光を放つ。記憶を修正する魔法を掛け、なのはの中の俺の記憶を消し去っていく。

「もうこれ以上なのはを巻き込む訳にはいかない。ユーノ、お前は どうする?」

「…聞く意味ある?」

「…だよな」

ユーノの嘆息に苦笑で答えると同時、アクセルが口を開いた。

《You might also have understood. It doesn't live in the translation that rolls this girl in our circumstances any further.

You also must have already spent it as free accessories（お前もわかっただろう。これ以上この少女を我らの事情に巻き込む訳にはいかん。お前ももうただのアクセサリーとして過ごせ）》

俺とこのデバイスとは三年もの付き合いになるが、寡黙なこいつがここまでの長台詞を吐いたことに驚く。こいつもやはり、なんだかんだで心配なのだろう。

《∴ All Right（∴ 了解しました）》

僅かな沈黙の後、肯定の意を返すレイジングハート。やはりこいつ自身も、なのはに対して罪悪感を抱いていたのかもしれない。

「それじゃ、行こうか、ユーノ」

「うん」

ユーノを肩に乗せ、俺は立ち上がる。僅かな間だったが、なのはと過ごせて楽しかった。俺が失った温もりを、安らぎを得られて嬉しかった。

だからこそ、俺は彼女の前から姿を消す。これ以上優しい彼女を、巻き込みたくないから。

「さようなら、なのは。願わくば永遠に」

それだけを言い残し、俺は襖をそつと閉めた。

## 第七話「すれ違い」(後書き)

うん、どうしてこうなったんだろうね？w

主人公刺されるわなのはさん泣き叫ぶわフェイトさんショック状態  
だわ。

ノリって…、怖いね…。

次回はきちんと巻き返すので大丈夫です。

作者は鬱やBADが嫌いなので、そういう終わり方をしないことだけは約束します。

## 第八話「錯綜」(前書き)

はい、八話です。

別名なのはのターン。理由は読めばわかるよ。うんw

もはや1万越えがデフォになりつつある今日この頃w誰か俺が死ぬ前に止めてくださいw

ではどーぞー

## 第八話「錯綜」

「いい加減にしなさいよ!!」

ぼんやりと思考に耽っていた私は、アリサちゃんの怒鳴り声と机を叩く音で我に返る。

「最近何話してもぼーっとして上の空で、あんた何考えてんの!？」

言われて私は今が夕暮れ、放課後の教室で三人でお話していたことを思い出す。いけない…、またぼーっとしちゃってた…。

「う、ごめん…」

「ごめんじゃない!! あたし達と話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもぼーっとしてなさいよ!!」

「アリサちゃん!!」

すずかちゃんの静止に耳を貸さず、吐き捨てるように言ったアリサちゃんは教室から出て行った。

「なのはちゃん…」

「いいよ…。今のは私が悪いから…。アリサちゃんの所に行っただけ」

「…ごめんね」

すずかちゃんがこちらを気に掛けながら、アリサちゃんを追い掛ける。

「…本当に、ごめん」

私には謝ることしか出来ず、かばんを背負って立ち上がる。

何故なら、どうして自分がぼーっとしているのか、何を思っているのか、自分でもわからないのだから。

「フエイトー？」

アルフの声に反応し、私は浅いまどろみから目覚めた。睡眠不足の頭を振りながら、ゆっくりと起き上がる。

「あー、また食べてない…。ダメだよちゃんと食べなきゃ…」

アルフが手付かずの食事を見て溜め息をつく。まあ、アルフの気持ちにはわからないでもない。

あの日以降、私は何も口にしていない。野菜を見ればたやすく切り裂かれた黒い衣服を、肉を見れば切り裂かれる体を見れば流れ出る血を思い出してしまっただ。

「少しでも食べたよ…、大丈夫…」

アルフに嘘をつきながら、ミネラルウォーターを口に含む。さすがに水分会くらは取らないと体が保たない。

「……………」

背を向けた私を見て、アルフが息を呑む。そっか…、傷、まだ塞がってなかったっけ…。

「そろそろ行こうか…。次のジュエルシードの大まかな位置特定は済んでるし…」

あんまり、母さんを待たせたくない。

「そりゃまあ…、フェイトがそうするってんなら、使い魔たるあたしは従うけど…」

「それ、食べ終わってからでいいから…」

「っ！？そ、そうじゃなくて!？」

抱えたままだったドックフードを見ながら言うと、アルフは顔を真っ赤にしながら言い返す。

「そうじゃなくて、あたしはフェイトが心配なの。広域探索の魔法はかなり体力使うのに、フェイトってばロクに食べないし休まないし、それに、あの子達のこと、気に掛けてるんだろ？」

真剣な表情でアルフが言葉を紡ぐ。あの子達、とはもちろん、白い少女と黒い少年のことだろう。くずおれる少年と泣き叫ぶ少女の姿が脳裏に焼き付いて、あの日から毎日夢に見ているくらいだ。やはり、気にはなっているのだろう。

「大丈夫だよ…、私は、強いから…」



嘘だ。私は強くなかない。こんなにも迷い、悩んでいるのに、強い訳がない。

マントを羽織り、グローブを嵌めながらその思考を切り捨てる。とにかく今は迅速に、ジュエルシードを集めることだけ考えればいい。

（そうすれば…、あの二人にも会わなくて済むから…）

「フエイト…」

「さあ、行こう。母さんが待ってるから」

心配げなアルフの声を遮り、きっぱりと告げる。バルディッシュを携え、マントを翻しながら私は外へ出た。

「くっ…、はあっ…、はあっ…、はあっ…」

探索魔法の終了を確認した俺は、床に膝をつく。コンビ二袋からスपोर्टドリンクを取り出し、三分の一程一気飲みする。

「ナナシ…、ちょっと、休もう…」

そう言うユーノも、床に横たわりバテていた。一時間ごとに俺の使用する探索魔法の精査、洗い出しを担当している為、俺以上に疲労が溜まっている。

「だな…、はあっ…」

ベンチに倒れ込むように寝そべり、赤く染まった空を眺める。

あの日俺は、海鳴市から俺に関する全ての記憶を奪った。学校に籍は残っているが、そこは記憶を弄り、出席扱いにさせてある為問題はない。その後グラビティフォールで周囲の空間位相をずらし、誰にも認識されないまま休みなしてジュエルシードを探し続けた。そんな生活が五日も、しかも夢のせいで一睡も出来ない生活続けば、さすがにガタもくるだろう。今ではグラビティフォールを維持するだけの余力も残っておらず、人目を盗んで動いているような状態だ。

「…くそっ」

にも関わらず、ジュエルシードは見付からない。微弱な反応は感じるが、位置特定は不可能な程小さな反応だ。探し出すのは無理だろう。余程運がないのか、ジュエルシードに嫌われているとは思えない。

「とにかく…、体を休めなきゃ…」

ユーノもベンチにはい上がり、ぐたつと寝そべりながら声を上げる。

「そう、だな…」

仮にジュエルシードを見付けたとしても、今の俺に封印することは出来ない。せいぜい返り討ちに遭うのがオチだろう。

だが、止める訳にはいかない。これ以上あんなもののせいで、この街を危険に曝したくはない。なのは達に危害が及ばないよう、発現したら迅速に封印しなければならない。

「とりあえず、少し休んだら移動しよう…。次は…」

一旦拠点に戻るか、と続けようとした時、屋上の扉が荒々しく開かれる。

「まったく、何考えてんのよあいつは……!!」

ぶつぶつと呟きながら毒づき、ベンチにどかっと腰掛けたその少女を、俺はよく知っていた。

「…あ」

そして今更俺のことに気が付いたのか、冷や汗を流している。

「す、すみません、少しイライラしてて…」

「気にすんな。誰だってそのくらいある」

殊勝に頭を下げる少女に対し、俺は猫を被ることもせず言い返す。取り繕う必要はない。どうせ覚えていないのだから。

「あの…、どこかでお会いしました？」

「ぶっ!!」

思いがけず放たれた一言に、口に含んだスポーツドリンクを吹いてしまう。記憶は確かに消したハズ……!!

『疲れてたから術式の構成が不完全だったんじゃないかな。隙を見てもう一回やればいいよ』

『…それもそうか』

ユーノと念話を交わし、大まかな方針を決める。だが、

「…これも何かの縁だ。よければ話、聞かせてくれないか？」

ペットボトルの蓋を閉じ、コンビ二袋に叩き込みながらそう話し掛ける。ひどく滑稽だ。忘れることがわかっていのに、それでも話をしようとしている自分がいる。

もしかしたら、無意識に気に掛かっていたのかもしれない。彼女の友人である、あの優しい少女が。

「…実は」

何か思う所があったのか、ぽつぽつと話し始めた彼女の声に、俺は耳を傾けた。

「入学したばかりの頃、あたしには友達がいなかった。自信家で、我が儘で、強がり。我ながら最低な子だったと思うわ」

あたしはぽつぽつと、屋上で出会った少年を相手に話し始めた。根拠はないが、彼はこの話を聞くべきだと、そんな感覚を抱いたのだ。

「そんなあたしは、毎日クラスメートをからかってバカにしていた。…心が、弱かったから」

思い出す。私の人生が変わった、あの日のことを。

「その日もあたしは、気が弱くて思ったことも言えない子の髪飾り

を取り上げてからかった。やめなよって言われても聞かなかった。他人の言うこと素直に聞いたら、何かに負けちゃう気がしてたから」

そんな中、間に入って来たのがあいつだった。

「私の頬をひっぱたいて、「痛い？でも大事なモノを取られちゃった人の心は、もっともつと痛いんだよ」って泣きそうな顔しながら言つて。そんな風に言われたことなかったあたしは、その子と取っ組み合いの大喧嘩をしたわ。それを止めたのが、事の発端のひどくおとなしい子」

すずかは泣きながらも、大声を出して私達の喧嘩を止めてくれた。ホント、あの子のどこにそんな勇気があったんだか。

「それからあたし達は、少しずつ話をするようになっていて…、いつの間にか、あたし達は友達になつてた」

さて、前座はここまで。本題はここからだ。

「そんな風に私を変えてくれた掛け替えのない大事な友達が…、最近、様子がおかしいの」

「…どんな風に？」

「あいつは元々、辛いことや苦しいことを抱え込むタイプで、誰にも何も言わないの。だけどあんな暗い顔されたら、悩んでるってわかつちやうじゃない。迷つてるの、困つてるの見え見えじゃない…！！」

思わず拳を握りしめる。何も言ってくれないあいつが、何の力にも

なつてあげられない自分が悔しくて、あたしは自己嫌悪の念に苛まれる。

「なんとかしたいのに何も出来ない、か……。ホント、世界は理不尽だよな……」

彼が立ち上がりながら、ポケットに手をつ込み空を見上げる。その瞳には何かが映っているのだろうか。一体どんな経験をすれば、そんな空虚な目が出るのだろうか、そんな感想を抱く。

「でもさ……、それでも俺達人は、理不尽な現実に立ち向かっていかなきゃいけないんだよ」

あたしとそう変わらない年頃なのに、何かを悟ったようにそう言う少年。

「確かに迷ったり、悩んだりすることもあるよ。俺も昔、散々迷った。でも俺は結局、前へ進むことを選んだ。まだわからないこともあるけど、それでも俺は進むことを選んだ。だから俺は今、ここに居る」

きつぱりと告げ、フェレットを肩に乗せた彼は、コンビニ袋を手に取り。

「一つだけアドバイス。あんたにもその子にも言えることだ」

そのまますたと歩き始めた彼が最後に一言だけ呟く。

「迷いながらも。悩みながらも。前に進めば、見えるものだってある。何もしなければ、始まりすらない」

そんなよくわからないことを言いながら、彼は屋上の扉を開ける。

「それって、どういう…」

「さあな。後はお前とそいつ次第だよ」

最後に微笑みを残し、彼は扉を閉める。残されたのは静寂とよくわからない言葉、そしてあたし自身。

「あ、アリサちゃんやつと見付けた…」

何かを掴みかけたと同時に、すずかが駆け寄ってきた。大方、私とあいつの間を取り持とうと考えているのだろう。

「行こ、すずか」

「え？どうしたの急に？」

「あのバカに伝えることが出来たのよ！！」

すずかの手を引っ張りながら、私は階段を駆け降りた。

「…ナナシ」

「…悪い」

ユーノの咎めるような声に、俺は素直に謝った。まず間違いなく、

記憶を修正しなかったことだろう。

「記憶を消したとしても、あいつの心のどこかに迷いが残っているとしたら…、そりゃ、二人共ヤキモキするわな。なら、前に進めるよう、それくらいは伝えてやらないと」

俺と過ごした時間を全て消し去ったことは、思ったよりも大きな代償を支払うことになってしまったのかもしれない。

（そこまで…、俺と過ごした時間が大事なものだっただっていいのか…？）

ふとそんなことを考え、すぐに首を振った。戯言だ。それ以外の何物でもない。

「とりあえず拠点に引き返して、回復に努めよう」

「…わかった」

空間位相をずらしながら窓から飛び出し、廃ビル目掛けて空を駆けた。

とぼとぼと歩きながら、校門の前へ出る。また無意識に考え事をしていたようで、教室からここまでたどり着くのに大分時間が掛かってしまった。

「急いで帰らないと…、時間がなくなっちゃう…」



そう呟いてから、私はふと疑問を抱く。

何の時間がなくなるのか。

「あれ…？」

わからない。わからないことがあった時は、誰かに尋ねるのが一番だ。

「ユ…」

そのまま肩に視線をやり、再びの疑問を抱く。

何故肩の方を向いたのか。

「あれ…？」

わからない。何か大切なことを忘れているような気がするが、それが何なのかわからない。

「ん…」

何故か胸の辺りがもやもやする。ひどくもどかしく、悲しい感じ。ホント、どうしちゃったんだろう…。

「なのはー！！」

「！？」

思考の泥沼に陥りそうになった私に、後ろから声が掛けられる。振り向くと、すずかちゃんを引きずるようにして走って来た、アリサちゃんだった。

「はあっ…、よかった…、間に合った…」

荒い息を整えながら、アリサちゃんが私に向き合う。

「ていつー!」

「あたっー!」

が、何を思ったのか、チョップを貰ってしまった。うう、痛、  
ふと脳裏を過ぎる、私にデコピンをする、影。

「はい、これでチャラっと」

戸惑う私をよそに、アリサちゃんが満足げに頷く。

「ア、アリサちゃん…?」

とりあえずそれは後回し。頭を抑えながらアリサちゃんに尋ねる。

「あんたが何を悩んでるかはわからないけど、あたし達は、待ってあげる」

「え…?」

「あたしはあんたが何を悩んで迷ってるのかはわからない。だからあたし達は、いつも通りに迎えてあげる。それがあたしの答えよ」

腰に手を当て、そう言うアリサちゃんの目は透き通っていて、迷いなんて微塵も感じられなかった。

「あ、それと、たまたま会った人からアドバイス貰ったんだけど」  
アリサちゃんはそのまま私を気にせず、

「迷いながらも、悩みながらも。前に進めば、見えるものだってある。何もしなけりゃ、始まりすらしない、らしいわよ？」

その言葉を、口にした。

「っ！？」

『それでも俺達は、「今」と戦わないといけないんだよ』

アリサちゃんの言葉に反応するかのようには、私の脳内にそんな言葉が再生される。この声、どこかで…。

『…忘れて』

「！？」

が、不意に頭の中に響いた声に、私の思考は霧散する。

『あなたは…』

『今ならまだ間に合うから…、忘れて、日常に戻って…』

その声と共に、掴みかけた感覚が遠ざかっていく。…このままじゃダメだ！！

『待つて！！あなたは何か知ってるの！？』

『私はもうリタイアしちゃったけど…、あなたはまだやり直せるから…』

『ねえ！！待つて！！』

『お願い…』

そのか細い声を最後に、私の中に響いていた声が途切れた。後に残るのは、疑問ともやもや。

「ま、そういう訳だから、よくわかんないけど頑張んなさい」

感覚的にはかなり長い時間だったように感じられたが、実際は一秒にも満たなかったみたいだ。アリサちゃんは私の異変に気付かず、手を振り離れていく。

「私も同じ気持ちだから…、頑張つてね」

すずかちゃんもそう言い残し、その場を後にする。

「…なんなんだろう、これ」

もう色々なことが起きすぎて、頭の中がぐちゃぐちゃだ。帰ってゆっくり休もう…。

そんな風に色々なものを抱え込んだまま、私は帰宅の路についた。

「っ！？」

それを感じガバツと起き上がった俺は、すぐに探索魔法を展開する。

「…ナナシ？」

寝ぼけたユーノが目を擦りながら尋ねてくるが無視。

「この反応…、あいつか…！！」

脳裏にあの少女の姿が過ぎる。近くにジュエルシードもあるようだが、まだ特定しきれていないのか動きにムラがある。

「ユーノ、あいつだ！！俺が前に出るから、サポート頼む！！」

「わかった！！」

ようやく意識が覚醒したのか、肩に飛び乗りながらユーノが答える。

「アクセル！！」

《Stand by Ready, Set up》

バリアジャケットを身に纏い、反応のある市街地に向けて加速した。

「…！？」

ベットに寝そべったはいいが、なかなか寝付けない私に追い打ちを

かけるように、それは突然やって来た。

「この…、感覚…」

世界が静止するような感覚。街を覆う緑色のドーム。それを見た瞬間、私は全てを思い出した。

「…ナナシ君!…」

口をついて出るのは少年の名前。名前が無いと言った、あの男の子。

「レイジングハート…」

私は机の上に置かれた宝石に呼び掛ける。

《How will do you?》(どうするつもりですか?)《

「ナナシ君の所へ行く」

《It is likely to understand if  
it recalled it. Moreover, will  
you be going to see such a  
spectacle?》(思い出したのならわかるでしょう。またあんな光景を見ることになるかもしれませんよ?)《

「っ!…」

レイジングハートに言われ、あの日の光景が脳裏を過ぎる。私を庇って傷を負った、彼の姿を。

「確かに怖いよ…。またナナシ君があんな目に遭うんじゃないかって思うと、とっても苦しくなる。でも…」

一度目を伏せるが、再び宝石を見据えきっぱりと答える。

「それでも私は行きたい。ナナシ君を助けない」

それは、私の心に芽生えた、嘘偽りない本当の気持ち。それを伝える為にも、私はナナシ君に会わなきゃいけない。

《…Passing(…合格です)》

「…え？」

《I also was hesitating. Though it was said be not to related because it is still anxious. (私も迷っていました。関わるなど言われましたが、やはり気になるので)》

レイジングハートが苦笑するように話し始め、私はぼかんとする。

「レイジングハート…？」

《If you decided the resolution, I do not say anything. It becomes under the name of the Raising Heart with your power (あなたがその覚悟をしたのであれば、私は何も言いません。不屈の心<sup>レイジングハート</sup>の名の下に、あなたの力となります)》

レイジングハートが光を放ちながら、私の手の中へ飛んでくる。温かな光に包まれて、私の心が奮い立つ。

《Let's go, Master. To tell your desire (行きましょう、マスター。あなたの想いを伝える為に)》

「……うん……」

レイジングハートを掲げ、私は久しぶりのその言葉を唱える。

「レイジングハート、セット・アップ……」

《Stand by Ready, Set up》

バリアジャケットに身を包み、杖へと姿を変えたレイジングハートを手に取る。

想いを貫く為に。未来を変える為に。私は、再びその力を手に取った。

「行くよ……レイジングハート……」

《All Right, My Master (了解しました、私のご主人様)》

窓を開け放ち、桜色の翼を広げた私は、空へと舞い上がった。



「…久しぶりだな、フェイト・テストロッサ」

ふわりとビルの屋上に舞い降りた俺は、その少女を見据える。黒を基調としたバリアジャケットを身に纏い、漆黒のマントを羽織った、死神のような少女。

「…久しぶりです」

無視されるかと思ったが、案外素直に答えてくれた。だが彼女の視線は、俺の顔と胸元を行ったり来たりしている。

「あの…、傷は…」

「ああ、もう治ったから問題ない。あの程度ならまだ可愛いもんだ」

「よかった…」

俺の返答に少女が安堵の息をつく。…やはり、この少女、

「…何か、特別な事情があるんじゃないのか？」

俺の放った問いに、彼女が静止する。

「いくら不慮の事故とはいえ、傷付けた敵を心配するヤツなんてそういない。ましてや、あんたくらいの年頃で、あんなものに関わろうとするって…」

「……………」

少女は黙して答えない。…まあ、半ば想定済みだったんだが。

「…仕方ない。ジュエルシールドを無理矢理発現させようとしている以上、俺はあんたらを止める必要がある」

今頃ユーノが必死にあの使い魔の気を引いている所だろう。不穏な気配を感じたので結界を張らせた後、魔力を集束させている使い魔の所に向かわせたのだ。元々の彼の役割は時間稼ぎだ。今から飛ばせば十分間に合うだろう。

「…させない」

が、黙って通してくれるハズもなく。バルディツシュを構えた彼女が立ち塞がる。

「……………」

奇しくも前回と同じ構図で、互いに一步を踏み出そうとした瞬間、使い魔の居たビルに、桜色の砲撃が撃ち込まれた。

「な…!？」

考える前に体が動いた。ダブルアクセルを起動し、彼女が居るであろう場所目掛けて加速した。

「デイベイン…、バスター!!」

ユーノ君の念話でだいたいの事情、  
記憶を弄ったことや、ジュエルシールドを無理矢理発現させようとしていることは理解した為、

最初から砲撃を叩き込んだのだが、狼の姿となった使い魔はそれを  
たやすく避け、私目掛けて襲い掛かってくる！！

「くっ…！！」

《Protection》

桜色のバリアが鋭利な爪を防ぎ、舌打ちしながら使い魔が距離を取  
る。彼女の傍らには集束された魔力。あれをどうにかしないと…！！

《Divine Buster》

再び砲撃を放つが、たやすく避けた使い魔は、爪と牙で襲い掛かっ  
てくる！！

《Gravity Saber》

が、間に入った人影が刃を振るい、使い魔を弾き飛ばした。

「…ナナシ君！！」

「…何故来た」

喜びの声を上げる私に対し、ナナシ君は冷たく問い掛ける。

「これ以上関わろうとすれば、あんなもんじゃ済まないことだって  
ある。あんなに泣き叫んでなのに、何故来た？」

私は深呼吸し、彼の瞳を見据える。そして、自分の心にある言葉を、

「…好きです」

その想いを、告げた。

「っ!？」

瞬間、ナナシ君の無表情が崩れる。

思えば、初めて会った時から気になっていたのかもしれない。その優しさで、どこか空虚な瞳に惹かれていたのかもしれない。

「ナナシ君の傍に居たいから。同じ道を歩きたいから。だから私は、ここに来ました」

ただひたすらに、自らの内に渦巻く想い、その全てをぶつける。

「まだわからないこともあるし、悩んだり迷ったりすることもあるけど…、この想いだけは、本物だから」

「…どうして、お前は…」

ナナシ君は、あの泣きそうな顔をしながら、苦しそうに呟く。その瞳に映っているのは、悲しみと恐怖の色で…、

「ナナシ君…」

そのことを聞こうとした私の声は、衝撃音によって掻き消された。

「「!？」」

見ると、あの使い魔が溜めていた魔力を使い、無理矢理ジュエルシ

ードを発現させていた。…しまった！！

「…とにかく、今はジュエルシールドが最優先だ。話はこれが終わったら、な」

「…うん」

ナナシ君の言葉に頷くと同時、彼は使い魔目掛けて加速した。

「グラビティセイバー」

重力で刃をコーティングし、使い魔のいる屋上目掛けて振り下ろす。

「ちっ…！！」

が、使い魔は即座に宙へ飛び、斬撃をかわした。

（……………俺は）

それを追撃しながらも、俺の中では思考の糸が絡まり合い、ぐちゃぐちゃになっていた。

『…好きです』

なのはは確かにそう言った。俺の目をまっすぐに見据えてそう言った。

（…バカが）

何故こんな男を好きになってしまったのか。こんな、何も出来ない無力で情けない俺なんかを。

「ちょこまかと…!!」

使い魔をスピードで攪乱しながらも、俺の思考は鈍化していく。

『お兄ちゃん』

「…っ!!」

脳裏を過ぎった声を振り払うように、アクセルを振るい斬撃を飛ばす。

「いい加減に…、墜ちろっ!!」

「こっちの台詞だ…!!」

爪と刃を交え、至急距離で睨み合う。

「いつも邪魔してくれちゃって…!! いい加減引っ込んでな!!」

「それもこっちの台詞、だっ!!」

ギイン!!と弾き、僅かに距離を開けて対峙する。

「てめえがあいつに尽くすのは勝手だ。それが使い魔の存在意義だからな。でも…」

思い出す。あの子の寂しげな瞳を。彼女に良く似た目をしていた、あいつのことを。

「ジュエルシードを集める前に、お前にはやるべきことがあるだろうが!!」

俺自身迷っているから言えた義理ではないが、少なくともこれだけは言える。あいつと同じ目をしたあの少女を、何か大きなものを抱え込んでいるあの少女を、放っておく訳にはいかない。

「黙りな…、何も知らないガキンチョがあああああ!!」

「わかってねえのは…、てめえの方だクソ犬があああああ!!」

互いに絶叫を放ちながら、俺達は再びぶつかり合った。

あの子、フェイトちゃんがジュエルシードに向けてバルディッシュを構えたのを見た瞬間、私は考える前に叫んだ。

「レイジングハート!!」

《All Right (了解しました)》

私の声に応え、レイジングハートがシーリングモードに移行、フェイトちゃんとほぼ同時に、封印の閃光を放つ!!

バディッ!!

衝撃音と共に、桜色と金色の閃光が、ジュエルシードに突き刺さる！！

「リリカル、マジカル！！」

「ジュエルシード、シリアルXIX！！」

互いに一步も譲らず、封印の呪文を唱え続ける！！

「「封印！！」」

輝きを増した二色の爆発に飲み込まれたジュエルシードが、ゆらゆらと光を放つ。…どうにか成功したみたい。

「フェイトちゃん！！」

地面に降り立ったその少女に、私は声を掛ける。

「私、高町なのは！！聖祥附属の三年生！！」

同じ目的を持つ者同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない。

《Scythe Form》

《Flier Fin》

無言のまま、バルディッシュを鎌へと変形させるフェイトちゃん。私も光の翼を展開し、その瞳を見据える。

だけど、知りたいから。そんな悲しそうな目をしてまで、どうして



ジュエルシードを探すのか。

「…行くよっ」

《All Right（了解しました）》

人気のない街中を、桜と金の閃光が飛び交う。少女の砲撃をかわした私は、そのまま背後に回り込む。

《Flash Move》

だが、デバイスの杖の声と共に翼を羽ばたかせ、少女が視界から消失する。

《Divine Shooter》

背後からの声と同時に、集束した魔力が放たれる。

《Defenser》

対し私は距離を取り、防御魔法を展開、相殺する。

「フエイトちゃん!!」

バルディッシュを構えた私は、呼び掛けの声に動きを止める。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないかもしれない。だけど話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ

「!!」

「…っ!?!」

私はその綺麗な瞳に魅入られ、思わず息を呑む。

「ぶつかり合ったり、競い合うことになるのは仕方ないのかもしれない。だけど、何もわからないままぶつかり合いたくないよ!!」

「私、は…」

悲痛な彼女の声に呼応するかのように、私の声も震え出す。確かに話し合えないと伝わらないこともある。あの少年やこの少女となら、わかり合えるかもしれない。でも、それでも私は…

「っ!?!」

迷いを振り切るようにして、ジュエルシールド目掛けて宙を蹴る。これ以上この子と話していたら、きっと私は何も出来なくなるから。

「っ!?!」

後ろから僅かに遅れて少女が追走する。互いに限界まで加速しながら、眼下に漂うジュエルシールド目掛け、バルディッシュを振るった。

「「っ!?!」」

が、同時に振り下ろされた彼女のデバイスとバルディッシュが噛み合い、

僅かに魔力が漏れていたジュエルシールドに、触れた。

ミシリ…。

世界が静止する。時間が止まる。誰ひとりとして動けなくなる。

ビシッ…。

互いのデバイスに亀裂が走った瞬間、それは起きた。不安定に魔力を注がれたジュエルシードが暴発し、エネルギーを集束させていく…！！

「…！！」

まずい、このままじゃ…！！

「んのバカ共があああああつ！！」

瞬間、絶叫と共に飛び込んできた少年が、右手にジュエルシードを握る。

「ぐ…、あ…」

膨大なエネルギーを秘めたジュエルシードに触れたことで、彼の手が引き裂かれ、血が流れ出す。

「止まってくんだ…、んの野郎…！！」

《Gravity Fall！！》

彼の叫びに応え、デバイスから力の波動が放たれる。

「あああああつ!!」

ジュエルシードから放たれた白い閃光に、私は瞳を閉じた。

「艦長!!」

「どうかしましたか？」

クルーの声に落ち着いて聞き返す。やっぱりお茶はいいわね。心が和む、

「小規模の次元震が発生しました!!」

「っ!!げほっ、ごほっ」

撤回。さすがにお茶でも無理でした。

「場所は!？」

「現在特定中…、っ!？艦長!!次元震の反応、消滅しました!!」

「なんですって!？」

続けての報告に私は再び驚く。次元震が消滅!？

「計測のミスなんじゃないのか!？」

「ありえません！！確かに発生したのですが、ほぼ同時に掻き消されました！！」

クロノが放った当然の疑問に、クルーも混乱しながら答える。…発生と同時に、掻き消された！？

「観測！！至急情報回して！！」

「無理です！！空間が操作されているみたいで、状況が把握出来ません！！」

…空間が操作！？

「どついうことだ！？」

再び疑問の声を放つクロノに、エイミィが悲鳴をあげる。

「次元震は消滅しましたが…、余波の影響なのか何なのか、こつちから観測出来ないみたいです！！」

「参ったわね…」

幸か不幸か、私達の現在地点は発生源の世界に程近い。…ならば。

「これよりアースラは、次元震の発生した世界へ向かいます。総員、配置に就き、準警戒態勢に入って下さい」

「…了解っ！！」

俄かに慌ただしくなり始めたブリッジを尻目に、私はクロノへ顔を

向ける。

「もしものがあつたら…、クロノ、お願いね」

「わかってますよ、艦長母さん。僕は、その為に居るんですから」

頼もしく答える息子クロノに頷き、私は艦長席に腰掛ける。

(…さて、どうなることやら)

## 第八話「錯綜」(後書き)

はい、やらしましたw

巻き返したはいいいけどなんではにフラグ立ってんの？w

フェイトがメインヒロインのハズなのに…。

ホント、ノリと勢いって怖いですねw

さて次回は、KYこと時の名を冠する少年と、鬼婆こと母上が出るよ！(えw

## 第九話「介入者」(前書き)

はい、九話です。

なのはのターンその2兼フエイトおおおお!! 回です。

連日うpのせいか指がやばいけど別にいいよね(えw

それではどーぞー



## 第九話「介入者」

ようやく閃光が収まり、私は目を開きながら、ゆっくりと起き上がる。

「…っ!？」

ひどい光景だった。周囲にあったビルのガラスは一つ残らず割れ、ジュエルシードの浮いていた場所を中心に、道路がクレーター状に割れている。どうやら私達はそこから吹き飛ばされたようだ。

それだけの衝撃を受けて傷一つないことに疑問を抱きながらも、クレーターの中心にジュエルシードと一人の人影を見つけ、思考を止める。

その、中心に立っていた人影が、崩れ落ちた。

「ナナシ君っ!!」

隣で同じように起き上がった少女が、居ても立ってもいられないと言った体で飛び出す。抱き起こされた少年は、ボロボロだった。ジュエルシードを握っていた右手には裂傷が走り、かなりの血が流れている。バリアジャケットも所々破け、その衝撃を物語っていた。

「よかった…、はぁっ…、怪我は…、はぁっ…、なさそうだな…」

少女の無事に安堵し、荒い呼吸を繰り返しながらも、彼の視線は宙に浮くジュエルシードを射抜いている。

「くっ…、そ…。まだ、魔力が…」

彼の言葉を聞いて気付いた。あのジュエルシードにはまだ、微かに魔力が残っている。すぐに封印しないと……!!

「……………っ!!」

が、手元を見下ろした私は絶句する。なぜならそこにあつたのは、ヒビ割れた、バルディッシュ。

宝石の部分と刃の部分に亀裂が走り、しばらくマトモに使えないであろうことは容易に想像がついた。

《…It is possible to still do…  
まだ、やれます》

「ダメだよ!! レイジングハートが壊れちゃう!!」

そんな声を拾い、向こうも同じ状況なのだと理解した私は、バルディッシュに呼び掛ける。

「戻って、バルディッシュ」

《Yes / Sir (了解)》

掠れた声と共にバルディッシュが輝き始めた。ピラミッドの上半分を削ったような三角形の待機状態へと戻り、私のグローブへと装着される。ゆっくり休んで……。

「…アクセル、やれるか…?」

《Your physical strength doesn't keep though I can do (やってもいいが、

主人が保たんぞ》

「くそ……!!」

彼はデバイスの返答に毒づきながら、ジュエルシードを睨みつける。その視線に込められているのは、怒りと憎しみの感情。

「ナナシ君……」

心配げに声を掛ける少女をよそに、私は動き始めた。クラウチングスタートのような前傾姿勢を取り、ジュエルシード目掛けて跳ぶ!!

「フェイトちゃん!!」

「んな……!?!」

そのままジュエルシードを掴み取り、両手で握りしめる!!

「フェイト!!ダメだ、危ない!!」

アルフの声と同時に、ジュエルシードが閃光を放った。私はしゃがみ込みながら、魔法陣を展開する。

（…止まれ）

衝撃でグローブが裂け、血が流れるが気に留めず、ただひたすらに念じ続ける。

（…止まれ、止まれ、止まれ、止まれ!!）

「アクセル…!!」

《…Yes, Sir (…了解)》

少年の苦しげな声に応え、デバイスが私を囲むように銀色の魔法陣を描く。銀色の光が煌めき、ジュエルシードの魔力が霧散していく。

「ナナシ君!？」

「見殺しに…、しろってか…？」

魔法の使用により更に衰弱した彼は、そのまま私に目を向ける。

「どうせ今の俺達じゃ無理だ…。今回はお前に譲る…」

そのまま彼は眠るように意識を失った。衰弱しきった体が休養を求めたのだろう。

「う…」

立ち上がった私も、疲労とダメージのせいでふらつく。そういえば…、私も大分衰弱してたんだっけ…。

(早く…、戻らないと…)

「フエイト!!」

倒れ込みそうになった私を支えるようにアルフが現れる。人型に戻った彼女には傷一つなく、彼が上手く立ち回ってくれたんだと直感

的に理解する。

「ホント…、敵わないな…」

そんな素直な言葉を口にしながら、私は気を失った。

「……………」

フェイトちゃんを抱き抱えた使い魔が、こちらを見遣る。その瞳に宿るのは、困惑の感情。

「…敵を助けるなんて、どういっつもり？」

人型にも関わらず牙を剥き、警戒をあらわにする彼女。

「…少なくとも私達は、あなた達の邪魔をするつもりはありません」

少し考えた後、私は真っ直ぐと瞳を見据えて言う。

「私達はそれが危ないものだから、この街を守りたいから、ジュエルシードを封印しています」

「…そうかい」

それだけを言い、彼女は目を伏せた。

「…あたしはアルフ。フェイトの使い魔だ。名乗るのは初めてだったからね」

フェイトちゃんの使い魔、アルフさんはそう言いながら背を向ける。

「あたしはフェイトの使い魔だから、その意志に従うだけだ。…助けてくれたことには礼を言っよ」

最後にちらりとこちらを見たアルフさんは、そのまま跳躍しビル街へと姿を消した。

「…帰ろうか」

先程から治癒魔法を展開していたユーノ君が、ぐったりとしながら呟く。

「…うん」

ナナシ君を背負い、私は家に向かって歩き出した。

「もう…、ホントに無茶なんだから…」

あたしはフェイトの傷を治療しながら、ぼんやりと思考に耽る。

『ジュエルシードを集める前に、お前にはやるべきことがあるだろうが!!』

フェイトを気に掛け、必死に手を伸ばそうとしているあの子。彼を突き動かすモノは、一体何なのだろうか。

「つつつ!!」

そんな風に考えていた為か、きつめに巻かれた包帯にフェイトが思わず声を上げる。

「ごめんよ、フェイト。ちょっと我慢してて…」

「平気だよ…。ありがとう、アルフ…」

フェイトは気丈に微笑みながら、上のフロアの写真立てを見上げる。

「明日は母さんに報告に戻らないといけないから、早く治さないとね…。傷だらけで帰ったら、きつと心配されちゃうから」

脳裏にあの人の顔が過ぎる。とてもじゃないが、心配してくれるような人には思えない。

「心配…、するか…？あの人か…」

「母さんは…、少し、不器用なだけだよ。私には、ちゃんとわかってる」

不器用？アレが不器用？アレが不器用と呼べるレベルのモノか？

「報告だけなら…、あたしが行ってこればいいんだけど…」

「母さん…、アルフの言うこと、あんまり聞いてくれないもんね」

そう。あの人はあたしを舐めきっていて、こちらの話など一顧だにしない。だから直接フェイトが赴かなければいけないのだ。

「アルフはこんなに優しくていい子なのに…」

「フェイト…」

そんなことなどない。目の前の少女の方が、あたしなんかよりずっとずっと優しい。

「きっと大丈夫だよ！！こんな短期間で、ジュエルシードを四つも集めたんだから、きっと褒めて貰えるよ！！」

「うん…、そうだね…」

私が励ますように言った言葉に頷き、少しだけ笑顔を見せるフェイト。その思いがいつか、報われる時が来るのだろうか。

確かにあたしには、ジュエルシードなんかを集めるより先にやるべきことがあるのかもしれない。でも、あたしはフェイトの使い魔だから。あたしは、フェイトの意志を尊重したい。

(…あんととは、相容れないんだろうね…)

脳裏にあの少年の顔を描きながら、そう思った。

「……………」

むくり、と起き上がり、最初に目に入っただのはなのは顔だった。

「……………待て」



OK、とりあえず落ち着こう。

問一、ここはどこか。

答一、なのはの部屋。

問二、俺は何故ここにいるのか。

答二、おそらくなのはが運んだから。

問三、何故なのはと俺と一緒に寝ているのか。

「……………知らんがな」

全力で溜め息。こいつの思考を今まで理解出来た試しがあつただろうか。いや、ない。

『…好きです』

「……………」

それに連なるようにして思い出される、あの言葉。俺にとっては重過ぎる、彼女の純粹な感情。

「俺は…、どうしたいんだろうな…」

俺の呟きに相棒はアクセル答えず、声は部屋に溶けていった。

「ん…、う…」

その声に反応した訳ではないだろうが、なのはが目を覚ます。

「んにゅ…、っ！！ナナシ君、大丈夫!？」

俺の姿を視界に捉え覚醒したのか、なのはがガバツと起き上がる。

「ああ。とりあえずは問題ない」

まだ全身にはけだるさが残っており本調子ではないが、ここ数日のコンディションを考えれば涙が出る程ありがたい。

「…ユーノとレイジングハートは？」

「ユーノ君は見回り。レイジングハートは…」

尋ねた俺に対し、なのはは机の上を指差す。まだ完治していないが、大分修復された状態の宝石が置いてあった。おそらく、自動修復機能が働いたのだろう。

「そうか…。あいつとなのはには怪我ないのか？」

「フェイトちゃんは最後に無茶しちゃったからわからないけど…、私は大丈夫。全然平気」

「よかった…」

俺は脱力し、安堵の溜め息をついた。

あの時、一歩間違えればなのはとフェイトは死んでいた。なのはとフェイトに秘められた膨大な魔力にジュエルシードが反応し、時空が歪む程強力なエネルギーが発生したのだ。

それを阻止すべく、俺はグラビティフォールで空間の歪みを調整しつつ、残った僅かな魔力でジュエルシードを押さえ込んでいたのだ。おかげで右手は裂傷だらけ。まあユーノが治療をしてくれたようだし、夕方までには治るだろう。

「…うん。私は大丈夫。ナナシ君が、守ってくれたから」

その声と共に、俺は思考から引き戻された。彼女の真っ直ぐな瞳を見据え、覚悟を決める。

「昨日のことだが…、ごめん」

俺は簡潔に、自らの意志を伝えた。

「俺は昔、自分以上に大切な人を目の前で失った。だから俺は怖いんだ…、誰かと深く関わることが」

あの日のことを思い返す。いつになっても薄れることはない、鮮明な記憶。赤い空と、紅い大地、そして、朱く染まった…、

「今後どうなるかはわからないけど、少なくとも今の俺はお前の想いに答えてやれない。…ごめん」

申し訳ない気持ちでいっぱいになり、素直に頭を下げる。イエスでもノーでもない、人として最低の答えだ。この後どんな扱いを受けたいとしても、俺に彼女を批難する資格なんて、ない。

「…よかった」

「…え？」

だが、なのはが呟いた一言に、俺は思わず顔を上げる。

「ナナシ君、ずっと苦しそうだったから。悩んで、迷って、辛そう

だったから。だから私は、ナナシ君の味方でいたい。そう思って、ああ言ったの」

俺の手を握り、その透き通るような瞳でこちらを見据えながら続ける。

「私に悪いからイエスとか、下手に希望を持たせたくないからノーとか、私が欲しかった答えはそんなものじゃない。ナナシ君が悩んで、迷って、それでもそうしたいって決めた、その答えが欲しかったの」

呆気にとられる俺を尻目に、なのはは語り続ける。

「だから私は、待ち続けます。ナナシ君が答えを出す、その日まで」

「……………ははっ」

聞き終えたと同時に、俺は自然と、頬が緩むのを感じていた。

「…ホント、頑固というか、一途というか…」

「えへへ、知らなかった？」

「知ってはいたが、予想以上だったよ」

苦笑しながら答え、ベットに倒れ込む。

「前にも言っただけど、お前がそう決めたんなら俺は何も言わない。好きにするといい」

「じゃあ好きにしまーす」

そう答えたのはは、何を思ったのか横になった俺にベタッと引っ付いてきた。

「…オイ」

そこまで好きにしているとは言っていない。

「ナナシ君、まだ本調子じゃないんでしょう？」

が、続けて放たれた言葉に俺は一瞬フリーズした。

「…何のことだ？」

「ユーノ君から聞いたよ。ここ五日、ロクに寝てないんでしょう？」

しらばっくれてみたがズバツと指摘される。…あのフェレットもどきめ、余計なことを。

「それにナナシ君、私と寝てた時はぐっすり寝れたみたいだよ？」

「……………あ」

言われて俺は、今回はあの夢を見ていないことに気付く。…いやまさか。

「だから私が、隣に居てあげる」

ノリノリでそう言うのはに、俺は溜め息一つ。極度に睡眠を欲し

ていたから、とか理由はいくらでも作れるが、

「そうだな…。そんじゃお願いするかな、俺の安眠枕さん」

「むー。私枕じゃないもん。抱き枕だもん」

「修正するとこそつちかよ」

何となく、信じてみたくなったのだ。この少女が持つ、温かさを。

「…おやすみ、ナナシ君」

なのはが俺の頭を優しく撫でながら、静かに呟く。俺はその温もり  
に包まれながら、睡魔の闇へと沈んでいった。

あの夢は、見なかった。

「みんなどう？旅は順調？」

開いた自動扉を通り過ぎ、クルー達に声を掛ける。

「はい。現在、第三船速にて航行中です。目標次元には、今からお  
よそ12時間後に到達の予定です」

「前回の謎の次元震以来、特に目立った動きはないようですが、二  
組の探索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

間髪入れず、クルー達から応答が返ってくる。

「次元震の発生した世界には、複数からなる魔導士のグループが二

組存在する」

次元震の余波が収まった瞬間から調査を開始し、僅か10時間でこれだけの情報を洗い出したのだ。前回のようなあまりにも不確定要素が多過ぎる事象に直面しなければ、この次元空間航行艦船『アースラ』のクルー達は非常に優秀だ。

そして今はその事象、発生した瞬間リカバリーされるという謎の次元震が起こった世界へ向けて航行中、という訳だ。

「失礼します、リンディ艦長」

艦長席に腰掛けた私に、一人のクルー、エイミー・リミエッタが紅茶を運んでくる。

「ありがとね、エイミー」

煎れたての紅茶で口を潤し、しばし思考。

「そうね……。小規模とはいえ次元震の発生は…、ちょっと厄介だものね」

ましてや、「発生した瞬間リカバリーされる」という、被害のない次元震だ。こんなイレギュラーな前例はないし、空間を操作された痕跡というのも気になる。

「危なくなったら、急いで現場に向かって貰わないと。ね、クロノ？」

私はブリッジに佇む黒衣の少年、私の息子にして時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンを見下ろす。

「大丈夫。わかってますよ、艦長」

クロノは懷から取り出したグレーのカードを構え冷静に、しかし自信満々に答えた。

「僕は、その為に居るんですから」

「うつ…、くつ…、あつ…」

高次空間内に浮かぶ要塞、『時の庭園』。その玉座の間に、私は居た。

「たったの四つ…、これは、あまりにも酷いわ…」

そう言つて、魔力のロープで両手を縛られ、宙に吊された私を見据える、

「はい…、ごめんなさい…、母さん…」

私の、母さん。

「いい？フェイト…、あなたは私の娘。大魔導士、プレシア・テスタロッサの一人娘…」

私の正面に立つた母さんは、私の顎を持ち上げ、瞳を覗き込む。

「不可能なことなどあつては駄目。どんなことでも。そう、どんなことでも、成し遂げなければならないの」



母さんは私の心に刷り込むかのように、ひたすら言葉を紡ぎ続ける。

「こんなに待たせておいて、拳がつてきた成果がこれだけでは…、母さんは笑顔であなたを迎える訳にはいかないの。わかるわね？フエイト」

「はい、わかります…」

実際私は母さんを待たせてしまった。大魔導士の娘である以上、私に求められるハードルの高さは常人のそれを遥かに越える。

「だからよ。だから…、覚えて欲しいの」

その声と同時に、母さんの握る杖が、鞭へと姿を変える。

「もう二度と、母さんを失望させないように」

「……………っ!!」

私は息を呑み、ギョツと目をつむる。全身に走る痛みに耐え、ただ、母さんへの申し訳ない気持ちにいつぱいになる。

痛い。苦しい。だけど、母さんは私の為を思ってくれてるんだ。間違ったことを指摘して、正しい方向へ導くのが、親子だから。

『…何か、特別な事情があるんじゃないのか?』

ふと、私にそう尋ねてきた、あの少年の姿が脳裏を過ぎる。

（こんな私でも…、あの子は、受け入れてくれるのかな…）

何も出来ない私を。迷ってばかりの弱い私を。母さんの期待に答えられない、私を。

「起きなさい」

気を失ってしまったのか、その一声に私の意識は覚醒する。

「ロストロギアは、母さんの夢を叶える為に、どうしても必要なの」

「はい…、母さん…」

「特にアレは、ジュエルシードの純度は、他のものより遥かに優れてる。さすが、天城の一族最高の天才が作り上げただけのことはあるわね。あの子がさっさと渡してくればこんなことにはならなかったんだけど…」

何やら母さんがぶつぶつと呟き始めたが、よく聞き取れない。

「あなたは優しい子だから、躊躇ってしまうこともあるかもしれないけど…、邪魔するものがあるなら潰しなさい。どんなことをしても。あなたには、その力があるのだから」

その声に呼応し、母さんの鞭が杖へと戻り、私を縛るロープが消えた。

「……………っ」

ぐったりと脱力していた私は受け身も取れず、床に倒れ込む。

「行つて来てくれるわね？私の娘、可愛いフェイト」

「はい…、行つてきます…、母さん…」

床に手を着き、のろのろと起き上がりながら答える。

「しばらく眠るわ。次は必ず、母さんを喜ばせてちょうだい」

「はい…」

その声を最後に、母さんは部屋から出て行つた。

私の持ち帰つたお土産、翠屋という喫茶店のケーキには目もくれず。

（少し…、悲しいな…）

そんなことを考えながら、私は部屋を出る。

「フェイト！！」

同時、アルフが駆け寄ってくる。その光景を見て安堵した私は、再び床に倒れ込む。

「フェイト！！しっかりして！！フェイト！！」

アルフ。私の使い魔。掛け替えのない、大切な家族。

「平気だよ…。私は、大丈夫だから…」

それだけを告げ、私は気を失つた。

「…起きた？」

「…ああ」

扉の開く音で目を覚まし、なのはに答える。

「…久しぶりにぐっすり眠れた。ありがとう」

「えへへ、どういたしまして」

ベットに腰掛けたなのはの頭を撫でながら、完治したレイジングハートを見遣る。

「…お前は、もう決めたんだな」

「Yes・I defend you with my Master（はい。私はマスターと共にあなたを守ります）」

「逆だろ、普通」

俺になのはの陰に引っ込めって？と苦笑しながら念話を続ける。

「俺はまだ決めてないし、まだ悩んだり迷ったりしてる。でも、前に進むよ。今まで通り、進んだ先に何かがあると信じて」

「Good luck・It prays for you to be found your own way of life」

（幸運を祈ります。願わくは、あなたが自分の道を見付けられるように）  
『

…サンキュ  
』

レイジングハートに礼を述べ、念話を切る。

「レイジングハート、直ったみたいだぞ」

「本当！？」

《Condition green（準備万端です）》

「また、一緒に頑張ろうね」

《All Right, My Master（了解しました、私のご主人様）》

レイジングハートが頼もしく答えた瞬間、

キン！！

「！？」  
」

『なのは！！それからナナシは…、起きてるのかな？』

『繋ぐ前に言う台詞だろ、それ』

苦笑しながらユーノの声に答える。とりあえず優先すべきことは…、

『ユーノ君、今どこ?』

『翠屋の近く。発現場所は海鳴臨海公園だよ』

『臨海公園か…。OK、ユーノ、途中で拾ってからお前も臨海公園に向かつてくれ。結界の展開も頼む』

『わかった!!』

念話を切り、なのはと向かい合う。とりあえず、一つだけ言わなきゃいけないことがある。

「色々ごたごたして言いそびれてたけど、改めてよろしくな、なのは」

「…うん!!よろしく、ナナシ君!!」

差し出した俺の手を取り、満面の笑顔を浮かべるなのは。あの時と同じように、しかし今度は固く結ばれた絆。今度は、手放さない。

「アクセル!!」

「レイジングハート!!」

「セット・アップ!!」

《Stand by Ready Set up》

桜色と銀色の光を纏い、俺達は空を翔けた。

今回のジュエルシードは大木だった。木に埋め込まれたジュエルシードに呼応し、枝を腕のように振り回している。

試しに完治したバルディッシュを振るい、フォトンランサーを撃ち込んでみたもののバリアによって全弾防がれ、攻めあぐねている所に、二人は現れた。

「アクセル!!」

《Gravity Saber》

少年が黒い力を纏った二刀を振るい、

「レイジングハート!!」

《Divine Buster》

少女が桜色の砲撃を撃ち込む。が、

「オオオオオオ!!」

そのどちらもバリアで防がれる。

「バリアか…、面倒だな」

「今までのより強いよ!! 気をつけて!!」

少年が静かに呟き、少女の肩から飛び降りたフェレットが注意を促す。

「オオオオオオオ!!」

大木が根を伸ばし、私達三人を射程に入れて襲い掛かる!!

《Flier Fin》

《Linear Accel》

少女が羽を飛ばたかせ宙に舞い、少年が磁性で街灯に引き寄せられ、私の近くに降り立つ。

「前回の怪我はなさそうだな」

「あ…」

それをわざわざ確認しに来たのだと、私は遅れて気が付く。

「なのは!!デカイのかますから魔力溜めとけ!!」

「わかった!!飛んでレイジングハート!!もっと高く!!」

《All Right (了解しました)》

少年の声に答え、少女が空高く舞い上がる。

「あの…」

「つい訳で、俺達はそのバリアをブチ抜くべく二点同時攻撃を仕掛ける。よかつたら手伝ってくれ」



が、私の言葉は届かず、彼はそう言い残し更に加速した。

「本体がダメなら端<sup>根っ</sup>から、つてな!!」

黒い輝きを宿した刃を振るい、大木の根を切り裂いていく。…とにかく、今はジュエルシードを。

「アークセイバー。行くよ、バルディッシュ」

《Arc Saber》

私の声に答え、鎌へと姿を変えるバルディッシュ。

「はあっ!!」

そのまま鎌を振りかぶり、三日月の刃を飛ばす。回転しながら大木の根を切り裂き、バリアにぶつかり火花を散らす!!

「オオオオオオ!!」

「撃ち抜いて!! デイバイン!!」

《Buster》

続けざまに少女が、集束させた魔力を大木目掛けて撃ち込む!!

「貫け轟雷!!」

が、私もまだ終わらない。目の前に魔法陣を展開し、バルディッシュ

コを叩き込む！！

《Thunder Smasher》

集束した雷が宙を駆け、大木目掛けて突っ走る！！

「オオオオオオオ！！」

さすがに二点同時は堪えるのか、大木が苦悶の声を上げる。そして、防御で精一杯の大木は気付かない。

自らの後ろに、刀を構えた少年がいることを。

「厘気一閃」

《Gravity Zamber》

黒い力を纏い肥大化した刀身が、大木をバリアごと切り裂いた！！

「オオオオオオオ…」

大木は跡形もなく消滅し、宙に浮くジュエルシールドだけが残される。ならばやることは一つだけ。

《Sealing Mode Setup》

《Sealing Form Setup》

それがわかっているのか、少女のデバイスも封印の為のシーリングモードへ移行する。

「ジュエルシード、シリアルXII!!」

「封印!!」

が、叫んだ瞬間、互いのデバイスが閃光を放つ寸前にジュエルシードが光を放つ!!

「っ!?」

「アクセル!!」

《Gravity Saber!!》

しかしその声と共に、私達の放った閃光はジュエルシードに届く寸前、漆黒の刃によって切り裂かれた。

「つぶね…、学習しろよお前ら…」

間一髪カットに成功し、やれやれ、と言わんばかりに溜め息をつく少年。その姿は至って自然体で、昨日の影響は微塵も残っていないようだ。

「ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたい」

「うん。タベみたいなことになったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも、可哀相だもんね」

呟いた私に対し、少女がそう答えた。相手のデバイスのことまで思  
ハルディッシュ  
いやることに、少しだけ驚く。

「だけど、譲れないから」

《D i v i c e F o r m》

斧に戻したバルディッシュを構え、二人を見据える。母さんの為にも、私は引き下がる訳にはいかない。

「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど…」

《D i v i c e M o d e》

少女が困ったように言いながら、杖を標準形態に戻し、構えた。

「強情だな…。人のこと言えないけど」

《D i v i c e F o r m》

少年も眩きと共に二刀を一本に戻し、ゆるりと構えた。

「私達が勝つたら…」

「話を聞かせて貰うぞ…」

二人の声に答えは返さず、私はただ前を見据える。互いに譲れないモノがある以上、戦うしか道はない。

「……っ！」「」

互いに加速し、それぞれの武器デバイスを振りかぶる。斧と杖と刀が交差する瞬間、

「ストップだ!!」

その中心部に、水色の魔法陣が展開した。

「現地では、既に三者による戦闘が開始されている模様です」

「中心となっているロストログアのクラスはSS+。動作不安定の上、無差別攻撃の特性を見せています」

アースラのブリッジは緊張に包まれている。遂に謎の次元震が起きた世界に到達したのだが、目下三人の魔導士が戦闘中なのだ。

「次元干渉型の禁忌物品…。しかもランクはSS+…。回収を急がないといけないわね…」

個々の力だけでも危険なのに、それが複数個存在するとなれば…、

「クロノ・ハラウン執務官、出られる？」

「転移座標の特定は出来てます。命令があればいつでも」

私の問いに対し、クロノが振り向き冷静に答える。…よし。

「それじゃクロノ、これより現地での戦闘行動の停止と、ロストログアの回収、三者からの事情聴取を」

「了解です、艦長」

私の命令に頼もしく答え、転送ポートに向かうクロノ。

「気をつけてね」

「はい…、行つてきます…」

白いハンカチを取り出しひらひらと振りながら言う私に、クロノが苦笑しながら答え、姿を消す。

「それにしても…」

ハンカチをしまい、ディスプレイを見ながら呟く。画面の中では大木を相手に、三人の子供達が戦っていた。

強大な魔力を持つ雷使いの黒い少女。それに比肩しうる魔力を秘めた白い少女。そして、

「重力…、磁力…、それに刀…」

二人の少女に的確な指示を飛ばしながらも、二つの変換資質を操り、相手を圧倒する黒い少年。

「まさか…、ね…」

私は脳裏に過ぎった考えを否定し、三者の間に割って入ったクロノを見遣った。

「しっかり頼むわよ、クロノ」

転移魔法によって突如として現れたその少年は、左手でバルディッシュの柄を掴み、右手に握った杖でレイジングハートとアクセルを止めていた。黒いコート状のバリアジャケットを纏い、鋭い視線で俺達三人を見据えるこの少年は、

まごうことなき、魔法使い。

「そこまでだ。ここでの戦闘は危険過ぎる」

まだ幼いながらも警戒した眼差しで俺達を探るように睨みつけ、宙に浮くジュエルシードを見付けると同時、視線を更に鋭くする。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか」

戸惑う俺達をよそに、夕陽に照らされたジュエルシードが、鈍い光を放っていた。

## 第九話「介入者」(後書き)

何かジュエルシードとナナシのランクがおかしいことになってるけど気にしたら負け。

そしてクロノ君マジKY(いい意味で

そしてプレシアさんマジ外道(ある意味一番書きにくかった

ん?プレシアさんとリンディさんが意味深なセリフ言ってるって? 気のせいだよ多分(えw



## 第十話「事情」(前書き)

はい、十話です。

それぞれがそれぞれの決意を固め始める回？です。

昨日は珍しく0時に寝たので指の調子が良いんだZ E  
でも今日は予定があるから執筆できないオワタ

## 第十話「事情」

私達三人がぶつかり合おうとした瞬間、唐突に水色の魔法陣が展開され、そこから一人の男の子が現れた。

「全く、何を考えているんだ君達は…」

私達全員分のデバイスを受け止めながら、呆れたように溜め息をつく少年。

「あんなものロストロギアの前で戦闘行動なんて…、この街を消すつもりか？」

「…少なくとも、いきなり現れたどこの誰ともしれない奴に言われる筋合いはないと思うが？」

アクセルを引き、私を庇うようにしてナナシ君が間に入る。その目に映るのは敵愾心。フェイトちゃんとわかり合えるかもしれないチャンスだったのだから、その気持ちも頷ける。

「僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。それだけで介入する理由には十分足りるはずだが？」

「…管理局かよ」

舌打ちと共にその少年、クロノ君を睨む。戦意こそ消えたものの、その瞳には怒りの感情が渦巻いている。

「まずは三人共武器を引くんだ。このまま戦闘行動を続けるなら、僕は君達を倒さないといけない」

その声を合図に、私達四人は地面に降り立つ。とりあえず話を聞こうと口を開いた瞬間、

橙色の閃光が、降り注いだ。

「っ！？」

クロノ君とナナシ君がほぼ同時に反応、クロノ君がラウンドシールドで防御し、ナナシ君が流れ弾を切り裂いていく。

閃光の雨が収まり、空を見上げた私達の視界に映ったのは、

「フェイト、撤退するよ！！離れて！！」

橙色の魔力を集束させ、クロノ君を狙うアルフさんだった。

「…………っ」

迷いに瞳を揺らしながらも、フェイトちゃんが飛び上がる。クロノ君が杖を向けるが、アルフさんの再度の攻撃に距離を取らざるを得なくなる。

「…っ！！」

「あっ！！」

フェイトちゃんがジュエルシールドに手を伸ばすのを見た私はレイジングハートに呼びかけ、翼を展開するけど、

（間に合わない…）

「はっ！！」

「きゃっ！！」

が、クロノ君の放った水色の弾丸がフェイトちゃんを掠め、フェイトちゃんは地面に落下する。

「ちっ！！」

ナナシ君が舌打ちと共にグラビティフォールを発動、落下スピードが緩慢になったフェイトちゃんをアルフさんが拾う。

「……………」

土煙の中から現れたクロノ君が、無表情に杖を構え、水色の弾丸を生み出す。

「だめっ！！」

「っ！？」

思わず飛び出し、フェイトちゃんを庇うように両手を広げた私にクロノ君が動揺する。

「止めて！！撃たないで！！！」

「そこまでだ」

「っ！？」

私の声に被せるようにして、ナナシ君がクロノ君の首にアクセルを突き付けた。一緒に背後を取られたことに、クロノ君は激しく動揺している。

「無抵抗の少女を撃つのが管理局のやり方か？」

「…っ」

ナナシ君が投げ掛けた言葉に、クロノ君が顔を歪める。

「一つ貸しにしといてやる。アルフ、フェイト連れてさっさと逃げる」

「…礼を言っよ」

クロノ君を睨みつけながら、ナナシ君がそう言い、アルフさんが答える。

「逃げるよフェイト、しっかり掴まって」

「……………うん」

フェイトちゃんは疲れているのか、ぐったりしながらアルフさんに掴まる。それを確認したアルフさんは駆け出し、森の中へと消えて行った。

「謝罪はしないぞ。俺は自分で正しいと思ったことをしたつもりだからな」

それを見届けたナナシ君は、アクセルを引きクロノ君に向き直る。

「…いや、いい。空間を操る君を敵に回してまで追うつもりはないよ」

意外なことにクロノ君はそれを許し、ジュエルシードを手を取った。

『クロノ、お疲れ様』

と、それを見計らったかのように魔法陣が展開、緑色の髪をポニテールにした女性が映し出された。

「すみません、片方を逃がしてしまいました」

『うーん、ま、大丈夫よ』

クロノ君がそちらに向き直り頭を下げるが、女性は気にも留めず微笑む。

『でね、ちょっと話を聞きたいから、そっちの子達をアースラに案内してあげてくれるかしら？』

と、その女性が私達を指差しながらそう言った。対しナナシ君がやや警戒の色を強める。

「了解です。すぐに戻ります」

クロノ君の答えを最後に魔法陣が消え、彼がこちらと向かい合う。

「それじゃ、案内するよ。次元空間航行艦船『アースラ』、僕達の活動拠点に」

足元に水色の魔法陣を展開しながら、クロノ君は微笑んだ。

広大な空間、恐らくは大量の物資転送に使われるであろう一室に転送された俺達は、クロノに続いて歩き始めた。

『ナナシ君…、ここって一体…』

『時空管理局の次元航行船の中、ってところだろうな』

念話で尋ねてきたのはに対し、俺は周囲を警戒しながら答える。

『…んにゃ？』

『…悪い。ユーノ、任せた』

クロノの一挙一動に全神経を集中させている俺は、ユーノに説明役を押し付けた。

『えっと…、簡単に言うと、いくつもある次元世界を、自由に移動する為の船だよ』

『あんま簡単じゃないかも…』

『…なのは、パラレルワールドって知ってるか？』

どうもユーノの解説は相手が専門用語を知っている前提のもので、初心者なのはには優しくないようなので仕方なく後を引き継いだ。

『えーっと、私達のいる世界以外に、もう一つの世界がある、って話だっけ?』

『それと似たようなもんだよ。なのはが暮らしている世界、俺やユーノが暮らしていた世界、人ではなく動物や植物で埋め尽くされた世界、たくさんの世界があつて、その世界の狭間、次元空間を渡り歩くのがこの船って訳』

『そして、それぞれの世界に干渉し合うような出来事を管理してるのが、彼ら時空管理局なんだ』

『そうなんだ...』

ユーノが説明を締めると同時に、ようやく転送用の部屋から出る。ホント無駄にデカいな...。

「ああ、いつまでもその格好というのも窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除しても平気だよ」

と、部屋から出ると同時に、クロノがそう声を掛けてきた。

「あ、そっか。忘れてた」

「いざごたごたが起こったら、変身の分のタイムラグで時間を稼ごうって腹か?」

「ちょ、ナナシ君!？」

なのはが驚愕の表情を浮かべるが、俺はそれを遮って続ける。



「何か起こってから」動く管理局が、まだ何も起きてないこの世界に何の用だ」

個人的に管理局は好かない。ある意味私怨とも言えるから仕方ないが、どうしても攻撃的になってしまう。

「何か起こってから」動くか…。その認識はあながち間違いない」

が、意外なことにクロノは肯定の意を示し、溜め息混じりに続けた。

「未来がわかる人なんて居ない。だからどうしたって管理局が動くのは「何か起こってから」になる。だけど…」

一瞬、瞳にあいつやフェイトと同じ光、何かを抱え込んだ者特有の光が見えたが、彼はそのまま続ける。

「今回は気付けた。発生した瞬間に消滅した次元震を追って、ロス・トログアを発見出来た。今度は、未然に防げるかもしれないんだ。だから、僕達に協力して欲しい」

瞳に強い意志を宿し、そうきっぱりと告げるクロノ。…なるほど。

「…次元震が起きたのは昨日だけだな」

苦笑しながら、俺は手を差し出す。少なくともこいつは信用出来る。そう思えた。

「いや、まあ…。これでも全速力で飛んできたんだけどね」

苦笑を返しながら手を握るクロノ。何か奇妙な連帯感が生まれた気がする。

「なのは、多分こいつは信用出来る。解除しても大丈夫だ」

「目の前にいるのにこいつって言うか…？」

「あ、うん!!」

俺とクロノが和解したことで安心したのか、なのはは笑顔で答える。バリアジャケットを解除し、シャツにスカートといったものの姿になる。俺もアクセルに命じ、ジャケットを解除。シャツにズボン、パーカー姿に戻った。

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

「ああ、そういえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

と、何やらクロノとユーノがそんな会話を始めた。

ユーノが四肢に力を入れ、緑色の光に包まれる。しばらくして光が収まった時そこに居たのは、

金髪の、少年だった。

「ふう…。なのはやナナシにこの姿見せるの、久しぶりになるのかな」

シャツにハーフパンツを着た、なのはや俺と同年くらいの少年が、ユーノの声で喋る。と、



「え、えーと、なのは、僕達が最初に出会った時って、僕はこの姿じゃ……」

「違う違うー！！最初っからフェレットだったよぉー！！」

俺の予想を裏付けるかのように、なのはとユーノが言葉を交わしている。やはりなのは知らなかったようだ。

「んん……？……ああっ！！そうだった……、ごめんごめん、この姿見せてなかった……」

「だよーね！？そうだよーね！？びっくりしたあ……」

「ていうか発掘云々で気付くだろ普通。フェレットが発掘する訳ないだろ？」

そんな光景を見ていた俺は思わずツツコミを入れる。フェレットがピッケル持って穴掘るのでも想像してたのか？

「だってだって、魔法があるんだからフェレットが遺跡発掘してたっておかしくないよー！！」

「いやその基準がわかんねえから」

なのはの脳内は一体どうなってんだ。かなり気になる。

「あー、その、ちょっといいか？」

が、業を煮やしたクロノが口を挟んできた。

「君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせているので、出来れば早めに話を聞きたいんだが」

「あ、は、はい」

「すみません…」

「ケチくさいぞー」

事務モードできつぱりと告げるクロノに二人が謝った為、俺だけは茶化す声を上げた。

「それとこれとは話は別だ…。…では、こちらへ」

溜め息をつきながら歩き出したクロノに続き、俺達三人も歩き始めた。

「艦長、来てもらいました」

「…へ？」

「…は？」

クロノ君に連れて来られた部屋には、私の人生史上五本指に入るシユールな光景が広がっていた。

このアースラという船はもちろん洋式で、靴を履いたまま中を歩くと、壁も床も金属製。なのにその部屋だけは、壁際に数々の盆栽が飾られ、床には座敷がしかれ茶道の道具一式が揃い、あげくししお

どしまで置いてあった。

「お疲れ様。まあお二人共どうぞどうぞ、楽にして」

そして、その中央に座る女性が、にこやかに語りかけてきた。青いスーツを着こなし、緑色の髪をポニーテールに纏めたその女性は、さっきの魔法陣越しに見たもので、

「どうぞ」

「「「あ、は、はい」」」

私達は奨められるがまま、畳に正座していた。

「初めましてね。私はリンディ・ハラオウン。この次元航行船アー  
スラの艦長をしています」

女性、リンディさんが頭を下げ、礼儀正しく挨拶する。

「えと、高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「…ナナシです」

ナナシ君が一人だけ場違いな名乗りを上げるが、こればかりは今に始まったことじゃないから仕方ない。

「そう、それじゃなのはさんにユーノ君、そしてナナシ君。詳しい事情、聞かせて貰える？」

「は、はい」私はユーノ君やナナシ君のフォローを受けながら話し始めた。ユーノ君と出会ったこと。ナナシ君と出会ったこと。一緒にジュエルシードを封印してきたこと。フェイトちゃんと出会ったこと。ぶつかり合ったこと。互いにすれ違いながらも、一緒に頑張ってきたこと。全部全部、打ち明けた。

「なるほど…、そうですか。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

全てを聞き終えたリンディさんは、そう呟いてユーノ君へ視線を向けた。

「はい…、それで僕が回収しよう…」

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

労いの言葉を掛けたリンディさんに被せるようにして、クロノ君がそう言う。確かに私もそう思うので、フォローは出来ない。

「あの…、ロストロギアって、何なんですか？」

「ああ…。遺失世界の遺産、って言っても難しいわね。えっと…」

私の口をついて出た疑問に、リンディさんがわかりやすく説明し始める。

「次元空間の中には、いくつもの世界があるの。それぞれに生まれ

て育っていく世界、その中に、極稀に進化し過ぎる世界があるの。技術や科学、進化し過ぎたそれらが、自分達の世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された、失われた世界の危険な技術の遺産。それらを総称して、ロストログアと呼ぶの」

「使用法は不明だが、使いようによつては世界どころか、次元空間さえ滅ぼす程の力を持つこともある、危険な技術。然るべき手続きを以て、然るべき場所に保管されていなければいけない品物だ」

リンディさんの説明を引き継ぎ、クロノ君が続ける。

「あなたが探しているロストログア、ジュエルシードは次元干渉型のエネルギーの結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物」

「お前とフェイトが街中でやり合つた時に発生した震動と爆発、あれが次元震だ。たった一つのジュエルシードで、全威力の何万分の一の発動でも、あれだけの影響があつたことを考えると、複数個集まつて起動された場合どうなるか…」

今度はナナシ君がリンディさんの声を引き継ぎ答える。そっか…、あの時のが次元震…。

「まあ、ナナシ君のおかげでその次元震はほぼ完全に無効化されたんだけどね。さすがは天城の…」

瞬間、リンディさんの目の前に、起動状態となつたアクセルが突き付けられていた。



「なっ！？何を…」

「黙れ」

すぐに驚愕から回復し、動こうとしたクロノ君にもう一本の刀が向けられる。さすがのクロノ君も動けないようだ。

「リンディ、と言ったか。二度とその名称を口にするな。次に言ったら、その首撥ねる」

怒りと殺気を纏い宣言するナナシ君に対し、リンディさんはどこか余裕げな笑みを浮かべる。

「あらあら、これは失礼」

目の前の刃をちょんつ、と押しながら可愛らしく謝るリンディさんに、ナナシ君がアクセルをネックレスに戻す。

「君は何をしたかわかってるのか…！？」

「いいのよクロノ、悪いのは私」

怒気を見せるクロノ君を、リンディさんが諫める。

「まあともあれ、これよりロストログア、ジュエルシードの回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「え…？」

緑茶に角砂糖を入れながらそう言ったリンディさんに対し、思わず

私とユーノ君の声がシンクロする。

「君達は、今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「で、でも!!」

続けて言ったクロノ君に必死に食い下がるが、

「ランクSS+の危険なロストロギア、しかも、次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入して貰うレベルの話じゃない」

「…ここまで三人でやって来たのに、手を引けて?」

冷静に述べるクロノ君に対して、ナナシ君が鋭い視線を投げ掛ける。

「まあ、急に言われても、気持ちの整理もつかないでしょ。今夜一晩、ゆっくり考えて、二人で話し合って、それから改めてお話をしましょ」

「…二人?」

リンディさんの言ったその言葉に、私は引つ掛かりを覚える。だって、私達は三人で…、

「すまないがそっちの二人は、席を外しててくれ」

「え!?!」

唐突なクロノ君の言葉に、私とユーノ君が驚きの声を発する。

「なのは、ユーノ、俺からも頼む」

「ナナシ君!？」

思わぬ当事者からの頼みに、私は思わずナナシ君の顔を見る。

「大丈夫だよ。すぐに終わるから」

そう言いながら微笑んだ彼の瞳には、

空虚な闇が広がっていた。

「…なのは、行こう」

そこに何かを感じたのか、ユーノ君が私を促す。

「…うん」

私は立ち上がり、ちらちらとナナシ君の方を振り返りながら、部屋を後にした。

「…で、どういっつもりだ」

退出した二人から視線を外し、俺はリンディを見据える。

「重力に磁力に銀の刀。まさかとは思ったけれど、あの単語に反応したということは間違いなさそうね」

対しリンディは緑茶にミルクを注ぎながら余裕たっぷりに微笑む。  
…カマを掛けていたのか。

「趣味が悪いな」

「だけど、気になるもの」

緑茶を啜り、リンディが姿勢を正した。

「それじゃ、事情を聞かせて貰ってもいいのかしら？ 名前の無いナシさん」

その為に二人を外させたくせに、よくもぬけぬけと。

「ああ、いいぜ。教えてやるよ。俺がジュエルシードを集める訳を」  
凄絶な笑みを浮かべながら、俺は全てを話す。話しを進めるにつれ、  
余裕たっぷりの彼女の表情が、驚愕に染まって行った。

「そんな…、ことが…」

「これは…、思った以上に酷いわね…」

クロノが顔を蒼白にし、震える声で尋ねてくる。リンディが頭を抱え、軽はずみに聞いたことを後悔している。

「どうだ？ 管理局。これがお前らの知りたかった「真実」だよ」

その様子に俺の嗜虐心が刺激され、両手を開きながら虚ろに微笑む。  
全てを語ったことで俺の心はあの時に戻り、負の感情以外表すこと

が出来なくなる。

「無遠慮に詮索したことは謝るわ。でも、それであなたはどのような？」

いくらか立ち直ったリンディが、真剣な表情で尋ねてくる。対し俺は、

「…さあな」

とだけ答えた。

「俺には何もない。消え去った過去と空虚な未来しかない。「ナナシ」は「名前が無い」のナナシでもあり、「何も無い」のナナシでもあるからな」

そう、あの日全てを失った俺には、何一つとして残っていない。

「なのにあいつは…、ぐいぐいこっちの心に踏み込もうとしてきて…」

俺は知ってしまった。いや、思い返してしまった。俺が無くしてしまった、温もりや温かさを。

「俺にはもう…、自分がわからないよ…」

俺はいつの間にか俯いていた。声が震え、視界が歪み、水滴がぽたぽたと畳に波紋を描く。

でも俺は、それを無視することにした。

「すごいや…、どっちもAAAクラスの魔導師だよ…!!」

モニタールームに入った私を迎えたのは、興奮したようなエイミイの声だった。モニターに映された三人の戦闘風景を見て、分析しているようだ。

「魔力の平均値はこっちの白い服の子が127万、黒い服の子で143万、最大発揮時は、更にその三倍以上!!」

「さしずめ、その二人の魔力による次元震を抑えられるあの子は、165万のランクSって所かしら」

素直に感嘆の念を覚えるが、全てを聞いてしまった身としては悲しみが込み上げてくる。全てを無くして、それでも戦わなければいけない少年。彼の覚悟は、どれ程のものなのだろう。

「二人の事情はわかったけれど、…問題はこの子ね」

ディスプレイに映された金髪の少女を見た私は静かに呟く。

「随分と必死な様子だったし…、何か強い目的があるのか…?」

「目的、ね…」

二人が気に掛けている、どこか悲しげな目をした少女。彼女が背負うものは、一体何なのだろうか。

「まだ小さいのに…、辛いでしょうね…」

必死に鎌を振るう少女を見ながら、そう呟いた。

「ダメだよ…、時空管理局まで出て来たんじゃない、もうどうにもならないよ…。逃げようよ…、二人でどっかにさ…」

「それは…、ダメだよ…」

傷付いたフェイトの治療を終え、弱音を吐いたあたしをフェイトが励ます。

「だって…！雑魚クラスならともかく、あいつ一流の魔導師だ…！本気で捜査されたら、ここだっていつ特定されるか…。あの鬼婆だって、訳わかんないことばかり言う上、フェイトに酷いことばかりするし…」

「母さんのこと、悪く言わないで…」

他のことはいいが、それをあたしにだけは言うて欲しくないということくらいわかってる。でも、言わずにはいられない。

「言うよ…！！だってあたし…、フェイトのことが心配だ…！！フェイトが悲しんでるとあたしも悲しいし、フェイトが泣いてると、あたしも泣けてくるんだ…！！フェイトが泣くのも悲しむのも、あたしは嫌なんだ…！！」

「大丈夫だよ…、アルフが辛いなら私、もう泣かないし、悲しまないから」

「…っ！！」

今、なんと言ったのだ？この子は。自分だって辛いのに、あたしの為に泣かない、悲しまないって？どうして…、そんな…！！

「あたしは…、フェイトに幸せに笑って欲しいだけなのに…っ！！」

あたしは突っ伏し、涙声で訴える。人一番優しいこの子が、どうして辛い思いをしなきゃいけない？何故？何故？何故！？

「ありがとう、アルフ…。でもね、私、母さんの願いを叶えてあげたいの…。母さんの為だけじゃない。きっと、自分の為に」

フェイトは目を閉じ、そう独白する。きっとこの街に来て、何かが芽生えたのだろう。

「だから、あと少し、最後までもう少しだから、私と一緒に頑張ってくれ…？」

聞かれるまでもない。答えは決まってる。あたしはフェイトの使い魔だから。

「じゃあこれだけは約束して…」

ただ、これだけは言わせて欲しい。

「あの人の言いなりじゃなくて、フェイトはフェイトの為に、自分の為だけに頑張るって。そしたら、私は必ずフェイトを守るから…」



私の懇願するような声に対しフェイトは薄く微笑み、こくり、と頷いた。

「だから僕もなのはも、そちらに協力させて頂きたいと…」

「協力ねえ…」

僕は腕を組み、フェレットに戻ったユーノの台詞について考え込む。

「僕はともかく、なのはの魔力は、そちらにとっても有効な戦力だと思います。ジュエルシードの回収、あの子達との戦闘、どちらにしても、そちらとしては便利に使えるハズです」

ユーノが畳み掛けるように持論を展開する。確かに理には適ってるし、ありがたい話だけど…。

「ふむ。なかなか考えてますね。それならまあ、いいでしょう」

「か、母さ…、艦長!」

あっさり承諾してしまった母さん、リンディ艦長に反論するが、

「手伝って貰いましょう。こちらとしても、切り札は温存したいもの。ね? クロノ執務官」

「はい…」

クロノだけなら未だしも、執務官と階級付きで呼ばれたら仕方ない。立場は母さんの方が上なのだから。それに…、

『俺にあの単語を使ったことに罪悪感を感じているのなら…、あいつらが望んだことに、最大限譲歩してやって欲しい』

あのナナシと名乗った少年が、海鳴市に転移する前に残っていた言葉を思い返す。なんだかんだで母さんも、申し訳なく思っていたのだろう。

「条件は二つよ。両名共、身柄を一時時空管理局の預かりとすること。それから指示を必ず守ること。よくって？」

頷いたこちらを尻目に、母さんが条件を持ち掛ける。民間の協力者を得る際に提示する、いつものものだ。

「わかりました」

その声を最後に、ユーノとの通信が途切れる。…そういえば。

「艦長、あの二人はわかりましたが、あの少年はどうするんですか？」

ロストロギア、ジュエルシードに深い因縁を持つあの少年。高町なのはがこちらに協力する以上、黙って見過ごす可能性は低い。

「ふふふ…、すぐにわかるわよ」

対し母さんは悪戯っぽい笑みを浮かべながら、モニタールームを出て行く。その笑顔に嫌な悪寒を覚えながら、僕もモニタールームを

後にした。

『…そんな訳で、こっちは大丈夫。決まったよ』

『うん。ありがとうユーノ君』

お母さんの隣で皿洗いを手伝いながら、私はユーノ君にお礼を言う。  
お父さんとお兄ちゃんも修行、お姉ちゃんはその見学に行っていて、  
今家にいるのは私とお母さんだけ。

「はい、これでおしまい、っと」

お母さんがお皿を棚に仕舞い、一息つきながらソファに座る。

「さて、それじゃ、大事なお話って、なあに？」

「うん。実は…」

同じくソファに座った私は、ユーノ君やナナシ君と出会ってから今日までのことを、魔法のこと以外全て打ち明けた。

「なるほど…。探し物をしてる友達を助けたいけど、その為に家を空けなきゃいけない、と」

聞き終えたお母さんは腕を組み、むむむと唸り始める。

「もしかしたら、危ないかもしれないことなんだけど、大切な友達と一緒に始めたことを、最後までやり通したいの」

お母さんはふむふむと頷きながら、私の話を聞き続ける。

「心配掛けちゃうかもしれないんだけど…」

「それはもう、いつだって心配よ…。お母さんはなのはのお母さんなんだから、いつも心配してるのよ?」

「……………」

母さんの声に思わず俯く。

「だけど、なのははもう決めちゃってるんでしょう?友達と始めたこと、最後までちゃんとやり通す、って。なのはが会ったその女の子と、もう一度話をしてみたい、って」

そう言ってお母さんは立ち上がり、私をぎゅっ、と抱きしめる。

「じゃあ、行って頑張ってください。後悔しないように。その女の子と男の子に、なのはの想い、届くといいわね」

「…うん」

ナナシ君とフェイトちゃんとの顔を脳裏に描き、顔をほころばせる。いつか、きっと、届くって信じて。

「お父さんとお兄ちゃん、お母さんがちゃんと説得しといてあげる。だから安心して、行ってきなさい」

「…うん!…ありがとう、お母さん!…」

手早く荷物を纏め、海鳴臨海公園にたどり着いた私を出迎えたのは、

「…来たか」

いつもの私服姿のナナシ君だった。先に帰ってろって言われた時は驚いたけど、今のナナシ君の顔は穏やかだった。

「何となく来るとは思ったけど…、決めたんだな」

すたすたと歩み寄って来たナナシ君が私の正面に立つ。いつだって彼は私の前に出て、体を張って私を守ってくれた。導いてくれた。

「決めたよ。自分の想いを貫く為に」

そう言いながら私は、ナナシ君に向けて握りこぶしを突き出す。

「…なら、僕は全力でフォローするよ」

人型に戻ったユーノ君も私と拳をぶつけ、ナナシ君を見据える。

「…じゃあ俺は、お前らが無茶した時のストッパー、ってな」

笑いながらナナシ君も右手を出し、三人の手が重なる。

「ここまで色々あったけど、後もう少しだ。…頑張ろうぜ」

「うんっ！！」

「勿論」

ナナシ君の言葉に頷き、ユーノ君も真剣に答える。

後戻りはもう出来ない。自分で決めた道。自分が本当にやりたいこと。でも、後悔したくないから。彼と共に歩みたいから。

「さて、時間だ」

振り返ったナナシ君の視線の先に魔法陣が展開され、中からクロノ君が出て来る。どうやら彼が出迎え役のようだ。

「それじゃ、行くか」

ナナシ君の声を合図に、私達は一步を踏み出した。

## 第十話「事情」(後書き)

はい、まごうことなき説明回です。

ていうかナナシさんキレるのはわかるけどアースラで刃傷沙汰は勘弁してくださいあw

次回からオリジナル成分が加速し始めますのでご注意ください。

## 第十一話「対峙」(前書き)

はい、十一話です。

オリジナルが加速しているのをご注意ください。  
ではどーぞー



## 第十一話「対峙」

「という訳で、本日零時を持って、本艦全クルーの任務はロストロギア、ジューエルシードの搜索と回収に変更されます」

次元空間航行艦船アースラ。その内部にあるミーティングルームに、俺達は居た。

「また本件においては特例として、問題のロストロギアの発見者であり、結界魔導師である…」

そう言いながらリンディ艦長が、ユーノに視線を送り、挨拶を促す。

「はい。ユーノ・スクライアです」

かちこちになりながらも危なげなく挨拶するユーノ。

「それから、彼の協力者でもある現地の魔導師…」

「た、たひゃみやひにゃのはですっ」

そしてなのははユーノ以上にガチガチだった。お前緊張し過ぎ…。どうやったらそんな言語になるんだ…。

「あっ…」

「…ドンマイ」

顔を真っ赤にして俯くなのはに、一応フォローを入れておく。

「そして、ちょっと訳ありで彼らに協力しているミッドの魔導師の……」

「……ナナシです」

リンディ艦長の声に立ち上がり、無難に挨拶を済ませる。なのはがあんなだった為緊張はしていなかったが、明らかな偽名にクルー達にわかにざわめく。……悪いかよ。

「以上三名が、臨時局員の扱いで事態に当たってくれます」

リンディ艦長もそれを察したのか、さっさと話を締めに掛かる。

「……よろしくお願いします」「」

三人揃ってお辞儀をすると、誰からともなく拍手。

「……えへへ」

ちらりとこちらに視線を送ってきたなのはに苦笑し、肩を竦める。こうして俺達三人は、臨時的にアースラのメンバーとして迎えられた。

「じゃあここからは、ジュエルシードの位置特定はこちらですわ。場所がわかったら現地に向かって貰います」

ブリッジの艦長席に座ったリンディ艦長がそう言い、俺達に振り返

る。

「「「はいっ」「」」

「艦長、お茶です」

と、エイミイとかいうオペレーターが、お茶とシュガーボックス、ミルクを持って現れた。

「ありがとう」

そのままリンディ艦長は砂糖を大匙どころか山盛りで三杯、エイミイが持つて来たミルクを全て注ぎ込み、湯呑みを手に取った。

「「……………」」

あまりにもあんまりな光景になのはとユーノが絶句する。俺も目の前の女性よりも凄まじい甘党を一人知ってはいたが、さすがに苦笑しか出来ない。彼女が糖分を過剰に摂取していたのには理由があったが、目の前の女性は完全に個人の趣味でそれを飲んでいる。あんな人が殺せるレベルの甘味に動じない人物が、もう一人居たとは…。

「そっといえばナナシ君になのはさん、学校の方は大丈夫なの？」

「あ、はい。家族と友達には説明してありますので」

唐突に尋ねたリンディ艦長になのはが答える。

アリサやすずかにもある程度は話したらしく、そういうことならと休みの間のノートとプリントの管理を買って出てくれたそうだ。

「俺は元々、記憶や情報を操作して学校を隠れものに使ってただけです。記憶と戸籍抹消して来たんで、こっちに専念出来ます」

空間位相をずらせば一日中探し回れるが、その分負担も大きい。かと言って普通に街中を歩けば咎められるので、学校を隠れものに使っていたのだ。

「そうですか…」

リンディ艦長は俺に対し沈痛な面持ちを見せた後、モニターに向き直る。

「……………っ!!」

瞬間、それを感じた俺はコンソールに触れ、アクセルと共同で操作し始める。

「ちょ、ナナシ君!？」

慌てるリンディ艦長をよそに、俺はそれを見つけ出した。

「………なっ…!？」

モニターに映された光景に、四人が息を呑む。そこに映されていたのは、

鳥の型をした、ジュエルシード。

「アクセル!!座標は!？」

《Specific completion!!》(特定済みだ!!)

》

「よし、なのは!! ユーノ!! 出るぞ!!」

それだけわかれば十分だ。なのはとユーノを促し、踵を返して駆け出す。

「ま、待つてゝ!!」

遅れて駆け出すのはとユーノを尻目に、俺は転送ポートへ向かった。

「管理局のリーダーより早いなんて…」

エイミイが信じられないと言った口調でぼやきながらも、モニターに三人の姿を映し出す。既に決着は間近で、ナナシ君が切り裂いた鳥をユーノ君が鎖で捕縛している所だった。

「捕まえた!! なのは!!」

「うん!! レイジングハート!!」

『Sealing Mode Setup』

ユーノ君の声になのはさんが答え、彼女のデバイス、レイジングハートがシーリングモードへ移行する。

『ケエエエエエエ!!』

苦悶の声を上げる鳥の頭に、V I I Iの数字が浮かび上がる。

『S t a n d b y R e a d y』

『リリカル、マジカル、ジュエルシード、シリアルV I I I！！封印！！』

舞うように呪文を唱え、なのはさんがレイジングハートを振りかぶった。

『S e a l i n g』

『ケエエエエエ！！』

レイジングハートの声と同時に、桜色のリボンが突き刺さり、鳥が苦悶の声を上げる。

『潰れろっ！！』

『G r a v i t y F a l l！！』

僅かに見せた抵抗もナナシ君の重力操作に潰され、鳥は桜色の粒子となって消えていった。

『R e c e i p t N o . V I I I』

『はい、終わりっ』

レイジングハートの声と同時に、ナナシ君がアクセルをネックレスに

戻す。

「……じ、状況終了です。ジュエルシード、N O・V I I I I を無事確保。三人共お疲れ様」

思い出したようにクルーが回線を開き、報告を開始するが、艦内はシンと水を打ったかのように静まり返っている。

『伊達に今まで三人で、ジュエルシードを回収して来た訳じゃないんだぜ？』

画面越しに私達を見上げ、ニヤリと笑うナナシ君。早急な感知に的確な指示、迅速な確保。どれを取っても一級品だ。

「ホント、三人共かなり優秀ね……」

いや、違うか。

ナナシの指示で二人の力が最大限に発揮されていると言った方が適切か。

「いくら背景があるとはいえ、あのセンスは天性のモノよね……」

このままアース<sup>ウチ</sup>スラに欲しいくらいだ。

「ところで……、もう一組の方はどうなってるのかしら？」

ふと思い立ち、コンソールを高速で操るエイミィに尋ねる。

「どうもジャミングが掛けられて……、特定は難しいです……」

対しエイミイも困っているのか、溜め息混じりに答える。

「フェイト・テストロッサ…、かつての大魔導師と同じファミリーネームだ。偽名だとしても事実だとしても、それだけの実力は備えてるみたいだ」

「え？そうなの？」

クロノの呟きに反応したエイミイが首を傾げる。

「大分前の話だけだね…。ミッドチルダの中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして、追放されてしまった大魔導師…」

「へえー。ダメだ…、やっぱり見付からない…。フェイトちゃん、よっぽど高性能なジャマー結界を使ってるみたい」

クロノの言葉を聞きながらも探索を続けていたエイミイが伸びをする。

「使い魔の犬…。多分あいつがサポートしてるんだ…」

「お陰でこつちが封印したジュエルシードを二個も奪われちゃってるし…、なんとかしないとね…」

とりあえず、問題は山積みだ。

（なるべく早めに片付けたいんだけどね…。ナナシ君の為に）



「フェイト…。ダメだ、空振りみたいだ」

綺麗な湖を臨める岩場に立っていた私は、アルフの声で現実引き戻される。

「そう…」

「やっぱ、向こうに見付からないように隠れて探すのはなかなか難しいよ…」

アルフが溜め息をつきながら座り込む。アルフの役割は主にサポートだから、そっちで負担を掛けていることに申し訳なさを感じる。

「うん…。でももう少し頑張ろう…」

ここ最近、考えていたことがある。ジュエルシードを一気に集める方法。それを思い付いたのだ。

「少しだけ…、試してみたいことがあるんだ…」

アースラに来てから10日。私達が手に入れたジュエルシードはV、II、IX、Xの計三つ。そして、フェイトちゃん達が手に入れたのがシリアルIIとVの二つだから…、

「あと六個、か…。長いようで短かった、かな…」

食堂のテーブルに座り、ジュースを飲みながらナナシ君が呟く。今日の搜索が空振りに終わった為、休憩兼軽くお茶会の最中なのだ。

フエイトちゃんやジュエルシードを探すべく、エイミイさんが搜索範囲を広げたり、クロノ君があちこち奔走して頑張ってくれているから、大丈夫だと思うけど…。

「数も減ってきたし…、もしかしたら、結構長く掛かるかもね…」

ユーノ君もビスケツトを頼張りながら呟く。

「…寂しくないか？」

「別に、全然寂しくないよ。寂しいのは慣れてるし、今はナナシ君やユーノ君もいるもん」

ナナシ君は知ってるよね、と笑い掛ける。お父さんが事故に遭って、私は寂しい幼少期を過ごした。だけど、今はみんな元気だし、ナナシ君やユーノ君、アリサちゃんやすずちゃんもいる。寂しくなんて、ない。

「そういえば、ユーノ君の家族ってどんな人？」

ナナシ君はこの手の話題に反応してくれないので、ユーノ君に質問を投げ掛ける。

「ああ…、僕は元々一人だったから」

「へ？そうなの？」

軽い気持ちで聞いてみたのだが、意外な答えが返ってきた。

「両親はいなかったんだけど、部族のみんなに育てて貰ったから。」

だからスクライアの一族みんなが、僕の家族」

「そっか…」

どうやら三人共、ちょっと特殊な環境で育ったみたい。多分、あの子も。

「色々片付いたら、もっとたくさん、みんなでいろんなお話ししようね」

「うん、そうだね」

「色々片付いたら、な」

すぐに賛成してくれたユーノ君に対し、ナナシ君は肯定しながらもどこか遠くを眺めている。その瞳には空虚な光があって…、昔の自分を見ているみたいで、なんだか悲しかった。

（…色々片付いたら、ジュエルシードの問題が片付いたらきつと、私達は…）

そんな思考に追い打ちを掛けるように、艦内に鳴り響く警告音。アラート壁に掛けられたディスプレイに映るのは、エマージェンシー非常事態の文字。

『エマージェンシー！！搜索域の海上にて、大型の魔力反応を感知！！！！』

クルーの艦内放送に、にわかに騒がしくなり始める。

『な、なんてことしてんのあの子達！？』

が、続けて聞こえたエイミィさんの声に、私達はほぼ同時に立ち上がった。

「なのは！！ユーノ！！ブリッジへ急ぐぞ！！」

ナナシ君の声と同時に、私達は駆け出した。

「…アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ、今導きのもと、降りきたれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル…」

海鳴市の沖合より上数十mの地点。フェイトが足元に極大サイズの魔法陣を展開し、バルディッシュを手に詠唱を始めた。雷が魔法陣を這い回り、黒雲が雨を降らせ始める。

（ジュエルシードは多分海の中。だから、海に電気の魔力流を叩き込んで、強制発動させて位置を特定する。そのプランは間違っていないけど、でも…）

「撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス…！！」

詠唱を終えると同時、宙に九個の巨大な黄色い球体が浮かぶ。そこに一つ目が開き、放たれた雷が輪の用に連なり、魔力を集束させていく。

「はあああつー！！」

フェイトがバルディッシュを魔法陣の中心に突き入れた瞬間、雷が

弾け、轟雷が海に降り注ぐ！！

「はあっ、はあっ、見付けた……！！」

撃ち込まれた巨大な魔力に呼応し、ジュエルシードが発現する。青白く輝く竜巻が六個発生し、大気を掻き乱す。

（これだけの魔力を撃ち込んで、更に全てを封印するなんて……。こ  
んなの、フェイトの魔力でも、絶対に限界を越えてる……！！）

「アルフ！！空間結界とサポートをお願い！！」

「ああ、任せといて……！」

（だから、誰が来ようが、何が起きようが、あたしが絶対守ってみ  
せる……！）

六個の竜巻が収束し、巨大な一つの竜巻へと姿を変える。

「行くよ、バルディッシュ。頑張ろう」

その声だけを残し、フェイトは単身突っ込んで行った。

「なんとも呆れた無茶を……」

ブリッジに飛び込むと同時に、迎えたのはリンディ艦長のそんな声だ  
った。モニターに映された竜巻と濃厚な魔力の気配、そしてあの少  
女を見た瞬間、俺は全てを理解した。

（あのバカ…！！）

危なっかしい奴だとは思っていたが、ここまで来るともはや何も言えない。

「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは、個人が出せる魔力の限界を越えている…！！」

俺が脳内で弾き出し、無視しようとしていた現実をクロノは容赦なく告げた。あれだけ濃厚な魔力が残留している以上、相当高度な魔法を使っただろう。負担は大きいハズだ。

「私達がすぐに現場に…」

「その必要はないよ。自滅しなくても、力を使い果たした所で叩けばいい」

出勤を申し出たのはに、クロノが非情に告げた。

「でも…！！」

「今の内に捕獲の準備を」

「了解…」

瞬間、俺は答えを返したクルーの首筋にアクセルを突き付けた。

「なっ！？…っ！！」

「動くな」

待機状態のデバイス、カード状のそれを取り出そうとしたクロノにグラビティフォールを発動、クロノが地に膝をつく。

「くっ…!!」

クロノが溢れんばかりの敵意を漲らせ、こちらを睨む。

「汚いな、管理局。あんな少女が危ないってのに、見過ごした拳句不意打ちするのか？」

画面には鎌の形態に変化したバルディッシュを構えながらも、刃を顕現させるだけの余力もないフェイトが荒い息をついている。

「っ…!!」

「私達は常に最善の選択をしなくてはいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実」

顔を歪めるクロノを気にも留めず、冷静に告げるリンディ。だが、

「知るか」

リンディの真正面に転移した俺は、目の前にアクセルを突き付ける。クルーには宙に浮かせたもう一方の刀を突き付けているので問題はない。

「最善？現実？知らねえよそんなもん。でもな…」

俺なんかが彼女らにそんなものを説く理由も資格もない。でも、

「少なくとも、あいつを見捨てた上での「最善」なんて俺は認めない。艦長としてあんたが命令したとしても、俺がこの船を下りればいいだけの話だ」

実際にそれもアリだ。ジュエルシードを効率的に集められるから協力しているだけで、最悪俺だけでも探すことは出来る。少なくとも俺には、あいつにそっくりなああの少女を見捨ててまで、管理局に与するつもりはない。

「ユーノ、座標特定と転送準備頼めるか？」

「とつくに出来てる。いつでも行けるよ」

親指を立てながら俺に答えるユーノ。…お前はホント、縁の下の力持ちタイプだな。

「さっすが。ユーノ、準備。なのは、行くぞ」

「…うん!!」

あまりにも殺伐とした空気に呆然としていたが、しっかりと答え転送ポートに歩き出すなのは。彼女もやはり行くつもりだったのだろう。

「よし、ユーノ!!」なのはがポートに立ったのを確認した俺はアクセルをネックレスに戻し、クロノに掛けたグラビティフォールを解除。リニアアクセルで跳躍、転送魔法を発動したユーノを抱え転送ポートに突っ込む!!



「あの子の結界内へ、転送!!」

ユーノの声と共に、俺達は緑色の光に包まれた。

「……………っ!？」

気配を感知した私は、後方の空を仰ぐ。そこに居たのは、

桜色の、天使。

ブーツから展開した翼を広げ、桜色の粒子を撒き散らしながら舞い降りて来た、あの少女。

「フェイトの邪魔を…、するなあああああ!!」

絶叫と共にアルフが飛び掛かるが、

「はっ!!」

緑色の魔法陣を展開した少年によって止められる。

「邪魔を…!!」

「違う!!僕達は、君達と戦いに来たんじゃない!!」

アルフが必死に食らい付くが、少年も必死に説得を試みている。

「フェイトちゃん!!後ろ!!」

「!？」

振り向いた先には、ジュエルシードによって暴走した青い雷が…、

「アクセル!!」

《Yes, Sir!! (了解!!)》

私と雷の間に、銀色のラウンドシールドが展開。雷と激突し、爆発と共に相殺した。

「きゃ…!!」

でも私はそれによって集中力を掻き乱され、僅かな魔力で維持していた飛行魔法が途切れる。

(落ち…、っ!!)

が、私の体はふわりと優しく抱き留められた。

「ったく…、無茶苦茶だなお前は…」

見上げるとあの黒い少年が、私を抱き抱えながら溜め息をついていた。

『何を考えているんだ君達は!!』

間一髪雷を防御、ぎりぎりの所でフェイトを抱き留めようやく一息、

と思った瞬間、クロノの声が響く。

「あーはいはい空気読んでねー」

『なっ…!?!』

めんどくささのあまりそんな子供じみた答えを返してしまう。全速力で飛ばして来たから余裕がなかったのだ。

「…ほっとける訳ねえだろ」

『!?!?』

「「話」を聞いたお前ならわかるだろ?こいつを見捨てるくらいなら…、こんな悲しげな目をした子をほっとくくらいなら…、死んだ方がマシだ」

俺の自らの思いをありのままに語る。きつとこいつも、何かを抱えているハズだから。だから俺は、なんとかしたい。

「~~~~っ!!」

「むー…」

が、俺の本心を言い終えると同時、何やらフェイトが顔を赤くし、俺の横に降りて来たのはがむくれている。…何か変なこと言ったか?

「フェイト!!!大丈夫!?!」

と、アルフが突っ込んで来たお陰で、妙な空気は霧散した。アルフグッジャブ。

「う、うん。大丈夫…」

「どこがだバカ」

よろよろと俺から離れようとするフェイトを制止し、バルディッシュに触れる。

「アクセル」

《Yes, Sir (了解)》

フェイトを抱き留める為宙に浮いていたアクセルに指示。俺とアクセルから放たれた銀色の魔力がバルディッシュに注入され、鎌の刃が復元される。

《Power charge (魔力回復)》

《Supplying complete (供給完了)》

「ま、こんだけあれば十分だろ」

飛べるか？とフェイトを解放すると、彼女は危なげなく飛んでみせた。問題なさそうだな。

「さーで、つと。ほんじゃま、やりますかー!!」

それを見届けた俺はアクセルを構え、単身竜巻目掛けて突っ込んだ。

「もう…」

単身竜巻に突っ込んだナナシ君を見て私は頬を膨らませる。たまにナナシ君は自然にカッコイイこと言っちゃうから、気を抜くとすぐに心を撃ち抜かれちゃう。

心なしか、ナナシ君を呆然と見ているフェイトちゃんの瞳に、何か今までと違う色が宿っている気がする。…気のせい、だよな。

「あんた達…、一体…」

「まずはジュエルシードを停止させないと、マズいことになる。話はその後だ」

驚愕の視線を向けるアルフさんに、ユーノ君がそう告げる。

「グラビティザンバーー!!」

ナナシ君の声に振り向くと、巨大な竜巻がナナシ君のアクセルで六分割されていた。相変わらず無茶苦茶だなあ…。

《You are most (あなたも大概ですよ)》

「え？そんなことないよ？」

「自覚ないんだ…」

レイジングハートの声にそう答えた私に、ユーノ君が冷や汗混じり

に呟く。どうしたのかな？

「…とりあえず今は、封印のサポートを…！」

頭を振ったユーノ君が竜巻に向き直り、魔法陣から出した緑色に輝く鎖で縛り上げる。

「くっ…、強っ…！！」

が、さすがに六つ同時は無理があるのか、ギシギシと鎖が軋み始める。

「ふっ…！」

が、アルフさんがサポートに入った。魔法陣から飛び出した橙色の魔法陣が竜巻に巻き付き、動きを止める。

「フェイトちゃん、手伝って…！一緒にジュエルシードを止めよう…！」

私も空中に飛び上がり、レイジングハートを構えながら言う。

「二人できつちり半分こ…！ユーノ君もアルフさんもナナシ君も頑張ってくれてるから、今の内に…！」

《Shooting Mode》

シューティングモードに変形したレイジングハートを構え、足元に極大の魔法陣を描く。

(…でも、ナナシ君の気持ちも、わかるかな…)

一人ぼっちで寂しい時、一番して欲しかったこと。それは、「大丈夫？」って聞いて貰うことでも、優しくして貰うことでもなくて。

「デイベインバスター、フルパワー！！…行けるね!？」

《All Right, My Master (勿論です、私のご主人様)》

レイジングハートが答え、魔力が集束していく。

(…全力で、撃ち抜く!!！)

「……………」

ほっとけないと言って、私を助けてくれた少年。

私の味方でいて、一緒に戦おうと言ってくれた少女。

何故そんな風に笑って成し遂げてくれるのか。何故こんな私に手を差し延べてくれるのか。私には、わからない。…だけど、

《Sealing Form, Set up》

シーリングフォームに変形したバルディッシュを構えて、竜巻を見据える。足元に極大の魔法陣を描き、周囲を雷が駆ける。

「二人で「セー」で、一気に封印!!」

少女の声に頷きを返し、同時に前を見る。

瞬間、少女のデバイスから生えた翼と、バルディッシュから生えた羽が、呼応するように大きくなる。

魔力が吹き荒れ、一撃で街を滅ぼす程の力が渦巻く。

「せーのっ！！」

少女の声を聞いた瞬間、私は動いた。

「サンダアアアアッ！！」

天から降り注いだ雷が、竜巻に直撃する！！

「デイベイイイイインッ！！」

少女の杖の先端にリングが形成され、魔力が集中する！！

「グラビティイイイイツ！！」

更に反対側から少年が、私達を上回る程の魔力を刃に乗せ、大上段に振りかぶる。

「レイジイイイイツ！！」

「バスタアアアアッ！！」

「ザンバアアアアッ！！」

バルディッシュを魔法に突き刺した瞬間三人の声がシンクロし、力を増した雷が降り注ぎ、桜色の砲撃が竜巻を撃ち抜き、肥大化した黒い刃が竜巻を切り裂いた！！



イイイイン！！  
ズドオオオオオン！！

四種類の膨大な魔力がぶつかり合った結果、海鳴市の海岸線にまで風圧が届く程の爆発が起こった。

『ジュエルシード、六個全ての封印を確認しました！！』

その分威力は凄まじく、どうやらジュエルシードも全て封印出来たみたいだ。

『な、なんてでたらめな…』

『でも、スゴいわ…』

何やらアースラ みんなが騒いでいるが、私達の耳には入らない。一人ぼっちで寂しい時、一番して欲しかったことは、「大丈夫？」って聞いて貰うことでも、優しくして貰うことでもなくて、おんなじ気持ちを分け合えること。寂しく気持ちも、悲しい気持ちも、互いに分け合って支え合えること。

私とナナシ君、フェイトちゃんはジュエルシードを間に挟み、海上で向かい合う。

（…ああ、そうか）

やっとわかった。ナナシ君が好きな気持ちも、フェイトちゃんのことをほっとけない気持ちもある。でも、それ以上に。

「…友達に、なりたいんだ」

三人で分け合って、互いに支え合って行きたいんだ。

「…っ！！」

ナナシ君とフェイトちゃんに差し出された手に、二人が目を見開く。私の想いは伝えた。後は、答えを待つだけ。

「…………」

ユーノ君とアルフさんも見守る中、フェイトちゃんが手を動かそうとした瞬間、

『次元干渉！？別次元から、本艦及び戦闘区域に向けて、魔力攻撃来ます！！あ、あと六秒！！』

「……っ！？」

曇天の空に、雷が走った。

渦巻く雲の中に広がる闇。そこから、自然界ではありえない紫色をした雷が降り注いだ。

「っ、母さん…！？」

瞬間、紫電がフェイトちゃん目掛けて襲い掛かる！！

「っ…！」

ほぼ同時にナナシ君がフェイトちゃんの前に回り、プロテクションとラウンドシールドを計五段重ねで展開した！！

「ぐっ…、あっ…」

バチバチバチッ！！と凄まじい音を放つ雷を受け止め、ナナシ君が苦しい声上げる。

「ナナシ君っ！！きゃっ！！」

近付こうとするが、雷がすぐ横を掠めた為距離を取らざるを得なくなる。

「っ！！アルフっ！！」

四層目を撃ち抜かれた瞬間ナナシ君が防御を捨て、アルフさん目掛けてフェイトちゃんをバルディッシュ越しに蹴り飛ばす！！

「なっ！？」

フェイトちゃんが驚きの声を上げる中、アルフさんがフェイトちゃんを抱き留めると同時、銀色と紫が混じり合い、爆発した。

「ナナシ君！！」

「うつせ…、生きてるよ…」

私の呼び掛けと同時に、ナナシ君が煙の中から現れる。アクセルを握っていた右手の周辺が焦げて帯電している以外、大事はなさそうだ。

「もう一本を避雷針代わりに使えたからいいものの…、普通あんな食らったら死ぬぞ？」

銀色の光を放つアクセルを左手に持ち替え、右手をぶらぶらと振るナナシ君。確かにスゴい攻撃だったし、無事でよかった…！！

「……………！？……………」

が、それだけでは終わらなかった。足元に紫色の巨大な魔法陣が展開され、光を放ち始める。

「これ…、転送魔法！？！」

「え！？何々！？！」

「母さん！？何を！？」

「くっそ、あの鬼婆…！！！」

「雷…、紫色…、まさか！？！」

それぞれが混乱に包まれる中、転送魔法が発動し、私達五人とジユエルシードは、海鳴市海上から姿を消した。

「くっ…、復旧はまだ！？！」

「ダメです…！！中枢をやられて、機能回復出来ません…！！！」

私の疑問にクルーが悲鳴混じりに答える。

「エイミィ！！どうにかして現場の様子を！！」

「無理です！！濃密な魔力でジャミングが掛かってて、今の状態では不可能です！！」

僅かな希望を込めて管制官の名を呼ぶが、その期待は裏切られる。

「くそっ！！」

クロノが壁を殴りつけながら毒づく。濃密な魔力が滞留しているせいで転移魔法も使えないのだ。無理な自分が悔しいのだろう。

「機能復旧まで対魔力防御！！次弾に備えて！！」

「了解！！」

指示を飛ばし終えた私は椅子に深く腰掛け、祈るように手を組む。

「ナナシ君、なのはさん、ユーノ君、どうか無事でいて……」

そこは、とても広い一つの部屋でした。部屋の奥には王様が座るような椅子、玉座が置かれ、薄暗いその部屋にはどこか退廃的なイメージがありました。

「……」

起き上がったユーノ君が辺りを見回す中、アルフさんが立ち上がる。

「あんた達、早く逃げな。これ以上ここにいとロクなことにならない」

油断なく周囲を見回しながら、アルフさんが私達を促す。

「…ここは、どこだ？」

左手でアクセルを構えながら、ナナシ君が尋ねる。

「ここは時の庭園。フェイトの実家だよ」

「「「！？」」「」」

ここが…、フェイトちゃんのお家！？

「時の庭園…、テストロッサ…、いや、まさか…、そんな…」

ナナシ君が冷や汗をかきながら、何やらぶつぶつ呟き始める。どうしたんだろう…？

「騒がしいと思ったら…」

「「「「「！？」」「」」」」

と、奥から一人の女性が現れた。胸元が開いたグレーのローブを着て、手に魔女そのもののようなイメージの杖を持った女性。

「母さん…」

「お前は……」

フェイトちゃんの怯えるような声と、ナナシ君の驚愕の声が重なる。

「ジュエルシードと一緒に、邪魔なハエまでついて来たみたいね」

その女性、フェイトちゃんのお母さんは、歪んだ笑みを浮かべた。

## 第十一話「対峙」(後書き)

はい、やらしましたw

なあにこれえ？な展開。でも反省はしていない。  
いよいよ次回、ナナシの過去が明らかに。



## 第十二話「過去」(前書き)

はい、十二話です。

オリジナルが加速しすぎて原型とどめてない気がする今日この頃w  
遂に今回、ナナシの過去が語られます。  
ではどーぞー

## 第十二話「過去」

「え……」

その一言を聞いた瞬間、私の中で何かが壊れた。

「残念だわフェイト……。ジュエルシードを取り損ねるだけじゃ飽き足らず、こんな魔導師ごときに助けられるなんて……」

とてつもない悪意を持つ、その女性。フェイトちゃんのお母さんだと言つ目の前の女性は、私の抱く「優しいお母さん」のイメージの、正に正反対の存在だった。

「……ごめんなさい」

「謝る前にジュエルシードを……。ああ」

と、謝るフェイトちゃんに言いかけていた女性が私に振り向く。

「確か……。あなたが持っているんだったかしら」

その瞳に宿る黒い感情。狂気と悪意に気圧された私は、思わず一歩後ずさる。

「あ……」

その結果ナナシ君にぶつかってしまい、慌てて彼の顔を見上げた。

「プレシア……」

が、彼は私を気にも留めず、視線の先の女性を睨みつける。その瞳を染めるのは、殺意と憎悪の色。

「……あら、誰かと思えば。天城の生き残りの坊やじゃない」

「あまぎっ？」

どこかで聞いたような言葉に私は首を傾げる。

「ナ」

気になった私が声を掛けようとしたと同時に、

「妹さんは、元気かしら？」

女性が、悪意を含めた嘲笑を浮かべた。

「プレシアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

瞬間、彼の瞳から光が消え、絶叫と共に駆け出した。負傷した右手にも刀を握り、重力制御で固定しながら女性目掛けて切り掛かる……

「あらあら、子供ねえ」

対し女性は再び嘲笑。鞭に変化した杖を振るい、左手の刀を搦め捕る。

「アアアアアアッ！！」

彼は即座に刀を手放し、左手に持ち替えたアクセルを振り下ろす。

「プロテクション」

バチィッ！！

女性がバリアを展開し、ナナシ君の刀を防いだ。

「アアアアアアッ！！」

だがナナシ君は刃に重力を纏わせ、無理矢理押し込み斬り破った！！

「ブレイク」

が、女性の声と同時に、砕けたバリアの破片が、ナナシ君目掛けて突き刺さる！！

「がつ、アアアアア！！」

ナナシ君は絶叫したまま、リニアアクセルで加速した。アクセルを鞘に収め、高速抜刀。神速の居合切り、リニアザンバーを放つ！！

「フラッシュムーブ」

が、一瞬で女性がナナシ君の背後に回り込み、大きく振りかぶった鞭を叩き付ける！！

「ガアアアアッ！！」

凄い勢いで吹き飛ばされ、ナナシ君がぶつかった壁がクレーター状に刎れる。遠心力を活かした鞭の威力は、あそこまで強いものなの……！？

「アアアアアア！！」

起き上がったナナシ君が再び突っ込みながら、グラビティフォールを発動。床が5cm沈み込む程の強力な重力が女性を襲う！！

「……………」

だが、女性は表情一つ動かさず、杖に戻った鞭を振る。

「がつ！！」

杖から放たれた雷が、動きが直線的になっていたナナシ君に突き刺さる！！

「こ、の……クソアアアアアア！！」

一瞬動きが止まるも、再度の絶叫と共に駆け出す。が、

「……耳障りよ」

「がはっ！！」

雷を纏った鞭を受け、再び壁に激突した。

「そうね。いつそ一思いに、妹の所へ送ってあげようかしら?」

女性も鬱陶しくなったのか、私の身長と同じくらいの大きさの雷の槍を生み出す。今あんなものを食らったら…!!

「がつ…、げほつ…、ごほつ…」

口元から血を流しながらも、ふらふらとナナシ君が立ち上がる。

「死になさい」

冷徹な宣告と同時に、雷がナナシ君目掛けて襲い掛かる!!今からフラッシュムーブを使っても…、間に合わな…、

「ダメエエエエツ!!」

が、バルディツシュを構えたフェイトちゃんが間一髪カットに入り、雷を防いだ。

「母さんお願い!!もうこの人を傷付けないで!!」

あのフェイトちゃんが、瞳に涙を溜めながら懇願する。滅多に表情を表に出さないフェイトちゃんの行動に驚くが、

「…邪魔よ」

それを、母親はバツサリと切り捨てた。ナナシ君の前に立ち塞がるフェイトちゃん目掛け、再び鞭が振り下ろされる!!

「っ!!」

が、それよりも早くアルフさんが動いた。橙色の鎖を飛ばし、フェイトちゃんを引っ張り寄せた！！

「ユーノ！！」

そしてそのまま、一人静かに着々と脱出用の魔法を編み込んでいたユーノ君目掛け、これまた鎖で引き寄せたナナシ君を放り投げる。

「ありがとう！！」

ユーノ君が鎖で私を引っ張り、魔法陣の中に二人が入った瞬間転送魔法が発動する。

「プレシアアアア！！プレシアアアア！！」

消えていく視界の中でナナシ君が絶叫を放つが、

「……………」

彼女は何も言わず、視線を逸らした。まるで眼中にない、と言わんばかりに。

「あ、ああ、ああああ！！」

それを理解してしまったナナシ君は、無駄だとわかっていても叫び続ける。彼の絶叫をそこに残し、私達は緑色の輝きに飲み込まれた。

「艦長！！アースラ内部に転移魔法陣発生しました！！」

「なんですって！？」

あの後次元干渉攻撃、紫色の雷を喰らい中枢をやられたアースラをついさつきどうにか復旧し、ようやく一息ついたブリッジ内部に再び緊張が走る。

「転移人数は三人！！魔力光は…、緑色です！！」

「緑…、ユーノ君のものね。すぐブリッジに通して」

クルーの声には私は即答した。今はとにかく少しでも情報が欲しい。あの後彼らがどこに行っていたのか。フェイトさん達はどうか。一刻も早く確かめねば。

「了解！！」

程なくして、ブリッジに三人が現れる。

「君達、勝手な行動は、っ！？」

三人の姿、正確にはナナシ君の姿を見て、文句を言おうとしたクロノが絶句する。

酷い姿だった。右手を覆うグローブは、黒く焦げて帯電した上ボロボロだった。だが、それはあの雷を防いだ為だと知っているの、問題はそこではない。

どんな魔法を食らったのか、バリアジャケットの胸元はその原形を留めておらず、雷を浴びたのか皮膚には黒い痕や赤いミミズ腫れが



ある。そして何より顔。口元や頭から血の筋を流し、虚ろな目は硝子のように何も映していなかった。

あれだけの力を持つ彼がここまでやられるなんて…、一体転移先で何があったのか。

「とりあえず、あの後何が起きたのか、説明してくれる？」

「「は、はい」」

二人が緊張しながら答えるが、間に挟まれたナナシ君は、何も言わなかった。

「はあ…」

私は備え付けの椅子に座り、溜め息をつく。その後、私とユーノ君で説明し始めたのだが、フェイトちゃんのお母さんの名前を出した瞬間ナナシ君がピクリと反応し、二人の顔が蒼白になった。そしてリンディさんが「あとはユーノ君に聞くから、なのはさんはナナシ君を医務室に」と退出を促したのだ。医務室にたどり着くとすぐに担当の人が現れて、治癒魔法であつという間に治してくれた。でも精神的に不安定だからと、こうして病室に寝かされている。

（…それにしても）

思い返す。あの時に見せた、ナナシ君の表情を。あの女性に対し一点の曇りもない殺意と憎悪を持って、ただひたすらにアクセルを振り下ろす彼の姿を。そんな風に感情のままに暴れる姿なんて、今まで見たこともない。

「…ある意味当然かな」

彼は今まで一度も、自らの過去について話したことがない。知らなくたって当然と言えば当然だ。

（…でも）

あの激昂したナナシ君と、いつも見せている空虚な表情。この二つには、何か関わりがある気がする。根拠はないが、何故かそうだと確信している私がいる。

「っ…、っ…」

と、ナナシ君が目を覚ました。未だ空虚な光は消えていないが、少なくともいつものナナシ君のように見える。

「あ…。なのはか…。大丈夫か…？」

「それはこっちの台詞だよ」

ナナシ君の言葉に苦笑する。起きての第一声がこれだ。心配することの身にもなつて欲しい。

「…なあ、なのは」

「ん？」

「知りたいか？俺の過去を」

唐突なそんな発言に、私はぽかんと口を開ける。

「え、でも…、いいの？」

「いい機会だ。見られちゃったし、な」

気にしてたもんな、と苦笑しながら水差しを取り、喉元を潤すナナシ君。

「さて、どこから話したもんな…」

こうして、ナナシ君の唐突な昔語りが始まった。

「俺はミッドチルダっていう、魔法が特に発達した世界の寒村、そのとある一族に生まれたんだ」

ナナシ君はぽつぽつと、当たり障りのない話から始める。

「人数こそ少ないものの、魔法の技術や知識が発達してて、みんなで協力し合って暮らすような…、そんな村だ」

その光景を思い描いたのか、僅かに顔が綻ぶ。

「俺は両親と妹の四人暮らしで、多少魔法が人より扱えることと、魔法が得意で天才と呼ばれる妹がいること以外、ごく普通の子供で、こんな生活がいつまでも続くんだと思ってた。でも」

瞬間、ナナシ君の顔が陰った。

「俺が六歳の時のある日、買い物に行っていた両親と妹が、事故に巻き込まれたんだ。両親は死亡。妹も下半身が麻痺して、介護が必要な体になってしまった」

急に訪れた不幸な事故。両親を失い、身体の不自由な妹を支えて生活することは、どれだけ大変だろう。

「妹は魔法の研究が大好きだったんだけど、事故のせいでリンカーコアっていう、魔法を操る為の器官を酷く損傷したんだ。大好きな両親と魔法をいっぺんに失って、妹はだんだん壊れていった」

思い出してしまったのか、顔を歪めるナナシ君。その辛そうな表情に、私の胸も苦しくなる。

「でも、だんだん心を開いてくれて、昔程じゃないけど笑うようになった。妹が作ったデバイス、アクセルとレイジングハートも居てくれたから、そこまで寂しくはなかった」

「え、ええっ!？」

衝撃的な告白に、私は思わずレイジングハートを見下ろす。

「それじゃアナシ君とレイジングハートって…」

《Yes, it is acquainted. I was his younger sister's device before. Axel corresponds to my elder brother (ええ、知り合いです。私はかつて彼の妹のデバイスでした。アクセルは私の兄に当たります)》

「そうだったんだ…」

たまにレイジングハートと話してる所を見て不思議に思っていたが、そういうことだったのか。

「あれ？でもなんでそれをユーノ君が？」

「まあ最後まで聞いてくれ。そんなこんなで何年か経ったある日。あいつの九歳の誕生日だったかな。魔法の研究を再開していたあいつは、遂に作り出してしまったんだ」

疑問を挟んだ私を遮り、ナナシ君が続ける。

「所有者の思いに応えて時空すら捻曲げるロストログア、…ジュエルシードを」

「え…、えええええっ！？」

再びの衝撃的発言に、私は椅子からひっくり返りそうな程驚く。

「あああああ、あんなものをナナシ君の妹さんが！？」

「勘違いするなよ。あくまで魔法の研究で必要だから作ったんだが、予想以上に力を持つちまったんだ。三歳で魔法を覚えて、六歳で複雑な機構を持つインテリジェントデバイス、アクセルとレイジングハートを作り出した時点で、嫌な予感はしてたんだが…」

ナナシ君が顔を歪める。妹の凄さを目の当たりにし続けていた分、思う所があるのだろう。

「あいつは本当に頭が良かった。一度説明を受けただけの魔法を完壁に使いこなし、一日に10個は新たな魔法を開発してた。俺達の一族の中でも、あいつの才能は特に際立っているものだったんだ」

過ぎた力を持つ天才は、だんだん壊れていくという。悲痛な過去という爆弾を抱えた妹さんも、研究を続ける内にどこか壊れていつてしまったのかもしれない。

「そしてある日、俺達の前にそいつは現れた。人を生き返らせる為にジュエルシードの譲渡を迫ってきた、プレシア・テストロッサが」

「……！」

遂に現れた。ナナシ君の過去に関わるキーパーソン、プレシアさんが。

「村の人は当然、妹も反対した。『例え可能だとしても、絶対の理を曲げてはいけない。一度曲げてしまえばそれは際限なく続き、やがて理のない混沌とした世界になってしまう』ってな」

一度ルールを破ってしまえば、他の人も真似し始めてルールなんてなかったことになってしまふ。つまりそういうことだろう。しかもそれが死んだ人の蘇生となれば、尚更。

「そう答えた時は、プレシアは納得したような表情で帰った。でも直感的に嫌なモノを感じた妹は、レイジングハートにジュエルシード封印の機能を施して、ジュエルシード共々封印したんだ」

「それをユーノ君が……」

「掘り返してしまった、って訳だな」

もう少し奥深い所に封印しとくべきだった、とナナシ君が悔やむ。

「で、俺はジュエルシードを封印するべくやって来た、って訳」

語り終えたナナシ君は、再び水差しを手に取る。…だけど、

「…まだ、話してないこと、あるよね？」

水差しを置いたナナシ君がピタリと静止する。だって…、

「そうじゃないと…、あんなに怒ったナナシ君、説明がつかないよ」

私やフェイトちゃんを気に掛け、常に私達の前に出て戦ってきたナシ君。そんな優しい彼があんなに怒るなんて、そうじゃないと説明できない。

「怒った…、ね…。そんな生易しいもんじゃないよ」

対しナナシ君は自らを嘲笑うように薄く笑み、

「俺は、あの女を殺す為に生きているんだから」

そう、はっきりと告げた。

「…え？」

「さっき言ったよな？妹は直感的に嫌なモノを感じた、って。それ

は見事に大当りするんだよ」

自嘲の笑みを浮かべながら、彼はその終わりを語り始める。

「ジュエルシードの封印を終え、村に帰ってきた俺達が見たのは、黒い大地だった」

家屋も壊され、更地になった大地で彼が見たモノ。それは、あまりにも残酷で、理不尽だった。

「雷によって村は潰され、魔導人形に村人は全員殺されてた。そして…、あいつは…」

そして、一際顔を歪めた彼は、

「俺の目の前で、ユキを、  
妹を殺したんだ」

三度目の、衝撃的な言葉を、告げた。

「だから俺は…、あいつを殺す…！！村を、みんなを、ユキを殺したあいつを殺す…！！」

凄絶な笑みを浮かべ、熱に浮されたようにナナシ君が言う。

「でもそんなことしたら、フェイトちゃんだって悲しむよ…！」

私はナナシ君の手を取り訴えかける。

「ナナシ君ならわかるでしょ…？例えどんな人でも、あの人はフェイトちゃんのお母さんなんだよ！？なのに…」



「だからこそほっとけねえんだよ!!」

ナナシ君が私の手を振り払い、声を荒げる。

「もう嫌なんだよ!! 妹にそっくりな、瓜二つなあいつが、悲しむ顔は見たくないんだよ!!」

始めてフェイトちゃんと出会った時。ナナシ君があんなにも驚いていたのは、きっとそれが原因で。それからフェイトちゃんをずっと気に掛けてきた理由も、きっとそこにあるんだろう。でも、

「だからってそんなことしたって、フェイトちゃんはきっとナナシ君を憎むよ!!」

「いいさそれでも!! それであいつが救えるんなら!!」

パンツ!!

その言葉を聞いた瞬間、私はナナシ君の頬を張っていた。

「私が好きになったナナシ君は、冷たくて、無愛想で…、だけどホントは不器用で、優しくて…、そんなナナシ君だから、私は!!」

「いい加減にしろ!!」

私の言葉を遮り、ナナシ君が怒鳴り声を上げる。

「俺が優しい? そんなもんは幻想だ!! 俺には何もないんだよ!! 家族もない!! 家もない!! 過去の思い出も、未来さえないんだ!!」

！そんな俺から復讐を奪うな！！もう俺には、それしかないんだよ！！」

それだけ言い終えると、ナナシ君は俯き、肩を震わせ始めた。

「なあ…、教えてくれよ…。俺は…、どうすればいいんだよ…。わかんねえよ…。何もかもわかんねえよ…！！」

頼れるからふと忘れてしまいそうになるけど。彼はまだ十歳の子供で。早くに親を亡くし、家族に等しい人や妹までも殺されて。そんな重い過去を感じさせず、私達を気遣ってくれる彼に、私はただ寄り掛かってるだけで。

「…っ！！」

私は顔を押さえながら、自分の部屋に戻る。自分から聞いておいてこんな様では、彼に申し訳ないと思ったのだ。

「ナナシ君は…、ずっと苦しんでたのに…」

私は手を伸ばそうとしながらも、心のどこかで躊躇っていた。嫌われることが怖くて。拒絶されるのが怖くて。もし私が勇気を出して踏み出せていたら、彼は違う未来を歩めていたのだろうか。

「ナナシ君…」

私の内に浮かんでは消える、いくつもの顔。私の初恋の、大切な人。

「うつ…、くつ…、ふええええええん」

ナナシ君の空虚と絶望を、自分の臆病さを悲しみながら。

私はずっと、泣き続けた。

床に横たわるその少女を見た瞬間、あたしの頭の中は白く塗り潰された。

「……フェイトっ！！フェイトおっ！！」

即座に駆け寄り、抱き上げる。その身体はゾツとする程軽く、綺麗な肌にはびっしりと傷が刻まれていた。

「……………っ！！」

三人を逃がした後、あの女はフェイトと二人で話をすると言ってあたしを追い出した。その時点で嫌な予感はしていたが、まさかここまで……！！

『母さんお願い！！もうこの人を傷付けないで！！』

あのフェイトが母親に逆らってまで守ろうとしたあの少年。傍らの少女と共に何度も手を伸ばしてくれた、あの少年。きっとフェイト自身にとっても、特別な位置にいる人物なのだろう。

それなのにあの女は、そんな娘の願いすらも、一顧だにせず無視したのだ！！

『ジュエルシードを集める前に、お前にはやるべきことがあるだろうが……！！』

ああそうさ。本当はずっと前から気付いてた。だけど、あたしはフ  
ェイトの使い魔だから。フェイトの意志を尊重したかったから。こ  
れまで黙って従ってきた。

「　　っ！！」

だが、もう抑えきれない。フェイトを守る為ならば、あたしは……！！

バガアアアアン！！

壁を殴って壊し、あの女の元に至る階段を下り始める。覚悟は決ま  
った。ならば後は、貫き通すのみ。

「待っててね、フェイト……」

待ってて、あたしのご主人様。あたしがきつと、なんとかするから。

「……たった九個。それでも次元震は起こせるけど……、アルハザード  
へは届かない……」

宙に浮かぶ九個の宝石を見据えながら、私は頭の中で計算を巡らせ  
る。せめてあと六……、いえ、五個は必要……。

「うつ……、ごほっ……」

が、急に競り上がってくる感覚に口元を押さえると同時、水音と、  
鉄の匂い。

「もうあまり時間がないわ…。私にも、アリシアにも…」

どうにかして手に入れなければ、と算段を練る私の背後で、破砕音が響いた。

「…？」

そこに居たのはあの使い魔。やたら反抗的な態度をとる、あの子の使い魔。…まあ、理由はわからないでもないが。

その使い魔、アルフと言ったか、その女はこつこつと音を立て、階段を下り始める。

「……………」

が、さして気にする程のモノではない。私は視線を戻し、ジュエルシードを見遣る。

「……………っ！！」

その態度が癪に触ったのか、アルフが拳を握りしめ殴り掛かってきた。

「…っ！？くっ…」

が、私の防御結界に阻まれ、距離を取らざるを得なくなる。

「……………」

「ああああああっ！！」

私が嘲りの笑みを浮かべると同時、再びアルフが殴り掛かってくる。

「ぐっ…、うつ…、あ、ああ、あああああっ…！」

が、あの天城の少年と同じように、押し破るようにして結界を叩き割った。別に感嘆の念は抱かない。私とて衰えているのだ。破られたって不思議ではない。

「あんたは母親でっ！！あの子あんたの娘だろっ！！」

そんな思考に耽る私に対し、アルフは私の襟首を掴み上げ、至近距離から睨みを効かせる。

「あんなに頑張ってる子に…、あんなに一生懸命な子に…、なんであんなひどいことが出来るんだよっ！？」

だが、激昂する向こうに対し、私の心は冷めたまま。まだあの天城の少年の方が殺意を滾らせている分、楽しませてくれた。

「っ！？」

そんな取り留めもないことを考えながら、私はアルフの腹に手を添え、魔力の弾丸を撃ち込んだ。

「がっ…、あ…」

勢いそのままに柱に激突するが止まらず、柱ごと砕いて壁に激突した。

「あの子は使い魔の作り方が下手ね…。余分な感情が多過ぎるわ」

感情なんてなければ、そんな風に苦しむこともなかったろうに、とらしくもないことを考える。天城の少年と再開したことで、どこか感傷的になっているのかもしれない。

「フェイトは…、あんたの娘は…、あんたに笑って欲しくて、優しいあんたに戻って欲しくて、あんなに…っ!!」

その言葉に苛立ちを覚える。昔の私？優しい私？そんなものは…、もう、どこにもいない。

「邪魔よ…、消えなさい!!」

鬱陶しくなった私は杖を取り出し、アルフに向ける。爆発に飲み込まれ、アルフは時の庭園から弾き出された。

「フェイト…、起きなさい」

母さんの声で、私はまどろみから覚める。…起きないと。

「…はい、母さん」

見上げると、母さんがジュエルシードを見せびらかすように広げている。

「あなたが手に入れてきたジュエルシード九個。これじゃまだ足りないの。最低でもあと五個、出来ればそれ以上。急いで手に入れて来て、母さんの為に」

「はい…」

起き上がると同時、私の体にマントが、まるで毛布のように掛けられていることに気付く。

「アルフ…？」

「ああ…、あの子なら逃げ出したわ。怖いからもう嫌だって」

その言葉を聞いて、悲しさと同時に嬉しさが込み上げてくる。アルフにはいつも苦労掛けてばかりだったから、別の場所で幸せに暮らしてくれるのなら、それでもいい。

「必要なら、もっと良い使い魔を用意するわ…。忘れないで、あなたの本当の味方は母さんだけ。いいわね…？フェイト」

「…はい」

ふと私の脳裏に、あの少年と少女の顔が浮かぶ。私を助けたと言ってくれた少年。私と友達になりたいと言ってくれた少女。あの二人なら…、

（…ダメ）

考えるだけ無駄だ。優しい二人に迷惑は掛けられないし、第一たった二人の子供の力でどうにか出来る程、現実には甘くない。

（もう一度…、会いたいな…）



だから私は、その気持ちに蓋をして。気付かないふりをした。

「送信、と」

あいつ宛のメールを送信し終えたあたしは、思わず頬を緩ませ笑顔になる。

「アリサお嬢様、何かよいお知らせでも？」

運転席に座る白髪の、しかし芯の強さを感じさせる執事、鯨島が質問を投げ掛けてくる。

「別に。普通のメールよ」

そう、普通だが、温かな平穩の詰まった、そんな幸せなメールというだけだ。ちよつとクサイかなあ、なんて思いながら流れる窓の外を眺めていた私は、それに気付いた。

「鯨島、ちよつと止めて」

私の指示に従い、車が流れるように停車する。路上駐車だが、今回ばかりは仕方ない。

後部座席から飛び出した私は、地面のそれ、血に濡れた足跡を追う。その先にいたのは、

橙色の毛並みをした、奇妙な大型犬。

「やっぱり……」

「怪我をしています…。かなりひどいようです」

後からついて来た鯨島が、冷静に分析する。

「でも、まだ生きてる」

そう。この子はまだ生きている。助かる見込みがあるのなら、やるべきことは一つだけ。

「鯨島」

「心得ております」

鯨島にその大型犬を運ばせた私は、すぐに獣医に電話し、一路帰宅を急ぐのだった。

その日の夜。俺は海鳴臨海公園に一人佇み、星が広がる空を見上げていた。

「よくユキにせがまれて、真夜中に出歩いたっけなあ…」

違う世界の星座なんてわからないけど、それでもその美しさは変わらない。なんて詩的なことを考えるのは、嵐の前の静けさだからだろうか。

「…来たか」

俺は地上に視線を戻し、その二人を見据える。魔力を放出し始めて

から三分。思ったより速かったな。

「ナナシ君…、これからどうするの？」

俺の正面に立ったなのはが尋ねる。…何を今更。

「言っただろ？俺には復讐以外なものもないって。あいつの所に行く前に、最後に話がしたくてさ」

薄く笑みを見せながら、俺はそう告げた。そう、結局それ以外の道なんてないのだから。

「行かせないよ…」

なのはが一步前に踏み出し、そう宣言する。

「最後になんかさせない。私はまだナナシ君に聞きたいこと、いっぱいあるんだから」

彼女と話をすれば、こうなることはわかっていた。なのに呼んでしまっただけ、俺もまだ青いのだろう。そう思いながら苦笑する。

「一つだけ聞こう。お前は、俺から奪う者か？」

欄干に預けていた体を起こし、なのはをまっすぐに見据え問い掛ける。

「うっん。私は…、与える者。分かち合う者だよ」

対しなのはも俺をまっすぐ見据え、そう答えた。

「でもそれには、俺は今の俺を捨てなきゃいけないんだろ？」

なのはに対して初めて、敵意を込めた笑いを見せる。

「だから…、私が、それ以上にたくさんのモノをあげる」

なのはも強い意志を瞳と胸に秘め、こちらを見遣る。

結局お互いの理論は平行線。交わることはない。ならば、

「アクセル」

《Yes / Sir（了解）》

「レijingグハート」

《All Right（了解しました）》

「セット・アップ！」「」

《Stand by Ready Set up》

戦って、わかり合うしかない。

「僕は外で結界の維持に専念するから、お互い遠慮なく全力でやっていいよ」

バリアジャケットを纏った俺達にそう言い、ユーノが踵を返しながら緑色の魔法陣を展開する。…オイオイ。

「俺をナメてんのか？別に二人で来てもいいんだぜ？」

「大丈夫だよ。なのはは強いから。それに……」

コーノがちらりとなのはを見遣る。

「言っても聞かないしね」

「……違いねえ」

それもそうか。こいつ、かなり強情だしな。

「……負けないよ、ナナシ君」

「こっちの台詞だ」

互いに螺旋を描くように、回りながら空に浮かぶ。

「高町なのは、レイジングハート」

「ナナシ、アクセル」

騎士のように名乗りを上げ、お互いのデバイスを構える。

「……行きますっ……!!」  
行くぞっ!!

銀色と桜色がぶつかり合い、互いから溢れ出した魔力が、木々を揺らした。

## 第十二話「過去」(後書き)

なにこのプレシア無双w

そしてナナシ叫び過ぎw

作者のオリジナルなんて所詮こんなもんだよ！(えw

次回、なのはVSナナシです。

なのはの想いは、過去に縛られるナナシを救えるのか。

こっご期待！、しない方がいいかなあ？(えw

### 第十三話「覚悟」(前書き)

それは、平凡な小学三年生だったはずの私、高町なのはに訪れた、小さな事件。

信じたのは勇気の心。手にしたのは魔法の力。

世界には悲しみがたくさんあるけれど、人と人は支えあつて、それを乗り越えていける。

でも、彼はまだ彷徨ってるから。そんな彼に、私の想いと言葉を届かせたいから。

だから今、最初で最後の本気の勝負。自分の魔法の全てを懸けて。何度だって伝えるよ。幸せに笑ってほしいから。

魔法少女リリカルなのはAnother、始まります。

水樹奈々さんの「PHANTOM MINDS」をイメージして書いたので、聞きながら読むのもいいかと。

### 第十三話「覚悟」

月明かりを浴びて、あたしは薄く目を開けた。

「あ…、目、覚めた？」

耳が少女の声を拾い、そちらに視線を向ける。

（…フェイト？）

いや、違う。確かに目の前の少女も金髪だが、髪型も声も、瞳の色も違う。だが、月明かりを背にした彼女は美しく、思わず息を呑む。

「あんた、頑丈に出来てるのね。あんなに怪我してたのに、命に別状はないってさ」

少女がしゃがみ込み、あたしと視線を合わせながら語り掛ける。その瞳は優しさに満ちていて、ああ、これか、と思う。

「怪我が治るまでは、家で面倒見てあげるからさ。安心していいよ」

この少女をフェイトに見間違えた理由は、外見のせいじゃない。瞳の奥に秘められた、優しい心があの子にそっくりだったからだ。

（…あ）

優しい瞳、という繋がりで思い出す。確か目の前の少女は、あの二人の知り合いだ。前に温泉旅館で一緒にいるのを見掛けた記憶がある。



「よいしょ、っと」

今更ながら気付いたが、あたしは檻の中に入れられていて、少女がその隙間からドッグフードを盛ったトレーを入れる。

「柔らかいドッグフードだから、きっと食べられると思うけど、大丈夫？」

心配げに私の頭を撫でる少女に答えるように、あたしはそれを食べ始めた。

「ふふっ……。そんなに食欲があるなら心配ないね」

柔らかに微笑み、少女はドッグフードを食べるあたしを飽きもせず見続けている。

「食べたらずっくり休んで、早くよくなりなさい」

こんな優しい少女に拾われた幸運を感謝しながら、あたしはドッグフードを貪るように食べ続けた。

「「はあっ！！」」

アクセルとレイジングハートをぶつけ合い、俺達は至近距離で睨み合う。なのはの澄んだ瞳には迷いがなく、俺を止めると決めた覚悟の強さを伺わせた。

「「っ!!」」

ギン!!と互いのデバイスを弾き、距離を取る。

《Divine Shooter》

なのはが桜色の弾丸を生み出した。その数五つ。

「シュート!!」

高い誘導性を持つ弾丸が、複雑な軌道を描き俺に迫る。

《Gravity Saber》

対し俺は回避を捨て、刃を強化。迫りくる弾丸を片っ端から切り裂いていく!!

「塵気一閃!!」

更にそのままアクセルを振りかぶり、斬撃を飛ばす。全力で放ったその衝撃波は、荒れ狂う波のようになのはに襲い掛かる!!

《Round Shield》

なのはは桜色の防御結界を右手に展開、黒い三日月を受け止める。

（相変わらずのバカ魔力だな…!!）

彼女の保有魔力量は、常人のそれを遥かに越える。力任せに魔力を注ぎ込めば、大概の魔法はあのシールドに防がれてしまうだろう。

《Gravity Accel》

そこまで考えた俺は重力制御により加速、シールドを展開した彼女の後ろに回り込む。

《Linear Zamber》

鞘に収められたアクセルが声を放ち、神速の居合切りを放つ！！

「っ！！」

《Flash Move》

対しなのは防がず、フラッシュムーブで距離を取る。

「ちいっ！！」

その的確な判断に舌打ちしつつ、俺はなのは目掛けて加速した。

（危なかった……！！）

とつさにフラッシュムーブを選択してくれたレイジングハートには、感謝してもしきれない。リニアザンバーは磁力を利用し、互いを引き寄せあいながら強力な斬撃を放つ技。範囲が狭い分、その威力も高い。もしラウンドシールドを展開していたとしても、そのままシールド越しに斬られていただろう。

『まず戦闘において、手の内がわからない高火力の敵に背後を取られたら回避。それ以外の場合は防御を選択しろ』

ナナシ君との授業の内容が脳裏に蘇る。

『確かにお前程の魔力があれば大概の攻撃は防げる。が、もしそのシールドごと破られた場合、お前は一発で終わる』

《Divine Shooter》

「シュート!!」

誘導弾を展開し、ナナシ君目掛けて発射するが、

「甘い!!」

再びそのことごとくを切り裂かれた。

『なのはは遠距離砲撃型の魔法が向いてるから、まず最初にすべきことは、距離を取ること』

「シュート!!」

再び発射し、レイジングハートをシューティングモードに変形させる。

「無駄なことを……!!」

三度切り裂かれるが、私の目的は果たされた。複雑な軌道を描く誘導弾を墜とす為、高速で動き回るナナシ君の動きが、一瞬だけ止ま

る。

『だからお前がすべきことは弾幕を張って距離を取り、そして遠距離からの砲撃で撃ち抜くことだ』

「デイベイン!!」

《Buster》

私とレイジングハートの声がシンクロし、桜色の砲撃がナナシ君を捉える!!

《Round Shield》

が、一筋縄で行くハズもなく。私のデイベインバスターはあっさりと防がれた。

「狙いは悪くないが…、力不足だ!!」

アクセルを構え直しながら突っ込んでくるナナシ君相手に、私は次の策を考え始めた。

『なあ兄者、オイラは星空が見たいぞ』

『お前はいい加減一人称や口調を安定させろよ。友達出来ないぞ?』

妹の元に車椅子を運びながら、少年は溜め息をつく。

『はっ、友達？一族一の天才と呼ばれるあたしに、誰も理解出来ない術式を生み出すこのあたしに、友達？バカじゃない？』

対し少女は嘲るような笑みを浮かべ、瞳に空虚な色を浮かべる。

『…少なくとも俺は、何があっても絶対に、お前の味方だ』

『だよねー、だからお兄ちゃん大好き』

満面の笑みを浮かべながら、飛行魔法で飛び上がった少女が少年に負ぶさる。

『車椅子じゃないのかよ』

『いいでしょーたまにはー』

甘えた声を出す少女を背負い、少年は溜め息をつく。

『つたく…』

『セクハラしないでねー』

少女がそう言った瞬間、少年がひどく黒い笑みを浮かべた。

『車椅子に縛り付けてやろうか？』

『ごめんなさい』

速攻で謝る少女。時折不穏当な言葉が飛び出すが、この辺りは見ていて微笑ましい普通の兄妹だ。

『だいたいお前…、下半身の感覚ないだろうが』

事故の後遺症で下半身が麻痺し、一時期は魔法が使えない程にまで衰弱していた上、当時の彼女は精神的にほぼ死んでいた。よくここまで立ち直ったものだと思う。

『まあねー。よかったね兄上、触ってもバレないよ？』

『アホか』

妹に欲情する趣味などない少年はバツサリと少女の発言を切り捨て、小高い丘に登る。

『おー。今我は天を手にしたぞー』

『なんでだよ』

空に手を伸ばし、はしゃぎながら言う少女に少年が苦笑する。

『知ってる？お兄ちゃん。星の光って私のいる場所に届くまで、何万年も掛かるんだよ？光は秒速30万kmなのに、それだけの時間が掛かるの』

『唐突にどうした？』

苦笑しながら聞き返す。

『だから、ね。星の光には凄い力があるんだよ、って話』

『意味わかんねえよ』

いつものようにオチのない話を受け流し、少年は空を見上げた。

願わくは、こんな生活がずっと続きますように。

（くそっ…!!）

わかっていたことだが、なのはとても強かった。膨大な魔力保有量に加え、ずば抜けたセンス。まだ魔法と出会って一ヶ月も経っていないのに、そこにいるのは歴戦の魔導師以外の何者でもない。

「シュート!!」

休みを与えず、続けざまにディバインシューターを撃ち込むのは、確かに悪くはない。が、

「届かなきゃ、意味ねえよっ!!」

俺はその全てを切り裂き、なのは目掛けて加速する。届かなければ意味はない。切れ味抜群の剣も、即効性の猛毒も、優しい言葉も、届かなければ全て無意味なモノでしかない。

（こんな所で俺は…、終わる訳にはいかないんだよ!!）

「厩気…、一閃!!」

アクセルを振りかぶり、再び斬撃を飛ばす。防げると確信したのか、なのはは避けずに受け止める。



「っ!!」

再びレイジングハートを振るい、弾丸を生み出すなのは。俺もアクセルを腰溜めに構え、斬撃をいつでも飛ばせるようにする。

「……………っ!!」

互いが動き出す、正にその瞬間。

『ストップだ!!』

いつぞやと同じように、クロノの声が聞こえた。

「何をやってるんだ君達は…!!?」

通信で二人の戦闘に介入したクロノが、頭を掻き乱しながら苛立ちの声を上げる。

「あんなことがあった後で、その場所で仲間割れの拳闘戦闘!? 一体何を考えてるんだ!!」

全てを聞いてしまったクロノとしても、ナナシ君のことが気に掛かるのだろっ。自らの人生を狂わせた怨敵を前にして、冷静でいると言う方が無茶だ。

『黙ってる!!』

が、ナナシ君の怒声が、アースラのブリッジに響き渡る。

『この戦いには、文字通り俺の「全て」が懸かってんだ。邪魔すんなー!!』

『ゴメン、クロノ君。だけど、きっと必要なことだから!!』

互いに目の前の敵を見据えながら、ナナシ君は高圧的に、なのはさんは懇願するように言う。

「なのはさん…」

あの後医務室で呆然とするナナシ君と、泣き腫らした痕のあるなのはさんを見た私は、彼女も知ってしまったのだろうと直感的に理解した。そして彼女は、彼を全力で止めるであろうこともなんとなく気付いていた。

『大丈夫です。僕が責任を持って結界の維持に努めます』

と、割り込むようにユーノ君が通信を入れる。彼の防御や結界魔法は折り紙付きだし、まあ、問題ないだろう。

「戦闘行動を許可します」

「母さん!？」

許可を与えた私に、クロノが驚愕の眼差しを向ける。

「ただし周囲に被害は出さないこと。ユーノ君、しっかり頼むわよ」

『はい！！ありがとうございます！！』

「エイミィ、現場周辺に念の為結界を」

その声を最後に通信を切り、私はエイミィに指示を出す。

「か、艦長！！どういふつもりですか！？」

と、クロノが再び突っ掛かってきた。

「あなたならわかるでしょう、クロノ。過去と決別して未来を見据えないと、人はいつまでも迷子のままよ」

私達も少しばかり過去に色々あったから、これだけ言えば通じるだろう。

「ですが危険です！！AAAランクとSランクの魔導師がぶつかり合ったら…」

「クロノ」

尚も食い下がるクロノに、私は呼び掛け瞳を見据える。

「私達は支え合って乗り越えられた。でも彼は、未だに一人で彷徨っている」

「っ！！」

クロノが動きを止め、苛立たしげに頭を掻きながら画面に向き直る。

「祈りましょう。彼が誰かと共に、それを乗り越えられるように」

モニターに向き直った私は、再開された戦闘の様子を見守った。

「シュート!!」

「せやあつ!!」

深夜の昏い空で再開された戦局は、先程と全く変わらない流れに落ち着いた。私が魔力の弾丸を放ち、それをナナシ君が斬る、という流れだ。

「いい加減…、しつこい…っ!!」

アクセルの輝きが増し、振るわれた軌跡に沿って斬撃が空を駆ける。

《Round Shield》

私はそれを受け切り、ナナシ君を見据えた。

「はあっ…、はあっ…、はあっ…」

「ぜえっ…、ぜえっ…、ぜえっ…」

互いの荒い息が、静かな空間に零れ落ちる。時間なんて計っていないが、真っ暗だった空が徐々に明るみ始めたくらいだ。よほど長い間戦っていたのだろう。

『レイジングハート、いける?』

『Of course. It is possible to go at any time (勿論です。いつでもいけます)』

レイジングハートと念話を交わしながら、少しずつ準備を進めていく。後は、チャンスを待つだけ。

一体どれだけの時間戦い続けたのだろう。俺はあの日、復讐に近い、刃を手に取った。それからただひたすらに戦って、戦って、戦って。もう俺の心は、それを数えることをやめてしまった。

《Divine Shooter》

「っ!!」

くだらない思考を切り捨て、弾丸をかわしながら前へと進む。今すべきことは、目の前の敵を倒すこと!!

《Gravity Saber》

《Round Shield》

俺の斬撃となのはのシールドがぶつかり合い、激しく火花を散らす。高町なのは。俺を好きだと言ってくれた少女。俺に安らぎと温もりをくれた少女。

今、倒すべき、敵。

「…………っ」

至近距離で交錯した互いの視線は、しかしすぐに途切れた。なのは  
が何かに集中するように目を閉じたのだ。

（集、中…？っ、まさか！？）

「っ…！」

背後に振り向くと同時にラウンドシールド。そして、その判断は正  
しかった。俺が先程かわした弾丸が、ほぼ直角に近いカーブを描い  
て逆走して来たのだ…！

「くっ…」

幸いそこまで火力は高くなかったので、簡単に防御することが出来  
た。だが、

《Flash Move》

「せええええっ…！」

上空から突っ込んで来たのはがレイジングハートに魔力を纏わせ、  
思いつ切り振り下ろす…！

「ちいっ…！」

アクセルで受け止め、弾きながら距離を取った。牽制に斬撃を放ち  
ながら、再び距離を開けて視線を交わす。

「はあっ…、はあっ…、はあっ…」

「ぜえっ…、ぜえっ…、ぜえっ…」

互いに魔力を放出し合い、休みなしで長時間戦っているのだ。これ以上は、持たない。

『アクセル』

『…Yes, Sir（了解）』

覚悟は決まった。やらなければやられる。ここはそういう場所だ。

「……………」

《Charge（集束）》

俺が刀を大上段に構えると同時、アクセルが動き始めた。足元に巨大な銀色の魔法陣を展開し、そこから溢れ出す黒いエネルギーを刃に集中させていく。

《Scanning（スキャン）》

「っ!？」

なのはを中心に黒い立方体が展開し、中の空間をスキャンする。…捉えた。

「受けてみる、なのは。これが、俺の背負うモノだ」

《Gravity Zamber》

アクセルの声と同時に、黒く巨大になっていた刀身が更に巨大化。凄まじいエネルギーを秘めたそれは、空間を震わせながら発現の時を静かに待つ。

『ちょ、ちよつと!! そんなもんぶついたら、なのはちゃん死んじやうわよ!?!』

さすがに危機感を抱いたのか、エイミィが警告の通信を入れる。

「…やかましい」

俺はただそれだけを呟き、前を見据える。

「こんなところで俺は…、終わる訳にはいかないんだよ…!!」

何一つない空虚な心。その奥に宿る、憎悪の炎。それだけが、「ナシ」を構成する全ての要因。<sup>フアクター</sup>それさえもなくしてしまったら俺は…、

「グラビティイイ!! ザンバアアアアア!!」

万感の思いを込めて、俺はアクセルを振り下ろした。

《The one to Drive Reason Mad / Start (理を狂わすモノ、起動)》



「はあっ…、はあっ…、はあっ…」

アクセルを辛うじて構えながら、刃が薙いだ軌跡を見遣る。今の俺の全力を込めた技だ。さすがのなのはも…。

「いたた…」

「!？」

が、驚くべきことになのはは無傷だった。小さな身体を覆うバリアジャケットは所々傷付いているものの、本人にダメージは全くない。

「今度はこつちの…!!」

《Divine》

シューティングモードに変形したレイジングハートの先端に、魔法文字の刻まれた環状魔法陣が展開。魔力を集束させていく…!!

「番だよっ!!」

《Buster》

二人の声が重なった瞬間、極太の桜色の砲撃が放たれた!!

「ちいっ!!」

大技で魔力を出し切った為全力は出せないが、間一髪ラウンドシー

ルドを展開する。

「あ、ああ、ああああ!!」

ふらつく体に褐を入れ、ラウンドシールドの維持に全力を注ぐ。激突する魔力の奔流でバリアジャケットが裂けるが、今は目の前に集中!!

「ああああああっ!!」

そして俺は、ぎりぎりの所でディバインバスターを防ぎきった。

「はあっ…、はあっ…、はあっ…」

荒い息を整えながら周囲を見回す。あれだけの威力の砲撃だ。もうなのはもふらふらのハズ。早く見付けて叩かなくては…!!

「!？」

悪寒を感じた俺は、直感的に空を見上げる。そこに居たのは、

桜色の、天使。

「ナナシ君に見せてあげる。私の本気を。その想いを」

疲れや消耗など微塵も感じさせない力強い声。背中から巨大な桜色の羽根を生やしたなのはは、レイジングハートを天に向け構える。

《Lock release・Energy absorption beginning・Code name「Starlight Breaker」Axiom start（ロック解除。

エネルギー吸収開始。コードネーム「星光の殲滅者」起動」《

人間の処理能力を遥かに越えるAI、レイジングハートが高速で演算・修正を行うことにより、それは発動した。

正面と足元に魔法陣を展開したなのは、その周囲に渦巻くありとあらゆる力が集束され、膨大な魔力の塊を形成していく。流れるように力が吸収されるその光景は、正に桜色の流星。

「それは…、その魔法は…」

《It ends. We break your nightmare and despair to pieces here》  
終わりです。あなたの悪夢と絶望は、ここで私達が打ち砕きます」《

レイジングハートが魔法の発動をサポートしつつ、俺にそう宣告する。

「受けてみて、ナナシ君。これが私の、全力全開！」

《Starlight Breaker》

そう叫んだのはは、レイジングハートを振り下ろし、魔法陣に突き入れる！！

『だからね、あたし、星の光で魔法を考えたの』

『へえー。どんな？』

星を眺め続けること30分。唐突に少女は話を戻した。

『光が極めて優れた、扱いの難しい一種のエネルギーだってことは知ってるよね？』

光や闇という、世界の根本に関わる力は強力な分、扱いが難しい。そのくらいは知っていた。

『そこにあたしの魔法、  
周囲に存在するありとあらゆる力を  
吸収する理論、理<sup>DRM</sup>を狂わすモノを合わせるの』

事故でリンカーコアを大きく損傷した彼女は魔法を扱えなくなったが、彼女自身が生み出したその理論で、大気中に存在する魔力を媒体に魔法を操ることを可能にしたのだ。

『集めたエネルギーを光り輝く魔力に変換、集束させて超強力な砲撃として撃ち込むの』

『相変わらず発想がぶっ飛んでるなあ…』

少女の説明を聞き終えた少年は溜め息と共に苦笑。いつものことだがこの少女、相変わらず発想が凄まじ過ぎる。

『で、名前はもう決めてあるのか？』

『うん。勿論決めてあるよ』

微笑んだ少女は満天の星空に手を伸ばし、

『全てを打ち壊す星の光。星光の殲滅者。その名も』

』

「スタアアアライトオオオオオ！！ブレイカアアアアア！！！！」

『スターライトブレイカー、つてね』

二人の声がシンクロした瞬間、俺は桜色の光に飲み込まれた。

「な、なんつーバカ魔力……」

僕は画面を見たまま思わず呟く。ナナシのグラビティザンバーを喰らうかに見えた瞬間、なのはの魔力が爆発的に増大したのだ。

その値、通常時の10倍以上。

その魔力でグラビティザンバーを防御、ほぼ無傷でやり過ごし、ナナシの攻撃を上回る程の威力のディバインバスター。

そして、あの砲撃魔法、スターライトブレイカー。

「うっそ……何これ……」

技の解析に当たっていたエイミィが、呆然とした表情で呟く。

「……っ！？」

モニターに映し出された光景を見て絶句する。そこに広がっていたものは、

大気中に存在する僅かな魔力や魔法の残滓、その全てがなのはの元にかき集められているというモノだった。

「あのデバイスがなんか発動したみたいんだけど…、ぐちゃぐちゃな公式設定と超高等技術のせいで解析出来ない…」

「なんだって…!？」

次元世界を管理する時空管理局、その技術でも解析出来ない…!？

「あんなの喰らってナナシ君…、生きてるかな…？」

エイミイが心配げに呟く中、僕も視線を戻す。

(…死ぬなよ、ナナシ!! 乗り越えて、戻って来い!!)

「はあっ…、はあっ…、はあっ…」

私は荒い息をつきながら、フライアーフィンの維持に集中する。私の魔力をほぼ全部使い切ってしまった為、宙に浮かぶのがやっとな状態だ。レイジングハートがフォローしてくれたからよかったものの、そうじゃなかったらアレを撃った瞬間私も真っ逆さまだった。

「…っ!! ナナシ君は…!？」

私が下を見下ろすと、ナナシ君は海目掛けて真っ逆さまに落下していく所だった。

「ナナシ君っ!!」

私は残った魔力を振り絞り、海の中に沈んでいくナナシ君目掛けて急降下する。

彼の悲しみを終わらせる為に。本当の私達を始める為に。

（… 負けたのか）

海の中を落ちて行きながら、最初に浮かんだ言葉はそれだった。

（あの日からずっと戦ってきて…、やっとあいつを見付けて…、それなのに…）

所詮、その程度だったのだろう。ナナシという人間は。

（何も出来なかったから全て捨てて…、でも結局何も出来なくて…）

なにもかも捨ててここまで来て、結局あいつどころか、自分が育て上げた魔導師に負けて。

（ああ…、そうか…）

ふと、視界が歪んでいることに気付いて、俺はその事実を理解する。

（俺、悔しかったんだな…）

村を守れなかった自分が。仲間を守れなかった自分が。ユキを守れなかった、自分が。

全てを無くすのと引き換えに、俺は一つの目的を得た。それさえ無くした俺は、どこに行くのだろう。

（このまま…、落ち続けるのも…、悪くないかもな…）

『ナナシ君っ！！』

どんどん沈み続ける思考を、少女の声が遮った。なのはが俺を抱き抱え、海面目掛けて急速に浮上する。

「「ぷはあっ！！」」

海面から脱出し、空へと舞い上がるなのは。

「ナナシ君…」

「…お前の勝ちだ。好きにしてくれ」

心配げに覗き込むのはに対し、全てがどうでもよくなった俺はそんな風に投げやりに言葉を投げ掛ける。だが、彼女は俺を見据え、

「…名前を、教えて」

それだけを言った。

「っ！？」

思いもよらない言葉に、俺は絶句する。

「まだ教えて貰ってないもん。ナナシ君の本当の名前」

「…どうしてそんなことを聞く？」



俺の訝しげな視線に対し、なのはは真っ直ぐに俺の目を見据え、

「今度こそ、始めたいから。友達として、一緒に支え合って行きたいから」

はつきりと、そう答えた。

「…ナツキ。天城ナツキだ」

諦めた俺は、久しぶりにその名を名乗る。どうせ選択権はないのだから。

「ナツキ君、か…。いい名前だね」

なのはが微笑みながら、その名を口にする。久々だからということもあるが、彼女に呼ばれたその名前が少しくすぐつたい。

「それじゃ、ナナシ君の物語はこれでおしまい」

と、なのはが唐突にそんなことを言った。

「復讐と過去に囚われていたナナシ君はもう終わり。これからは、ナツキ君として生きていくの」

「…バカ言っな。俺の中にはまだあいつを、プレシアを殺したい気持ちが残ってる。なのにナツキとして暮らせて？」

唐突に何を言うのかと思えば、…そんなことが。

「確かに私は、ナツキ君にプレシアさんを殺して欲しくない。そんなナツキ君は見たくないし、フェイトちゃんもきつと悲しむから」

そのくらいわかっている。なのはが悲しむであろうことも、フェイトに憎まれるであろうことも、全部わかってる。でも、

「…じゃあ俺は、これからどうすればいいんだよ」

プレシアと対面した時のことを思い出す。感情は理屈じゃ止まらない。それはよくわかっている。

「そんなの、決まってるよ」

八つ当たりのように尋ねた俺になのはは笑い。

「ナツキ君が、幸せになればいいの」

当たり前だと言わんばかりに、答えた。

「赦してあげて、とは言わない。きつとそれは難しいことだから。でも、ユキさんが生きていたとしたら、ナツキ君に何を願ったと思う?」

なのはは祈るように目を閉じ、

「私だったらきつと…、ナツキ君に、幸せになって欲しいって、…  
そう思うよ」

そう言った。

「最後に私が使ったアレ、元々はユキさんのモノなんですよ？私がナツキ君を助けたい、って思ったら、レイジングハートから使い方が私に流れ込んできたの」

「!？」

思わず俺は、レイジングハートに視線を送る。

《I followed it as told it that she must do so because I was able to think (あの子がそうしろ、と言ったように思えたので、私はそれに従ったまでです)》

対しレイジングハートはしれつと答える。こいつ…、あいつの陰で霞んでたけど、前から割とそんな感じだったつけ。

《∴Master (∴主人)》

と、今まで沈黙を貫いていたアクセルが口を開き、

《Isn't it good any longer? (もう、いいんじゃないのか?)》

終わりを告げた。

「っ!？」

今まで共に戦ってきた相棒の思わぬ言葉に、俺は激しく動揺する。

《What you shoulder is too heav

y i n t e n - y e a r - o l d   c h i l d . I t   i s  
a n   o p p o r t u n i t y ( 主人が背負うものは十歳の子供に  
はあまりにも重い。潮時だ ) 》

「なんだよお前ら…、みんな揃って…、まるで俺に普通になれって  
言ってるみたいじゃないか…」

思わず声が掠れ、がたがたと震え出す。普通なんて…、俺とは正反  
対に位置するものじゃないか…。

「普通で、いいんだよ」

でも彼女は、迷子の子供を安心させるように笑って。

「これからナツキ君は、ナツキ君として自由に生きて、幸せになっ  
ていいの」

そのなのはの台詞を引き金に、俺を縛っていた何かが壊れる。

「今まで一人でよく頑張ったね…、お疲れ様」

そう言ってなのはは、俺を優しく抱きしめてくれた。

「…ははっ」

温もりに包まれて、水平線上に顔を出し始めた太陽を見て、俺は唐  
突に気がついた。

「世界はこんなにも…、優しかったんだな…」

そんな簡単なことに今まで気付けなかった自分にバカらしさと、そんな大切なことを教えてくれたなのはに感謝の念が込み上げてくる。

「まだわからないけど…、進むべき道なんて見えないけど…」

水平線から昇り始めた太陽に、更にその先の星々に語りかける。

「それでも向き合って…、俺は、前に進むよ…」

こうして俺はナナシの名を捨て、再び天城ナツキとして、生きることになった。

そして、レイジングハートが一瞬だけ、普段とは違う色を点していたことに、俺達は気付かなかった。

### 第十三話「覚悟」(後書き)

げげごぼっおえっ (クサ過ぎて吐いた  
なにこれ中二w

そしておっそろしくgdgdwww

しかも前書きまでアレだしwww

もう俺死んだ方がいいかもしれないw

なのはとユキの残した魔法のおかげで、過去を乗り越える決意をしたナナシ君改め天城ナツキ君。これからどう生きていくのか楽しみですね。

次回、説明回っぽくなる予定。

え？レイ八さんにフラグ？…ナンノコトカナ？

## 第十四話「想い」（前書き）

はい、十四話です。

説明&a m p・オリジナルとクサさ加速回ですw  
ではどーぞー

## 第十四話「想い」

「…どうにか、丸く収まったみたいね…」

意外な結果に終わった戦闘を見届け、私はホッと一息つく。

「まさか、なのはさんが勝つなんてね」

魔法の技術や研究に特化した少数民族、天城の一族の中でも歴代最高の魔導師である、ジュエルシードの制作者、天城ユキ。

その兄にしてユキの片腕的ポジションを務め、重力と磁力の二つの変換資質を持ち、刀を操る天才魔導師、天城ナツキ。まさか彼がナシなんて名前を名乗って、こんな辺境の世界に來ているとは思わなかった。

「恋する乙女は止められない、かしら？」

いくら迷いがあつたとはいえ、Sランク魔導師の彼を倒したなのはさん。本当、驚く程強い子だわ…。

『これが私の、全力全開！！』

魔法の力は精神の力。それだけ彼を想っていたのだろう。最後の最後で謎の魔法を見せ、ナシ君…、いや、ナツキ君を完敗に追い込んだ少女。色々と気になることはあるけど…。

「とりあえず三人を回収しましょう。お説教タイムはその後です」



「指示や命令を守るのは、個人のみならず、集団を守る為のルールです」

アースラに拾われ、ようやく一息つくのかと思った瞬間、それはやって来た。リンディ艦長の控えるミーティングルームに呼び出され、勝手な行動をしたお叱りを受けているという訳だ。なんだかんだで忘れていたが、海上のジュエルシードを回収する時も勝手に出て来ていたので、その分もまとめてお叱りを受けている。

「勝手な判断や行動が、あなた達だけでなく、周囲の人達をも危険に巻き込んだかもしれないということ、それはわかりますね？」

「……はい……」

リンディ艦長に睨まれ、三人揃って縮こまる。全くもってその通りなので反論が出来ない。特に俺はユキを守る為もあり、一人で動き回っていた為集団での行動に慣れていないのだ。

「いくら状況が一段落したとはいえ、あんなことがあった後でその場所に無断で立ち入り、あまつさえ戦闘行動。しかも、人が殺せるレベルの魔法の使用。本来なら、厳罰に処す所ですが……」

厳罰、と聞いてなのはの身体がびくりと震える。それを見た俺は、なのはの一步前に出た。

「……悪いのは俺です。なのはを勝手に巻き込んだのは俺の責任です。吹っ掛けた俺や自ら結界を張ったユーノはともかく、なのはには十分情状酌量の余地があると思います」

「ナツキ君…」

なのはに優しく笑い掛けながら視線を戻すと、ぽかんとした顔のリンディ艦長がいた。

「…艦長？」

「…ふふっ。ナツキ君も丸くなったわね。最近までは近寄る者全てを傷付けるような刀みたいな雰囲気だったのに…。なのはちゃんに惚れた？」

「！？」

「にやわっ！？」

一瞬動揺するもすぐに冷静さを取り戻し、変な声が聞こえた背後をこっそりと窺う。

「……………あっ」

が、視線が合った瞬間、顔からぼふっ！と煙を出し、赤くなりながら俯いてしまう。調子狂うな…。

「…って、そんなことはいいいんですよ。問題はなのはの厳罰を撤回して貰えるのかどうかです」

頭を掻きむしりながら視線を戻すと、口に手を当て微笑むリンディ艦長の姿が。

「いやあ、ごめんなさいね。なんだか新鮮で…」

『…ユーノ、俺、そんなに変わったか？』

そんな周りの反応に違和感を覚えた俺は、ユーノに念話で尋ねてみた。

『うん。変わった。物凄く。前まではむき身の刀みたいな危険さがあつただけど、今は鞘に収められた刀みたいなイメージ』

『…なんか違うのか？それ』

ユーノがユキみたいな答えを返してきた為、思わず聞き返す。

『むき身の刀だったら危ないんだけど、鞘に収められていれば安全でしょ？雰囲気が柔らかくなって、ナツキの持つ優しさが前面に出始めた、みたいな』

『…優しい、かあ？』

どうも俺の周りには俺を過大評価する奴が多い気がする。ユキとかなのはとかユーノとかリンディ艦長とか。

「あ、あの」

と、再起動したなのはが一步前に出た。

「私のアレはともかく、ナツキ君の攻撃は、直撃しても死にませんよ。それにわざと外してくれたし」

「おい待て」

突飛なのはの発言に俺は思わずツツコミを入れる。

「俺のアレには…、十分人が殺せるだけの魔力が込められてたぞ？」

実際、一歩間違えればそうなっていただろう。DRMを起動してくれたレイジングハートにつくづく感謝だ。

「でもナツキ君、振り下ろす時アクセルをちょっと傾けてたよ？」

「……………はい？」

記憶にない証言をされ、頭が一瞬フリーズする。

「…アクセル、ズレてた？」

《It shifted. Without any mistake (ズレてたな、バッチリと)》

振るわれた張本人(?)の証言も入る。

「え?でも俺そんなことしてない…」

「無意識だったんじゃないかな」

と、否定する俺の声を遮りなのが言う。

「口ではああ言っても、なんだかんだで私を傷付けないようにしてたんだよ、ナツキ君は。優しいから」

…そんな屈託のない笑顔で言われたら、反論など出来るハズがない。

「こほん。…まあ、結果として丸く収まりましたし、今回の件はナツキ君にとってもプラスになりました。よって今回のことについては、不問とします」

「「「……………え？」」」

唐突な赦しの言葉に、三人揃ってぽかんとしながらリンディ艦長を見る。

「ただし、二度目はありませんよ」

リンディ艦長は悪戯っぽく微笑みながら、片目をつむってみせた。  
…最初からそのつもりだったな、この女。

「はい…」

「すみませんでした…」

「ありがとうございます…」

三人で謝罪すると同時、壁際に立っていたクロノが動き出す。

「さて、問題はこれからだ。エイミィ、モニターを」

「はいはい」

クロノの指示にエイミィが軽い声で答え、モニターに一人の女性を映し出す。

「っ!!」

そこに映し出されたのは、プレシア・テストロッサ。

俺の全てを奪った、怨敵。

「!？」

心がどす黒い感情に染まっていくが、不意に握られた右手の感触に我に戻る。

「…大丈夫？」

「…ああ。ありがとう」

なのはの手を握り返し、モニターに視線を戻した。

「プレシア・テストロッサ。僕らと同じ、ミッドチルダ出身の魔導師。専門は、次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師でありながら、違法研究と事故によって、放逐された人物です」

俺に気遣うような視線を送りながらも、クロノが語り始めた。

「三人の証言もありますし、登録データと昨日の攻撃の魔力波動も一致しています」

「さすがに自分の親族を皆殺しにするような奴の顔を、間違えるはずがない。間違いなくその女だ」

俺の言葉にクロノが頷く。これだけの状況証拠が揃えば、管理局も

大々的に動ける訳だ。

「そしてあの少女、フェイトはおそらく…」

「親子…、ね…」

「フェイトちゃん…、母さんって言ってたね…」

なのはの言葉に、フェイトの声が蘇る。

『母さん…』

驚きと共に、どこか怯えたような色を含んだ声。その声が何故か、脳裏に焼き付いて離れない。

「ナツキ君、他にプレシア女史について、何か情報はないの？」

「わかりません。やたらジュエルシードに固執していて、死人を生き返らせたがっていたこと以外はなんとも…」

実際俺の知っているプレシアについての情報なんてその程度のもんだ。調べ始めようとした矢先にジュエルシードを追うことになったので、彼女については全く知らない。

「…そう。エイミー、プレシア女史についてももう少し詳しいデータを集めて。放逐後の足取り、家族関係、その他なんでも」

「はいはいお待ちを。すぐに探しますよー、っと」

エイミーが軽く承諾し、手元のコンソールを弄り始めた。

「プレシア・テストロッサ。ミッドの歴史で、26年前は中央技術開発局の第三局長でしたが、当時彼女個人で開発していた次元航行エネルギー駆動炉、『ヒュードラ』使用の際違法な材料によって実験を行い、失敗。結果的に、中規模次元震を起こしたことによって、中央を抜けて地方へと異動になりました」

この短時間でどうやってこれだけの情報を集めたのか気になったが、とりあえず今は聞くことに集中する。

「随分と揉めたみたいです。失敗は結果に過ぎず、実験材料にも違法性はなかったと。辺境に異動後も数年間、技術開発に携わっていました。しばらく後行方不明になって…、それっきりですね」

「家族と、行方不明になるまでの行動は？」

リンディ艦長の質問に対し、エイミィが困ったようにコンソールを弄る。

「その辺のデータは綺麗さっぱり抹消されちゃってます。今本局に問い合わせ調べて貰っていますので、一両日中には上がってくると思います」

「ふむ…。プレシア女史もフェイトちゃんも、あれだけの魔力を放出した直後だからそうそう動きはとれないでしょう。その間にアースラのシールドも強化しないといけないし…」

リンディ艦長が腕を組み、しばし思考。そして、

「あなた達は、一休みしておいた方がいいわね」



そんなことを宣った。

「え？でも…」

「特になのはさんは、あまり長く学校を休みつぱなしでも良くないですし、家族や友達も心配してるでしょう。一時帰宅を許可します」

そう言ってリンディ艦長は、ニッコリと微笑んだ。

「…で、なんでこんなことになってんだ？」

かばんの中に入れられたナツキ君から、恨めしげな声が響く。

「仕方ないよ…。ナツキ君の記憶は消されてるし、部外者が学校に入るのもマズいから」

「だとしてもこれはないだろ…」

かばんからひょっこりと、黒い猫さんが顔を出した。今ナツキ君は変身魔法を使い、私の護衛として学校に来ている。多分大丈夫だとは思うけど、念の為ということでリンディさんに頼まれたのだ。ちなみにそのリンディさんと言うと、私の家でお母さんにご挨拶とお話をしている真っ最中です。

「くっそ…、変身魔法なんか覚えるんじゃないかった…」

「いいじゃないナツキ君、可愛いよ？」

私は溜め息をつくナツキ君の頭を、机の下でこっそりと撫でる。

『…お前、俺が年上の男だってこと忘れてないか？ユーノじゃあるまいしそんな扱いされても困るんだが』

『なんでそこで僕が！？』

とぼつちりを受けた形のユーノ君が、かばんの中からツツコミを入れる。

『いやだって俺ユーノみたいになのはと風呂入ってないし』

『だ、だからアレは不可抗力だって！！溺れたし！！』

温泉の時のことだろう。そういえば結局ナツキ君と入れなかったなあ、なんてことを考え、恥ずかしくなってやめた。

『はいはいそーですねー』

『…ナツキ、ホント変わったよね…。遠慮がなくなったというか…、口が悪くなったというか…』

ユーノ君ががつくりとうなだれ、溜め息をつく。

『でも、いいんじゃないかな』

私は黒板を眺めながら、そう呟く。

『ナツキ君、無理せず自然な自分になれてる気がするし』

『…自然な自分、ね。忘れてたよ、そんなもの』

ナツキ君が苦笑して、体を丸める。そういえばあんまり寝てなかったっけ。

『おやすみ…、ナツキ君…』

私はその声を最後に、授業に意識を戻した。

「…で？」

人型に戻った俺は、目の前の屋敷を見上げる。そこにあるのは、以前行ったことのある月村家と同規模のお屋敷、バニングス邸だった。

「何故俺はこんなところに？」

あの後かばんの中で熟睡していた俺は、目が覚めたらここに居た。隣ではニコニコと微笑むのがおり、なんか嫌な予感が…。

「ナツキ君をアリサちゃんとすずかちゃんに紹介するの」

「…は？」

いきなり何を言い出すのかこいつは。

「実はね…」

なのは得意げに、事のいきさつを話し始めた。

「なのはちゃん！よかった、元気で…」

昼休みと同時、すずかちゃんが駆け寄ってきて、私の手を掴んで下にブンブンと降る。

「う、うん。ありがとうすずかちゃん。アリサちゃんも」

若干気圧されながらも、二人にお礼を言う。

「まあ、元気みたいでよかったわ」

「…ふふっ」

顔を背けながら照れるアリサちゃんに、二人顔を見合わせ笑う。

「とりあえず戻って来れたけど…、まだやらなくちゃいけないことがあるから、戻らないといけないんだ」

二人の顔を真剣に見据え、はっきりと告げる。フェイトちゃんのことを少なからず思っているナツキ君共々、近い内にアースラに帰らないといけない。ジュエルシードも全て封印したとはいえ、まだ九個はフェイトちゃんの手の内だ。

「大変だね…」

「でも、決めたんでしょ？」

すずかちゃんが心配げに、アリサちゃんが諦めたように問い掛ける。

「うん、大丈夫」

もう、決めたことだから。ナツキ君と一緒にジュエルシールドを完全に封印して、フェイトちゃんに話を聞く。それが、私のやりたいこと。

その言葉で納得したのか、二人はそれ以上聞かないでくれた。

「放課後は？少しくらいなら、一緒に遊べる？」

『ナツキがいるから、多分大丈夫だと思うよ。むしろ、その為に来させたんだと思う』

すずかちゃんの質問に、ユーノ君が私に答えてくれた。ナツキ君…、そうだ！！

「二人共、今日はもう一人連れて来てもいいかな？」

「へ？どうしたの急に」

私の唐突な言葉に、すずかちゃんが聞き返す。

「私の大切なお友達なんだけど、今までずっと大変だったから、友達が作れなかったの…。だから、よかったら二人にも友達になって欲しいなあ、って」

確かにナツキ君は一步前に進めた。前よりも優しくなれた。なら、少しでも多くの人に知って貰いたいと思う。

「私は全然大丈夫だよ。アリサちゃんは？」

すずかちゃんが快諾し、アリサちゃんに視線を送る。

「別に構わないけど、集合場所は家にしましょ。新しいゲームもあるし」

「本当！？」

アリサちゃんも問題ないようで、更に場所まで貸してくれた。

「そういえば、タベ怪我してる犬を拾ったの」

「犬？」

唐突なアリサちゃんの話題転換に、すずかちゃんが聞き返す。

「うん。変わった子なんだけど、凄くいい子。よかったら会ってあげて」

「うん！！」

私は放課後を楽しみにしながら、勢いよく頷いた。

「確かにみんなナツキ君のこと忘れちゃってるけど、それでもアリサちゃんやすずかちゃんなら、きっと良い友達になってくれるから」

「……………」

なのはの発言に目を瞠る。普通に生きる、とは言ったが、まさかここまでしてくれるとは思っていなかった。

「ホント…、お前はスゴイ奴だよ」

俺の人生を劇的に変え、ここまでしてくれた彼女には、感謝してもしきれない。

「普通だよ、普通」

対しなのはは後ろで手を組みながら微笑む。…こいつには一生敵わない。

「いらっしやい」

「なのはちゃん、待ってたよー」

明るい声と共に扉が開き、二人の少女が姿を現す。目の前の少女の原点となった、正反対な二人の少女。

これは、新しい俺の第一歩。今度こそ普通の幸せを、手に入れる為の始まりの行動。

「初めまして。天城ナツキです」

俺は自然な笑顔を浮かべ、二人に自己紹介をした。

「いやー、まさかあの時の人がなのは知り合いだったなんて…」

「世の中つてもものは、案外狭いからな」

地面に寝そべっていたあたしは、その声を拾い目を開ける。片方はあたしを拾ったあの少女のものだが、もう一方の方に違和感を感じた。

(…この声、どこかで…)

聞き覚えのある声なのだが、頭に靄が掛かったかのように思い出せない。何故かはわからないが、その声に引っ掛かりを感じた。

「で、アリサがタベ拾った子ってのは？」

「あ、ほら着いた。この子よ」

あたしを守る檻の前からの声に、視線をそちらに向けると。

「…　　っ!？」

顔を驚愕の色に染める少年と少女が居た。

『アルフ…、さん…?』

『…あんた達か』

『その怪我はどうした?誰にやられた?』

呟いたあたしに対し、少年が気遣うように質問してくる。



(…そうか)

違和感の原因はこれか。彼の纏う張り詰めた空気が弛緩し、穏やかな気配に包まれている。声に違和感を感じたのも当然だろう。言魂というように、言葉にはその人の魂が宿るものだから。

『…それに、フェイトちゃんは…』

少女の声を引き金に思い出す。傷付き倒れたフェイトと、空虚な瞳のあの女。そして、

何も出来なかった、自分。

「あららら、元氣なくなっちゃった。どした？大丈夫？」

背を向けたあたしに、拾い主の少女が言うが、あたしは答えない。

「傷が痛むのかな？そつとしといてあげようか」

「…うん」

カチューシャの少女の言葉に賛成し、背後の気配が動き始めるのを感じる。

「あ…」

少女の声にちらりと振り返ると、フェレットの姿に戻ったあの金髪の少年が、檻に入ってくるところだった。

「ユーノ、こら…、危ないぞ？」

「大丈夫だよ、ユーノ君は」

拾い主の少女の言葉を遮り、あの少女が答える。

「念の為俺が残るよ。三人は楽しんできて」

「うん、ありがと、ナツキ君。アリサちゃん、すずかちゃん、行く？」

「…そうね、それじゃお茶にしようか」

「美味しいお茶菓子も持って来たよ」

「うわー、楽しみー」

あの少女に促され、二人が姿を消す。残ったのは、三人だけ。

『一体どうした？お前らの間で一体何が？』

少年が心配の色を含めながら、あたしに聞いてくる。

『ジュエルシードを集める前に、お前にはやるべきことがあるだろうが！』

この子には最初からわかってた。あたしが本当にすべきことが、きちんとわかってた。彼に打ち明ければ、きっと力になってくれる。そう思った。が、

『あんたがここに居るってことは、管理局の連中も見てるんだろう』

ね…』

『…うん』

『時空管理局、クロノ・ハラウンだ』

フェレットの声に答えるように、念話にあの少年の声が割って入る。

『どうも事情が深そうだ。正直に話してくれば、悪いようにはしない。君のことも、君の主、フェイト・テストロッサのことも』

『話してみてくれないか？こいつはあまり融通効かないけど悪い奴じゃないし、最悪俺やなのはだけでも力になってやる』

クロノという少年の言葉に同意し、続けて話す少年。

『融通効かないって…、相手の心証悪くしてどうする…』

『事実を客観的に述べただけだが？』

クロノの溜め息に、少年が笑いながら答える。

『話すよ…、全部…』

私は覚悟を決める。

『ただど約束して。フェイトを助けるって。あの子は何も…、悪くないんだよ…』

『任せろ』

少年は即答した。迷いなど、一切見せずに。

『訳有りなのは最初からわかってた。例え何があろうとも、俺がいつを助けてやる』

ニヤリと笑った彼に感謝しながら、私は全てを語り始めた。

『なのは、聞いたかい？』

『うん。全部聞いた』

アルフの告白を聞き終えたなのは、脳内に響いたクロノの声に答えた。

『君達の話と、現場の状況、そして彼女の使い魔、アルフの証言と現状を見るに、この話に嘘や矛盾はないみたいだ』

『…クロノ。あの女、プレシア・テストロッサを捕縛する事は可能だな？』

俺は自分でもぞつとする程低い声でクロノに質問する。アルフの話聞き、プレシアへの憎悪が再燃し始めていた。

『可能だ。今までの証言や君の過去、アースラを攻撃した事実。これだけあれば、逮捕の理由にはお釣りが来る』

クロノも怒っているのか、言葉の端々に怒りを滲ませながら即答す

る。

『だから艦長の命があり次第、僕達は任務をプレシアの逮捕に変更することになる。君達は、どうする？』

どうするか？そんなこと、決まってる。

『…私は、フェイトちゃんを助けたい』

『…上等』

なのはがそう答えた瞬間、俺はニヤリと笑った。

『あいつが悲しむ顔は見たくない。これは俺の我が儘で、身勝手なエゴなのかもしれない。ただ単にあいつにユキを重ね、救うことで悦に浸りたいだけなのかもしれない』

俺は淡々と、自らを貶めるようにして言葉を紡いでいく。確かにあいつはユキにそっくりで、悲しげな目をした少女は空虚なユキを思い出させる。…だけど。

『だけど、それでも俺はあいつを救いたい。それがなのはが教えてくれた、天城ナツキとしての俺の選んだ道だ』

次の瞬間、俺ははっきりとそう告げた。迷いなく、真っ直ぐに。世界の優しさを、自らの意志を見せてくれたなのは。ならば俺も、自らの意志を貫くだけだ。

『それに、友達になりたいって伝えた、その返事をまだ聞いてないし…、ああっ！…！』

何か大切なことでも思い出したのか、なのはが思わず大声を上げる。

『ナツキ君！！友達になりたいって言った答え、聞いてないよ！！』

『…は？いやいや、アレはフェイトに言ったんだろ？』

ずっこけそうになりながらも、俺はなのはの質問をのりりくらりとかわす。

『ナツキ君にも手伸ばしてたよ！？さあ、答えて！！』

詰問するように問い掛けるのはに対し、観念した俺は。

『…決まってるだろ、そんなもん。言わせんな恥ずかしい』

事実上の、肯定の言葉を返した。

『二人の意志はわかった。こちらとしても、君達の力を使わせて貰えるのはありがたい。フェイト・テストロッサについては、二人に任せる。それでいいか？』

『…うん。なのは…、ともう一人、なんか別の名前になってるけど…』

『ま、色々あってな。これからは天城ナツキだ』

俺は笑いながら訂正する。そういえば、天城ナツキになってから会ってなかったしな。

『…ナツキ、なのは、頼めた義理じゃないけど…、だけど、お願い。フェイトを助けて…。あの子は今…、ホントに一人ぼっちなんだよ…』

アルフの懇願するような声に、俺達は。

『そんなこと、頼まれるまでもないよ。大丈夫、任せて』

『一人ぼっち？ 知るか。一人ぼっち同士で集まれば、それはもう一人じゃない。無理矢理にでも引つ張ってきてやる』

なのはは笑いながら。俺は不敵に。

当然のように答えた。

『予定通り、アースラへの帰還は明日の朝。それまでの間に、君達がフェイトと遭遇した場合は…』

『…うん。大丈夫』

クロノ君の声に頷きを返し、私はアリサちゃんとすずかちゃんとの会話に意識を戻す。

「なのは…、なんか、少し吹っ切れた？」

「え、あ、えと、どうだろう」

どうなんだろう。自分ではあんまりよくわからない。

「心配してた…、てか、あたしが怒ってたのはさ、なのはが隠し事をしていることでも、考え事していることでもなくて…」

アリサちゃんが、本心を吐露するように呟き始める。

「なのはが不安そうだったり、迷ったりしてたこと。それで時々、そのままもう私達の所へ帰って来ないんじゃないかなって思っちゃうような目をする事」

「……………」

そんなアリサちゃんの思いに目頭が熱くなり、胸が苦しくなる。…けど。

「行かないよ、どこにも」

これだけは、はっきりと言える。

「友達だもん。どこにも行かないよ」

「そっか…」

「うん…」

きつぱりと告げた私に、二人が安心して笑顔を見せる。その言葉を最後に、お茶会はお開きになった。

そう。どこにも行かない。私は、私達はちゃんと、ここに帰ってく



る。ただ少しだけ、いつもと違う時を過ごすこと。それは、これから先自分らしく真っ直ぐ生きる為、後悔しないようにする為の、小さな旅。

「…良い顔になったな。迷いは消えたみたいだな」

家に帰って来た私を見て、お父さんがそう呟く。

「お父さん…。私が迷ってたこと、知ってたの？」

「そりゃそうだ。お父さんは、なのはのお父さんだからな」

驚いて尋ねる私に、お父さんは当然だとばかりに答える。

「明日はまた、朝早くから出掛けるんだろう？」

「…心配をおかけします」

頭を下げた私に対し、お父さんは手を私の頭に乗せる。

「まあ、なのはは強い子だからな。父さんはそれ程、心配してないよ」

お父さんは私の瞳を真っ直ぐに見据え、

「頑張つてこい。しっかりな」

それだけを告げた。

「うんっ！！」

私は元気よく答え、満面の笑みを浮かべた。

「よっ」

翌朝五時半。玄関から出て来たなのはに片手を上げる。

「うん。おはよ」

挨拶を交わし、互いに視線を交わし合う。言葉はもう、要らなかった。

「……………」

互いに無言のまま、あの場所目掛けて同時に駆け出した。

「来たよ」

しばらくして、ユーノが声を上げる。視線を辿ると、塀の上を並走していたアルフが道路に飛び降りる所だった。

「来たね。始まったばかりの少年」

「来たぜ。全てを終わらせ、新しい少女<sup>未来</sup>を始めさせる為に」

アルフの声に答えると同時、そこにたどり着く。  
海鳴臨海公園。天城ナツキと高町なのはの、始まりの場所。今日ここで、少女の新たな未来を始めさせる為の舞台。

「「「……………」」」

三人が周囲に視線を巡らせる中、俺はただ一人星の消え始めた空を見上げる。星と日の入り乱れる時。天城ナツキが始まってから、一日が立とうとしていることを実感する。

「…来たか」

《Scythe Form》

振り向くと同時、バルディッシュの声。街灯の上に佇んだ少女が、雷の刃を纏った鎌をこちらに向けていた。

「フェイト…、もう止めよう…？あんな女の言うこと、もう聞いちゃダメだよ…。このままじゃ、フェイトが不幸になるばかりじゃないか…！！だからフェイト…！！」

アルフの懇願の声に、フェイトは黙って首を振る。

「だけど、それでも私は、あの人の娘だから」

「無駄だよ、アルフ。言ったって止まりやしない」

そこにいるのはかつての俺。復讐に囚われ世界を閉ざしたナナシ、そのもう一つの姿。

「なのは、頼みがある。あいつの相手は、俺一人でやらせて欲しい」

「「「「！？」」」」

俺の発言になのはだけでなく、フェイトや他の二人も絶句する。

「あいつはもう一人の俺だから。救いを求めて、迷い続けてる悲しみの権化だから。俺はなのはに救われたけど、あいつはまだ彷徨ってる。だから、今度は俺がやりたいんだ」

俺がなのはに敗れるまで止まらなかったように。目の前の少女もきつと、止まらないだろうから。

「…わかったよ。でも、絶対に負けないで」

「わかってるさ」

心の中で礼を述べながら、俺はフェイトを見据える。

「ただ捨てればいいって訳じゃない。逃げればいいって訳じゃない。乗り越えなきゃ、何も見えないから」

《Put out》

レイジングハートが俺の意志に答え、今まで集めた全てのジュエルシードを排出する。

「懸けようか。お互いの持っている、全てのジュエルシードを」

《Put out》

フェイトも無言でバルディッシュに命じ、ジュエルシードを排出させる。

「行こうか、アクセル。終わりと始まりを告げる為に」

《Yes / Sir（了解）》

俺はアクセルを握りしめ、一つの言葉を思い描く。それは、あの日以来名乗ることのなかった、相棒<sup>アクセル</sup>の本当の名前。

「求めるべきは力。災厄を断ち、現実<sup>いま</sup>を守る、不屈の意志。なれば目覚めよ、楽園<sup>ゆめ</sup>の守り手。ガーディアン・オブ・アルカディア、セツト・アップ!!」

《Stand by Ready / Set up》

身体が銀色の光に包まれると同時、いつもの私服がバリアジャケットに変化、その上から漆黒のロングコートを身に纏う。銀の十字架を模したネックレスが刀へと姿を変え、グローブを装着した右手へと握られる。

俺達の全ては、まだ始まってもない。だから、本当の自分を始める為に。悲しみを、終わらせる為に。

「始めよう。最初で最後の、本気の勝負。全力全開の、一騎打ちを」

#### 第十四話「想い」（後書き）

なにこれクサイw

そしてそんな文を書くことに慣れ始めた自分が怖いw  
というかナツキが万能すぎるw

いよいよ次回、ナツキVSフェイト、そして…。

次回もクサさ爆発につき注意。

## 第十五話「本気」(前書き)

それは、復讐に囚われていた俺、天城ナツキに訪れた、一つの転機。受け取ったのは信じる心。始まったのは新しい自分。

俺はなのはのお陰で、過去を乗り越え、大切なことを知った。真っ直ぐに、前を向くことが出来た。

でも、彼女はまだ悲しんでるから。あいつみたいな悲しい顔を、彼女にして欲しくないから。

だから、俺は全ての力と魔法を懸けて、彼女を止める。

何度だって言ってやる。笑顔を見せてほしいから。幸せになって欲しいから。

魔法少女リリカルなのは Another、始まります。

## 第十五話「本気」

どこまでも晴れ渡る青空、その下に広がる草原に仲良く並ぶ人影が二つ。

(…ああ、そうか)

目の前で花の髪飾りを作る女性を見て、私は理解した。これは、昔の夢。目の前にいるのは母さん。私の母さん。いつも優しかった、私の母さん。私の名前を優しく呼んでくれた、母さん。

「出来たわ。ねえ、とても綺麗でしょう？アリシア」

…アリシア？違うよ母さん。私はフェイトだよ？

「さあ、いらっしやい。アリシア」

母さんの呼び掛けに、過去の私が近寄っていく。その頭に髪飾りを載せた母さんは、柔らかに微笑んだ。

「ほら、可愛いわ。ねえ、アリシア」

母さんの笑顔を見た私は、ただ無言で微笑む。

(…まあ、いいのかな…)

母さんが笑ってくれるなら。私の名前を呼ばれないくらい、大したことではない。胸の中に苦しさを押し込み、私はただ、笑う。



『…幻想だ』

ふと、そんな声を聞いた私は、意識を現実に戻す。  
街灯から少年を見下ろす私と、刀を構え、私を見上げる彼。

「……………」

無言のまま、互いの視線が交錯する。彼の真っ直ぐな瞳を見ていると、ここ最近の記憶が脳裏に蘇る。

少女を身を呈して庇った少年。自分を傷付けた相手である私を気遣う少年。力になりたいと言ってくれた、私を何度も助けてくれた、少年。

（…私は、優しい母さんが大好きだから）

だから、私は引き下げれない。彼が母さんの邪魔をするというのなら、

（…全力で、倒す）

街灯から飛び上がった私は、サイズフォームのバルディッシュを構えた。

胸に走った痛みと切なさに、気付かないふりをして。

「始まったか…」

モニターに映し出された二人を見て、静かに呟く。彼が妹に瓜二つの少女を放っておくハズがない、とは思っていたものの。

(…まさか一人で、とはね)

なのはは優しいから。きつと、覚悟はしても躊躇ってしまうから。だから、心を殺して生きてきたナナシである、ナツキが戦う。確かになのはを思いやっていることはわかるが…、

(…君もまだ、躊躇っているんじゃないのか?)

昨日のなのはとの戦いよりも動きにキレがあるのは事実だ。だが、たまに切っ先が揺らぐ瞬間があることを、僕は見逃していなかった。

「しかし、ちょっと珍しいよね。クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて」

隣に座ったエイミイが、ふとそんなことを聞いてきた。

「まあ、ナツキが勝つに越したことはないけど、あの二人の勝負自体は、どちらに転んでも、あんまり関係ないからね」

本人が聞いたら怒るだろうな、と苦笑しながら、アホ毛の手入れに四苦八苦しているエイミイを見遣る。

「ナツキ君が戦闘で時間を稼いでくれている内に、あの子の帰還先追跡の準備をしておく、ってね」

ナツキはSクラスの魔導師だ。彼と戦う以上、消耗はとても大きなものになる。使い魔であるアルフがこちらについた以上、今までの潜伏先に戻る可能性も薄い。となれば、彼女が時の庭園に帰る確率は非常に高い、と踏んだ訳だ。

「頼りにしてるんだからね。逃がさないですよ?。」

取り出したヘアスプレーを吹き、エイミイの髪をブラシで整えながら呟く。

「おう!!任せとけ!!」

エイミイが頼もしく答えるが、

「...あら?。」

再びそびえ立ったアホ毛のせいで台なしだった。

「...でもあのこと、二人に伝えなくていいの?プレシア・テストロツサの家族と、あの事故のこと」

エイミイがこちらに視線を送り、「あのこと」について問い掛けてくる。

「...勝つてくれるに、越したことはないんだ。今は、ナツキを迷わせたくない」

僕はそれだけを呟き、上空で繰り広げられる戦闘に視線を戻した。

「...っ!!」

鎌と刀を交差させながら、至近距離で視線をぶつけ合う。互いの瞳

に宿るのは、互いに譲れない己の道。

「っー!!バルディッシュー!!」

ギン!!と真の名を解放した俺のデバイス、ガーディアン・オブ・アルカディアを弾きながらフェイトが後退、バルディッシュに命じる。

《Photon Lancer》

フェイトの周囲に雷の弾丸が形成される。その数、五つ。

《Gravity Saber》

対し俺はアクセルを重力でコーティング。エネルギーを肥大化させていく雷を見据える。

「ファイア!!」

「グラビティアクセル!!」

フェイトが発射を命じた瞬間、俺はそれを発動した。

グラビティアクセル。重力制御による加速魔法。作者のくせに長いと面倒でしょ?等と言い、こいつのあだ名の由来ともなった、俺の初めて覚えた魔法。

「……………!!」

フェイトの放った雷をぐり抜け、ただひたすらに前へ進む。スピードは驚異的だが、誘導性が低いので一発かわせばそれで終わり。

気を抜きさえしなければ、なのはのデバインシューターより対処は容易だ。

「せやあつ!!」

正面に食らい付いた俺の斬撃に、フェイトがラウンドシールドを展開する。が、俺の刃はいともたやすく、それを真つ二つに切り裂いた。

「っ!？」

フェイトが驚愕し、一瞬隙を見せた。それを見逃す俺ではない。

「厘気一閃!!」

腰溜めに構えたアクセルを振り抜き、黒色の斬撃を飛ばす!!

「っ!？はあつ!!」

対しフェイトは構えた鎌を振るい、金色の衝撃波で相殺した。

「まだまだあつ!!」

《Gravity Shooter》

黒色の弾丸が七つ生み出され、空を縦横無尽に駆け抜ける!!

「くっ!!」

フェイトは鎌を振るい弾丸を打ち消しながら、こちら目掛けて急降

下してきた。

「はあっ!!」

そのままフェイトが振り下ろしたバルディッシュを、アクセルで受け止める。

「な…、めるなあっ!!」

叫びながら意識を集中させると同時、先日の再現のようにフェイトの背後から黒色の弾丸が迫る!!

「っ!？」

フェイトはバルディッシュを引き上へ逃れるが、

そこにはアクセルを鞘に収め、彼女を待ち構える俺が居た。

「リニアザンバー!!」

「っ!!」

フェイトは防御結界を展開しながら後退、刃がシールドを切り裂くが、フェイトには届かなかった。

「ちいっ!!」

《Photon Lancer》

毒づく俺に返された答えは、無機質な声と雷の槍だけだった。俺はその全てを切り裂き、フェイト目掛けて加速する。

「切り裂け!!」

再び横薙ぎの一閃。アクセルから放たれた衝撃波がフェイトに迫る。

「っ!!」

対しフェイトは慌てず気合い一閃、再び衝撃波を打ち消そうと、

《Gravity Fall》

それを許す程俺も甘くはなかった。周囲の空間を捻曲げ、衝撃波を四方八方から襲わせる!!

「っ!?!きゃあっ!!」

重力の波に揉まれ、バランスを崩すフェイト。それを見た俺は更に加速する。

「はあああああっ!!」

「ぐっ!!!!」

大上段から振り下ろしたアクセルを、ギリギリのところで受け止めるフェイト。

バディッ!!

重力と雷がぶつかり合い、激しく火花を散らす。

《Photon Lancer》

バルディッシュをこちらに押し込みながら、フェイトが次の手を打つ。彼女の周辺に展開されるのは、雷の槍。

「ファイア!!」

「ちいっ!!」

バルディッシュを弾き、グラビティシューターを展開。牽制兼相殺に撃ち込みつつ、フェイト目掛けて突っ込む!!

《Scythe Slash》

「はあっ!!」

が、フェイトもそれを読んでいたのか、バルディッシュを構え突っ込んできた!!

「ぐっ!!」

辛うじてかわすものの、刃が浅く俺の頬を切り裂き、血が流れ出す。

「　　っ!!」

それを見たフェイトは動揺したのか、フォトンランサーを乱射し距離を取る。

「　　っ!!」



俺もそれをかわしながら後退、10 m程の距離を開ける。互いに視線を交わしながら、俺達はしばしの膠着状態に陥った。

（強い…）

僅かな間を開けて対峙する少年を見て、私は素直にそう思う。圧倒的な魔力、流れるような剣捌き、状況に応じた的確な判断力、そして何より、強い意志。これまで戦った相手の中で、一番の強敵だ。

（なのに…、私は…）

それなりの実力を持っていることは自負しているつもりだが、先程から押されっぱなしで、防戦一方なのは否めない。しかも彼の血を見て、動揺してしまうくらいだ。

『こいつを見捨てるくらいなら…、こんな悲しげな目をした子をほっとくくらいなら…、死んだ方がマシだ』

彼の言葉を思い返す。私に何度も手を伸ばし、救おうとしてくれた少年。

なのに、今の私は、その相手と刃を交えている。

（…考えるな）

私はそんな思考を頭の片隅に押し込み、少年を見据える。私は迷ってばかりの、弱い子だから。悩んではばかりの、弱い子だから。

（やられる前に、やる…！）

バルディッシュを構えた私は、足元に極大の魔法陣を描いた。

「…!？」

しばらく後、フェイトが動いた。バルディッシュを構えると同時、足元に極大の魔法陣が展開される。

「んな…!？」

俺も行動を開始しようとした瞬間、周囲に現れては消える魔法陣が展開、止まらざるを得なくなる。

《Phalanx Shift》

バルディッシュの声に応え、フェイトの周囲に雷が集束し、いくつもの弾丸を生み出していく。

「くそ…、っ!？」

魔法陣の中を突っ切ろうとした瞬間、両手を光り輝く輪で拘束される。まさか、拘束魔法<sup>バインド</sup>まで扱えるとは…!!

『ライトニングバインド…!!マズい、フェイトは本気だ!!』

『ナツキ君!!今からそつちに…』

『来るな!!』

騒ぎ始めた外野を、俺は一言で制止した。

『三人共手は出すな。これは、俺とあいつの全てを賭けた一騎打ちだ。それを汚す気か？』

『でも、フェイトのそれは本当にマズいんだよ！！』

『…信じよう』

尚も心配げなアルフの声を遮り、なのはが一言だけ呟いた。

『なのは！？』

『大丈夫。ナツキ君はいつだって、約束は守るから。だからナツキ君は、絶対に負けない！！』

(…どこにそんな根拠があるのやら)

力強く断言したなのはに、思わず苦笑する。だが、自分のことをそこまで信頼してくれているとなれば、

「…全力で、応えねえとな！！」

俺はアクセルにアレの準備を促し、尚も弾丸を生み出していくフェイトを見据えた。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのも

と撃ち掛かれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

詠唱を終えた私は、目の前の少年を見据える。これだけの魔法を展開しているにも関わらず、彼の瞳は私だけを真っ直ぐに見据えていた。

（そんな目で…、見ないで…っ！！）

「フォトンランサー、ファランクスシフト！！撃ち碎け、ファイア  
！！」

私の声に応え、雷の槍が四方八方から襲い掛かる！！少年に激突し爆煙を上げるが、それでも執拗に雷を叩き込む！！

「くっ…、う…」

ここの所口々に休まず、大規模魔法を連発していた為、身体が悲鳴を上げる。でも、

（…負ける訳には、いかない！！）

最後の一発を、駄目押しとばかりに叩き込んだ瞬間、

白銀が、煌めいた。

「あつぶね…、バインド解けなかったら死んでたなこりゃ」

「！？」

雷を切り裂いた銀の刃を携え、少年が無傷で現れた。あれだけの集中砲火を…、たった一本の刀だけで全部切り裂いたっていうの！？

「それじゃ…、今度はこっちの番、だよな!!」

彼が刀を天に掲げた瞬間、大気が震えた。

銀色の極大魔法陣が、足元と正面の二カ所に展開され、黒い力が渦巻く。やがて現れたのは、極大の魔力を孕んだ黒い球体。彼はそれを重力で圧縮し、一点の破壊力を高めていく。

「くっ…、っ!？」

アレは危険だと全力で訴えかけてくる本能に従い、逃れようとする  
と同時に。正面の魔法陣から、私を挟むようにして銀色のレールが展開される。

「ぐっ…!!」

離れようともがくが、まるで強力な磁石に吸い付いたかのように離れない。

磁石？

「っ!!」

それに気付いた瞬間、私は彼を見上げた。彼はただ目を閉じ、重力の制御に集中している。高圧重力で圧縮され続け、磁力を纏い白銀に染まった黒球はサッカーボール大の大きさとなり、静かに発動の時を待っている。

「あいつだって、ぶっつけ本番でスターライトブレイカーを使ってみせたんだ。ならあの技の生みの親の兄たる俺に、こいつが出来ない道理はない」

バチバチバチッ！！と音を立て、重力が渦巻き、空間が歪む。膨大で濃密な魔力が場を圧倒し、全てが彼に跪いているような感覚に囚われる。

「星を束ねる二つの力よ、我が剣に宿り、災厄を終焉<sup>おわ</sup>らす光となれ！！」

彼が詠唱を終え目を開けると同時、デバイスがその名を告げた。

《Gravity Railgun》

超重力電磁砲、と。

「受けてみる、フェイト。これが俺の想いの<sup>全力全開</sup>全て！！」

彼がデバイスを引き、突きの構えを取りながらそう叫ぶ。

「グラビティイイ！！レールガンツツ！！」

彼が魔法陣に刀を突き入れた瞬間、白銀の球体が、私を飲み込んだ。

レールガン、というモノがある。磁気を帯びたレールの間に挟んだ物体を電磁誘導により加速、音速を軽く越える速度で打ち出す装置のことだ。

では、もしその理論を改造、転用し、砲撃魔法に用いた場合、一体どうなるのか。

天城ナツキは自らの魔力変換資質で、磁力を自在に操ることが出来

る。レールガンの理論に、発射する物体自体に磁力を纏わせ加速させるリニアモーターの理論を付加した場合、一体何が起きるのか。答えは簡単。

あらゆるモノを穿ち貫く、最強の弾丸と化す！！

「な…、んだ…、アレ…」

モニターから戦闘を見守っていた僕は絶句する。昨日のなのはも大概だったが、今回も相当ひどい。

「解析出来た、けど…、無茶苦茶だよこんなの…！！」

昨日同様解析に当たっていたエイミィが震える声で呟く。

「重力球を高圧重力で圧縮、一点の破壊力を高め、更に磁力のレーンとの反発を利用して、高速で射出…。理論としては間違っていないけど…、普通の魔導師に扱えるようなレベルのモノじゃない…！！」

「重力と磁力の変換資質を持ち、天城ユキから学んだ知識があるからこそ、か…」

なんでこつも無茶苦茶な連中ばかりなのか。頭が痛くなってくる。

「フエイトちゃん…、死んでないよね…？」

「天城ユキに瓜二つらしいし、ナツキの性格上それはないと思った  
いが…」

否定しきれないことが怖い。とりあえず僕は、モニターに視線を戻すことにした。

「はあっ…、はあっ…、はあっ…」

ほぼ全ての魔力を使い切り、俺は荒い息をつく。この魔法の理論は一年前に完成させていたのだが、使うのは今回が初めてだ。使う機会がなかったとか、威力が凄まじい分消耗が激しいというのもあるが、それ以上に、リスクが高過ぎるのだ。

膨大な魔力を孕んだ重力球を、高圧重力により圧縮する。言葉にすれば簡単だが、一歩間違えれば暴発により自分自身が大ダメージを負う。しかも、レールを設置する都合上正面にしか撃てず、単発の為外したら終わり。正に博打としか言えないような技なのだ。

（今回ばかりは…、上手く行ってよかった…）

ファランクスシフトなんて大技で消耗していたからよかったものの、普段のフェイトは速過ぎる。どう足掻いたところで当てるのは不可能だろう。

「っ！…！そうだ、フェイトは！？」

ふらつく体に褐を入れ、周囲を見回す。レールに挟まれていた以上、避けることは不可能だったハズ…。

「っ！…！」

海目掛けて真っ逆さまに落ちていくフェイトを見た瞬間、俺は余力



を振り絞り加速した。

「…ん」

「お、気付いたか」

気を失っていたのか、目を覚ますと同時にそんな声が聞こえた。いつかと同じように、落下する私を彼が抱き留めてくれたようだ。

「悪い…、ちょっとばかりやり過ぎた」

彼は顔を赤くし、視線を逸らしながら謝る。自分の体を見下ろすと、彼のロングコートが掛けられていた。肌に触れる感触から、バリアジャケットが相当ボロボロなのだと気付き、顔が熱くなる。

「あんなもん叩き込んで言うのもアレだが…、大丈夫か？」

「…うん」

気遣うような視線に、頷きと共に答えを返す。その言葉に彼の頬が緩み、肩の力が抜けたように思えた。

「飛べるか？」

「…ちよつと、無理かな…」

彼の言葉に、とっさにそう答えた自分に少し驚く。飛ぼうと思えば出来ないことはないが、もう少し…、もう少しだけ、このままでは

たかった。

「…そうか」

彼は頷き、優しく私を抱きしめる。温もりに包まれて、どこか安堵している自分がいた。負けてしまったけど、なんだかスッキリした気がする。

「…頑張ったな」

「…え？」

唐突な呟きに、思わず聞き返す。

「今までずっと一人で、大変だったよな…。もう少し早くわかり合えていれば…、もっといい未来があったかもしれないのに…」

「そんなことない!!」

自らを貶るような声を、自分でも驚く程の大声で否定する。

「何度も何度も手を伸ばしてくれて…、私の力になろうとしてくれて…、凄く、嬉しかったから」

私なんかを気に掛けてくれて。気遣ってくれて。本当に、嬉しかったから。だから、自分を過小評価する彼の姿なんて、見たくなかった。

「…そう言って貰えると、頑張った甲斐もあるな」

そう言った彼は困ったように、でも嬉しそうに笑った。

『よし、ナツキ。ジュエルシードを確保して、それから彼女やなのは達と帰還してくれ』

「あいあい」

デバイスから響いた管理局の少年の声に頷き、公園目掛けて動き出そうとした瞬間、

『っ！！来た！！』

管制官の少女の声に、少年が天を仰ぐ。大気が乱れ、黒雲が渦巻き、私達目掛けて紫の雷が降り注いだ。

「っ！！」

「アクセル！！」

少年がデバイスに命じながら、思わず目を閉じた私を安心させようと抱きしめる。

《Protection x7！！》

デバイスが答え、私達を覆う七層のバリアを展開、ほんの僅かな時間稼ぐ。

《The one to Drive Reason Mad's  
tart（理を狂わすモノ、起動）》

そしてその希望は、確かに彼女へと繋がった。  
桜色の翼を展開し高速で飛んで来た少女が、私達とバリアの間に割  
って入る。

## 《Round Shield》

七層目が破れると同時に、少女がラウンドシールドを展開。紫電の奔  
流を完全に防ぎきった。

「オイオイ、理<sup>DRD</sup>を狂わすモノはそんなホイホイ使っていないようなも  
んじゃないぞ？」

「でもそれで守りきれなかったら本末転倒でしょ？」

呆れながらも氣遣う少年に対し、振り返った少女はピースサイン。  
なんだかんだ言いつつもいいコンビのようだ。

「なのは！！ジュエルシールドは！？」

と、通信による問い掛けに、少年が目の色を変えた。

「マズった……！！ユーノ！！アルフ……！！」

「やられた……。僕達側のジュエルシールドは死守したけど……」

「あたし達側の九個を持ってかれた……」

フェレットの少年と、アルフの念話での報告に、緊張感が高まる。

『エイミィ……！！』

『ビンゴ！！尻尾掴んだ！！』

管理局の少年の鋭い声に、軽くも頼もしさを感じさせる少女の声が答えた。

『よし！！不用意な物質転送は命取りだ…、座標を！！』

『もう割り出して、送ってるよ！！』

高速でカタカタとキーを叩くような音と共に、俄かに通信先が慌ただしくなる。

『武装局員、転送ポートから出動！！任務は、プレシア・テストロツサの身柄確保です！！』

『『はっ！！』』

女性の声に答え、数十人の局員とおぼしき人物が答える。任務内容の辺りは聞こえなかったが、母さんと何か関係があるのだろうか。

「さあて、これから忙しくなるな…」

半壊したバルディッシュと自らのデバイスを握り、足元に広がる緑色の魔法陣を眺めながら、少年はそれだけを呟いた。

「がはっ、げほっ、ごほっ」

大量の血を床に吐きながら、どうにか奪取したジュエルシードを見  
遣る。

「次元魔法は…、もう身体が持たないわね…」

口元を拭い、隣に飾られた円形の水晶に視線を送る。

「それに…、今でこの場所も掴まれた…」

いくらジュエルシードを奪取する為とはいえ、転送魔法はリスクが  
大き過ぎる。監視されているのはわかっていたし、位置特定される  
危険性も理解していた。だが、止まる訳にはいかないのだ。

「フェイト…、あの子じゃダメだわ…」

水晶に映し出された、天城の坊やに抱き抱えられたままの少女を見  
遣る。

「そろそろ…、潮時か…」

「第二小隊、転送完了」

「第一小隊、侵入開始」

なのはやフェイト達を伴いブリッジに入った俺達を出迎えたのは、  
そんな声だった。どうやら時の庭園に局員を続々と送りこんでいる  
ところのようだ。

「みんな、お疲れ様」

と、こちらに歩いてきたリンディ艦長が、労いの声を掛ける。

「いや、問題ないですよ」

怯えたように体を震わせたフェイトの手を握り、答えを返した。

現在俺達はバリアジャケットを解除し、なのはは聖祥附属の制服、俺はいつもの私服姿に戻っている。フェイトに関してはバリアジャケットがボロボロなので、医務室で借りた患者用の白い服を着せた。そもそも、アースラ側からすればフェイトは捕縛対象の娘<sup>ブレンシア</sup>なのだ。どう動くのかわからず不安で、バリアジャケットなど言語道断なだろう。確かにそれは同意出来るが、拘束用の手錠だけは断固拒否した。彼女は保護対象であり、捕縛対象ではないのだから。クロノの口添えもありすんなり許可されたが、背後から何やら妙な視線を二つ程感じた気がする。

「それから…、フェイトさん？初めまして」

リンディ艦長がにこやかに挨拶するが、フェイトは僅かに頭を下げ、俺の陰に隠れるように引っ込んでしまった。…こいつって、こんな小動物みたいな奴だったっけ？

『ナツキ君、なのはさん、彼女をどこか別の部屋に。母親が逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ』

『了解しました』

「フェイトちゃん、よかったら私の部屋に…」

リンディ艦長の念話に答え、なのはがフェイトを連れ出すべく動き始めた。

『総員、玉座の間に侵入。目標を発見!!』

だが、なのはの誘いはその声に遮られ、自然と全員の視線がモニターに集中する。

『プレシア・テストロッサ。時空管理法違反、及び、管理局管制への攻撃容疑で、あなたを逮捕します。武装を解除して、こちらへ』

隊長格の男の声に彼女、プレシア・テストロッサは動かない。まるで眼中にない、と言わんばかりの態度だった。

『そつちを固め…、ん？なんだこれは？』

だが、隊員の一人の声に、プレシアの目がギョロリと動いた。

『こ、これは…』

隊員の声と同時に、視点が切り替わる。そこに広がっていたのは、奇妙な部屋だった。壁は棚とそこに載せられた空っぽのホルマリン漬けのような瓶がぎっしりと並べられていて、近いもので表すならば理科準備室、だろうか。そして、部屋の中央の巨大なカプセルの中に眠る、

フェイト。

「え!？」

「な…!？」



外見はフェイトより幼いが、流れるような綺麗な金髪、整った顔立ちはフェイトとそっくりを通り越して完全に同じだ。

「……………」

俺達ですらそんな反応なのだから、張本人であるフェイトの驚きは計り知れない。声を失い、血が止まる程俺の手をきつく握りしめている。

『ぐああっ!!!』

と、カプセルに触れようとした局員が吹き飛ばされた。

『私のアリシアに…、近寄らないで』

血走らせた目で局員を見据え、低い声を響かせるプレシア。

『う、撃てえっ!!!』

局員達が砲撃を撃ち込むが、それらはバリアに阻まれ届くことはなかった。

『うるさい…!』

プレシアが呪詛のように呟き、魔力を集束させていく。

「危ない!!防いで!!!」

リンディ艦長が警告を送るが、如何せん遅過ぎた。室内に紫色の雷

が降り注ぎ、数十人からなる局員を一瞬で地に沈めた。

「いけない！！局員達の送還を！！」

「了解です！！」

エイミィが指示に答え、キーを叩き始める。

「アリ…、シア…」

「座標固定！！0120503！！」

「固定！！転送オペレーションスタンバイ！！」

呆然としたフェイトの呟きは、オペレーター達の喧騒によって掻き消された。…フェイトは、アリシアを知っているのか！？

「もう駄目ね…、時間がないわ…。たった九個のロストログアでは、アルハザードに辿り着けるかどうかはわからないけど…」

愛おしげにカプセルを撫で回しながら、プレシアは呟く。

「でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間を…」

こちらに視線を向け、何かに取り付かれたかのように独白を続けるプレシア。

「この子の身代わりの人形を、娘扱いするのよ」

「…!!」

その発言に、後ろの二人が息を呑む。

「…人形、だと？」

「そうよ、天城の坊や。人形とは…、そこにいるあなたのことよ、フェイト」

俺の呟きを拾ったのか、プレシアは語り始めた。

「せっかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない…、私のお人形」

『…最初の事故の時にね、プレシアの実の娘、アリシア・テストロツサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は、使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の生成』

隠しきれないと悟ったのか、エイミイが背景を語り始めた。

『そして、死者蘇生の秘術。フェイトって名前は当時、彼女の研究につけられた開発コードなの』

「…っ!？」

開発コードと同じ名前…？それじゃあまるで…、

「よく調べたわね…。そうよ、その通り。だけど駄目ね。ちつとも上手くいかなかった。作り物の命は所詮作り物。失ったものの代わりにはならないわ」

世界全てを嘲るように、当たり前のように気付いたように、プレシアの独白は続く。

「アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我が儘も言ったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた。アリシアは、いつでも私に優しくかった」

「…黙れ」

だが、二度目の俺の呟きは無視され、プレシアの過去の幻想は加速する。

「フェイト。やっぱりあなたは、アリシアの偽物よ。せつかくあげたアリシアの記憶も、あなたじゃ駄目だった」

「やめて…、やめてよ…!!」

なのはが涙ながらに訴えるが、それでもプレシアは止まらない。

「アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使っただけのお人形。だからあなたはもう要らないわ。どこへなりと消え…」

「黙れつつつてんだろぅが!!」

いい加減限界だった。俺の三度目の声に、虚ろな瞳でこちらを眺めるプレシアを睨みつける。

「作り物の命？知るか。だったら俺達だって父親と母親に作られた命だろうが。アリシアの偽物？知るか。フェイトはアリシアじゃない

「いんだ。本物も偽物もない」

フエイトを抱き寄せながら思い返す。初めて会ったあの日のことを。妹のユキにそっくりだったから気になっていたということもあるが、今は違ふと断言出来る。

「フェイトは今ここにいるからフェイトなんだ！！そこに真偽は関係ない！！」「ここ」に「いる」からフェイトなんだ！！偽物なんかじゃない、俺達が出会い、すれ違い、歩み寄れたフェイトは、フェイト・テストロツサという名前の一人の女の子だ！！作り物なんかじゃ、絶対にない！！」

「！！！！」

フェイトが信じられないといったような、しかし、どこか縋るような視線を向けてきた。そんな少女を見て、守りたいという想いが自然と込み上げてくる。

そう、今ここにいるフェイトは作り物なんかじゃない。トクン、トクン、と心臓が動いていて、泣きもするし悲しみもする。笑顔だつて、きつと持っている。なら、普通の人間との違いなんて何も無い。

「例えば世界中全ての奴が否定しようとも、俺だけは何度だつて言つてやる。フェイトは作り物なんかじゃない、普通の女の子だ、ってな」

「ふ、ふ、ふ、はは、アーッハッハッハッハッハッハッハ！」

言い終えた俺に僅かに呆然とした後、高笑いを上げるプレシア。

「いいわ…、天城ナツキ。そのアリシアにそっくりな目…、好きよ」

「？」

「親族皆殺しにするような年増に興味はないんでね。なのはの好意だけで十分間に合ってる」

「にやわっ!？」

唐突な上場違いにも程がある俺の言葉に、なのはの顔が真っ赤に染まる。

「な、ナツキ君!？」

「事実だろ？それに、緊張も解れたみたいだしな」

なのはがプレシアのプレッシャーに気圧されていることくらいわかってた。俺もそこまでバカじゃない、となのはに笑い掛け、モーターに視線を戻す。

「…むー」

斜め下の辺りから何やら不満げな視線が突き刺さっているが、とりあえずスルー。頭をぽふぽふと叩き、お茶を濁しておく。

『確かに…、父親と母親の間に生まれた以上、人は皆作られた命とも言えるわね…。さすがは天城ユキの兄。発想が面白いわ…』

そんなこちらに対し、尚もプレシアは壊れたように笑い続ける。

『ならいいことを教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出してからずっとね、私はあなたが…』

プレシアは一際歪んだ笑みを浮かべ、

『大嫌いだったのよ』

その一言を、告げた。

「っ!!」

理論ならばいくらでも突き崩せる。だが、感情だけは簡単に変えられるものじゃないから。それ故にその一言は、フェイトの胸を深く刺った。

「……………」

フェイトの瞳から光が消え、ゆっくりと倒れていく。間一髪床に触れる前に抱き留めたが、その手から金色の三角形がこぼれ落ち、

床に落ちたバルディッシュは、砕けた。

まるで、今の彼女の心のように。

「フェイトちゃん!!」

「フェイト!!」

なのは達が心配げな声を上げる中、俺は急速に心が黒く染め上げられていくのを感じた。消えずに眠っていた殺意と憎悪、怒りの念が蘇ってくる。

「局員の回収、終了しました」

「…お疲れ様」

世界が遠退くような感覚の中、俺は必死にそれらを押さえ込む。今の俺はナナシではない。天城ナツキなのだから。

「た、大変大変！！ちょっと見てください！！屋敷内に魔力反応…、多数！！」

「なんだ…！？何が起こってる！？」

どうにかして黒い感情の波を押さえ込み、俺はモニターを見上げた。そこに移っていた光景は庭園の床から甲冑のようなモノが現れているというものだった。

「庭園敷地内に魔力反応、いずれもAクラス！！総数60、80、まだ増えています！！」

「傀儡兵…！！」

忘れるはずがない。天城の村を滅ぼした奴ら。魔法で動く機械人形。プレシアの手駒達だ。

「プレシア・テストロッサ…、一体何をするつもり…！？」

時の庭園が揺れ始める中、私はアリシアの入ったカプセルを浮かせ、玉座の間へと歩き始める。

「私達の旅を…、邪魔されたくないのよ…」



アリシアとの平穏な過去を取り戻す為ならば、私は神にでも悪魔にでもなろう。その覚悟は、あの日から変わることはない。

「私達は旅立つの…!!」

掲げた両手の先、九個のジュエルシールドが現れ、規則的に回り始める。

「忘れられた都…、アルハザードへ…!」

大きく円を描き始めたジュエルシールドが、どんどん魔力を集束させていく。

「…まさか!?!」

「この力で旅立って…、取り戻すのよ…、全てを…!」

輝きを放ったジュエルシールドが、空間を震わせ始めた。

「次元震です…!中規模以上…!」

「震動防御…!ディストーションシールドを…!」

「ジュエルシールド、九個発動…!次元震、更に強くなります…!」

「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動を…!」

『了解です!!』

クルーに適切な指示を飛ばす母さんの声を聞きながら、僕は歯噛みした。

「バカなことを…!!」

そこまで聞けば十分だった。僕は画面に背を向け駆け出す。

「クロノ君!？」

「僕が止めてくる!!ゲート開いて!!」

エイミイにそれだけを言い残し、僕はモニタールームを出た。

「アルハザード…、か…」

忘れられた都、アルハザード。もはや失われた禁断の秘術が眠る土地。

（そこで何をしようっていうんだ…。自分が無くした過去を…、取り戻せるとでも思ってたのか…？）

構えた右手に待機状態のデバイスである、鉄製のカードを呼び出す。投擲されたカードが一本の杖に変化、愛杖であるS2Uを握る。

『私とアリシアは、アルハザードで全ての過去を取り戻す!!』

「どんな魔法を使ったって…、過去を取り戻すことなんか、出来るもんか!!」

プレシアの狂った笑い声を断ち切り、僕は転送ポート目掛けて加速した。

「…過去を取り戻す、だと？」

フェイトを背負い医務室に向かって駆けていた俺は、プレシアの声に上を見上げる。

「戻らないものを取り戻す？ガキかてめえは。そんなこと、絶対に赦さねえ」

「ナツキ君…」

横を走るなのはが、心配げな視線を向けてくる。俺のユキへ抱く後悔を知っているからこそその心配だろう。…大丈夫だよ。

「確かにユキに会いたい気持ちもある。それは事実だ。…でも」

ユキは確かに狂っていたのかもしれない。それでもあいつは、大事なただけはちゃんとわかってた。

「あいつが死んでも貫き通した道を、兄の俺が踏み外す訳にはいかないだろ？」

ニヤリと笑い、なのはを見据える。それは、確かな俺の決意。彼女が教えてくれた、天城ナツキとしての道。

「…うんっ!!」

微笑むなのはから視線を逸らし、前を見据える。

「さあ…、我が儘なババアをぶっ飛ばしに行くぞ!!」

もちろんフェイトを医務室に寝かせてからな!!と付け足し、俺は走るスピードを上げた。

## 第十五話「本気」(後書き)

誰か！誰かファ リーズ持つて来い！w

いやしかしこんなクサイセリフをよくもまあ…w

これが…、中二か…っ！（違w

そしてグラビティレールガン。はい、やらかしましたw

なんでそんなもん食らって無事かって？非殺傷設定ってチート（ry

次回、フェイトの選択と、ナツキの終焉回です。

## 第十六話「決意と終焉」（前書き）

はい、十六話です。

原作が割かし崩壊しております。

なのでそういうのが嫌いな方は引き返すことをオススメ。

…いやまあ、今までだってブレイクしてましたがねw  
それではどーぞー

読者達よ、「Take a shot」の準備はOKか？（えw

## 第十六話「決意と終焉」

『次元震発生！！震度、徐々に増加しています！！』

『この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、あと30分足らずです！！』

『あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードもロストログアです。それを暴走覚悟で発動させて、足りないエネルギーを補っているんです』

『…始めから、片道の予定ってことね』

艦内放送は尚も、警告音と絶望的な状況を伝え続けている。早くしないと取り返しのつかないことになるな…。

「何がアルハザードだ…、夢を見るのはガキの特権だろうが…」

フェイトを背負い、医務室へ向かいながら俺は齒を噛み締める。あんなお伽話なんかの為に…、世界を滅ぼすつもりかよ…！！

「クロノ？」

と、反対側から駆けてきたクロノと鉢合わせした。手には起動状態のデバイスを握り、戦意を漲らせている。

「クロノ君、どこへ？」

「現地に向かう。元凶を叩かないと」

尋ねたなのには対し、言うまでもないとばかりにクロノが答える。  
その瞳には失った者特有の光があり、ああ、こいつも怒ってるんだな、と実感する。

「俺も行く」

「……!?」「……」

名乗り出た俺に、四者から驚愕の視線が集まる。

「確かにフェイトも心配だが…、そのせいで次元断層なんか起こさせたら笑い話にもならねえだろ。すぐに片付けてやる」

今背負っているこの温もりを、俺達の未来を終わらせない為に。その為なら、俺はいくらでも戦ってみせる。

「わ、私も!!」

「僕も!!」

と、何を思ったのか、なのはとユーノも名乗りを上げた。

「お前らはフェイトの傍に…」

「ナツキ君、危なっかしくてほんとけないもん」

「次元断層止めても、ナツキが帰って来れなきゃ意味ないでしょ?」

なのはとユーノが苦笑しながら、バリアジャケットを装着する。…ホント、いい友人に巡り会えたな、俺は。



「…わかった。行こう」

意外なことに許可したクロノに続きユーノが、こちらを振り返りながらなのも駆け出す。

「アルフ、フェイトを頼めるか？」

「ああ、勿論」

アルフに抱かせたフェイトを一瞥し、頭を撫でてやる。

「なのはは、覚悟を決めた。俺は、迷いながらも進むことを選んだ。お前は、どうしたい？」

虚ろな瞳で宙を眺めるフェイトに、俺は静かに語り掛ける。

「お前が自らの道を決められるよう、祈ってるよ。お前がそうしたいと決めたのなら、俺は全力で助けてやる」

それだけを言い残し、俺は駆け出した。

『クロノ、ナツキ君、なのはさん、ユーノ君、私も現地に出ます。あなた達は、プレシア・テストロッサの逮捕を！！』

「了解！！」

リンディ艦長の念話に答え、胸元のアクセルを握る。

「終わらせるぞ…！！全部！！」

《Yes Sir!! (了解!!)》

頼もしく答える相棒の声を聞きながらバリアジャケットを纏い、俺は重力制御で加速した。

雷が轟く中、私達は庭園に降り立った。門の周りには、庭園を守る門番のように傀儡兵が控えている。姿形も様々で、くぐり抜けるのも一苦労しそうだ。

「いっぱいいるね…」

「まだ入口だ。中にはもつというよ…」

ユーノ君の呟きに、クロノ君が冷静に答える。

「ナツキ君、この子達って…」

「作り主の命令に従うだけのただの機械だ。大方今の命令は、近付く者を攻撃せよ、ってところだろうな」

私の疑問に対し、一步を踏み出した傀儡兵を見据えながらナツキ君が答える。

「そっか…、なら安心だ」

思いつ切りやつても大丈夫だと安心して、レイジングハートを構えた私をクロノ君とナツキ君が遮る。

「この程度の相手に、無駄弾は必要ないよ」

「アクセルは刀だから、ほとんど魔力なしでもやれるしな」

クロノ君が静かに、ナツキ君が不敵に言い、一歩前に出る。

それだけで、傀儡兵達はたじろいだ。

《Gravity Saber》

その一瞬を見逃さず、ナツキ君が傀儡兵の一体の前に踏み込む。アクセルを振り抜き、その鋼鉄製の胴体を両断した！！

「はあっ！！」

《Stinger Snipe》

その出来事に傀儡兵の動きが止まった瞬間、クロノ君が動いた。掲げられた杖、S2Uから水色の光が溢れ出し、三日月型の刃のように宙を裂く！！

「速っ……」

刃は傀儡兵を切り裂きながら宙に舞い、新体操のリボンのように回り始める。

「スナイプショット！！」

クロノ君が再度叫ぶと同時、リボンのような光が集束、弾丸となって傀儡兵を射抜いた！！

「はい邪魔邪魔邪魔!!」

ナツキ君も叫びながら黒い刃を振るい、片っ端から敵を切り裂いていく。ナツキ君は元からだけど、クロノ君ってこんなに強かったんだ!!

「はあああああっ!!」

一際大きな傀儡兵相手に、クロノ君が単身突っ込んだ!! 巨大な戦斧をかい潜り、その胴体に杖を触れさせる!!

《Break Impulse》

瞬間、傀儡兵の鎧が粉々に碎け散った!!

「ぼーっとすんな、行くぞ!!」

舞でも見ているかのような二人の洗練された戦いに呆然としていると、ナツキ君が声を掛けてくる。既にクロノ君は門を破って侵入する所ようだ。

「う、うん!!」

我に返った私達はナツキ君に続いて駆け出す。

中はひどい有様だった。崩れた廊下の下には白い闇とでも言うべきものが広がっていて、不思議な力が渦巻いている。

「その穴、黒い空間がある場所は気をつけて!!」

「えっ!？」

唐突なクロノ君の言葉に、私は前を向く。

「虚数空間。あらゆる魔法が、一切発動しなくなる空間なんだ」

「っ!？」

魔法が…、使えない…!？

「飛行魔法もデリートされる。もしも落ちたら、重力の底まで落下する…!二度と上がって来れないよ…!」

「き、気をつける…!」

「…重力、か…」

何やらナツキ君が呟いていたが、そんな恐ろしい空間が足元に広がっていることに緊張していた私は気付かなかった。

フェイトをベットに寝かせたあたしは、壁のモニターを見据える。画面の中では Bannon!とドアを蹴破り、クロノを先頭にした一団が大広間に侵入する所だった。

『ここから二手に別れる。君達は最上階にある駆動炉の封印を…!』  
部屋にこれでもかとかばかりに押し込められた傀儡兵を見て、クロノが即断した。

『クロノはどうするの?』

『プレシアの元へ行く。それが僕の仕事だからね』

尋ねたユーノにクロノが答え、デバイスの杖を構える。

『今道を作るから、そしたら!』

『頼むぞ』

ナツキがなのはとユーノを抱え、周囲の空間を歪ませる。

『Blaze Cannon』

デバイスの声と同時に、集束した巨大な水色の弾丸が放たれ、十体も  
の傀儡兵を一気に葬った!!

『Gravity Accel』

それを見届けたナツキが重力加速。空へと舞い上がり、奥の階段目  
掛けて飛翔する。

『クロノ君、気をつけてね!!』

階段の陰に消える三人を見て、クロノは微笑み、地を蹴った。

『私も出ます。庭園内でディストーションシールドを展開して、次  
元震の進行を抑えます』

そこまでが限界だった。みんなが必死で戦ってくれているのに、何もせずに見ているだけなんて、あたしには出来ない。

「あの子達が心配だから…、あたしもちょっと手伝ってくるね」

フェイトに声を掛けながら、そつと頭を撫でる。

「すぐ帰ってくるよ。そんで、全部終わったら…、ゆっくりでいいから、あたしの大好きな、本当のフェイトに戻ってね」

きつと大丈夫。ナツキやなのはがいれば、フェイトは絶対に幸せになれるから。

「これからは、フェイトの時間は全部、フェイトが自由に使っていんだから」

あたしはモニターに背を向け、転送ポート目掛けて駆け出した。

「…ん」

空虚な闇から目覚め、我に返る。部屋を見回すうちに直前までの記憶を思い出し、頭の中でぐちゃぐちゃな思考が回り始めた。

（母さんは…、最後まで私に微笑んでくれなかった…）

私の記憶ではないアリシアの記憶を思い返し、そんなことを考える。

（私が生きていたと思ったのは…、母さんに認めて欲しかったか

ら…)

どんなに足りないと言われても、どんなにひどいことをされても、それでも私は母さんに笑って欲しかったから。

(でも、あんなにハッキリと拒絶されたのに、それでも私は母さんに縋り付こうとしている…)

モニターを見遣ると、少年や少女とアルフが合流するところだった。

(アルフ…)

ずっと私の傍にいてくれた、掛け替えのない家族。無茶ばかりしてた私を、いつも心配して。

『フェイトは今ここにいるからフェイトなんだ!!そこに真偽は関係ない!!「ここ」に「いる」からフェイトなんだ!!偽物なんかじゃない、俺達が出会い、すれ違い、歩み寄れたフェイトは、フェイト・テストロッサという名前の一人の女の子だ!!作り物なんかじゃ、絶対じゃない!!』

ふと、画面に映った少年の顔を見て、あの時の言葉を思い出す。私を作り物じゃない、一人の女の子だと言ってくれた、黒い服の男の子。何度もぶつかり合って、何度も傷付けてしまったのに、それでも手を伸ばしてくれた、私にとって、大切な人。

『例え世界中全ての奴が否定しようとも、俺だけは何度だって言うてやる。フェイトは作り物なんかじゃない、普通の女の子だ、ってな』



彼はいつだって諦めなかった。何度でも立ち上がり、何度でも立ち向かう。そんな強さと優しさに、私は惹かれていたのかもしれない。

『なのはは、覚悟を決めた。俺は、迷いながらも進むことを選んだ。お前は、どうしたい？』

「うつ…、えう…」

温かな言葉の数々に、私は思わず涙をこぼす。

生きていたのは、母さんに認めて貰いたかったから。それ以外に、生きる意味なんてないと思ってた。それが出来なきゃ、生きていけないんだと思ってた。

『お前が自らの道を決められるよう、祈ってるよ。お前がそうしたいと決めたのなら、俺は全力で助けてやる』

（ただ捨てればいいって訳じゃない。逃げればいいって訳じゃない。乗り越えなきゃ、何も見えないから）

『はあああああっ！！』

『切り裂けっ！！』

彼が私と戦う前に言った言葉を胸に、爆音と彼らの叫びを背に、ベツトから下りた私はバルディッシュを手取る。今までずっと一緒に戦ってきた、砕けてしまった私のパートナー。

（私の…、私達の全ては…、まだ始まってもない…）

デバイスフォームに復元されたバルディッシュを見遣る。刃や水晶

の部分はヒビ割れて、一目見ただけで使い物にならないことがわかった。

「そうなのかな…、バルディッシュ…。私…、まだ始まってもないかったのかな…」

《…Get Set（…準備、完了）》

水晶を輝かせ、自らの身を軋ませながらも、バルディッシュはそう答えた。

「っ…！！そうだよね…、バルディッシュも、ずっと私の傍に居てくれたんだもんね…」

瞳から零れ落ちた滴が、バルディッシュの水晶に波紋を描く。

「お前も、このまま終わるのなんて、嫌だよね…」

《…Yes / Sir（…勿論）》

金色の輝きを宿したバルディッシュを、私はそっと抱きしめる。

「私は…、一人なんかじゃなかったんだ…」

脳裏に浮かんでは消える、みんなの顔。何度も手を伸ばしてくれた、少年と少女の顔。

『…行こうぜ』

笑顔で差し延べられた少年の手を、

今度こそ私は、しっかりと掴んだ。

「上手く出来るかわからないけど、一緒に頑張ろう」

涙を拭い、バルディッシュを握りしめる。渦巻く魔力が集束し、閃光と共にバルディッシュが砕け散った。

その中から現れる、修復が完了した私の<sup>バルディッシュ</sup>デバイス。共に戦ってきた、私の相棒<sup>パートナー</sup>。

《Recovery（修復完了）》

（私達の全ては…、まだ始まってもない…）

宙から舞い降りたマントを羽織ると同時、体が漆黒のバリアジャケットに包まれる。

「だから…、本当の自分を、始める為に…」

足元に魔法陣を展開し、時の庭園への転移座標を入力していく。

「今までの自分を、終わらせよう」

金色が渦巻く中、私は医務室から転移した。

「シュート…！」

「おらあっ…！」

私が上空から滑空してくる傀儡兵を狙撃し、取りこぼした分をナツキ君が切り裂いていく。アルフさんも爪や牙で敵を引き裂き、ユーノ君も鎖で相手を縛り上げている。

「くっそ、数が多い!!」

「だけならいいんだけど…、このっ!!」

アルフさんが毒づくが、正直私も同じ気持ちだ。やたらめったら多い上、ランクはA相当。このままじゃじり貧になるのは目に見えている。

「なんとかしないと…、っ!!」

と、ユーノ君が展開していた鎖を無理矢理引きちぎり、一体の傀儡兵が私目掛けて斧を振り下ろす!!

「なのは!!」

ナツキ君が叫びながら加速するが、このままじゃ間に合わない!!

(…ダメ、なのかな)

諦めに支配され、目を閉じた瞬間、

「っざけんな!!」

《Thunder Rage》

ナツキ君の声に答えるかのように、天から雷が降り注いだ。

「っっ！！」

上空を見上げた私達の目に映ったのは、

バルディッシュを構え、鋭い視線を向ける、フェイトちゃんの姿。

《Get Set（準備完了）》

「サンダーツ！！レイジツ！！」

デバイスと少女の声がシンクロし、魔法陣が展開されたと同時に、轟雷が傀儡兵を直撃、爆散させた！！

「フェイト！？」

アルフさんが驚愕の声を漏らす中、フェイトちゃんが私の前に舞い降りる。

「……」

互いに視線を絡ませながらも、言葉は出ない。言いたいことが多過ぎて、上手く話せない。

ズガアアア！！

「っっ！？」

と、壁をぶち破り、一体の巨大な傀儡兵が入って来る。その敵は肩のバレルを展開し、砲撃を放って来た！！

「「!?!」」

反応の遅れた私達は慌てて身構えるけど、もう砲撃は目の前で、

「空気読めよ」

《Linear Zamber》

が、そんな一言と共に砲撃とバレルは真つ二つに割られ、私達の横を通り過ぎ、爆発した。

「おらよっ!!」

私達の前に降り立ったナツキ君が抜刀、振り返り様に斬撃を放つが、バディッ!!

黒色の衝撃波はバリアによって阻まれた。

「あらら、かってーな」

「大型だから、バリアが強い」

落胆と驚きが半々のナツキ君の呟きに、フェイトちゃんが補足を入れる。

「なーる。でも…」

フェイトちゃんの答えに頷きながら、ナツキ君がニヤリと、不敵に

笑った。

「砲撃さえないけりゃ、ただの的だろ？」

「うん、私達三人でなら」

ナツキ君の言葉に当然のように答えたフェイトちゃんのに、私達はしばし呆然とする。

「っ！！うん！！うんうん！！」

「ああ、俺達三人揃って、出来ないことなんか、何もねえ！！」

でも、隠しきれない喜びを声に滲ませ、私達は大声で答えた。

「行くよ、バルディッシュ」

《Get Set（準備完了）》

フェイトちゃんがデバイスフォームに戻ったバルディッシュを構え、

「こつちもだよ、レイジングハート！！」

《Stand by Ready（いつでも行けます）》

シューティングモードに変形したレイジングハートを私が構え、

「切り裂くぞ、アクセル！！」

《Yes Sir！！（了解！！）》

黒い力を纏わせたアクセルを構え、ナツキ君が叫んだ。

「サンダアアアアッ!!」

フェイトちゃんが手の平大の魔法陣を放り投げ、

「スマツシャアアアアッ!!」

バルディツシュを突き込むと同時に、雷の奔流が突っ走り、バリアにぶち当たった!!

「デイベイイイイインツ!!」

私も大量の魔力をレイジングハートに集束し、

「バスタアアアアアッ!!」

桜色の砲撃を叩き込む!!

「グラビティイイイイツ!!」

更にナツキ君が肥大化した黒い刃を振りかぶり、

「ザンバアアアア!!」

全力で振り下ろす!!

バチバチバチッ!!と激しい音を立て、バリアと三色がせめぎ合う!!



「『『セーのっ!』!』!』」

三人の声がシンクロした瞬間、三つの力が爆発的に増し、光が強まる。金と桜と黒が混じり合い、一条の光となって傀儡兵を撃ち貫いた!!

ズドオオオオオン!!

「っ!?!」

時の庭園全体に響き渡るような衝撃に、私は顔を上げる。この魔力の波動は…。

「来たのね…。けどもう間に合わないわ…。ねえ、アリシア…」

私は傍らに浮くカプセル、その中に眠るアリシアを愛おしげに見遣る。

「ああ…、もう少し、もう少し待っていて…。私の可愛いアリシア…」

ジュエルシードが輝きを点し、宙に光の軌跡を描いていく。アルハザードまで、あと少し。

地面に降り立ち、床を五層程ぶち抜いて虚数空間に落ちていった傀儡兵を見遣る。他もあらかた叩き終わったし、ようやく一息、とい

ったところか。

「フェイトちゃん!!」

「フェイト!!」

と、それを理解すると同時、なのはがフェイトに振り返り、人型に戻ったアルフがフェイトに抱き着く。

「アルフ…、心配掛けてゴメンね」

『…決めたんだな』

アルフの頭を撫でるフェイトに、念話で問い掛ける。

『うん。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ。本当の私を』

対しフェイトはこちらを真っ直ぐに見据え、ハッキリと答えた。

(…大丈夫そうだな)

その瞳にはもう空虚な闇はなく、強い意志の光が宿っていた。この様子なら大丈夫だろう。

「やったな、二人共」

自然と笑みが零れた俺は、なのはとフェイトの頭をぽふぽふと叩き、消耗して大の字に倒れているユーノの元へ向かった。

扉を荒々しくぶち破り、広い廊下に出た。周囲には瓦礫や、傀儡兵の破片などが散らばっている。

「あそこのエレベーターから、駆動炉に向かえる」

油断なく周囲を見回しながら、フェイトちゃんが私に教えてくれた。

「うん、ありがとう。フェイトちゃんは…、お母さんの所に？」

「……………」

フェイトちゃんはこくり、と無言で頷く。

「私…、その…、上手く言えないけど…」

レイジングハートをナツキ君に渡し、フェイトちゃんの手を握りしめながら、想いを言葉にしていく。

「…頑張つて。そしたらまた、お話しよう？」

「雑魚と駆動炉は、俺達がきつちり片付けとく。終わり次第すぐ向かうから、安心して行ってこい」

私の言葉に続けて、ナツキ君がフェイトちゃんの頭を撫でる。…まあ、今回だけは大目に見よう。

「…ありがとう」

私の手を握り、ナツキ君に顔を向け、柔らかな笑みを浮かべるフェイトちゃん。

「今クロノが一人で向かってる！！急がないと間に合わないかも！！」

と、偵察に出ていたユーノ君が戻ってきた。どうやらあんまりのんびりしている訳にもいかないみたい。

「フェイト」

「うん」

アルフさんに促され、私達に見送られる中フェイトちゃんが駆け出す。

「なのは、俺達も急ごう」

「うん！！」

ナツキ君に答えを返し、私達も上へ上がる。

「…うわ」

そこで待ち構えていたのは、大量の傀儡兵達だった。広間にいた時より多いかもしれない。

「…ま、愚痴ったってしゃーねーわな。俺が切り込むからなのはは駆動炉の封印、ユーノはなのはの防御とサポートを」

「うん、いつも通りだよな」

ツインフォームに変形したアクセルを構えたナツキ君に、私は笑いながら呟く。

「ナツキ君、いつも私達の前に出て、体を張って守ってくれたよね」

《Sealing Mode》

言葉を紡ぎながら、レイジングハートを変形させ、桜色の翼を広げる。

「だから、弱い私でも戦えるんだよ。心がいつも繋がってて、背中がいつも、あったかいから!!」

「…ははっ、よく言うよ。俺を救ってくれたのはの方が、よっぽど強い子だよ」

そんな私に苦笑しながら、ナツキ君が鋭い視線で傀儡兵を射抜く。

「やろうぜ、二人共。馬鹿げた夢物語を終わらせる為に」

「うん!!」

「オッケー!!」

ナツキ君が黒い力を纏い、私とユーノ君が足元に魔法陣を展開する。

「さあ…、全部切り裂いてやるよ!!」

加速したナツキ君を見ながら、私も魔力を練り上げる。固く、速く、強く。全てを撃ち抜く、桜色の弾丸を生み出す。

「行くよっ！！ディバインシューター、フルパワー！！」

ユーノ君が敵を縛り上げるのを、ナツキ君が敵を切り裂くのを見ながら。

「シューッ！！」

私は全力のディバインシューターを、駆動炉目掛けて放った。

『…！？これは…！？』

どうやら、プレシアも気付いたようだ。次元震が緩やかに終息に向かっていくことに。

『プレシア・テストロッサ、終わりです。次元震は私が抑えています』

プレシアの居る地点へ念話を飛ばしながら、母さんこと艦長が魔力の放出を強める。

『駆動炉もじき封印、あなたの元には、執務官が向かっています』

『エイミィ！！』

現状の確認とプレシア論破の手伝いになるよう、母さんにも聞こえ

るように念話を放つ。

『なのはちゃんとユーノ君、ナツキ君は駆動炉に突入！！フェイトちゃんとアルフは最下層へ！！大丈夫、いけるよきつと！！』

『ああ！！』

と、エイミィに答えを返すと同時、

『こちらユーノ・スクライア、駆動炉を無事封印！！ナツキも今そっちに向かってます！！』

空気を読んだかのように、ユーノからの念話が入る。さすがナツキになのは、仕事が速い。

『忘れられし都アルハザード…、そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかすら曖昧な、ただの伝説です！！』

『違うわ…、アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が砕かれた時、その狭間に滑落していく輝き…、道は、確かにそこにある』

…馬鹿げたことを！！そんなお伽話を、本気で信じてるのか！？

『随分と分の悪い賭けだわ。あなたはそこに行つて、一体何をするの？失った時間と、犯した過ちを取り戻すの？』

『そうよ…。私は取り戻す…。私とアリシアの…、過去と未来を』

過去と未来を、取り戻すだって？ふざけるな…。

『取り戻すの…。こんなはずじゃなかった…。世界の全てを!!』

「ふざけるな!!」

僕は砲撃魔法で壁をぶち破り、プレシアのいる最下層へ降り立つ。

「っ!？」

「世界はいつだって、こんなはずじゃないことばかりだよ!! ずっと昔からいつだって、誰だってそうなんだ!!」

フェイトとアルフが降り立つのを横目に、僕は自らの思いをぶつける。

「こんなはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ!! だけど自分の勝手な悲しみに、無関係の人間まで巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない!!」

そう、立ち向かうのも逃げるのも自由だが、迷惑を掛けることだけは絶対にしてはいけない。自分のエゴで他人を巻き込むことだけは、絶対に赦してはいけない。

(…あとは君達次第だ、頑張れ)

こちらに向かっているナツキと、僕の前に降り立ったフェイトの顔を思い描き、僕は状況を見守った。



「……………」

ふわりと降り立った私は母さんに視線を送る。

「…っ、ごほっ」

「っ！…!母さん…!…」

咳込む母さんに向けて、私は我知らず駆け出していた。

「何しに来たの…?」

が、母さんの一言に思わず足が止まってしまっ

「消えなさい…。もうあなたに用はないわ…」

母さんの曇りない悪意に怯みそうになるけど、あの少年の言葉を思い返し、勇気を出して一步を踏み出す。

「あなたに言いたいことがあって来ました」

「……………」

母さんが訝しげに、後ろのアルフが心配げに私を見る。

「私は…」

『頑張っ

『安心して行ってこい』

言葉に詰まる私を励ますように、二人の声が脳裏に蘇る。……頑張れ、私。

「私は、アリシア・テストロツサじゃありません。あなたが作った、ただの人形なのかもしれません」

あの少年が聞いたら怒って心配するだろうけど、私は大丈夫。彼のお陰で、乗り越えられたから。

「ただ……、私は……、フェイト・テストロッサは、あなたに生み出して貰った、あなたに育てて貰った、あなたの娘です」

「ふ…、ふふ…、はは…、あーっはっはっはっはっは！！」

私の言葉に、母さんが高笑いを上げる。

「だから何？今更あなたを娘と思えというの？」

「あなたが、それを望むなら」

対し、私の答えはシンプルな一言だった。

「それを望むなら私は、世界中の誰からも、どんな出来事からも、あなたを守る」

例えば嫌われようと、相手にされなかりと、私の想いは変わることはない。

「私が、あなたの娘だからじゃない。あなたが、私の母さんだから」

私は更に踏み出し、母さんに手を伸ばす。これが私の答え。フェイト・テストロッサとして私の選んだ、たった一つの答え。

「……………」

母さんはしばらく私を眺めた後、答えを口にした。

「くだらないわ」

拒絶の、答えを。

「っ!!」

こうなるかもしれないことはわかってた。むしろ、こうならないはずがなかった。でも改めて突き付けられた現実には、悲しかった。

カツン、と音を立て、母さんが杖をつくと同時に、紫色の魔法陣が展開する。そこに膨大な魔力が込められているのは、見るまでもなく明らかだった。

「マズい!!」

クロノが叫んだ瞬間、庭園の揺れが加速する。次元を揺らす震動が、周囲に波紋を呼び起こす。

『艦長!!ダメです!!庭園が崩れます!!戻ってください!!この規模の崩壊なら、次元断層も起こりませんから!!クロノ君達も脱出して!!崩壊まで、もう時間がないの!!』

エイミィの声に周囲の緊張感が高まる。床や壁、天井が崩れ始め、

虚数空間に飲み込まれていく。

「了解した！！フェイト・テストロッサ！！…フェイト！！」

クロノが必死に呼び掛けるが、私は動かない。いや、動けない。母さんの瞳に宿る狂気と執念に、これからしようとしていることを何となく理解してしまったのかもしれない。

「私は向かう…！！アルハザードへ…！！そして全てを取り戻す…！！過去も、未来も、たった一つの幸福も…！！」

母さんがそう叫び、虚数空間に飛び込んだ！！

「っ！！母さんっ！！」

飛び出そうとするが、理性がそれを止めていた。虚数空間内ではあらゆる魔法が消去される。私が行ったところで、何も変わらない。

「ナツキ…」

そんな時思わず口にしてしまったのは、一度も呼んだことのない、あの少年の名前。

『お前がそうしたいと決めたのなら、俺は全力で助けてやる』

「ナツキ…っ！！助けて…っ！！」

来るはずがないのに、届くはずがないのに、その名を呼んでしまう。どんな状況下でも諦めず、不可能を可能に変えてきた、私にとって大切な人の名を。

「っざけんなああああ!!」

そして、その祈りは、少年へと届いた。

崩壊が加速する庭園の中、最下層にたどり着いた俺は、おおその状況を理解した。

「アクセル!! やれるな!？」

《Yes, Sir!! (当然!!)》

アクセルを左手に握りしめ、右手を前へ伸ばした俺は、その名を叫ぶ。

「グラビティフォールツ!!」

重力使いたる魔導師にとっての究極魔法、重力制御による空間制御の魔法を。

クロノの虚数空間についての説明を思い出す。「もしも落ちたら、重力の底まで落下する」と。

「ああああああっ!!」

ならば、重力制御が可能な俺ならば、干渉することも可能!!

《!!》

アクセルが消去されそうになるグラビティフォールを必死に維持する中、俺は制御に全神経を費やす。

「退場するには…、まだ早いんだよっ！！」

捉えた感触を握りしめ、右手を思いつ切り振り上げる！！

「「なっ！？」」

クロノとプレシアの驚愕の声を聞きながら、俺はプレシアとカプセルを、無理矢理引っ張り上げた。

「はあっ…、はあっ…、はあっ…」

思わず脱力し膝をつく。ただでさえフェイト戦の消耗や、ここに来てからの戦闘。トドメに今の無理矢理なグラビティフォールで、俺の体はボロボロだった。

でも、まだ終わらない。終わる訳にはいかない。

「っ、はあっ…」

荒い息を整えながら俺はゆっくりと立ち上がり、呆然としているプレシア目掛けて歩き出した。

「はあっ…、はあっ…」

目の前で荒い息をつく彼を、私は呆然と見遣る。魔法とは最先端の科学、いわばプログラムだ。あらゆる魔法が無力化される虚数空間、

その計算式をデバイスの高速演算<sup>ワクチン</sup>で狂わせながら私を引っ張り上げたその力。私は目の前の少年に対して、初めて恐れを抱いていた。

「…何が目的？」

警戒の視線と共に送った至極当然の疑問に、彼はこちらを一瞥し、

「…一つだけ答える。それくらいはいいだろう？」

逆に質問を投げ掛けてきた。まあ、最後にそのくらいはいいか、と思いつく。

「…お前は、フェイトの母親になる気はないんだな？」

…何かと思えば、そんなことが。

「…ええ、ないわ」

「…っ！！」

こちらを見ていたフェイトが俯くが、構いはしない。…どうせ、すぐに会えなくなるのだから。

「…そうか」

彼はそれだけを呟き、俯く。

「何が目的か、だったな…。じゃあ、俺の答えも一つだけだ」

面を上げた彼は、私を見据え、

「復讐を届けに来た」

そう答えた。

「…そう」

薄々とだが、そんな予感はしていた。表にこそ出さないが、彼の言葉の端々に怒気が滲んでいたからだ。

「それで？私を殺す気かしら？」

両手を開き彼に尋ねる。もはやアルハザードに辿り着けるかどうかもわからないのだ。この少年に殺されるのも一興だろう。

「バカが。そしたらフェイトは俺を憎むだろ。誰かが我慢しなけりゃ、憎しみの連鎖は止まらない」

対し彼は肩を竦め溜め息。今思えばこうやって彼と話すのは初めてかもしれない。

「…アクセル」

《Rewrite Plasma》

デバイスの声と共に、彼の右手に銀色の光が宿り、バチバチと放電のような現象を起こし始めた。

「リライトプラズマ…」。この魔法は、磁力を操ることで間接的に電気を操作し、対象の脳を好きに弄れる魔法だ」



元々は、魔法絡みの記憶修正用だけだな、と彼は呟く。脳の働きは、全て電気信号によって行われているのは周知の事実だ。電気を操れるのなら、脳の破壊など容易だろう。

「そして俺はこいつで、あんたに最高で最悪の悪夢を見せてやる」

「最高で最悪の悪夢…?」

訝しげに尋ねた私に対し彼は、

「覚めない夢は、現実と変わらない、って話、知ってるか？」

ひどく奇妙な答えを返した。

「俺はこれから、あんたに一つの覚めない夢を、その肉体が滅ぶまで見せ続ける」

そして、その内容は、

「アリシアが生まれてから、死ぬ直前までの記憶だ」

「!？」

あまりにも衝撃的な答えに、私は絶句した。

「記憶を元になっているから、夢の中でも結末は変えられない。自らの愛娘が死ぬとわかっていても、お前は何も出来ないんだ」

正に拷問だろ?と尋ねてくる彼に対し、私は体を震わせる。…ああ、

そうか。そういうことか。

「そうね…、確かにそれは…」

ある意味、最高の夢だ。

「そしてその上で、お前をアルハザードと思われる座標まで転移させる」

「!？」

この少年、この後に及んで何を…!？

「目の前に娘を救える手段があつて、なのに何も出来ない自分を思  
い知る。…これが、俺の復讐だ」

…なんともまあ、馬鹿げたことを。

「…いいの？虚数空間に落ちたら最後、探索魔法も使えない。復讐  
のチャンスは、今だけなのよ？」

「これがあいつの教えてくれた…、天城ナツキとして、俺が選んだ  
答えだ」

らしくもなく確認するように尋ねた私に対し、ちらりと背後に降り  
立った、白い服の少女を見遣り答える少年。きっと、あの少女のお  
陰で、過去を乗り越えられたのだらう。

「く…、ふふふ…」

可笑しくて堪らない。自然と笑いが漏れる。これのどこが復讐なのか。なんと最高で最悪で、

優しい復讐なのだろう。

「ホント、天才の思考は凡人には理解出来ないわね…」

「大魔導師がよく言うよ」

互いにこの茶番劇を嘲笑いながら、言葉を交わす。この少年、甘いにも程がある。

「さて、時間もないし、さっさと始めるか」

彼の右手に輝く銀色が、更に激しくスパークする。私にはその光こそが、アルハザードへの入口に見えて仕方なかった。

（時間と空間が砕かれた時、その狭間に滑落していく輝き…、道は、確かにそこにある、か）

次元空間。時間も空間も無に還る虚数空間。そして、銀色の輝き。偶然にしても、出来過ぎだろう。

「フエイト…」

だからだろうか。彼の手が触れる瞬間、私は彼女に顔を向ける。かつての記憶をたどりながら。精一杯の笑顔を浮かべながら。

「幸せに、なりなさい」

母親として、最後の一言を告げた。

「っ!!」

言い終わると同時、彼の手が、額に触れて。

その軽い衝撃にも耐えられず、私は背後に倒れていつて。

アリシアが入ったカプセルと共に、虚数空間に落ちていく。

「一緒に行きましょう…、アリシア…」

薄れゆく意識の中、アリシアのカプセルを抱き寄せる。

「今度はもう、離れないように」

睡魔の闇に包まれて、私達はただ、落ちていった。

## 第十六話「決意と終焉」(後書き)

この作品は二次創作です

この作品は二次創作です

大事なことなので二回言いました。

ええ、虚数空間なんて幻想はなかったことになりました。

一応注釈(解説?)を活動報告に載せておくので見たい方はどうぞ。

ていうかナツキがもはや否定できないレベルのチートになりつつあるようn(ry

次回、いよいよ最終回。

神回はことごとくクラッシュしているの、あまり期待せずにお待ちくださいw

## 最終話「きずな」（前書き）

それは、失意と絶望の中で終わるはずだった私、フエイト・テストロッサに訪れた、運命の分かれ道。

貰ったのは温もりと優しさ。信じたのは自分の想い。

願ったのは、小さな想いが届くこと。叶わないはずだったそれは、少年の想いで確かに届いた。

だから私は一步を踏み出して、想いを届けたいと思った。少年と少女に、たくさんの「ありがとう」を伝える為に。今度こそ、本当の自分を始める為に。

出会いと別れのその先に、新しい未来があると信じて。

魔法少女リリカルなのはAnother、最終回。始まります。

## 最終話「きずな」

『お願いみんな――！脱出、急いで――！』

エイミイの悲鳴のような通信に、プレシアが落ちた先を眺めていた俺は我に返った。崩れ落ちる時の庭園から脱出しないと、プレシアの二の舞をたどってしまう。

「なのは、ユーノ、アルフ、クロノ、先に行つてくれ」

「……！？」

唐突な発言に、言われた四人が驚愕の視線を送ってくる。が、俺の視線はただ一点、金髪の少女に向けられていた。

「決着をつけたら、すぐに戻るから」

「……わかった」

俺の声色から何かを感じ取ったのか、クロノが承諾する。

「ナツキ君……」

「フエイト……」

なのはとアルフが、それぞれ心配げな視線を向けてくる。……無理もないか。

「大丈夫だよ、なのは。死ぬつもりはないから、生きて帰ってくる。」

約束だ」

なのはの目を見据え、きつぱりと答える。そう、天城ナツキはまだ始まったばかりなのだ。こんなところで心中するのは御免被る。

「…うん、約束」

小指を絡め、固く約束する。元々破るつもりもないが、これでハードルは上がった訳だ。

「大丈夫だよ、アルフ…」

フェイトもアルフに微笑み掛けながら、小指を差し出す。

「絶対に、帰るから」

「…うん」

アルフと指切りを交わし、フェイトは俺に向き直る。俺達の間の微妙な空気を察したのか、みんな素直に脱出していった。

「…さて、何から言ったものかな」

頭を掻きながら、俺はフェイトに向き直った。

「まずは…、ゴメン」

向き直ったナツキは、まず最初に頭を下げた。



「あんな形とはいえ…、お前の母親を目の前で…」

「ナツキ」

謝り始めたナツキを遮って、私は言う。

「話してくれないかな？全部」

直感的にその言葉の意味を理解したのだろう。ナツキが表情を変える。

「…聞いても面白いもんじゃないぞ？」

「ナツキのことなら、私は知りたい」

それでもなお聞いてくるナツキに、私はきっぱりと答えた。

「…そうか」

ここじゃ危ないから別の機会に、と言って逃れることも出来たはずなのに、ナツキは全部、包み隠さず語ってくれた。

両親を事故で失ったこと。妹と支え合って生きてきたこと。妹がジュエルシードを作ったこと。母さんがそれを狙って、村を滅ぼしたこと。目の前で妹を殺されたこと。ジュエルシードを追ってこの世界に来たこと。妹にそっくりの目をした少女や、妹に瓜二つな私と出会ったこと。戦って、すれ違って、少女に救われたこと。私を助けたと思ったこと。全部全部、話してくれた。

「そっか…」

全てを聞き終えて、最初に出た言葉はそれだった。

「悪い、なんかしんみりさせちまったな」

「ううん、そんなことない。話してくれて、嬉しい」

私は首を振り、微笑み掛ける。彼の方がよっぽど辛いモノを抱えているのに、何故他人をそこまで気遣えるのだろうかと思う。

「ナツキの方が私なんかよりずっと大変だったのに…、何度も手を伸ばしてくれて、助けてくれて、嬉しかった」

脳裏に蘇る、今までの記憶。彼と幾度もぶつかり合い、傷を負うこともあったけど、今はこうして同じ場所に立っている。そのことが、素直に嬉しかった。

「それに母さんも、最後に笑い掛けてくれた」

ナツキの「復讐」でアリシアの呪縛から解放された母さんは、一瞬だけだったけど、私に笑顔を見せてくれた。それは、私が心の奥底で望んでいたもので。けど、きつと手に入るハズのなかったモノで驚いたけど、凄く嬉しかった。

「ありがとう、ナツキ。母さんを救ってくれて」

「救えた…、のかな…」

礼を述べる私に対し、ナツキの顔は陰ったまま。

「俺はあれがあゝの状況で出来る最善だったとは思ってる。だけど、俺に力があれば、もっといい結末が迎えられたかもしれない」

独白するように、ナツキは自らの迷いを語る。

「何が良くて何が悪いかなんて、その場その場で簡単に変わる。もしかしたら俺は、最低で最悪の選択をしてしまったのかもしれない」

「そんなことないよ」

ナツキを遮って、私は断言する。

「だって母さん、笑ってたもん」

虚数空間に落ちていく時、母さんは笑ってた。アリシアの入った力プセルを抱きしめ、幸せそうに。

「夢の中だけだとしても、母さんを救ってくれて、ありがとう」

「…別に、大したことじゃないよ」

そつぽを向きながら、照れたように答えるナツキ。初めは無表情な人だと思ってたけど、こんな表情も出来たんだ。

「さて、問題はこれからだ」

と、気を取り直したようにナツキがこちらを見る。

「お前は、これからどうするんだ？」

これから？

「え…、っと…」

わからない。ジュエルシードはもう集める必要もない。母さんに言葉伝える目的は果たしたし、母さんに笑い掛けて貰う夢も叶った。じゃあ、次は？

「あ…、あれ…？」

わからない。何もわからない。今まで行動指針をくれていた母さんは、もういない。

「っ…！」

そう。母さんは、もういない。

「う…、あ…」

寒い。ひどく寒い。確かに私のバリアジャケットは薄着だが、今までに感じたことのない寒さを感じる。

「あ…、うあ…」

母さんは、私のたった一人の家族は、もういない。

「ひうつ…」

体ががたと震える。視界が歪む。不安に押し潰され、世界に私

一人しかいないように感じる。

「あ…、あれ…、おかしいな…」

感情を押さえ込むのは得意だったはずなのに。今までずっとやってきたことのはずなのに。私の瞳から、ぽたぽたと雫が滴り落ちる。

「ちょっと…、待ってて…、すぐ、収まるから…」

必死に涙を止めようとするが、止まらない。涙は心が壊れないよう、感情を洗い流す安全装置だという話を聞いたことがあるが、

母さんを亡くした私の、涙が止まる時なんて、来るの？

（ダメ…、お願い…、止まって…）

必死に願いながら、ボロボロと零れる涙を拭いながら、頭の中はどんどんぐちゃぐちゃになっていく。

（嫌われたくない…！！）

せつかわかり合えたのに、変な子だと思われちゃう。そしたらまた、いなくなっちゃう。だから、止めなきゃ。

（お願い…！！止まって…！！）

だが涙は止まらず、足元にどんどん波紋を描いていく。心が押し潰されそうな感覚に、一人私はただ震え続ける。

（止まって…！！止まっ…、っ！？）

が、次の瞬間、私は温もりに包まれていた。体を覆っていた寒さと震えが収まっていく、不思議な温かさがあった。あれだけ願っても止まらなかった涙は、あっさりと止まった。

「ナ、ツキ…？」

涙に濡れた瞳で見上げると、ナツキは私を抱きしめたまま、顔を真っ赤にして視線を逸らしている。

「あー、いや、その、えーと、なんだ、奇遇なことに、俺もお前も天涯孤独の身な訳で」

頭を掻きむしり、あーとかうーとか唸りながら必死に言葉を紡ぐ。

「…俺はお前にとつてのプレシアにはなれないけど、代わりに寂しさを癒すことくらいは出来る」

瞳を閉じ、心の中から伝えたい言葉を必死に探し出すナツキ。そんな彼に、心が揺れ動くのを感じる。

「だから、まあ、その、なんつーか…」

再び数度唸った後、彼は、

「…俺でよければ、お前の兄になってやるよ」

そう言った。

「…え？」

「いやだからまあ、なんつーの？俺としてもお前のことはほっとけねえし、お前にしても一人でいるよりはマシだろうし…」

再び頭を掻きむしりながら、そう続けるナツキ。その言葉は、私への純粋な優しさだけで出来ていて、たくさんの温かさが込められていて…、

「まあお前が嫌なら別にいいんだけど…、ってうおおい!？」

「ひくっ…、えうつ…、ふえええん…」

止まっただけの涙が、再び溢れ出すのを感じた。

「え、つまりあれか！？泣く程嫌だったか!？」

オロオロとし始める彼に抱き着きながら、私は思いつ切り首を横に振る。

「違うの…。ナツキに、そう言っ、貰えたことが、嬉しくて…。私に、家族って、思ったら、嬉しくて…」

涙声でもりながらも、私の想いを伝える。余すことなく伝わるように、ぎゅっつと抱きしめながら。

「…そっか」

フツと表情を緩めたナツキは、私の頭を優しく撫でる。

「そんじゃ、兄としての初仕事でもしましょうか」

彼はそう呟き、私を抱きしめたまま地面に座り込む。

「時間なら気にしなくていい。俺がなんとかしてやるから、思う存分泣いとけ。今まで溜め込んでた分、全部吐き出してすっきりさせるまで、な」

それが、限界だった。

「ひうつ…、えうつ…、うわあああああん!!」

私はナツキの胸に縋り付いて、赤子のように泣き声を上げる。ナツキは何も言わず、ただ優しく頭を撫で続けてくれた。

家族の温もりに包まれて。もしかしたら、生まれて初めて。

思いつ切り、泣いた。

ナツキ君とフェイトちゃんが時の庭園から戻って来たのは、それが完全に崩れ去る僅か二分前のことだった。

「お帰り!! ナツキく…、ん…?」

ブリッジに入って来たナツキ君に声を掛けるが、語尾はしりすばみに消えていった。

何故なら、フェイトちゃんがナツキ君の左腕にべったりと引っ付いていたからだ。

「えーと…、お帰り?」

不自然に固まった空気を解そうと、ユーノ君が二人に声を掛ける。



「あ、ああ……。ただいま」

私につられてフリーズしていたナツキ君も、どうにか言葉を搾り出す。

「フエイト!!!大丈夫!？」

と、フェイトちゃんが心配で堪らなかったのであらう、アルフさんが真つ先に駆け寄る。

「うん。大丈夫。お兄ちゃんを守ってくれたから」

僅かにたじろぎながらもフェイトちゃんが答えるけど、

「「「「「……お兄ちゃん？」「」「」「」

聞き覚えのない単語にブリッジの全員の声がシンクロした。

「え？あつ……」

フェイトちゃんも気付いたのか、顔を真っ赤にしてナツキ君の陰に隠れる。

「いや、まあ……家族がない同士ほっとけなかつたんで……」

自然と視線がナツキ君に集中し、当の本人は頭を掻きながら答えた。  
「えーと。それってつまり。」

「ふええええええええ！？」

思わず私はダッシュで詰め寄り、ナツキ君の手を握る。

「え！？つまりどういうこと！？ナツキ君は私より、フェイトちゃんの方が好きなの！？」

「……………はあ！？いや待て待て待て、何がどうしてそうなった！？」

私の質問に対し、ナツキ君は何を言っているのか本気でわかっていないように聞き返す。

「いや、だからな？俺は別にそーいうやましい感情じゃなくて、フエイトが心配だから…、好きだとかそんなんじゃないよ！！」

ナツキ君が慌てて否定するが、

「…お兄ちゃん、私のこと、嫌い？」

「…ふっ」

背後の純粋な少女が追い打ちを放った。

「いやだからどうしてそうなる！？嫌いだったら兄になるとか言わないからな！？」

「やっぱり私よりフェイトちゃんが好きなんだ…」

慌てて訂正するナツキ君に、ふと悪戯心が刺激された私は、顔を覆いながらそう言ってみる。

「いやだからフェイトの好きは男女間のそれじゃなくてあくまで兄妹間のそれな訳で…」

「…私、お兄ちゃんのこと、好きだもん」

弁解するナツキ君と悪戯つ子のように微笑む私に、バットをへし折る程の剛速球がヒットした。ストライクで。

「え！？いや、でもお前は妹で俺は兄で…、あれ！？何これ！？」

混乱のあまりもはや意味の繋がらないような言葉を吐くナツキ君と、

「あわわわわわわ…！！」

思わぬ強力なライバルの出現に動揺する私と、

「…二人共、どうしたの？」

ぽかんとしたまま私達の間で視線を漂わせるフェイトちゃんを尻目に、

「…とりあえず、治療を受けた方がいいよ」

帰ってきてからずっとブリッジに待機していたクロノ君が私達を促し、六人は医務室へ移動することになりました。

『庭園の崩壊は終了。全て虚数空間に吸収されました。次元震も停止。断層発生はありません』

『…そーですか』

リンディ艦長との事後報告の念話を切り、俺はぼーっと目の前の現実から逃避しようとする。

目の前では黒いドレス風のワンピースに着替えたフェイトが俺の頭に包帯を巻いていて、足元には擦り傷を消毒している聖祥附属の制服を着たなのがいる。

頭の傷は脱出の際瓦礫を掠めたもので、責任を感じたのかフェイトが自ら治療を始めたのだ。対抗するようになのはも細かい傷の手当てを始めるし、好意を無下にするのも心苦しい。言ったところでこの二人は聞かないだろうから放置しているが、お前らユーノやアルフに治療してやる気はゼロか。

ちなみにクロノはエイミィに治療を受けているのでノーカンの方向で。

「ところで…、どうしてフェイトやアルフまでここに？」

と、医務室に来てから約10分。ユーノが遅すぎるツツコミを入れた。

「えーと…、元々フェイトとアルフはこの事件の重要参考人だから、護送室に収容されるはずだったんだけど…」

俺は苦笑して呟き、ちらりとフェイトを見る。一生懸命に包帯を巻く彼女が、俺から離れるとは思えなかった。…いやまあ、若干自惚れ入ってるかもしれんが。

「で、仕方ないから準重要参考人であるナツキも一緒に収容しようとしたら」

溜め息をついたクロノの視線の先には、ピンセットの先に挟まれたコットンと睨めっこするなのはの姿。

「…ああ、そういうこと…」

全てを理解したのか、なんだかユーノが哀れみの視線を送ってきた。他人事だと思いやがって…。

『おいユーノ。前に猫天国から救い出してやっただろ。なんとかしてくれ』

『ゴメン無理』

『諦め早っ！！』

ユーノとそんなアホな念話を交わしていると、クロノが盛大に溜め息をついた。

「今回の事件は、一歩間違えれば次元断層さえ引き起こしかねなかった、重大な事件なんだ。時空管理局としては、関係者の処遇には慎重にならざるを得ない。…はず、なんだけど…」

「うん、出来たよお兄ちゃん」

「こっちも終わったよー」

無邪気に微笑む二人を見て、クロノが頭を抱え込む。

「なんなんだこれは…。どこか別の時空なのか…？」

「なんつーか、俺もその気持ちはよくわかる」

ユキの想いを継いで、なのはに教えられて、フェイトを救った。その結果がこの混沌とした医務室だと思うと、なぜか涙が込み上げてくる。

（なあユキ…。本当にこんな道でよかったのか…？）

なんか違う意味での地獄絵図しか見えないんだが。

「俺…、この世界で何がしたかったんだ…」

「僕に聞くな…」

俺達は互いに顔を見合わせ、盛大に溜め息をついた。

それから数日。次元震の余波が収まるまでの間、私達はアースラの中で過ごしました。ナツキ君が空間制御で押さえ込むことを提案したけど、私とフェイトちゃんに全力で止められて苦笑していました。ジュエルシードに関しては、プレシアさんが使った分は魔力の抜けただだの石になっちゃったんだけど、時間があれば復活するらしいから、管理局の人達が保管することになりました。

フェイトちゃんに関しては、ナツキ君がどうにか説得して護送室に入って貰うことになりました。ナツキ君がリンディ艦長に提示した二つの条件のお陰か、意外とすんなり入ってくれたみたい。一つ目が手錠を付けさせないこと。二つ目が、ナツキ君は自由に護送室に入る権利を持つこと。特に二つ目は大分粘ったみたいで、クロノ君

と相当揉めたらしい。おかげでナツキ君やフェイトちゃんと話す機会は少なくなっただけ、フェイトちゃんは大笑してくれるようになったらしいから、まあ、いいかな。

「今回の事件解決について、大きな功績があつたものとして、ここに略式ではありますが、その功績を讃え、表彰致します」

そして、久しぶりにナツキ君と大きな時間が取れた日。私達はミーティングルームで表彰を受けていた。

「高町なのはさん、ユーノ・スクライア君、天城ナツキ君、ありがとう」

ナツキ君の推薦もあり、私がリンディさんから賞状を受け取る事になった。『フェイトを救ったのは俺かもしれないけど、それは結果論だし、それを言うなら俺を救ってくれたなのはのおかげだから』とのこと。

「あ、ありがとうございます」

ぺこりと一礼し、賞状を受け取る。温かい拍手に包まれて、私は思わずはにかんだ。

その後、お疲れ様会的な感じで、私達は食堂に集まっていた。ナツキ君は三人分の食事を持って抜けた為、人数は四人だ。

「クロノ君、フェイトちゃんは、これからどうなるの？」

「事情があつたとはいえ、彼女が次元干渉犯罪の一端を担っていたのは、紛れも無い事実だ。重罪だからね…。数百年以上の幽閉が普通なんだが…」

数百年…！？

「そんなっ！！」

「なんだが！！」

私の声を遮り、クロノ君が強い口調で続ける。

「状況が特殊だし、彼女が自らの意志で次元犯罪に加担していなかったこともはつきりしている。更に、発端の事件である天城一族襲殺事件の被害者である、ナツキが色々取り計らってくれた」

ナツキ君、フェイトちゃんの相手をしながらそんなことまでしてたんだ…。

「後は、偉い人達にその事実をどう理解させるかなんだけど…、その辺には、ちよつと自信がある。ナツキも証言してくれるし、心配しなくていいよ」

「クロノ君…」

フェイトちゃんの為にそこまで頑張ってくれたことに、素直に感動する。

「何も知らされず、ただ母親の願いを叶える為に一生懸命なだけだった子を罪に問うほど、時空管理局は冷徹な集団じゃあないから」

ていうか穏便に済ませないとナツキが暴れるからね、と苦笑するクロノ君。最近気付いたけど…、



「クロノ君って、もしかしてすごく優しい？」

「…別にそんなんじゃないよ。執務官として当然のことだ」

顔を背けながら答えるクロノ君だけど、ちょっと顔が赤い。照れなくともいいのに。

「次元震の余波は、もうすぐ収まるわ。ここからなのはさん達の世界になら明日には戻れると思う」

「よかったあ…」

リンディさんの言葉に私は微笑む。アースラでの生活は確かに快適だけど、やっぱりお家は恋しい。

「ただ、ミッドチルダ方面の航路は、まだ空間が安定しないの。しばらく時間が掛かるみたい」

「そうなんですか…」

でも、ユーノ君のいた世界には行くには時間が掛かるみたい。

「数ヶ月か半年か、安全な航行が出来るまで、それくらいは掛かりそうね」

「まあ、うちの部族は遺跡を探して流浪している人ばかりですから、急いで帰る必要もないと言えないんですが…。でもその間、ずっとここでお世話になる訳にもいかないし…」

世話になり続けるのは心苦しいのか、ユーノ君が困ったように呟く。

「じゃあ、家にいればいいよ！！今まで通りに！！」

私の提案に、ユーノ君が驚きの視線を向ける。

「なのは…、いいの…？」

「うん、ユーノ君さえよければ」

私は笑顔で即答する。困った時はお互い様だもんね。

「じゃあ、その…、お世話になります」

「うん！！」

頭を下げたユーノ君に頷くと同時に、私は満面の笑顔を浮かべた。

『あの人が目指していたアルハザードのこと…、ナツキ君は知っている？』

『ええ、旧暦以前の前世紀に存在していた空間で、今はもう失われた秘術がいくつも眠る土地、でしたよね』

ささやかなパーティーを終え、膝の上で眠るフェイトの頭を撫でながら、リンディ艦長の質問にすらすらと答える。

『…ユキの研究の中で何回か聞きましたからね。でも、とつくの昔

に次元断層に落ちて滅んだはずですよ？」

軽く驚いているリンディ艦長に種明かしをし、続きを促した。

『あらゆる魔法がその究極の姿にたどり着き、その力を持つてすれば、叶わぬ望みはないとさえ言われた、アルハザードの秘術……。時間と空間を遡り、過去さえ書き換えることが出来る魔法……。失われた命をもう一度蘇らせる魔法……。彼女はそれを求めたのね……。』

『でも、魔法を学ぶ者なら誰だって知ってる。過去を遡ることも、死者を蘇らせることも、決して出来やしない。だからあいつは、そんなお伽話に等しい伝承に縋るしかなかった、ってところでしょ？ね……』

親殺しのタイムパラドックス、という言葉がある。過去に遡った自分が自分の両親を殺した場合、自分は生まれなかったことになる。ならば両親は殺されることもなく、自分は無事に生まれてくることになる、そんな堂々巡りの矛盾話だ。

歴史を変えろということはそれだけ危険なことだ。過去を書き換えれば未来が変わり、今ここにいる俺達は消えてしまいかもしれない。そもそもアリシアが死ななければ、俺はこの世界に来なかったし、なのはやフェイトと出会うこともなかった。過去を変えろという行動は、それだけの多大なリスクを孕んでいるのだ。

『でも、あれだけの大魔導師が、自分の命さえ賭けて探してたのだから、彼女はもしかして、本当に見付けたのかもしれないわね……。』

リンディ艦長の声に、俺はそれを話すことを決めた。

『ジュエルシードは、ユキが作った次元干渉型のロストロギアだっ

てことは知ってますよね。ユキがそれを作った理由は、「周囲への被害を出さず、アルハザードの知識を発掘する為」だったんです」

『…！？』

俺の発言にリンディ艦長が息を呑む。…まあ、そりゃ驚くよな。

『つまり、彼女は…』

『さあ？多少気がふれていたんで、何とも言えません。ある意味、だからこそアルハザードの存在を信じていたのかもしれないね』

他人に対しては狂ったような態度しか取らなかった彼女だが、俺に対してだけは割と普通に接していた。どちらが彼女の本質か、なんてわかる訳もない。俺は家族だから、嫌われないように上辺だけ取り繕っていたのかもしれないのだから。

『それは、両親を生き返らせる為？』

『だったらあいつは最初からプレシアに協力してますよ。あいつは多分、知りたかったんでしょうね…。「世界」の全てを』

あいつは学ぶことに貪欲だった。次々と知識を吸収していき、更なる発展を望んでいた。あいつなら本当に「知りたい」というだけの理由で、アルハザードを目指そうとするだろう。

『…まあ、本人達がいらない今となってはわかりませんよ』

いくら俺達が意見を交わしたところで、プレシアもユキももついないのだ。いくら議論を重ねたところで徒労でしかない。

『…それもそうね。話は終わりよ。フェイトさんの時間を邪魔してごめんなさいね』

『いえ、別に大丈夫ですよ。本人寝てますし』

現在進行形で熟睡中である。ずっと頑張ってたから疲れてるんだろ  
うな。

「ナツキ…」

念話を切ると同時、アルフが声を掛けてきた。

「…ありがとう」

と、アルフはいきなり頭を下げた。

「…え？新手のどつきり？」

対し心当たりのない俺は、そんなマヌケな答えしか返せない。

「あんたは命懸けでフェイトを助けてくれた。何度もフェイトに手を伸ばしてくれた。あたしにすべきことを教えてくれた。おまけに色々手を回してくれて…。今まで言う機会がなかったけど…、感謝してもしきれないよ」

「…ぷっ」

アルフの言葉に、俺は思わず吹き出す。一体何かと思えば…、そんなことか。

「な、何笑ってんだよ！！あたしは真面目に…」

「いや、悪い悪い。でもさ…」

顔を真っ赤にして言うアルフに笑い掛ける。

「俺は自分がやりたいことをやっただけ。感謝される為にやった訳じゃない」

だから畏まって言われても困るよ、と苦笑する。対しアルフはぽかんとした後、呆れたように笑った。

「ホント…、変な奴だね…」

「身近な奴がぶっ飛んでたからな」

互いに笑い合い、膝の上の少女を見遣る。

「ん…、う…」

さらさらとした髪を梳き、再び視線を合わせる。

二人の目的は同じ。この少女を支え、守ること。だから。

「これから頼むぜ？主思いの立派な使い魔さん」

「こっちの台詞だよ、妹思いの優しいお兄ちゃん」

互いに誓いを交わしながら、俺達は静寂に浸ることにした。

「それじゃ、今回は本当にありがとうございます」

「協力に感謝する」

リンディさんとクロノ君に見送られ、私とフェレットのユーノ君は転送ポートに立つ。

「なのはちゃん、ここにはいつでも遊びに来ていいからねー」

「はい、ありがとうございます」

エイミィさんの言葉に頷くと同時、クロノ君が溜め息。

「エイミィ、アースラは遊び場じゃないんだぞ……」

「まあ、いいじゃない。どうせ巡航任務中は暇を持て余してるんだし」

呆れて訂正するけど、リンディさんの大賛成と言わんばかりの発言にずっこける。

「か、艦長まで……」

「……えへへ」

そんな光景を見ていて、私は嬉しくなる。こんな風に家族みたいな繋がりを作れたことが、嬉しくて、あったかい。

「フェイトの処遇は、決まり次第連絡する。大丈夫、決して悪いようにはしない。今もナツキが頑張ってるからね」

「うん、ありがとう」

ナツキ君、予定が入ったから見送りに来れないって言ってたけど、そういうことだったんだ。

「ユーノ君も、帰りたくなったら連絡してね。ゲートを使わせてあげる」

「はい、ありがとうございます」

肩に乗ったユーノ君も、リンディさんにぺこりと頭を下げる。

「じゃ、そろそろいいかな」

「はい」

エイミィさんの声に頷くと同時、クロノ君が顔を向ける。

「あ、そうだ。なのは、ナツキから伝言」

ナツキ君から？なんだろう…。

「色々あるだろうけど、頑張れ、ってさ」

…もう。自分だって無茶やるくせに、他人の心配ばかりして。

「…うん。ナツキ君もね、って伝えておいて」



「…わかった」

クロノ君も同意見なのか、笑いながら承諾してくれた。

「それじゃ、またいつか」

「うん、またね、クロノ君、エイミィさん、リンディさん」

三人に見送られる中、私は光に包まれて、海鳴臨海公園に戻ってくる。

「すーっ、はぁーっ」

懐かしい海鳴市の空気を、目一杯吸い込んで。

「帰ろっか、ユーノ君」

「うん」

高町家目掛けて、私は駆け出した。みんなに「ただいま」って、言う為に。

数日後。

瞳の奥の秘密を吸い込まれそうな笑顔の裏の真実に柔らかな愛が届くけに行くよ

「んにゅ…」

全てが始まったあの日と同じメロディーで、目を覚ます。

あれから私は日常に戻った。今まで通りだけど、いろんなことがあったから、今までとは少しだけ違う日常。

「…てい」

ぼちつとボタンを押し、布団を被り直す。今日はお休みだから、もう少しゆっくりしたい。

夢中だった時のことは、過ぎ去ってしまえば、なんだか一瞬のことのよう。だけど、心の中には確に残ってる。出会ったこと、必死だったこと、いろんなこと。

…ただ、一つだけ気掛かりがあるとするとするなら、

「…ふえ？」

だが、そんな睡魔と思考は再び流れ出したメロディーによって霧散した。ごそごそと弄り、ディスプレイを見ている。そこに表示されていた文字は、

「ほわぁ!？」

時空管理局。

「はい、なのはです!!」

慌てて通話ボタンを押し、携帯を耳元に当てる。

『よ、なのは。元気にしてたか?』

「な、ナツキ君!？」

だが、出たのはナツキ君で、わたたとしながら聞き返す。こんな時間にいきなり電話。一体どうしたのかな…。

『さつき正式に決まったんだが、フェイトの身柄はこれから本局に移動。それから事情聴取と裁判が行われる』

「え!？」

ナツキ君が語る、私のただ一つの気掛かり。綺麗な目をした、温かな優しさを持ったあの子のこと。

『フェイトはほぼ確実に、いや、絶対に無罪になる。大丈夫だ』

『あれからナツキがあっちこち動き回ってくれたからな』

『そういうクロノ君も、あれからずっと証拠集めしてくれたからねー』

外野からクロノ君とエイミィさんの補足が入る。つまり、それって…!!!

『お前ら…、そういうことは言わなくて』

「ありがとう!!!ナツキ君!!!クロノ君!!!」

私はナツキ君の声を遮って、二人にお礼を言う。ホント、感謝してもしきれない。

『聴取と裁判、その他諸々は、結構時間が掛かるんだ。だけど』

『その前に、フェイトがお前に会いたい、ってさ』

ナツキ君の言葉に、私は一瞬フリーズした。：フェイトちゃんが、私に！？

「本当！？」

『嘘ついてどーすんだよ』

ナツキ君が苦笑しながら答える。だけど、信じられなくて…。

『つー訳で、今から臨海公園に出てこれるか？』

「うん！！勿論だよ！！」

既に着替え始めていた私は、ユーノ君を肩に寄せ、走り出した。

答えを、聞く為に。

「来たか」

お兄ちゃんの声に、海を見ていた私はそちらに視線を向ける。あの白い子が、こちら目掛けて走ってくる場所だった。

「フェイトちゃん！！」

手をブンブン振りながら私の名前を呼ぶ。嬉しいけど危ないんじゃない

…、

「にゃわっ！！」

「ほっ、と」

少女が躓いて転ぶのと、お兄ちゃんが10m先のそれを支えるのはほぼ同時だった。…ホント、よく見てるんだなあ、なんてことを思う。

「嬉しいのはわかるけどはしゃぎ過ぎ」

肩のフレットをつまみ上げ、アルフにぽーいと放りながらお兄ちゃんか頭をぽふぽふ叩く。

「だって…」

「…安心したよ」

何かを言いかけた少女を、お兄ちゃんが笑顔で遮った。

「いつも通りのなのはで安心した。大丈夫そうだな」

それだけ言い残して、お兄ちゃんはクロノの腕を掴み、ズルズルと引きずり始める。

「お、おい！！ナツキ！！」

「ここからはなのはとフェイトだけの時間だ。邪魔者はおとなしく引っ込みましょーねー」

ちらりと私達に視線を送りながら、肩にフェレットを乗せたアルフを促す。

「…邪魔者なんかじゃないよ」

我知らず反論してしまい、それを見てお兄ちゃんが苦笑する。

「だけど、フェイトが答えを出さないと、だろ？」

「…もう」

…本当に、ズルい。これからすることを考えると心細くて、縋りた気持ちもあるのに、そんな風に言われたら。

頑張るしか、ないじゃないか。

「ま、俺達は向こうにいるから。あんまり時間はないけど、しっかりと話しとけ。後悔しないように、な」

お兄ちゃんは私達に微笑み、この場を後にした。

「…ありがとう」

二人共声がシンクロし、思わず顔を見合わせる。

「…ふふっ」

「…あははっ」

なんだかそれがおかしくて。しばらく私達は、一緒に笑い続けた。

「なんだか話したいこといっぱいあったのに…、変だね。フェイトちゃんの顔見たら、忘れちゃった」

「私は…、そうだね。私も上手く言葉に出来ないや…」

来る直前まで色々考えてたのに、少女の顔を見たらバカバカしく思えたのだ。事前に用意していた言葉を伝えるだけなら、伝言を頼むだけでも事足りる。

『ありのままの自分の想いを、真っ直ぐぶつければいいさ』

困り果てて相談した私に、お兄ちゃんの返した言葉を思い出す。今なんとなく、その言葉の意味を理解出来た気がした。

「だけど、嬉しかった」

「え？」

驚いたように聞き返す彼女に、私は笑みを向ける。

「真っ直ぐ向き合ってくれて、何度も手を伸ばしてくれて。とっても嬉しかった」

私に手を差し延べてくれたのは、お兄ちゃんだけじゃない。目の前の少女も、何回も向き合ってくれた。

「ううん、頑張ったのはナツキ君だよ。私はただ、友達になれたらいいな、って思ってた。ただそれだけの為に頑張っただけ」

少女は否定しながらはにかむ。この子が、お兄ちゃんを助けてくれたんだ…。そして、そのお兄ちゃんがいたからこそ、私は今、ここにいる。

「でも…、今日は、もうこれから出掛けちゃうんだよね…」

「うん…。少し長い旅になっちゃうと思う…」

事情聴取や裁判にどれだけ時間が掛かるかわからないけど、少なくとも一日二日で終わるようなものではないだろう。

「また…、会えるんだよね？」

「…うん。少し悲しいけど…、二人のお陰で、やっと本当の自分を始められるから…」

だから、これから始めることは、新しい私としての最初の一步。

「来て貰ったのは、返事をする為」

「え…？」

ぽかんと聞き返す少女に、私は向き直る。

「君が言ってくれた言葉…、友達になりたいって言葉」

「っ！…うん、うん！…」

少女もこちらに向き直り、こくこくと頷く。

私は今まで、一人で座り込んで泣きじゃくってたただけだった。



「今まで私にそんなこと言ってくれた人なんていなくて、だけど嬉しくて」

自らの胸の内、その想いをありのままにぶつける。

でも、お兄ちゃんが涙を拭って、立ち上がらせてくれた。ゴールでこちらに手を伸ばしているのは、あの少女。

「だから、なのは…」

私は初めてその名を呼び、瞳を真っ直ぐに見据え、

「…友達に、なりたいんだ」

そう、告げた。

「私に出来るなら、私でいいなら、私の初めての、友達になって欲しい」

「初めての…、友達…」

フェイトちゃんの言葉に、半ば呆然としながら呟く。そのこと自体は凄く嬉しい。だけど、

「でも、ナツキ君は…」

「お兄ちゃんは特別」

ナツキ君が初めての友達なんじゃないのか。ナツキ君こそが初めての友達に相応しいんじゃないのか。そう思って問い掛けた私の声に、フェイトちゃんは首を振る。

「お兄ちゃんは私を何度も助けてくれた。私が壊れそうになった時、優しく抱きしめてくれた。だからお兄ちゃんは、友達以上に大切な人」

フェイトちゃんは目を閉じて、自分の体を抱きしめながらそう答える。それを見て私は、ああ、フェイトちゃんも同じなんだな、と思う。

「だけど私、どうしていいかわからないの。友達はいなかったし、お兄ちゃんは自分から言ってきたから。どうやったら友達になれるのか、わからないの…」

迷うように瞳を揺らして、俯くフェイトちゃん。そんな彼女に私は、

「…簡単だよ」

「え…？」

驚いたように私を見るフェイトちゃんに笑い掛けながら、

「もう私達は、私とフェイトちゃんは友達だもん」

答えを、告げた。

「…え？」

「名前を、呼べばいいんだよ」

ぽかんとした顔のフェイトちゃんに、私は話し始める。

「な…、まえ…？」

「うん、そう。初めはそれだけでいいの。君とかあなたとか、そういうのじゃなくて、ちゃんと相手の目を見て、はっきり相手の名前を呼ぶの」

そう、それだけ。たったそれだけでも、友達になることは出来る。

「さっきフェイトちゃんは、真っ直ぐ私の目を見て、名前を呼んでくれたでしょ？」

きつと私は忘れない。私に、友達になりたいって言うてくれたフェイトちゃんの姿を。

「だからもう、私とフェイトちゃんは友達」

フェイトちゃんの手を握りしめて、ニッコリと微笑む。

「な…、のは…」

「うん…！」

「なのは…」

「うん…！」

「なのは…!!」

「うん、うん!!」

互いに何かを確かめるように、言葉を交わし続ける。そんな私達を祝福するかのように、一陣の風が吹き抜けた。

「ありがとう…、なのは…」

「うん…!!」

嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて。気が付けば私は、涙を流していた。

「泣かないで、なのは…。なのはが泣いてると、私も悲しいよ…」

「…っ!! フェイトちゃんっ!!」

そんな彼女の優しさに、もう限界で。私はフェイトちゃんをぎゅうっと抱きしめる。

「なのはは温かいね…、お兄ちゃんと同じ…」

「フェイトちゃんも…、やっぱり…?」

その言葉に何かを感じ、私はフェイトちゃんを見上げる。

「うん…。私も、お兄ちゃんが好き…。大切な人だけど…、それ以上に、大好き」

顔を赤くしながらも、はつきりと答えるフェイトちゃん。…ああ、

「…よかった」

「…え？」

ナツキ君が好きな私の言葉に、フェイトちゃんが目を丸くする。

「フェイトちゃんが初めて好きになった人が、ナツキ君でよかった…」

ナツキ君は、優しいから。自分が傷付いてでも、他人を守ろうとする強い人だから。どちらを選んだとしても、きっとフェイトちゃんにとってのプラスになるって、私はそう信じてる。

「…っ！！」

私の言いたいことを直感的に理解したのか、フェイトちゃんの綺麗な瞳から涙が溢れ出す。

「ありがとう、なのは…。今は離れてしまっけど、きっとまた会えるから…。そしたらまた、君の名前を呼ぶから…」

「うん…、うん…」

フェイトちゃん。私と同じ、一人の悲しみを背負った子。私と同じ、一人の男の子を好きになった子。

私の、友達。

「会いたくなったら、きっと名前を呼ぶから…。だから…、なのはも私を呼んで…。なのはに困ったことがあったら、今度はきつと、」

私がなのはを助けるから……」

「うん……！うん……！」

互いに涙を流しながら、私達はしばらく抱き合っていた。

「あんたんとこの子はさ……、なのはは……、本当にいい子だね……」

隣に座ったアルフが、目元を拭いながら話し掛けてくる。

「フェイトが……、あんなに幸せそうな顔してるよ……」

「……俺の生き方を変えてくれた奴だ。凄くて当たり前だよ」

自分の恩人に送られた賛辞に、素直に頬がほころぶ。やっぱりなのはは……、すげえ奴だ。

「何がナツキ君は優しいだ……」

お前の方が、ずっとずっと優しいじゃねえか。

「ああ……、よかったよ……、ホント……」

涙で歪んだ空を見上げながら、俺は呟く。この世界に来て。なのはやフェイトに会えて。過去を、乗り越えられて。本当に、よかった。

「ユキ……、きつと俺は……、お前の分まで幸せになってみせるから……」

空に誓い、涙を拭い、前を見据える。

もう俺は、過去に囚われない。たまには振り返って、後悔することもあるかもしれない。でも、俺達は「今」を生きている。今を生きて、未来を掴む為に。俺は、もう、囚われない。

「そろそろいいか？」

「…お前は空気を読むということを知らんのか？」

私達にそんな声を掛けてきたクロノ君に、ナツキ君がチョップを入れる。

「…何をする」

「…少女の味方ごっこ？」

ジト目で睨むクロノ君に、ナツキ君が首を傾げながら答えた。

「…ふふっ」

「…あははっ」

そんな二人のやり取りに、思わず私達の頬が緩む。

「まあ、ともあれ時間がないのは事実だ。なのは、フェイト、言いたいこと、全部言えたか？」

「うんっ」

「うん…」

私とフェイトちゃんの答えに満足したのか、穏やかな笑みを浮かべるナツキ君。…もう、お別れなんだね…。

「フェイトちゃん!!」

私はフェイトちゃんを呼び止めながら、髪飾りのピンクのリボンを解き、差し出す。

「思い出に出来るもの、こんなしかないんだけど…」

「じゃあ、私も…」

一瞬驚いた表情を見せるも、フェイトちゃんも答えるように、黒いリボンを解き、差し出した。

「……………」

髪を風に揺らしながら、互いのリボンを交換する。私のリボンがフェイトちゃんの左手に、フェイトちゃんのリボンが私の左手に渡される。

「…ありがとう、なのは」

「…うん、フェイトちゃん」

「きつとまた…」



「うん、きつとまた…」

その声を合図に、重ねたままだった両手を放す。

「ほら、預かり物」

と、声と共に肩に微かな重み。振り返ると、アルフさんが私の肩にユーノ君を乗せてくれていた。

「ありがとう。アルフさんも元気でね」

「ああ、色々ありがとね、なのは、ユーノ」

ニツコリと微笑みながら、アルフさんが離れていった。

「それじゃ、僕も」

「クロノ君もまたね」

「ああ」

軽く挨拶を交わすと、クロノ君も離れた。

「なのは」

「ナツキ君…」

最後に出て来たのは、ナツキ君。私の頼れるパートナーで、大好きな男の子。

「俺は向こうに残らなきゃいけないけど…、なのはならきつと大丈夫だ」

ナツキ君はフェイトちゃんの裁判に立ち会う為、アースラに残ることになっていた。しばらく会うことは出来なくなる。

「なんかあつたら呼んでくれ。お前がいなきゃ俺は、今ここにはいなかった。お前がいなきゃ俺は、前を向いて歩けなかった。だから…」

ナツキ君は穏やかに笑いながら私の頭をぽふっと叩き、優しく撫でてくれた。

「今度は俺が、お前を守るから」

「…うん」

ナツキ君が離れると同時に、四人の足元に水色の魔法陣が広がる。転位魔法で、アースラに帰るのだ。

「バイバイ…、またね…」

クロノ君。アルフさん。ナツキ君。フェイトちゃん。今までありがとう。

「……………」

と、フェイトちゃんが微笑みながら、手を振ってくれた。

「っ！！」

驚いたけど、私もすぐに手を振り返す。

お別れは辛いけど、頑張って笑顔を浮かべる。私だったら、泣き顔より笑顔で送り出して欲しいから。フェイトちゃんも、きっとそうだと信じて。

「また、いつか」

ナツキ君の声と、フェイトちゃんの笑顔を最後に残し、

四人は、光に包まれた。

「…なのは」

しばらくそのまま四人のいた場所を見続けていると、ユーノ君が声を掛けてきた。

「…うん。大丈夫」

ナツキ君とフェイトちゃんは、いつでも私の心の中にいる。二人の笑顔を思い浮かべるだけで、私は何だって頑張れる。

「ユーノ君、帰ろ!!」

出会いがあるから、別れがある。別れは、新たな出会いの始まりだから。

だから、私は前を向く。振り返らずに、真っ直ぐ進む。いつか、また会える日を信じて。

「…うん!!」

元気に答えたユーノ君に満面の笑みを返し、私は駆け出した。

「あー、ヤバイ。今更泣けてきた」

アースラに帰還と同時に、お兄ちゃんはそんな言葉を口にした。軽い口調で平静を装ってはいるものの、声がほんの僅かに震えている。なんだかんだ言っても、やっぱり寂しいのだろう。永遠のお別れではないものの、お兄ちゃんにとって「別れ」はタブーに近いものなのだから。

「それじゃ僕は資料の制作に取り掛かるから、何かあったら僕の部屋に来てくれ。アルフ、手伝い頼む」

「はいはい、っと」

と、そんな言葉を残し、クロノとアルフが部屋を出る。残されたのは、私とお兄ちゃんの二人だけ。

「…さて、俺らも戻るか」

「…うん」

私はお兄ちゃんの手を握って歩き出す。その後クロノやお兄ちゃんの取り計らいで、アースラ内での自由を認められた私は、お兄ちゃんの部屋に滞在している。クロノは少し渋ってたけど、リンディさんは笑顔で承諾してくれたし、お兄ちゃんもお願ひしたら折れてくれた。やっぱり優しい。

「…なあ、フエイト」

「ん…？」

ふと、お兄ちゃんが声を掛けてくる。

「…寂しくないか？」

「…寂しいよ」

寂しくない訳がない。せつかく友達になれたのに、まだまだ話したいことはいっぱいあったのに、私達の立つ場所は異なっている。だけど、

「でも、大丈夫。お兄ちゃんが温もりをくれた。なのはが勇気をくれた。だからきつと、大丈夫」

きつぱりと答えた私に、お兄ちゃんが目を丸くし、苦笑した。

「ホント…、なのはもお前も強い奴だよ…」

「それは、お兄ちゃんがいたからだと思うよ」

お兄ちゃんがいれば大丈夫。そう思える私と同じで、なのはもきつと似たようなことを思っているはず。好きな人が、大切な人が傍にいれば、人はどこまでも強くなれる。

「…んじゃ、クロノのどこにでも行くか。さつさと済ませて、早くなのはのところに帰らないとな」

そう言って、笑顔で手を引くお兄ちゃんに、

「…うんっ!!」

私は、満面の笑顔で頷いた。

最終話「きずな」（後書き）

ええ、多くは語りません。

ただ、ここまで書いて幸せでした。

ご愛読していただいた皆様、本当にありがとうございました。

P・S・ご希望があれば別枠でお疲れ様会的な何かを書こうかと思っています。どしどしご意見くださいな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9505m/>

---

魔法少女リリカルなのはAnother

2011年4月4日01時51分発行